
町民C、勇者様に拉致される

つくえ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タ
テ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または
は「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒ
ナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範
囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致し
ます。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

町民C、勇者様に拉致される

【Zコード】

Z5611V

【作者名】

つくれ

【あらすじ】

のほほんと生きてきた町娘。戦闘能力もからきしの彼女がある日
突然拉致される。その相手は、なんと勇者様だつた！？ 町民C視
点で送る、主にコメディ、時折シリアスのファンタジー小説です。

町民じ、拉致される

働いてこるパン屋に出勤しようとしたら、拉致された。

「冗談みたいなホントの話。」冗談で言つてゐんだつたらどんによかつたか！

正直、わたし自身冗談であつて欲しいと祈つてゐる。祈るだけだけど。今はどうにも硬直して動けない。

「うあー」

ほら、うめき声すらこの女の声じゃなくなつてます。自分でこの女って言つたら思つたより恥ずかしかつた！

乙女じやなくとも、せめて人間でありたい。私は荷物じやありません。声を大にして言いたい。私は荷物じやありませんから下ろせ！！

誘拐犯は軽々と私を肩に担いで、朝っぱらから町を歩いています。堂々としてるな誘拐犯！

ほら、通りがかつたおじいちゃんがビッククリしてゐじゃないか。おじいちゃん、助けてー。いや、拝まなくていいから。何で拝んでんの。まだ声が出せない。このまま動けないなら、助けを呼ぶこともできない。

誘拐犯が歩くたびに、みぞおちにヤツの肩が食い込み、ぐえ、ぐえつて声が出てしまう。膝の裏を片手で抱えて押さえている様子。軽々と持ち運ばれるさまで、先用ダイエット頑張らなかつたらよかつたとわけの分からぬ後悔が押し寄せてくる。まあ、減つたのは僅かな体重と胸だけでしたが。胸だけでしたが！…そこは減るなよおおと泣き崩れたのはちょっと苦い思い出だった。減らなか

つたお腹周り。そこに幾らやわらかお肉があるとしても、肩にみぞおち食い込んでるから！ みぞおちって、人体の急所だから！

ちなみに私はタダの町民Cの分際なので、体なんて鍛えてあります。

筋肉なんて無いよ！ 町民A、Bでもすらなく、町のにぎやかし要員、それが私だ！ そう自負してる！ 地味顔、田舎娘服装、ほーらどうみてもお金持つて無さそうですよー、拉致しても意味無いですよー、と心中だけで叫ぶ。声に出して言いたいけれど、唇開いても出る声つてぐえとかうあとかしか無いってなんなの。

なんでこうなった。

呆然としながら自分の長いみつあみの先っぽが、顔の横でゆらゆら揺れてるのを眺める。

目立たない薄茶色のくせつ毛が誘拐犯の歩調に合わせてぴょこぴょこ跳ねる。

あ、誘拐犯の癖に生意氣な。このマント、相当いい素材だわ。肌触り滑らかです。

ワーチョット冷静になってきたかも。

いけるー この勢いで今の状況を整理しよう(きつつ)

えーと、今朝は特に夢もみず、すつきり目覚め。

お気に入りの緑のワンピースが乾いて無いから、代わりに水色のスカートと白いブラウスと茶色のブーツで家を出た。どうでもいい話つていわないでください。一応、乙女として身だしなみは大切なんです。

そしてパン屋のエプロンと財布が入ったかごバッグをもつて、家を出たところで視界がぐるっと回った。

気がつけば担がれて街中を移動中。

いや、状況整理できて無いから！ 自分で自分にツツ ハミだよ。
だんだん頭に血が上ってきたああ。それにしてもこの人一体どこに連れて行くの。見当もつかない。周囲の風景をグルグル見回してみても、人通りが少ない所通つているのが分かつた。
土地勘のある人間の犯行ッ！ でもこんなマント使つてるような知り合いなんていないし。

はつ。

実は変質者！

賞利目的ではなく、そう、変態行為目的での犯行か！ 食べても美味しくありませんよ。食事的な意味でも、性的な意味でも。ほらほら、担いでるなら分かるでしょう、私のまな板具合がな！
パン屋のおかみさんが、胸は作るものだといつてた。名言である。でも上手くメイキングできません。寄せるものが、無いのでね！
お腹の肉はあるんだけど……。だんだん辛くなってきた。精神的な意味で。

そういうしているうちに、周りの風景が変わってきた。

宿屋街だ。

まさかの展開ですよ！

町娘C、このあといろいろいたされた拳句、鋭利な刃物とかで切り裂かれて死体発見、あらたな事件の予感とかな！
隣のおばちゃん、「あの子は普通のいい子でしたよ、なのにどうしてあんな事件に巻き込まれるなんて」 つてぐらい言つてくれるかな。

そうして町を訪れた勇者さま一行に、町人Aさん辺りが噂として

伝えるんですよ。恐ろしい事件がありましたよ、多分魔族の犯行ですねとかつてさ。

色々考えてたら悲しくなってきた。頭に血が上っているせいか、だんだん目が潤んできたのが分かる。

何でこんな目にあつてるのか、妙に悲しくて、悔しくて、いろいろこみあげてきた。

お父さんやお母さんが死んだ時、強く生きるつて決めたのに。ここで人生終了したら天国で会えるかなあ.....。

ひとりしんみりムードになってきた。やばい本氣で泣けてきた。うえー。

べそかいてたら、いつの間にか誘拐犯の足が止まっていたらしい。わたしは泣いてたから気付かなかつた。

「あなたはいつたい、何やつてるんですか！」
神様！ どうやら常識的な人がいたようです！！

略す、省略される（後書き）

記述修正

町民じ、泣きべやをかきまくる

私は唐突に下ろされた。

腰をひょいと掴まれ、人形を下ろすよつこ、じゅ、ストン、と。ひどい泣き顔を人様にさらすわけにはいけないので、とりあえず手で擦りうとしたら、

「女の子泣かせて何してるんですか！」

と先程の声の人が、常識的なことを叫んでくれた。

もつと言つてえええ！

さつきの挙んでたじいちゃんとは違つ、助けてくれる予感がひしひしとしている。それにしてもあのじいちゃん、何を挙んでたんだ。ちょっとボケの心配をしてしまつたし。

とにかく、助かつた！ 安心して涙腺が緩みまくりました。ぼたぼた涙がこぼれてくる。止まらない。下を向いて泣いている私の頭の上を、会話が通り過ぎていく。

「とつあえず、持つてきた」

「まあ、確かにさつきの抱え方は持つてきた、ですが……」

いや、そこは納得するところじやなかひつよー。もつと頑張らうよー。私はどうとう堪えきれずに、主張した。心の声を聞かせてやりたいね！ 下を向いたまま、しゃつくりの間になんとか口を挟んだ。

「つぐ、わたし、も、物じやないです！」

何故か背後で息を呑む音がした。

「喋れたのか」

ちょっと待て、私のことをなんだと思つてるんだ。

というか、今の声は、明らかに目の前の人と違うわけで、えーっと何か大事なことを忘れている気がする。

「ああ、お嬢さん、どちらにしても申し訳ない」としました。これで涙を拭いてください」

下を向いた私の目線の先に、すっと差し出されたハンカチを受け取つた。指先にとてもやわらかい素材が触れる。ちょ、これもかなり高級な布だよ！ こんななめらかハンカチつかつたことないよ！ 略してなめカチだよ！ いやな響きだな……。

とりあえずハンカチを拒むいわれが無いので、ありがたくお借りして涙を拭ぐ。色々乙女としてはいえないことになつてている顔を整える。目が腫れている気がする。うー。いやだな。知らないひとの前で大泣きをしてしまつた。と、ぼんやり考えながら、ハンカチを置みなおした。

腫れた目では恥ずかしいけれど、下を向いたままでは失礼だ。私は意を決して顔を上げた。

「あ、ありがとうございました……」

田を上げると、そこには神々しい笑顔の美人さんがいらっしゃいました。

ガチン、と再び硬直する私。

『白い肌に金色の瞳、流れる銀の真つ直ぐな髪。なんと神々しい。あれですか、最近流行の小説風に言えば、『水晶を集めてる過した月光を束にしたかのような髪、そして蜂蜜と黄金を形にしたような瞳、薔薇の花びらを浮かべた唇』とかいうあれですか。

耽美ってやつですね、これが耽美か。

二二三

こんな主人公オーラ出してる人いたら、町民としては目がつぶれるうづづーーー！

私の狼狽をものとせず、美人さんはハンカチを受け取つた。あれ、ちょっと手が硬かつた気がする。そして渡してから気がついた。そのハンカチ、私の涙やいろいろ染みてますよ！ 洗つて返しますうつう。と言おうとする機先を美人さんは制して、

「うちの連れが、大変」迷惑をおかけしました」

と仰つた。

ちよつと待て。

ウチノツレ。えーつと。

私は反射的に一步あとずさつた。一步あとずされば、そこにあるものにぶち当たるわけで。がつ、と胸中と肩に硬いものが当たった。

おそるおそる振り返ると、深い深い蒼の鎧が目に入った。鎧があ

そうだ！

何か重大なことを忘れてる気がしたんだ！

私の背後には誘拐犯がいたんだああああああ！

私は声無く絶叫した。

町民じ、再び泣きべそをかく

声なき絶叫の後、私の頭は真っ白になつた。で、妙に冷静になつた！ クールになれ！

頭真っ白のまま、見上げたそこにある顔に、私は眉根を寄せて考え込んでしまう。なんだか見覚えがあるような、妙に懐かしいような変な気分がもつさり沸いてきた。

まじまじと見る。

……うん、やっぱり知らない！

私がガン見している間、相手はじつといやらを見下ろしていた。無表情で。

というか、忘れてたけど、私の背後にあるひとは誘拐犯だよ！ 眺めている場合じやなかつた。

忘れていた自分にナチュラルにショックだ。さつきのじいちゃんのボケを心配している場合じやなかつたみたい。自分がボケだなんて。目の前の美人さん効果で忘れてたことにしておく！

「じゃ、わつこい」とで

私はパン屋で鍛えた接客スマイルを振りまき、踵を返して鮮やかに立ち去ろうとした。が、それは問屋がおろさない……よね……。がつちりと腕をつかまれました。痛い痛い腕が痛いです！

「腕、痛いんですけど！」

「そうか」

そうか、じゃなあああい！

それにしても誘拐犯、鮮やかな蒼い鎧を着けている。こんなに田立つ格好ならば、すぐに通報されるに違いないのに。

「うー」

興奮しそうになると上手く言葉に出来ないのは、私の悪い癖。とりあえず睨む。

び、びびらない、私被害者！　あっち加害者！　びびってる場合じゃないけど……こーわーいー。

負けない！　目に力を入れてぐぐぐと睨み返す。

睨んでいたら気がついた。

こいつも無駄に美形である。ただし表情が無いことで減点だな。そして誘拐犯ということを素敵さ五割引大セールだよ！　つまりかっこよさ五割だよ！　多分、一般男性レベルです、五割引で。

長めの黒い髪はわずかに乱れているものの、私の髪みたいに癖はない。切れ長の蒼い目が冴え冴えこちらを見下ろしている。背が高い。妙にそのせいで威圧感があるのか、ホントにこーわーいー。怯えて後ずさりたいのは山々ですが、手をがつちりホールドされているからあとずされないぜ。

まさにぴーんち。

だんだん言葉が乱暴になつてるのはかなり余裕が無いからです。それについても、……うん？　どつかで見た顔……どつかで見た……。

「おお、勇者様！」

朝早く出発しようとした商人達の団体が、こぢらに気付いて手を振っている。

そうだ、ゆうじゅさまだー確かにどつかで見た顔だわ。

つて、

「勇者様ああああ？」

私が魂からの叫びを上げてしまつたとしても、仕方が無い事は紳士淑女の皆さんなら分かつてくださると思つ。

酸欠のようにあつあつと喘ぐ私を、にっこりと笑顔で美人さんが封殺しました。

目が笑つて無いです。黙れ。あの表情はそれだ。私空氣読む子！
了解いたしました美人さん！

「おせむい」やこまく、泣いた。やつ出発ですか?」

勇者様（のはず）は、くるりと商人に向き直る。先程までと別人のような爽やかな声と笑顔である。

そそそそそ

トリハタどじろか、私の髪も逆立ちそうな勢いなんですか。
誰、これ！　いや、こいつが素なのか？

私が頭で記憶していた勇者様像と、目の前の男が結びつかなかつたのは、まさにこれだ。

「昨日、勇者様が町にやつてきた！」とのことでなぜかお出迎え式典とやらが執り行われていた。そこで見た顔だつた。

やけにキラキラしてゐるひとが一人いるわ、と思ひながら、仕事帰りに横目で見たんです。

遠かこだのと チベニと見ただけだから覚えてなかこだのは」(櫻
嬌といふことで！

まだボケじゃないよ！ しつこいけどね！

そのとき、わー爽やか笑顔だー、と思つた覚えがある。

目の前の無表情男と全然違つた。が、今、商人さんたちに向けて
いるいい笑顔は確かに必殺！ 勇者スマイル（私命名）でした……。
こういうのも必須科目なのかな、勇者つて。笑顔の見せ方キラッ

とかわ。

そりゃあんな笑顔見せられたら、隣のおばちゃんも「私があと十歳若ければどうにかするのにねえ!」とか言い出すよ。て言つか實際言つてたよ。どうにかしちゃつたら、旦那さんはどうなるんだろう。ちよつと気になります。

勇者様は、その代」とい、通称がつく。

偉人とされ、生きる伝説である彼らの名前は何故か伝わつていない。

俗世との関わりを絶つという意味があるとかないとか無いとか。深い経緯なぞ私は知らん。で、今の目の前にいるはずの人は、確かに、「深蒼の勇者様」だつたはず。口に出すと恥ずかしいな!

鎧が青いのは人ごみの隙間から見えたから、ああ、なんと安直な命名だと思つたんだけれど、いつ近くで見ると、その名前の由来は瞳の色なんだろうな。

すごい蒼い。

こちらを見ていないからまじまじと観察できるんだけど。といふか、手を離してくれないから逃げることもできません。

商人のおっちゃん達と勇者様（らしき人）がしばし和やかにトークをして別れるまで私ぼんやりと立っていました。空気になれ！空気になるんだ私！ 空気になれば、この手もすり抜けられ……わけないか。

で、おじちゃんたちがいなくなつた途端、勇者様（らしき人）から笑顔がなくなりました。

だから怖いってその変化！

勇者様（らしき人）の顔の変化を見上げて、びびつてゐる私に、美さんのが声を掛けてきた。

「ところでお嬢さん」

「はい？」

「私たちと一緒にお茶でもいかがですか？」

ナンパ……ですか？

予想外のこと、私の頭はついていけません。

私の人生が荒波にもまれすぎて難破しそうです、マジで。

町民じ、誘拐犯と話し合ひ？

気がついたらお洒落な食堂の端っこにいた。

はつ、いつの間に移動を！ 私、それほどまでに魂抜けてたのか
！ 今更気付いた！

それにしてもこの食堂、朝早くから開いてるんだなー……つて！

「あつー！ 出勤しなきやー！」

がたーん、と椅子を蹴倒しながら私は思わず立ち上がった。だつてさつき出勤途中だつたんですよ。パン屋は朝が早い。朝が早い代わりに、早上がりできるんだ。いい職場です。つて、遅刻確定だよおおお。今までショックで忘れてた。人生の終わりだと思い込んでたしね！

でもここで無断欠勤しようものなら、別の意味で人生終了のお知らせですよ。社会的な意味で！

「まあ、せっかくのコロアが冷めてしまいまいすし、どうぞ一杯だけでも

美人さんがこり笑顔で勧めてくる。

「いや、あの、」

「どうぞどうぞ」

この人分かつてやつてるだろ！ 私が小心者で断れないのを見抜かれている！

座らうとして、椅子を蹴倒したのを思い出した。けど、椅子はいつの間にか戻されていた。あれ？

「座れ」

彫像、もとい無表情勇者様（たぶん）が、くいっと椅子を指し示

した。戻してくれたんだね！ ナイスガイだね！ さすが勇者様！ いらんとこに気が利きますね。

「あ、ありがとうございます……？」

お礼を言つべきなのか……？

ここまでされたら大人しく座らざるをえないでしょ。すとんと腰を下ろす私。

私の前に置かれたココアは、ゆつたりと蒸氣に甘い芳香を混ぜながら私に誘いかけてくる。淡い茶色には幸福が溶けているんだよ……ぶつちやけ、好物です。断れないから手に取り、くん、と匂いを鼻腔に吸い込む。わーいにおい。

むつ！ これは濃厚な牛乳で作つたココアではありますんか！！ 僅かに表面に張りかけている膜がその証拠！ タダでさえ牛乳は高級なのに。それで作ったココアなんて、私が飲めることなんて滅多に無い。

これは迷惑料に違いない……と懐柔された感たっぷりに私はココアに口をつけた。しょ、食欲に負けたわけじゃ、無いんだからねっ。ふと目を上げたら、ものすごく温かい目で見守られてたああ。その、愛玩動物がごはん食べているのを見守る眼差しは止めてええ。いたたまれず視線を外せば、食堂のお姉さんがチラチラこちらを見ている。

そうだよね、気になるよね！ 私だって気になるよ。何で小娘捕まえて勇者様たちがお茶してるんだとか！ なんでだよおお！ 説明もどむ！

本当に、本当に私は普通の庶民ですから。

大体、才能がある人は見出されてそれなりの学校に通つてゐつていうのが常識だ。

人間には適正があり、それはある程度神様が見出してくださる。星都……あ、これは神様の大神殿がある都のことね、あそこには神

せいと

様の声を代弁する大神官『神の声』と言う御方がいらっしゃるそうなんだけれど、地方にいる神官も神様の道具を使えば人の才能に関するお告げぐらいならできるのだ。

もって生まれた才能は、たやすく延ばすことが出来るそうな。ただ、適正と望む職業が一致するとは限らないんだって。それはそれでなりたい職業があるつている意思は否定されるはない。ただ、才能が無いからかなりの努力と学校へねじ込めるだけの財力が必要なわけなんだけれど、閑話休題。

結局剣術にしても、魔法にしても、神官職にしても、はたまた町の鍛冶屋のおっちゃんにしても！ 一定のラインで適正が計られているのだ。

私は何も無い。やったね！ ……特別、にあこがれたこともあつたけど、あれは大変そうだなって言うのが本音。何も無い人のほうが九割。殆ど大多数なんだ。普通万歳！

この世で今現在一番なんでもできるという可能性を持つている人、それが私の左斜め横に座っている人が持つていてる称号『勇者』であり、『神の手足』である。神様の代わりに、世界を立て直すために、神様の手足となるから、とか何とか。詳しいことは、裏の家のおばあちゃんに聞いて！ 私は聞いたけど覚えれなかつたから！ 気軽に聞いたら話が五刻位かかつちゃたんだ。苦い思い出です。

美人さんがカツ、とテーブルを叩いた。指先で軽く弾く程度なんだけど、思わずはつとして注意を戻す。

「で、貴重なお時間をいただいた理由なのですが」

背筋をしゃきんと伸ばして、聞く姿勢を整える。そう、ようやく説明タイムが来た！！ これ待っていたんですよ。説明力モン！

「どこから説明をすればいいのかわからないぐらい、色々面倒なので本題だけ言います」

なのに美人さんがいきなり話を省略した。その中略はひどくね？！
多分今んとこに大事な事隠されてた！ ちょ、まだ私ついていく
てないよ！

嫌な予感がひしひしとしながら、耳を塞ぎたい衝動に強く強くか
られた。

「私たちと一緒に旅をしませんか？」
は？

町民じ、誘拐犯とでは話し合いにならない

えーっと。

無理。

無理無理無理。

光の速さで否定するね！

私がついて行つた所で、荷物入れの皮袋以上に役に立ちませんとも！

ぶつちやけ、リアクションが取れませんでした。唐突過ぎるつて口をあんぐり開けてしまったことに気がついてぱくんと閉じる。乙女にあるまじき……このセリフはもういって？ 失礼しました。

とにかく！

だから、私には何のスキルもないんですって。人の話を聴いてください。

「そういう人材は、王立魔法院とかでお求めになつてください」

適材適所！ いい言葉ッ！

乾いた笑いを浮かべながら言ったセリフは、検討するにも値しなかつたようだ。

私の拒絕ツッぷりを眺めながら、青い鎧の誘拐犯様がこうつ零しましたよ。

「面倒だ。持つて行つた方が早い」

そこの男おおお！ なんつー物騒なことをさらりと言つかな！

勇者の癖になんつー黒いセリフをおおおお。

いやいやいや。ここできちんと行くつもりがないよと否定しないと人生終了のお知らせだ！ と強く思った私は、なけなしの勇気を振り絞り、主張をした。

ここまで強く主張をするなんて、人生始まって以来だよ！ 初めてづくしだね！ ひやつはー！

「私を連れて行つてもお荷物以上にしかなりませんよ！ 魔法は使えない、歩くにしても半口で足がパンパンになります！ それに血を見たら氣絶する自信があります！」

私は語つた。熱く語つた。拳まで振り回した。言えたよ、天国のお父さんお母さん！ ちゃんと怖い人たちに意思を伝えることが出来ました。私、やれば出来る子！

しかしそんな私の拳を振るつた熱弁は、あつという間に却下された。

「そのあたりは力技で何とかします。残念ながら財力と権力にだけは溢れていますので」

につこり笑う美人さんに、私のトリ肌は立ちっぱなしよ！ この人も危険すぎるのか。常識人に思えたのは嘘だつたのか。

「神に誓つて、あなたを全力でサポートいたしますよ

美人さんがさらりと出した首飾りは確かに星神様に使える神官が持つ護符アミコレットだ。というか、神官様だつたんですねー。

「体力はその勇者が有り余るほど持っています。疲れたら私が魔法で何とかいたします。まあ、男一人だといつとこころに不安を覚えてらっしゃるなら、それは我慢していただけすると幸いですが、そういった危険性はありませんし」

私が呆然としている間に話がすすんでしまっているようだ。なんて強引な展開！
と、いま色々聞き流してはいけない言葉を聞き流しそうにならんだけど。

「えっ。男性の方だつたんですか……？」
「はい。よく間違えられるんですが」

私の質問に、美人さん、もとい、神官様はにつこり笑つて流してくださいさつた。

ですよね。

いろいろ女性として悲しくなつてきた。だつてお肌の艶とか負けてる気がビンビンしますよ。

「詳細な話をしたいところですが、ともかく私たちも色々困っていることがありますて、あなたの力を借りしたいのです」

愁い顔もさまになります。だが！ 私は！ 流されないつ。

「勇者様たちに解決できない難問が、私じときが解決できるとは思えません……」

だんだん主張も尻すぼみ。ですよね、世界中で信仰されている星神様の神官様に、強くいえませんつてー。

「残念ながら」

唐突に会話に介入してきた滑らかな声に、私は反射的に跳ね上がった。

置物と化していた勇者様だ。この人、威圧感半端無いくせに、たまに静か過ぎるから存在を忘れてしまう。はつ、気配を絶つ達人とか！まさかねー。

「お前に用意された選択肢は二つしかない」

高まりゆく緊張感に、私は思わず「ぐく」と喉を鳴らした。

「歩くか、担がれるかだ」

「一択どひじやなかつた。

勇者様は斜め上を行つてらしゃつた……。

どつちがいい？ 無表情なままでじつといひを見る勇者様に、私はこいつ、言うじかなかつた。

「歩きまわ……」

完全に負けた。

神官へ、勇者に確認をゆる（前書き）

本日は「残酷なお話」がまじつたりしています。
町民の出番はありません。シリアルです。

神官A、勇者に確認をする

溜息がテーブルの上に落とされる。

神官は軽く首を回した。

少女を説得するなんて、生きてきた中で全く経験がなかった。正直疲れたといつていい。

これだと魔物と戦つているほうがいい。あれには敵愾心しかないから、余計な思考を回さずに済む。星職者せいしょくしゃとしてあるまじき考え方ではあるが、事実そのだから仕方が無い。

店員を呼び、少女が飲み干したカップを下げる。笑顔を向け、礼を言えば、頬を染めた女性店員が機嫌よく立ち去った。町の人間が彼らに向ける好意は分かり易い。憧れと、信頼と、そして他に潜むもろもろと。

ただ、その必要以上の注目は今は不要であった。
手で軽く呪印を切り、一定範囲外への空気の振動を抑える。こうすれば彼らのテーブルから外に声が漏れにくくなるのだ。

少女は本当に普通の女の子だった。金茶色の頭髪をみつあみにした、清潔感のある町娘。それ以上でもそれ以下でも無い。道ですれ違つても、印象に残らないだろう娘。

だから神官は勇者にもう一度確認を取る。

「本当にあの子なのですね」

ゆつくりと勇者と称される男が一いちらを見た。肯定である。

蒼の瞳は底知れぬ輝きを宿している。それに怖氣おじけることなく、神官は真っ直ぐに目を見かえす。問い合わせたの確認だった。そして、本気で彼女を連れて行くしかないという事実を自分に言い聞かせるものもある。

勇者が嘘をついた事は無い。彼は虚言と最も遠い場所にいる人間だ。幼馴染としてともに育つた神官は一番知っていた。

彼がそうというならば、 そののだろう。

少女を眺めながら、 実際にどうなのか軽く能力判定のための走査術をかけていた。 彼ぐらいであれば、 道具などなく簡単に行える術であった。 結果、 本人の自己申告どおりに、 驚くほど少女には能力がなかつた。 勇者の言うことが確かならば、 それは完璧な隠蔽だといえる。 一つ疑念を持てば、 様々なことが連なり、 疑問ばかりが増えていく。

その一つは、 この町があまりにも平和だという点だ。

今、 世界は魔物の侵食によって脅かされている。

勇者が最後の砦と称されるのは、 誇大な表現ではない。

隣の大陸の国家は繰り返される戦闘により大きく疲弊しているといつ。 隣の大陸は、 現在彼らがいることより気候が温暖であり、 災害が起こりにくい。そのため、 食料の自給率が増し文明も国力も増し、 様々な国家が繁栄していた。

しかし、 それが今、 揺らいでいる。

魔物の発生である。

魔物がどこから沸いて出るのか、 それを詳しく知る人間はいない。 その時々で違うのだ。

魔物たちの欲望には際限は無い。 あれらは特に人間に對して貪欲だつた。 何がそうさせるのか、 魔物は人間を襲い、 殺す。 恐らく魔物が増えずに入れれば、 人間社会も大きな発展を迎えていたに違いな

い。

魔物を迎撃するために、様々な研究が行われている。しかし、不思議なことにそれらの研究が実を結ぶことが無い。何故か魔物に襲われ、新しい技術が花開くことが無いのだ。

それを人々は魔王の呪と呼ぶ。

先程の少女も口走っていた「王立魔法院」でも確かにそのような研究が行われている。

能力により人々を選別し、高い力を持つものを囲い込む。そのような機構を設けているのも、この魔王の呪のせいでもあつた。

危険な研究を隣人が行つているとすれば、そして、そのせいで自分も魔物に襲われる確率があるとすれば。

普段大人しい庶民たちが急に変貌するのだ。

一時期、魔法使い狩りが行われたという闇の歴史もある。魔物に襲われた町の人間が混乱し、「魔法使いが研究をしていたせいでこの町が襲われたのだ」という流言を信じた。それにより町の人間が町に暮らしていただけの魔法使いたちを殺害し吊るし上げたのだ。

皮肉なことにその町は、力ある魔法使い達を失つたせいで程なく滅んだという。

これをその町の名前をとり、ツワナアゲート事件と呼ぶ。

この後、魔法使い達のための学院が各国に設けられ、魔法文明が進んだと言つても過言では無い。災いが転じた例だ。不思議と平和利用の研究のためであれば、魔王の呪は発動しないことが多いのだ。

今、神官の前に置かれている冷やされた果汁もその恩恵である。

ここ五十年で魔法の技術は庶民の生活に浸透するほど広がった。

しかし、勇者の旅には魔法使いは同行していなかった。

神官以外が同行していた時もある。

だが、彼らのたびにそのまま付いて来られるかということとは別問題だった。

ひと時の仲間ではなく、本当の意味で同行してもらうには、勇者達と『同じ』でなければならない。こればかりはどうしようもない。逆に言えば、条件さえ合えばそのあたりはどうともなる。

先程の町民は、根本的なところで、どうしようもなく、勇者達と同じ『同じ』だったのだ。

本人がそれを知ったところで、頑なに否定するだろう。彼女の常識を打ち破るのは難しい。だから彼女には結論だけを伝えたのだ。人のよさそうな、小動物的な少女は、怯えながらも同行を許諾した。結果さえあればいい。神官はそう考えている。

面倒だから説明を省く。その言葉には、様々な意味を込めていた。

この町は平和すぎる。

かといって、星職者が多くいるわけでもない。
むしろ神官の姿など見かけなかつたといえる。

魔物が増えると同時に、神官の数が増える。貴族の子弟がこぞつて押し寄せるのだ。星神殿では実際魔物を寄せ付けない結界を張る能力を習得しているものが多い。

戦えなければ、寄せ付けないようにすればいい。たとえ自分に適性がなくとも、能力がある人間を囲い込むことが出来れば安泰。そういう考え方が透けて見えるのだ。保身もここに至れりといえるのだろう。

だが、それを臆病とはいえない。実際魔物の脅威は白い布に落とされたインクのようにじわりじわりと人々の心を染め上げていく。

そして、それは幾ら拭つたところで容易には落とせない。シニのよう
うに常に暗い影を落としていくのだ。
どの町にいっても人々の顔は暗い。

しかし、ここでの雰囲気は全く別のものだった。

例えて言うならば、春の口差し。人をまどろみに誘つ、やわらか
い空気が流れている。

魔物の存在など、御伽噺でしかないと錯覚しそうなほどだ。

「ここは、平和すぎますしね」

皮肉に近い声で神官はぽつりと洟らした。
何かに守護されているかのような平和。人の力とかけ離れたところ
で蠢いている理の力。

理不尽ではないか、と神官は思つ。世界に蔓延^{はびこ}する流血と悲劇に比
べ、守護されたまどろみのあまりの甘美さに。

「俺は分かる気がする」

珍しい勇者の発言に、机に落ちたまだつた視線を引き上げる。
勇者は窓から外を見ながらぽつりと呟いた。

「ずっと見てるなら、平和なほうがいいだろ？ 意思があるなら、
そういうことじゃないのか？」

まさか、と笑い飛ばせるならよかつた。が、この状況がそつする
ことを許さない。

誰のための平和か。

神に靈廟があるなど、神官としては知りたくなかつたが。

「それも、やうですよね

とりあえず、彼の言葉には同意だけを返しておいたので
あつた。

町民として、身辺を整理する

支度金としてぽんと渡された金額は、私の年収でしたあああ。

大混乱中の、町民です！ 自己紹介しながら落ち着け自分。

今まで持つたことのない金貨なんて物を抱えてるから、拳動がいつもより不審になるよ！

こんなに小さいのに、私の年収だよー！ 頑張って貯めても銀貨一枚ぐらいの生活です。

何故大金を持っているかといいますと、いたいたからです。拒否権は私に存在しない。人権はありますか？ ありますか？ ちょっぴり今から不安です。特に勇者様に対して聞きたい。でもその答えが怖いから聞けない！

金貨を渡されて固まる私に、旅装は思つたよりも高いんですよ、と神官様が仰つた。いや、高いとかどうとかよりも、ポンと渡しきだよ！ なんか本気度に驚いたよ。この人たち、確かに無駄に権力と金に溢れてるって実感した。なめカチ（なめらか肌触りのハンカチ）持つてるしね！ これから旅に必要なものを教えてもらつた。旅なんて出たことがないからね。実は町からも出たことがあります。いや正直必要ないでしょ？ 親類はないし、この町以外に知り合ひはないし。いきなり旅とか飛躍しそぎだろ。

これから予定も話された。通告ですね！ 相談ではなく通告ですね！

私は買い物に行って色々揃えて、明日集合とか。

随分ゆっくりだなと思つたら、「お家の解約とか必要でしょう」とのこと。

私どこにつれていかれるんですかあああ…！
ちょっとの期間つて雰囲気じゃないよ！

あれ？ なんだか町民には色々大事な情報を聞いていないのでは
ないだろ？ 今更だけど！

とりあえず、職場のパン屋に恐る恐る出勤してみると、朝の混雑
は終わってた。

そして怒られることもありますんでした……。ほつとじてまた泣
きそうになつたのはひみつ。

おかみさん、怒るとホント、怖いんだから！

無表情勇者様とタメ張るぐらい怖いんだから！

なんでも、私が今日遅れるという知らせがあつたらしい。

そんな使いの人なんてだした覚えないよ！ 勇者様……はそんな
ことしそうにないから（偏見？）おそらく神官様だろう。あの人あ
あ見えて苦労性に違ひない。それも偏見？

おかみさんに、しばらく休みを貰うことを切り出してみた。する
と、大丈夫だとのお返事をいただいた。あえて期間は言わなかつた
けどね！ そこには私の希望も含まれてるけどね！

なんでも隣の大陸に嫁いでいた娘さんが、魔物の被害がひどくな
つてきたから帰ってきたとのこと。一応、手は足りるそうだ。
また帰つてきたらいつでも復帰してくれたらいいよとは言つてく
れたけど。

帰つてこられるのかな。遠い日になりそうなのをぐつと堪えまし
たよ！

ホント、勇者様の旅についていくなんて信じてもうえそつに無い
から、遠くの親戚が危篤で、と言つちやつたせいもあるんだけれど。
良心がちくりとしました。でも本当のこといつも、やばい子扱い

だよ！ 庶民なのは私が一番知ってるよ！

勇者様の旅についていって、帰つてきたら職が無くなつてたらどうしようつ……。

これは、養つてもらひしかないのか？ 終身雇用でお願いします！ 役に立てないけど。

でもあんな人を世間のお姫様たちが放つておかないと違ひない！ どこかのお姫様とあの人たちがくつつくとしたら、正直邪魔者ですよねつ。小姑状態になりますよねつ。

うつかり養つてもらつたりしてたら、そしてそのせいでお姫様たちににらまれる羽目になつたら、私は縮み上がる！ 美人さんたちは戦えなどしない！ 初めから逃亡確実です。

そもそも勝負にならない！ この無い胸、無い色気！ どこに勝負できる要素があるよ！ ……。あつ、自虐ネタ言つたら自分で悲しくなつてきた……。はつ。

とりあえずお家の大家さんにも同じ話をして、荷物を整理した。結構物に執着が無いから、ぽんぽん捨ててしまつ。

結局一抱えある箱ぐらいの荷物が残つた。困つていると、大家さんが帰つてくるまで取つておいてくれると言つてくれました。戻つてくるつもりはあるので、助かります。

裏のおばあちゃんありがとう！ あ、物知りおばあちゃんは大家さんです。

そんなこんなで知り合いの人には声をかけつつ、商店街で毛布代わりにもなるマントや丈夫な衣服やもろもろを買い込んだ。こんなに思いつきりお金使うの初めてだよ！ いつも銅貨一枚レベルで悩む生活なのにね……どうしてこうなつたのか。とにかく。

で、必要だといわれたものを買い込んだだけなのに、荷物まみれ

になつた。

買ったたびに増えていくのは仕方が無いんだけど、道端でカバンに整理できないから中途半端に溢れて、持ちにくい！

よろよろしている私の荷物を、誰かが支えてくれた。

引ったくりに注意！ とか頭に浮かんけど、見る人を勝手に犯罪者扱いするのはよくない。本当に支えてくれただけみたいだしね！ 絶妙なバランスにゅらゅら揺れる荷物がちょっと固定される。助かった。

ありがとう、親切な人！

礼儀としてお礼だよね。

「ありがとうございま……」

す、が言葉にならなかつた。見上げればあの蒼い瞳がじつとこちらを見下ろしていた。

ある意味犯罪者より怖いです。

何してんですか勇者様。

町民じ、氣がするなる

人通りの激しい大通りで勇者様登場とか。

絶対騒ぎになるよおおお！ 退避！ 総員退避いいい！ といつても退避するのは私だけだけね！

と思つたけど、はて、あまり注目をされていない様子。ちらりと過ぎた違和感に、私は勇者様を上から下まで眺めてみた。

あの派手な鎧を纏つていない。

洗いざらしの生成りのシャツに、茶色のズボンと同じく皮のブーツ。

使い込まれた風の皮の剣帯で剣を腰にぶら下げている以外は、そこら辺にいる兄ちゃんといった風情だった。勇者オーラ的なものはあまり無い。

えつ、勇者様って、鎧で認識されるもの？ ちよつとそれって不味くね？ 勇者の意味で。勇者って、こうキラキラギラギラして控えおろははーつて感じじゃないんですか？

「家に帰るのか？」

まじまじと勇者様の服装を観察していたら声を掛けられた。

「ひやーー！」

思わず舌を噛んでしまったのは仕方ない。そう、あれだ。画像が喋った時の驚きみたいなものだ。私の返事だかなんだか分からぬ叫びを勇者様はどう受け止めたのか、荷物をひょいひょいと勝手に取り上げてさつさと歩き出した。

私は慌ててそれを追っていく。

足長いし！ 一步の距離が私と違うすぎる！ 追いつけないって。

荷物が半分……いや、さりげなく重いのを持つてくれているみた
いだつたから、半分以下になつたけど、歩くには邪魔だ。
その上、この人と歩くの早いです。

私は小走りでやつと追いつける。普通の歩行もこんな感じかな。
徒步の旅だつたら、もしかして私オンリーマラソン状態ですか！
持久力に自身はありませんよ！

一人で歩くというか、私が勇者様を追いかけるという、私だけに
とつてのデッドレーはようやく終着点へたどり着こうとしていた。
程なくして、住宅街に入り、私が借りている家の前に到着する。

「オオオオオル！」

ただいま、私のおうち！ まあ、今日までですが。

はあはあと肩で息をしている私をよそに、勇者様は相変わらず無
表情で家を眺めている。勇者様、息なんて切らせてませんよ。これ
が基礎体力の差か！ 基礎体力セレブめ！ あ、私が作った言葉で
す。基礎体力が凄い人たちを羨ましがる言葉です。

しばらく勇者様は庶民の家を眺めていたようだつた。

が、不意にその視線が私に向けられた。ぱちっと音がしたような
気がする勢いで目が合つてしまつた。反射的に息を吸い込んでしま
う。野生動物と目があつたら逸らせないあれですよ。そ、逸らせな
い。

だつて怖いし！

この一瞥いちべつは、鍵を早く開けろつて言う意味ですね、荷物持たせて
すみません！ 了解しました！ お待たせしましたああ！

慌てながら荷物をとりあえず横に置き、鍵を探す私に、勇者様は
ぽつんと、

「早かつたか」
と呴いた。

何の話ですか！

妙に意味深だな……。緊張で手が震えてなかなか鍵が開かない。数度目のチャレンジでようやく家の中に入れました。勇者様は特に何もコメントすることなく、じつと荷物を持って待っていました。

沈黙が気まずい。

さつきは歩いていたから、会話のことなんて考えなかつた。
何も話すことがない、が、沈黙が重過ぎる。
あーいい天氣ですね……ぐらいの話題しか思いつかないわ。
所詮、私の社交スキルはこの程度である。

扉を開けながら、私はようやく勇者様の言葉の意味に行き着いた。
というか閃いた。

歩くのが早かつたかという確認か！！

勇者様って、まさか翻訳係が必要な人？ 言葉、足りない人？
私もそのうちこの不思議空気に慣れることが出来るんだろうか…

私、慣れることが出来なければ終わりかもしれない。だって記憶力なし、学なし、体力無しの上に言葉も通じないなんて、何重苦なお荷物人間が出来上がるんですかああ。

扉を開け放つと、狭い我が家が良く見える。

私の部屋は、もうほぼ片づけが済んでいた。あとは今日寝るだけのスペースと着替えぐらい。イスとかもそのままにしていくから、すっきり物が無い状態です。あ、しまったお茶も出せない！

「なんもお構いできませんがどうぞ」

と家に上がるようになりあえず礼儀として勧めてみた。けれども勇

者様は動かない。変わりにこんな事を言い出した。

「荷物はここに置いても？」

「え？ あ、はい」

玄関先に勇者様は荷物を置き、

「もう少し、警戒心を持て」

と淡々と告げる。

唐突に始まつた話に、理解が追いつかない。

「はあ……」

私の生返事に、それ以上の言葉は続かず、

「では明日」

と勇者様は踵を返した。

色々と口も疑問もはさむ隙がなかつた！

颯爽としてるな。さすが勇者様、歩き去る動きまで爽やかだ！

私はよつやく大事なことを忘れていることを思い出した。

「荷物、ありがとうございました！」

背中に私の声が当たつているのだろうが、勇者様は振り返らなかつた。肩で風を切るつて、あんな感じなんですね、実際見たらすごいな。

背中を見送り、ドアを閉めた。

荷造りしなきゃなあ。勇者様つて意外といい人かもしれない。
ちよつとは上手くやつていけるかなーつて考えて、ふと気付いた。

た。

私はさつき、勇者様の歩調に追いつけず、ずっと後ろを走つてた。なのに勇者様は迷うことなく、私の家にたどり着いた。

何であの人私の家知つてるんだああああ！

謎だけが深まつた午後であつた。

町民ひ、みづきへ旅立つかもしれない

朝ですよー。

田の出ひゅうと前にパツチリ田を覚ますが、私の毎朝です。

勝った！隣の田へ出鳥に勝った！田へ出鳥というのは、裏のおばあちゃんが飼っている鳥で、日の出と同時にけたたましく鳴く種類の鳥のことです。名前はヒナちゃん。成鳥でもヒナちゃんです。

おはよひざわこます、町民ひです！

今日はかなり朝もやが掛かっています。もやつとしてますね！またに絶好の旅立ち日和です。

朝もやこまぎれて、どんぐりで旅立てるんじゃないでしょうか！

まあ、自分の意思での旅立ちじゃないですかねー。

田立たないで旅立ちたい……。切実に。

朝ごはんをもそもそ食べて、用意した水と食料その他もろもろを持って、マントを羽織る。

服はなるべく露出をしない格好で、足を出してうつかり虫や蛇にかまれたら危険ですよ、との神官様の言。センパイの言葉は重要だよー。

食料つて意外と重いな。これがなくちゃ生きていけないのは、分かつてるけど重い！

荷物の重さにふらつきながら、最後に鍵を取る。大家さんの家に、この鍵を返したら、部屋とお別れのときが来る。

入口から、ちょっとだけ部屋の中を見回す。

「……」で過ぐした時間が、ふと頭を過ぎた。

もう何もなくなつた部屋がちょっと寂しい。

思わず部屋に向かって、行つてきます、と呟いたけれども、その乙女の行動（笑）に自分で恥ずかしくなつて心の中で悶絶した。いたたまれませんよなー！！！

とりあえず、締まらないけれども。

二二二

といふえす家からに旅立つた

本当に、生きて帰れるんですかああああ！！！ 神様！

待ち合わせの門の前、勇者様と神官様は目立たないロープを被つて待っていました。

軽く引いた。

だって、ローブですよ！

ハシマラハシマラハシマラハシマラハシマラハシマラハシマラハシマラ

たて想像してみてください。朝霧かうすら挂かってた場所で、
フード被つた一人組みがひつそりと気配なく佇んでいるんですよお
おお！ 暗殺者か何かと間違つて。

私が近所の人だったら、自警団に通報するレベルです。

神田様がちよつとトーアを拳げて挨拶してくれないと、私は遠巻き

実際、今も少し距離をとっていますけれども。

中身をさらしても困ることになるけれど、フード姿も胡散臭いです。どうにしろ、困るのは私だけか！ そうか、そういうことか！

そんな心理的葛藤を知つてかしらすか、神官様はあっさり挨拶をしてくれた。

「では、これからよろしくお願ひしますね」

「は、はい！」

びし！と返事をする私。勇者様は相変わらず頷くだけで会話に参加している様子。

勇者様、たまには喋らないと、喉が退化しちゃうですよ！

こちらの門は、あまり人気の無い地方へつづく門のため、利用者が少ない。今日は私達だけかもしない。霧が出てるせいで、旅立ちを見合わせている人がいるのかも？ 旅素人の私には分からながな！

「この町から出るのは、初めてですか？」

神官様の問いに、私はこつくりとうなずく。勇者様の真似じや、無いよ！

この町には様々な思い出がある。
しんみりするなあ。

広い世界に、旅立とうと思つたことなんてなかつた。
何で勢いで旅立つてるんだって、ちょっと冷静になつたら危ないかもしねえ。

このテンションのまま旅立つよ！

「じゃあ、いきますか」

何の気負いなく神官様と勇者様が歩きだす。

私はその後を追つて、初めて門を越えた。

越えたところで、ぶつ、と意識が途切れてしまった。
が。

町民じ、なんの感動もなく旅立つ

遠くで、声がする。

不思議な声。

せりりとした、心のひだを撫でて行くよつな、搔き分けるよつな
声。

それでいて無機質。

……存在率の九割五分は……で埋まつてい……

「」の町を出ると……の望みと反するため……

受容器として……耐性は

それでも、「」にかける……か……とするか……

人が寝ている耳元で、さわさわ話して「」の声が聞こえるって、す
「」おおく不快じゃないですか？

寝て「」るときに虫とかが耳の周りを飛び回つて、「」めっちゃ
くちゃ気になつて気になつて気になつて眠れません。安眠妨害だよー。
皆さんもそうですね！

私、夜中にキレて、跳ね起き、真っ暗な中見えない敵と戦うぐら
いの勢いで虫を追い払うことに専念したことがあります。だって虫
のために明りつけるなんて、ランプの油もったいない。それにつけ
たところで虫が見えるぐらい明るくならないから、暗いままで戦つた
わけですよー。あれは辛かった！三ヶ月の明るさをもつとしてして

も厳しかったね。辛い思い出です。

まだ脳に話し声が届く。

いろいろが積もり積もって、とうとう私は爆発した。

「つぬせこつー！」

反射的に叫んでがばりと身を起こす。

が。

場所があまりにも想定外でした。

えええええええ？！

何故か私、勇者様に背負われてましたあー！　あ、おんぶなんですね。

前回の荷物担ぎより、ちょっと人としての扱いを受けている気がする！　やつたね！

「無事に起きたか」

勇者様が淡々と一言で状況説明してくださいました。

私、寝てたんですね。

私がいきなり身を起こしても歩く姿は全く揺るがないです。

それに、くつ、この人、できる人ですね！　耳元で叫ばれたにも拘らず、表情が全く動いていません。三歩ぐらい離れて歩いている神官様のほうが正直ビックリしています。

真横にあった無表情に、私のほうがトリハダ立ててしまつ。

この人、すごいマイペースなんだろうか。私だったらとりあえずうるさいのと驚いたので、地面に落としますよ。ええ、落としますとも。勇者様の評価がグッと上がったね！

「あ、ありがとうございます……？」

今回も微妙なお礼になってしまったのは、状況把握が出来ていな
いせいです。

とりあえず、きょろきょろしてしまいます。

草原のど真ん中みたいで。左右に緩やかな丘陵地帯が広がって
て、地平線は見えない様子。残念！

お田様はガンガン日光を「機嫌に降り注いでいます。
これは、日焼けするわ……。

そういえば、初めての旅の醍醐味だいごみ、外から見る私の町！ をして
みたかったので、ググッと振り返ってみる。
麗しのわが町が背後にツ……つて、やっぱり見えないわー。
どんだけ離れたんですか、私が寝ている間に。
逆か。どれだけ寝てたんですか、私。

勇者様の足取りは確かに、全く乱れが無いです。
ざつ、ざつ、ざつ、つていう感じ。鎧装備して私抱えて、このひ
とやつぱり基礎体力セレブだ。実感しました。おんぶしてもらつて
いるのに、汗臭くないよ！ どうなつてるんだこの鎧！ 鎧はくさ
いつて向かいのじいちゃんが言つてた。勇者オーラですか、勇者オ
ーラですね！

神官様ものんびりと歩いているようで、ちゃんと付いて行つてい
る。インドア派に見えたのにね。

横には一頭、荷物運び用の黄緑色の陸馬りくまが歩いている。

背中に括られた荷物の中には、私の荷物も見えた。

陸馬りくまは大きさは成人男性より大きいぐらい、四本足で首がそこそ
こ長くてゴツイ毛が生えている動物です。

毛の一本？ ひとかたまり？ まあとにかくその太さが私のこゆ
びぐらいはある。そんな毛がもつともつとしているから、見た目巨
大なモップが歩いているように見えます。そして色がとんでもなく
カラフルな種族です。実際今横に歩いているのは黄緑色だよ！ 草
原だが、保護色にならない。いいのか野生。

大人しいけれど、丈夫で働きものだから旅人は重宝するらしい。
これも物知りおばあちゃん情報だよ！ あと、生息地の違いで天馬
や海馬、森馬とかどこまで本当なのか分からぬ仲間がいるらしい。
陸馬をじつと見ていたら、唐突にヤツが「ポー」と鳴いた。え、
ポーって鳴くの！

「お昼ですね」

えつ、時計代わりなの？！

神官様に目線で問いかけると、

「知りませんでしたか？」

と逆に言られた。馬族は、体内時計が恐ろしいほど正確らしい。ど
うやら定期的に一定間隔で餌を取れなければ急に動けなくなるとい
う種族なんだそうだ。

とりあえず、草原のど真ん中ですが休憩ということになりました。
「下ろすぞ」

予告してくださったので、とても華麗に着地できました。
ぐつすり眠つたので、元気ですとも！

わりとどこでも寝られる特技は持っています。

「重かつたですよね。申し訳ありません」

とりあえず勇者様に謝罪を述べると、

「そうでもない」

と答えたが返ってきた。

なんとも微妙な……。

「そこは嘘でも軽かつたといふべきなのでは？」

と神官様のお言葉でした。

それ、フォローのつもりですかあああ。

まだまだ口に出してつっこめない私。いつか、つっこんでしまうんだろうか……。

色々将来の自分が不安になってきた。

はつ……もしかして、このたびに私が必要とされたのはツッコミのため？！ そんな役割を求められているのですかつ！ 大体このツッコミだって、心の中で喋っているのにっ！ 神様並に神通力をお持ちですね、もしや！

「うひたえる私をよそに、神官様はがりがり地面に絵を書き出しました。えっ、何が始まるの。ゲー術ですか？ ゲー術というのは最近流行している、爆発する術だそうです。小説に載つてた。アートを作ることによって爆発するらしい？ 素人は手を出してはいけないそうです。

「それはゲー術ですか？」

はいっと手を上げながら質問したところ、神官様はビリリィローな表情をした。

「いえ、これは普通の術ですよ」

何でそんな表情なんだろう、と首を傾げると、勇者様が、

「これは新星術しんせいじゅつだ」

とまさかのフオローラをしてくださいました。予想外の場所からのフオローラに、思わずびくりとした。

「しんせいじゅつって、なんですか？」

「平たく言えば、今、一般的に星教せいきょうで使われている術式のことです。始原しろの勇者以降に体系付けられました」

えーっと。いまいち、その、勇者様の名前でどの人がどの勇者様かなんて聞きわけがつかないです。ぽかーんと口を開けていると、神官様はその顔で察してくださいました。たようです。

「勇者の順番を覚えていらっしゃいますか？」

苦笑する顔も美人さんは得ですね！ エレガント！ 私の相手をしながらも、地面にがりがりと図を書いている。大人二人が手を伸ば

したぐらいの直径の円だ。円の周りに星のめぐりを配置して記入している。あれ、星の配置なんて私知つてたっけ？ 占いでもするために覚えたかなあ。

どちらにしても、星の配置は分かつても、勇者様の順番は、「ええっと」

正直、覚えていません……。ごめんなさい。

えへ、と笑う私に、神官様の作業を眺めていた勇者様が、またしてもフォローですよ！

ますます勇者様の株が上がりります！ このままだったら大きな力ブに育ちますよ！ 意味はありませんけど！

「勇者が現わされたのは、始原の勇者、紅蓮の勇者、黄金の勇者、夜闇の勇者、の順だ。大体星が一巡りか二巡りの期間を置いて現われる」

星の一巡りは、大体、百年ぐらいだから、百から二百年毎なんですね！

意外に短い周期な気がしないでもない？ むむむ。

「そして、始原がはじまりのひとつ呼ばれる場合があります。それまで複雑だった星術を整えて新星術に編纂しなおされたのがこの時代ですね」「へー。

「という辺りまでは流石に一般常識だと思っていたのですが……」

そんなかわいそうな子を見る目で、見ないでください……。

視線を避けるようにそつと目線をずらすと、陸馬がもつしやもつしゃ雑草食べてたのとバッヂリ目が合った。陸馬がびくっと跳ね上がる。大丈夫だから。私はその草は取りません。君の餌です。ちょっと和みました。勇者様と目が合つたときは大違ひだけどね！

ともかく、神官様の地面への落書きは意味があつたらしい。

「では、星都セレスタイルといったん戻りますよ」

につこり笑つて神官様。な、何のおはなしデスカ？

神官様が、土の文様を蹴ると同時に、何かの言葉を口にした。

「J m n w K s h S h m s ,」

その宣言のような言葉と同時に、足元の模様が光りだした。
真昼間なのに光つてるのが分かるつてある意味凄い。

謳うような声が草原を流れていくのですよ。ちょっと詩人風に解説してみた。

「T n ,

Z h y - 2 5 7 7 8 9 5 - K r Z h y - 4 5 8 7 5 2 1

' - O y s S h t r y 5 7 8 6 , " M s h " S h g b t A

r ,

J m n K y n s r , M n K h , " D z " S h k t ,'

ふ、と神官様の声が止まつた。模様は光りっぱなしだ。まだ途中
なのになどしたんだろ？

ぽんやりとその様子を眺めていたら、勇者様がおもむろに私を担
ぎ上げた。

「ぐえ

また、荷物担ぎですか！ 私つてやっぱり荷物？ もう生き復活し
たような人権はどこへ行つた。

人権の消失ですね！

勇者様が私を担ぎ上げ、陸馬を円の中に引き入れる。
その様子を見て、神官様が最後の言葉を放つ。

「J m n w S h r y S h m s ,」

えええええええ！

円の外の世界が、ぐるぐる混ざつてこきます。
うわーん不気味だよおおおおー 反射的に勇者様のマントを握
ってしまった。

いつして、私の旅立ちはよくわかんないまま終了するのだ
った。えええええ。
感動も、何も無いよー。

町民も、なんの感動もなく旅立つ（後書き）

一部訂正しました。

町民じ、知らない場所にやつてぐる

きーもーちーわーるーいー。

荷物状態に担がれ、おなかを圧迫されているのを差し引いても微妙にくらつとくる。

なにがどうなつたんだろ？

星都へ帰るとか何とか聞いた気がするけど……？

歪む景色を見たくなくて、ぎゅっと閉じていた目を開いた。変な感覚が収まつたから恐る恐るにだけれどね！

開くんじゃなかつたと後悔しました。
ええ、後悔しましたとも！！

ここ数日で後悔することばっかりだな！ そんな気がする！

周囲には十人ぐらいの人々がさわさわ話しながらこちらを見ていました！

大！ 注！ 目！ ですよ！

私から見えるところだけでこれだけ人がいるんだから、全体だったらかなり多いんだろうね！ その中を荷物担ぎで登場の私は一体どういった位置づけなんでしょうな！ あ。

下ろしてほしいけど果たして下ろしてもらつていいものなのか。むむ、と悩んでいたところ、また軽々と下ろされました。意外と下ろす時は丁寧だね！ 担ぐ時こそ、その気遣いがほしいですよ！一言声を掛けるとかね！ いや、声を掛けてもらつてもどうなん

だろう……。ともかく！ 気遣いは人間関係の潤滑油です。上手いこといいました。

下りしてもらつたおかげで、足の下に地面を感じます。
夢じやないのか。実感がわいてきました。

なにがどうなつたかよく分かりません。
ここがどこかも分かりません。

やたら綺麗な芝生ですが、ここは本当に立つてもいい場所なんでしょうか！ ふかふかした芝生が丁寧に敷き詰められ、整備されています。勇者様も陸馬も平然と立つてゐるからいいんだろうか。私は芝生様を踏みつけないよ、状況によつてはちゃんと靴を脱ぎますよー。

ひとりで混乱する私をよそに、事態は進行してゐたようです。

「お帰りなさいませ」

田の前にやたらキラキラズロズロした服を纏つた一団が近づいてきました。

しかも、礼を取つてゐるよ！ 眑民の私にとつてはこれはビックリ状況でしかありません。硬直してしまいますよ！ あんなに金糸の縫い取りをした服を着てゐる人なんて、見たことが無いよー。目がつぶれるつづーーー！ しかも美しく整列してゐます。乱れが無いつて綺麗だけど思つた以上に怖いです。

「用が済めばすぐに出ます。陸馬をしばらく預かつて置いてください」

神官様がセレブリティたっぷりな雰囲氣で、集団に声を掛けいらっしゃる。慣れてるのかな？ もしかして本物セレブ？

神官様はそれ以上何も言わずに歩き始める。集団がささつと両側

に避けて道を作る。えええええ。なんか怖い！ 勇者様は無言でそれについていくし。私はどうすれば！

はつ、周囲の人からあいつは一体なんなんだ目線をじわじわ感じます。突き刺さるよ！

そうだね！ どう見てもハイパー庶民が混じりこんでいるね！ なんとかは私もよくわからない！ 聞くなら先頭の神官様に聞いてええ！！ 私のほうが知りたいです……。

そんな中、勇者様が二歩ほど歩いたところドふと私を振り返った。視線をじっと注がれます。

これは、待つてくれているのかな。

慌てて歩き始める。芝生様、踏みしめてごめんなさい。

私がついてくるのを見て、勇者様は歩き始めた。待つてくれたんですね！ 多分……。

このさいだから観光するつもりでいいよね！ 絶対に庶民では入れない場所の匂いがふんふんするから！

私は開き直つて周囲を観察してみた。

見れば見るほど変な感じです。

異常に高い壁が周囲を包んでいる庭っぽい場所だった。壁の上部を見ようとしたら、口が開くぐらい上を見なきやいけない。顎と首のラインが真っ直ぐになるよ！

壁は白い。とにかく白い。混じりけのない白がキラキラ陽光を跳ね返している。

木は一本もなく、芝生広場がただただ広がっているだけ。

空は青空が突き抜けて見えるから、屋外なんだろうと思う。それでも、私の家二十戸分ぐらいの広さです。なのに何も無い。芝生と壁だけだよ！ 何のための場所なんだろう？

ふと先程までいた場所を振り返ると、陸馬が近寄ってきた人に引かれて、おそるおそる移動していたのが見える。そうだね！怖いよね！ 分かるよ！ 陸馬に親近感をぎゅんぎゅん感じます。次に逢ったときは親近感たっぷりにお世話するよと心に誓つた。待つてね陸馬さん。

周囲をきょろきょろ見渡しながら歩いていたら、私はちょっと遅れてしまつたらしい。勇者様がじつとこっちを見てましたああ！いや、声を掛けてくれたらいいのに！

勇者様と付かず離れず歩いていった先には、また壁がありました。そこに神官様が手を触ると壁にうつすらと切れ込みが入り、入口になる。つなぎ目は一切わからなかつたけどね！

周囲を取り囲むキラキラ集団は頭を下げたまま神官様が通過をするのを待つているようです……。あ、あそこの間を歩くんですかあああ！ とんだ羞恥プレイだな！

拳動不審な私に、流石に勇者様が見かねたようです。
手を差し出されました。

手ですか！ 迷子対策ですね！ すみません！

それにしててもこの人も喋らないな！ 神官様が十喋るとして、一喋るかどうかだよ！ つまり十対一の割合ですね！

びぐびくしながら手を重ねると、そのままロスコートされる形で歩き始めました。

手は本当に重ねるだけ。あ、意外と手が大きいですね勇者様。

といつか。

といつかあああ。

い、い、い、これは恥ずかしい…………

何でこの人は素なんでしょうか！！ 色々と恥ずかしいな！ 多分色々と訓練されてるんですね！ 何の訓練かは分からないですが！

手を引かれた混乱でグルグルしている間に、の人々で作られた道は終わつたようです。

室内に入ると、やや暗いです。

ちょっとだけ田をしばしばしていると、

「歩けるか？」

と声を掛けられました。全力で頷きますよ！

「歩けます！」

いまの言葉に不穏な響きを感じたからです。ここで、歩けないなんて言つたら……荷物担ぎされる！ そんなムードが漂つてましたから……。

町民じ、もう帰つたぐる

他の御付の人はそろそろとは付いてこなかつた！

よかつた。あの行列がついてきたら本氣で心臓止まりかけるところだつた。

残念ながら通路は一人並んでもゆつたりとした広さがある。だから手を離すタイミングを逃したまま歩いています。さりげなく、勇者様の気遣いを無駄にしない感じで離したい。考えれば考えるほど、今の状況を意識してしまいます！

重ねた手から意識をベリッとひきはがし、また周囲の観察ですよ。

通路はこれまた白い壁だつた。

床にはふかふかの青い絨毯(じゅうたん)が敷き詰められている。

靴に当たる感触がやわらかいですね！ 靴から泥が落ちていいか本氣で不安です。でも気付いた。靴に泥が付く暇なんてなかつたことに！ 町は石畳で舗装されているし、草原では一回勇者様のおんぶから下ろしてもらつただけ、そして気がつけばさつきの芝生広場（仮称）ですよ！ 安心した！ 万が一汚してしまつたら、自分で掃除をする所存です。ええ。掃除はこう見えて得意ですし。弁償はカンベンしてください。払えませんつて。

それにも長い通路です。延々と同じような景色が続いています。ところどころに燭台が置かれて光を放っているおかげで足元が良く見える。それにしても、これは高い蠅燭ですね！ ふわっと蜜の匂いがします。庶民には手の届かない蜜蠅(じも)ですよ。たぶんね。だって聞いたことしかないし。それを常時灯してるとか。贅沢だな！ ……で、つまりここはどこだ。疑問は膨れっぱなしよ！

足音さえ絨毯に吸収されるから、物音は本当に衣擦れと鎧とかの音だけ。静かな雰囲気の中、質問するのは、はばかられます。ぐ、口を開けない！ この沈黙嫌だあ！

不意に先頭を歩いていた神官様が足を止めました。行き止まりのようです。のつぺりとした白い壁だけが前にあります。

ぐるりとこちらを向き、神官様はあからさまに驚いた顔をした。えつ、ていう表情でした。

重ねた手に凄い視線を感じます。そんなにこのエスコートもどきは恥ずかしいことだつたんですか？ 誰か指摘してえええ！ 勇者様を見上げても、いつも通り無表情だった。ゴクリ。さすが勇者様……ゆるぎないぜ。

ですが、これだけガン見したにも関わらず、神官様はなかつたことにしたようです。なんでだ。ツッコミはいつでも歓迎ですよ。さらりとエスコート状態のことを流しました、「この先、もしかしたら面倒なことが起こるかもしだせんが、しばらくの間我慢していただけますか？」

と仰る。何の事だか分からるのは相変わらずだけど、そう言われたなら仕方が無い。岩のように口をつぐむよ！ 実際心の声はべらべら喋っているけど、口に出してはいられない純情乙女でござります。自分で純情とか言つてるけどね。

「分かりました」

とりあえず、勇者様のように動作だけで返事をせずに口を開いてみた。神官様はかすかに頷いて、苦笑したようだ。

「いろいろと、しがらみが有るんですよ。まあ、何も無いかもしれませんのが念のためです」

セレブには気苦労がつきものなんですね。大変ですね。

「なにがあつても、喋らないでください。私たちがフォローします

から

たち、つていつにこうに疑問がありますよ！ 勇者様は果たしてフ
オローしてくださるのか！ 乞つゝ期待ツ！

神官様は壁に向かい、杖をかざした。またあの不思議な韻律の言
葉が謳われる。

「J ymnw Ksh Sm s ,

—K·j (開錠呪文) ,

A k t b N y r y k — ^K m H N M c h y (合言葉入
力 神への道) ,

J mn w S h r y S h m s .

壁がゆらりと揺れて、無くなりました。壁が無くなつた！？ い、
いちいち驚いていたら身が持たない！ そうですね、魔法って不思
議ですね！ もうこいつやつて自分の中の常識と折り合ひをつけてい
かなきやいけない気がした！

「行ぐぞ」

一声掛けられてから、軽く手を引かれる。

「あ、は……い？」

見上げた勇者様は、笑顔でした。

もう一度言う。笑顔でした。

勇者スマイル装備ですよ！！！！！ ゆうじやはえがおをそ
うびした！ ぱらららつたらーん。

でも今の声は笑つてなかつた氣がするんですが！

笑顔装備しなきゃいけないって！この先は一体なにが待ち受けているんだああ！

旅一田田ですが、帰つていいいですか？

町民じ、ひびりまぐる

扉を潜り抜けたら、とんでもない空間が開けていました。さつきから口が開きっぱなしですよ！

まず、天井が高い。

さつきの壁ぐらい、高い。

でもさつきの壁より恐ろしいのは、ここが室内だということです。ひ、広すぎる。何のためにこんなに高い天井に設定したのか……。

天井を見上げるとまた顎と喉のラインが一直線になつたよ！ 人は何故上を見るときに口が開くのだろう。自分的に謎です。

天井には一面に絵がびっしりと描かれていました。天井だけに、天上の様子ってね！ 冗談ではすまない感じですが！

凄く写実的な人の絵が、生き生きと綺麗な彩色で描かれています。描いた人つて、上向いて描くんだろうか。絶対肩こりになるよね！ むしろ苦行かもしねれない。

絵を眺めていたら、色々見つけた。頭が白い人がいる。あれが始原の勇者の物語かな。³ そうだとしたら安直ですね！ なにがというか、ネーミングが……。

と、天井に目をとられている場合じゃない。さつき神官様が不穏なことを言つてたばかりじゃないか。かほんと口を閉じて、前を向く。

だけど、また閉じた口を開けそうになつた。

前もとんでもない感じだつた。無理！ これで平常心とか無理だ

からああああ！！！

白い壁には金で作られた装飾がツタのように這つていて、それがまた窓から差し込む日差しを受けてキラキラ光っている。金ですか！「ゴーレドですね！」

ひい！何という金の無駄遣い！

窓には色ガラスがはめ込まれて、それも何かの物語の絵になつています。普通の窓じや駄目なのか！どうあっても装飾を施す気が！このセレブ空間め！

窓をすり抜けた日の光は、廊下にも物語を映し出している。それらが幻想的に映し出されている床は、陽光の色彩を計算しているのか、これまた白い大理石だ。うつすらと入る黒い模様が上品ですね！ツルツルに磨き抜かれている表面は、鏡のように窓の光を反射している。やらやらと輝きが天井にまで拡散して、色と彩りが乱舞して、本当に幻想的な雰囲気をかもし出している。そうか、これがゲー一術かつ！爆発したとしても、仕方あるまいな！

そして、私の思考は初めに戻るのだった。

だから！

このどう考へても豪奢な建物は一体！

どこですか！

氣後れしている私の手をくいつと勇者様が引つ張った。
ギラギラブリリアントなゴージャス廊下を進むらしい。この、豪華空間を進むらしい！

この大理石で滑つたら、ものすごく恥ずかしいんですけど！慎重にならざるをえないよ！恐る恐る足を踏み出してそーっと歩く。旅装そのままの私は、本当に場違いだな。場違いすぎて、ばちが

当たるぞ！ おおつと、私が滑る前に、ギャグが滑ったああああ！
！ 自分で言つて寒かった！ これは寒い！！ 厳冬並みである。
く、くだらないことを考えたら、気分が落ち着くかなって思つたん
だつて！ 信じて！

私が誰かに弁明をしている間に、いつの間にやら廊下を行で肅々と歩いていた。半分、私の魂が抜けかかっているがな！ 見よ、この口から出た魂を！

いろいろキャパシティが限界になってきた。いや、とっくに限界を迎えてたのを気付いてない振りしてました。歩くのだけで、正直一杯一杯です。

「背筋を伸ばせ」

横の人から声が掛けられた。ぼそっと呴きレベルの大きさなのに、耳に滑り込んでくる。反射的に私は背筋を伸ばす。

「顎を引いて前を見る」

言われて初めて、目線が下を向きがちだったことに気付く。顎を引いて、前を見ると、視界が広がった気がする。

「その靴はある程度は滑り止めがある。滑らない。かかとから着地しほ。胸を張れ」

きわめて自然につなげられた指示に、私は何も考えずに従つた。頭、真っ白ですから！

「頬と口角を上げて目をもう少しパツチリと開け。笑顔を作り、敵意が無いことを示せ」

無理やり笑顔を作る。か、顔が引きつてる気がするけど、そのあたりの指摘はない。何とか合格ラインなんだろうか。

「前方から王族の気配がする。そのまま姿勢を保て。俺が合図で手

を少し前に突き出したら、左足を引いて一礼しる。あとはあいつに任せていじつと立ったまま笑顔を保てそれだけでいい

頭の中で今の指示を反芻する。はんすうよし、覚えた！ 多分！

色々教えてありがとうござります！ 心の中で師匠と呼ぶよー！ 意外と面倒見がいいお兄さんなのだね！

というよつ、今の発言の中で幾つか不穏な単語が混じっていた気がするけど、私は全力でスルーするよー！

ええ、スルーさせてくださいー。

そう、無心になつて歩くんだ。無になれ。
おつぞくつてなにそれ。

……いやー、考えちゃ駄目だよ、考えたら負けな気がするー！

町民じ、お姫様は無理だと嘆る

真っ白になつて歩く」としばし。とつとつその時が来ました。

「深蒼の勇者様！ お帰りを、お待ち申しておりましたわ！」

静寂を破つたのは、鈴が鳴るような声と花の香りでした。

前方から何かが近づいてきます、先生！

声の主は、若い女性だった。先頭に立つ彼女が一番華麗で、そして何かのオーラを纏っています。その背後からは付き添いと思われる人がすらすら付いてきている。先頭の彼女より簡素だけれども、綺麗な揃いの服装です。その意味は深く考えたくない！ どう考えても王……いや、気のせい！ 気のせい！

見事な金色の巻き毛を複雑に半分だけ結い上げ、生花とティアラで愛らしく留めている。背中に流した髪は金の滝のようだつた。周囲の彫刻に負けてないぐらいゴールデンでぴつかぴかです。キューティクルというのは、ああいうものをいつのか！ ゴージャスな風景にしつくり溶け込んでいらっしゃる。

物語の挿絵ぐらいでしか見たことのない、ふんわりとパニエでふくらませた薄紅色のドレスをちょっとだけつまみながら、紫色の瞳を輝かせて小走りに近寄つてくる。本当にあんな丸いドレス、あるんだー。ビックリするほど肌が白いから、淡い色がよくお似合いです。

それにしても顔が小さい！ 田がぱつちりと大きくて、桃色の唇がほんのり色気をかもし出している。簡単に言えば、美少女です。同じイキモノですか？

淡い色で全体がまとめられている姿は、春の妖精みたい。私が少女小説風な表現をしちゃうぐらい、本当に可愛いです。

でも、どつかで見たことがあるね！

お祭りでよく売ってる国王様一家の絵姿で見たことあるような気がするなんて、気のせいだよね！

彼女はふわふわした雰囲気の笑顔で、一いちらに 訂正、勇者様に駆け寄つてくる。

なんだろう、とてもヤバイ予感が。脳裏に警鐘がガンガン響くぜ！

反射的に、勇者様にひかれていた手を、すつこめようとした。が、あろう事か勇者様は握りました。握りやがりましたあああ。ちょ、離してえええ！ 絶対面倒」との予感がするからあああ！

「勇者様、お帰りをお待ちしておりましたのよ」

両手を胸の前で組んで、うつとりと勇者様を見上げる彼女。勇者様は、日頃のあれがどこへ行つたのやら、につこりと笑いかけ（ここで私のトリハダが一気に増えた）、

「ありがとうございます」

と答える。全体的にぼやかされた言葉を、そつなく笑顔勇者様は返します。

その返答に美少女はポツとあからさまに頬を染めたあと、「あの、よりしければ旅のお話などを聞かせていただきたいんですけど」ともじもじしながら仰いました。

「申し訳ございません、王女殿下」

ここに神官様の登場ですよ！

この話の隙間からねじ込んでいく能力は感嘆に値します。私は絶対無理！ 姫君はここによつやく神官様のほうへ向き直つた。つて、王女様つて言つたあああ！

混乱は顔に出さないッ。それが庶民としての立ち位置を守るのだ

ああ！ クールになれ！

神官様は相変わらずのクールっぷりで話を続けます。

「今日は神殿に立ち寄つただけでござりますので」

神官様の笑顔は本日も炸裂中です。あえて語尾をぼかすテクニッ
ク！ お断りムードを察しろといふことですね！ でもちょっと黒
いものが見えてる気がするな。気のせいだと思いたいな。姫君の御
付きの人気がちょっと緊張した様子。そうだよね、下つ端つて、敏感
になるよね！ ちょっと親近感を覚えました。

さり気なく黒い神官様に、それでも姫君はマイペースを崩さない。

「あら、神官様もお帰りなさいませ」

神官様に今気付いたのか？！ ようやく勇者様を見上げる乙女モー
ドは終了したようです。神官様へ向き直り、につこり。しかし、彼
女は諦めなかつた。

「でも、少しぐらいお時間はいただけませんこと？ ひとやすみも、
重要だと思いますわ。美味しい焼き菓子が手に入りましたの」

お姫様のスルーカは凄いな。わたしも見習わなければならぬ。
だが、見習わなくて大丈夫なようだ！ 今、私、全力でスルーされ
ている気がするよ！ ああ、すっぱり私の存在がなかつたことにな
つてる！ いや、このままでいいよ！ 私を無視してくれてもいい
よおおお！ いや、無視してくださいマジで。

「姫様」

勇者様（笑顔）が爽やかに姫君に声を掛ける。はい、と姫様は本
当に嬉しそう。

「ま」とに申し訳ございません。本日は時間が取れないので

本当に、残念そうに、情感を込めて勇者様は仰つた。普段とのギ
ヤップはなんだろう！

そういえばその件について聞いたことがなかつた。一重人格な
か、それともなんかどっちかが偽者の俺的なんだろうか。どっちに
しても、普段のぶつ切り会話ツブリを知つてゐる身からすると、正

直、トリハダが止まらないんですが。

——で初めて姫様の視線が私に流されました。

ちょ、見ないで！ 怖いから！

町民ひ、ジョブチョンジゅるりしー

お姫様の視線が突き刺さる先は、一つしかない。
勇者様が握り締めやがった手です。
だから！ 離して！ ほしかったのに！

神官様はお姫様の視線に気付いたらしく、にこりと笑いかける。
「こちらの方は、私たちの旅を手助けしてくださる方です。ご紹介
します」

神官様の無言のうながしに、勇者様が手を少しだけ前に出した。

前に出るつて、いじめですか！ と叫びかけたが、先程勇者様に
言い聞かされたことをからうじて思い出す。

合図で手を少し前に突き出したら、左足を引いて一礼！

ぎこちないながらも、一礼をした。ギクシャクビビるじゃないよ
！ 庶民にはこれが精一杯。
でも、挨拶の口上も分からぬ。
あれ、自己紹介って身分が下のものからするんじゃなかつたつけ
？

でも、私は黙つていろいろつて何度も言い聞かされた。とりあえず、敬
語もぐちゃぐちゃだと思うから、大人しく黙つておく。
神官様が私の一礼を見届けてから口を開いた。

「こちらが新しい神子になられる方です。これから、セイヒツの間ま
に入り、星原樹の選定を受けていただくところです」

ちょ。

ちょっとまってええええええええええええええ！－！－！
てないですよおおお！

むりでなんすか。

なんかその煌びやかな呼び方ってなんすか。

これから気軽に職業が名乗れなくなりますよー

「」職業はなにをされていますか？

神子です。

ツ、言えない…………！！！この平凡顔のまな板娘では名乗れない

笑顔を保ちつつ、頬がぴくぴく痙攣するけいれんのが分かります。

私の知らない衝撃の事実！ どどーん。

いや、ホント知りませんって。

「それならどうと、はじめから話してくれれば……信じませんよね。ですよねー。」

姫様は、ご不満のようです。

ですよねー、どう見ても庶民が勇者様（笑顔効果で三割カツ「よ
さ増量」）の手を握ってる図、ですしねー。御付きの人たちからもビ
ュンビュン視線が飛んできます。視線が針だったら、私、ハリトカ
ゲみたいになつてるはず。ハリトカゲは全身針で出来たトカゲの魔
物です。俺に触ると怪我するぜ、みたいな。

はつはー。

緊張しそうでよひやく落着いてきました。

平常心だよ！もう私は平常心保つてる！

お姫様がうらつこて いるつて事は、
神官様が仰つたとおりに星都なんだと思つ。

で、星都つて言つのはイコール王都だ。ただ、この国に關しては王より神が上つて感じなんだよね。だから、星神の都といつ意味で星都つてよばれているのさ！ 冷静に誰かに解説してみた。

「この方が……？」

スーパー疑惑の眼差しですよ、お姫様。

私もそう思いますよ！

あやしいですね！ とつてもあやしいですよね！
何でこうなったのか意味が分からぬ。

全体的に、まあ、私を拉致した誘拐犯（勇者様）のせいだということだけは理解しているがな！

「はい。なので一刻も早く儀式を行いに行きたいのです」

置み掛けるように神官様。要約すれば早く行かせろってことですね。

「では、その女性があの星神官せいじんかんの代わりというわけですか？」

お姫様も負けずににつこり。

ん、なんだろう、今の言い方が引っかかる。
代わり、といわれるからには、私の前に誰かがその神子とやらをしていたのだろう。

星神官、つてあまり聞き覚えの無い役職だ。

「あなたは、これからのことに寛えられて？ わたくし、同じ女性としてとても心配しておりますの」

お姫様は私に向かつて両手を胸の前で組みながら語りかける。
何の、話でしょう？

私は口を開きたいが、開けない。そう約束したから。

でも彼らも私に色々話さずにつれてきた。なんか、おかしいよね？ いや、今更つて言わないでくださいいい！ 一応、世間的に、地位も名譽もある方々だから、変なことをするはずがないって思つて付いてきたんですけどああ！！！

「男性の星神官でも一月で心を病んでしまわれたの。過酷な旅にな

りますわよ

わたくし、心配で、という姫君。なのに、何故か私を心配してい
る風にはちつとも聞こえない。私の耳が悪いんでしょうか！ それ
とも女の嫉妬は怖いねっていう話で納まる話題なんでしょうか！
それにしても内容がいきなりヘビーですよ！ 聞いてないよ、そ
の二ですね！

私が異常な緊張のせいで、掌に汗をかいことに気が付いたのだろう。勇者様が少しだけ、手に力を入れた。それを見逃さないお姫様。ますます笑みが深まり、言葉に刃が潜む。

「このひと、こーわーいー。

無表情勇者様の怖さなんて、子猫のひっかき攻撃ぐらいに思えてきた！ こう、じわじわくるのがたまらないーしかも美少女なのがまた怖さを増やすつづつー

「選定されるまでしたら、辞退できますわ。辞退されても、わたくしが悪いようにいたしませんわよ」

ふと、もし私が辞退したらどうなるんだろうと思つた。辞退しても、大して変わりは無いんじゃないだろうか？ 所詮一般人です。

「姫君」

「」Jでようやく勇者様の介入です。姫様はぴたりと口をつぐみました。

「この方の不安を徒しただすにあおらないでいただきたいのです。世界は一刻と魔物の侵食を許しています。それを食い止めるには、神子が必要なのです」

愁いをたたえた勇者様の言葉に、姫君は流石に勇者様の前でこれ以上何かを言うのは諦めた様子です。この笑顔バージョンの勇者様が本当にお気に入りなんだろうなあ。分かりやすすぎる対応ですね！

それにして、いつの間に、いつ、急展開になつたんだ？

私がついていけません……。

町民じ、いたたまれなくなる

私を他所に事態は進んでこようつです。私にとつての非常事態ですがね！

お姫様からは睨まれるし、後ろの人たちも怖いし、勇者様たちは説明が無いためもうどうしようもないわ！付き合つてられません。奇声を上げて踊りでも披露したら、逃げられるのでしょうか……？いやたぶん駄目だな。居場所が廊下じゃなくて、牢屋になるだけですね。

だらだらと冷や汗を流しつつ、この居たまらない雰囲気をスルーしようと精一杯頑張っています。でも発言はしちゃ、駄目なんだよね。恐ろしい角度からいろいろ抉り取られそうな予感がします。ベンベン草も生えない感じに全滅フラグですよ！

「お姉さま、そのあたりでおよしになつたらどうです？見苦しいですよ」

横から涼やかな声が割り込んできました。全員の目がそちらに向きます。私も思わず注目！

カツカツといい音をさせてブーツのかかとを鳴らしながら、王子様つぽい服装の方が登場です。

短く切つた癖のある黄金の髪をなびかせ、明るく淡い色使いのお姫様と対照的に、深い緑と黒を基調とした軍服を纏っています。イメージも真逆。お姫様がふわふわしているとすれば、この方は怜俐で颯爽としている。腰には纖細な細い剣を佩いている。でも高そうな剣です。鞘にまで金とか！あんな立派な服が仕事着なのか？どう見ても男物なんだけど、でも女性の声だったよーな。

「主神殿今まで男性の衣装を纏つあなたよりは分別はありますよ？」

？」

お姫様は笑顔で皮肉を投げ返しました。

また一つ分かつた事があるね！ ここってしゅしんでんだって！ えーと。どつかで聞いたな。どこだっけ。

そして新たな王子さまっぽい方は女性らしい？ 人間、見た目で判断してはいけないって、神官様で学びました。まあ、昨日ですが。美人に性別は意味無しだよ！

王子さまっぽい方は、姫君と同じ紫色の瞳をすっと細めて、

「この方が動きやすいのです。これから剣の稽古ですから。この服装については陛下と睨下のお許しはいただいております。頭の中まで砂糖菓子とおしゃべりがつまっているお姉さまと、一緒にしないでいただきたい。お姉さまこそ、ダンスの時間ではありますか？」

と言い放ちました。

ぞぞぞぞぞ。

ひい！ 私のトリハダは休むことを知らない……！！

涼やかに笑う姿は、うん、立派な王子様ですがセリフに棘がありますよ！ ザックリ相手を攻撃するつづ。

お姫様は流石に慣れているのか、表情が変わらないようですが……いや、こめかみの辺りがピクッとなつた気がする。私、田だけはいいんです。見逃さないよ！

お姉さま、とこうとこうを見ると、どうやら姉妹らしい。

と言つ事はこのお姫様が第一王女の華姫と、第二王女の騎士姫だらうなあ。姉妹の折り合いがたいそう悪いと町の噂で聞いたことがあります。あんだけ離れた町まで話が届くって、どれだけ仲悪いの。まあ、じつ、お二人揃つたら一目瞭然ですがね！ 空気が軋みを

上げていますよ！ 退避ー！ 総員退避ー！

騎士姫様が、お姫様から目を離さず、声だけで勇者様に呼びかけた。

「勇者殿、急がれているのだろう？ 早く救世の旅の続きを戻るといい。世界の一大事に、お姉さまも分かつてくださるだろうよ」

先程までわがままに引き止めていたのを明らかに知っていますね！ いつから見てたんですか。そして、セレブって皮肉のエスプリが効いた会話以外は無いのか。

いたたまれません。

この毒気にはいたたまれません！

私の笑顔はとっくに硬直しているよー お面状態です。

勇者様はこの好機を逃しませんでした。

「ありがとうございます」

と軽く礼を言い、歩き出します。

勇者様の笑顔とお礼に続いて、神官様も丁寧に礼をした後、颯爽と歩き始めます。私も慌てて礼をして、追いかける。追いかげずとも、手を握られているので引きずられることがありますがつ。

騎士姫様は、悪戯っぽく笑って手を振つていらつしゃつた。

姉姫様が何か仰りたそうにしたけれど、妹姫の手前、沈黙を選ばれた様子。

何はどうあれ。

ようやく刺々しい空間から脱出できて、大きく溜息をついた。先程と大して変わり無いけど、空気が美味しい！ 胸いっぱいに吸い込んだね！

勇者様の手と重ねた手が、結構汗ばんでいるのに気付いた。乙女としてこれは駄目なんじやないでしょうかつ。外してくれなさそう

だから、後で即行謝罪することに決める。

そして今更気付いたけれど、勇者様はちゃんと私の歩調に合わせてくれていたみたい。昨日のように置いてけぼりにならずにすんでます。勇者様には気遣い大王の称号を貰えたい。でも荷物担ぎはNGな！

しばらくそのまま無言で歩きます。天井の絵は、進むにつれてだんだん逆に勇者達の時代から創星そうせいの時代へとさかのぼっていきます。絨毯が足元の衝撃を吸収してくれるから、歩きやすくてたまらない。

そして、行き止まりにはこの高い天井まで届く、デカイ扉がドーンと存在していました。

白い、何の材質か分からない、つるつとした扉には浮き出し模様が彫られています。

その扉には樹の模様と、そこから果実を取る人の姿。

創星記ですね！　流石に知っていますよ！　始まりの樹と万物の果実ですね。

これは石になつた人間が貼り付けられているといわれても納得しそうな彫刻です。

こんな馬鹿でかい扉（推定石材つぽい？）、どうやって開けるんだ？

まじまじと近づいてくる扉を上から下まで眺めます。

「ここで神官様が立ち止まり、くるりとこちらに向きました。

「先程の姫君の言葉を聞きましたよね？　それでもこの向こうへ一緒に歩いてくださいますか？」

「神官様はあくまで私の意思を聞いひとつとしている。……らしい？」

えっ、今更ですか！ 今まであんまり意思を聞かれた覚えがなか
つたんですがつ。

町民じ、やつと説明を受ける（かもしけない）

ようやく発言を許された感じの私は、恐る恐る切り出した。

「えっと……、いろいろお伺いしたいことがあるんですが、ここでも聞いてもいいんですか？」

一応、黙つておけ発言があつたしね！ どこまでが駄目なのかちやんと聞いておかなくては。さつきみたいにお姫様たちがひょっこり現われたらいたたまれないよ！

「大丈夫ですよ。ここには近づける人間は滅多に居ません」

え、なんで？

また疑問が増えましたよ！ なんですかその選別されてるっぽい発言は。ここは不思議ゾーンですか？ 不思議ゾーンですね！

私が首を捻つていると、

「ここは星神の力がもつとも強い場所でもあります。耐性のない人間はまず近づくことすら許されません」

それでさつきのお姫様たちは追つてこなかつたのか。何で大人しく見送つているのかと思いました。特に姉姫様はハンカチとか噛締めてキーッとかしそうだつたぐらいの眼光だつたしね。

「私、そんな不思議な耐性はあまり無いと思うんですが。星神様の力？ とかも感じませんし」

「……本当に、何も感じないか？」

不意に勇者様が口を開きました。いつも通りに平坦な調子で、もう無表情に戻っています。 やつぱりこっちが素顔なんだろ？ あ、これも聞きたいことですね！

何を感じるというのだろう。

ぐるーっと首を回して、壁、床、天上、目の前の扉を見ました。 うん、高そうな調度品ですね、とか庶民丸出しの感想でいいんだろ？ う。

微妙な気持ちがにじんだ表情を、神官様は読み取つてくださつたらしい。

「私でもここの濃密な空気は苦手ですよ。不快ではないんですが、常に全身を軽く圧迫されていいるような気がしますから」

反射的に私はもう一度、周囲をきょろきょろ見回した。

だ、だまされてるとかじゃないよね！」

本当に何も感じません。ぶっちゃけて言えば、さつきのお姫様たちのバトルの方が重苦しかつたです！

勇者様がじつと無言で私を見下ろすんですが。これが重苦しいぐらいですよ！

何も感じていないのはこの反応であらからしまだつたようです。神官様は続けてこう仰いました。

「それがあなたを連れてきた理由なんです。他のものは耐えられませんでした」

自分が何も分からないから、いまいち理解が追いつかない。だつて、重苦しい雰囲気とか、何も感じないんですつて！ 耐えられないう、でふとさつきの会話を思い出す。

「先程の王女様が仰つてた、星神官様のことですか？」

なんだか地雷の匂いがふんふんして聞きにくいくことだけど、私の身体に関わりそうなことだからね！ 今のうちに労働条件を把握するためにはきまくりですよ！

「の方は、元々耐性は殆どありませんでした。ですが、私たちの旅に同行することになつたんです」

何が起こつたんだろう？ 勇者様が一発で分かる補足をしてくださいました。

「王族だつたからねじ込まれた」

不穏なムードが漂つてきましたああ！ 権力つて怖い！！！

「王位継承権の上で、私たちの旅に同行したという実績が付きますしね。いい感じの箔付けだと考えられたのでしょうか」

色々権力闘争があつたみたいですね！ 怖いからつっこまないけ

ど。ついでに言えば、これ以上は聞かないほうがいいんでしょうね！

「同行したはいいものの、彼は耐性がなかつた。本来果たすべき神子の代理は果たせませんでした」

あ、また出てきた単語ですね！　なんか派手な響きの神子！　ここで質問だ！

「神子ってなんですか？」

そんなければいけないものになるつもりは無いんだけれどな！　なんかこう、派手な衣装を着て、歌つたり踊つたりするんじゃないのかな。

「神子とは、尊みことから発生した言葉です。神の体現者であり、代理者として御言みことを発する方という意味があります」

むむ。これは私の知識とはちょっと違つてきた。

「神様のお言葉を伝える方つて、『神の声』の大神官様のことじやないんですか？」

都の神殿にいらっしゃる大神官様は、文字通り星神様のお告げを代弁するお方だというのは子供でも知つてることですよ！　流石の私でも分かります。勇者様の順番は知らなかつたけどね！

神官様はほろ苦い笑顔を浮かべた。何でそんな顔をされるんじよウカ？

「『神の声』は文字通り代弁者なのですが、乱暴に表現すれば、そうですね……預かつた言葉を読み上げるだけなのです。ですから分類としては尊みことではなく、預言者であります」

むむ。また難しくなつてきました。

「じゃあ、神子と預言者の違いはなんなんですか？」

さつぱり分からぬいぜ！　両手を挙げて万歳降参ですよ！　プライズ説明担当！　か、噛み砕いて、優しくお願ひしますね。

「神子は神との意志を通じることが出来るものです。『神の声』は一方通行であります、神子はある意味双方向で意思を交わすことが出来るそうです」

ソウデス、つて伝聞形ですか？

「今まで、本当の意味での神子が立った事はなかつたからな」
勇者様がぼそりと呟きます。えー……驚きが大きすぎて、わけが
分かりません。この一日間でこの単語ばかり使つてゐる氣がする！
どちらにしても、私が神様と繋がるとか、無い無いって！

ということは、神子、とは呼ばれても神子の代理なんだろうな。
うん、代理だつたらいけそうな気がする？ ぶつちやけ、あまり星
教の勉強とかもしたことがないんです……。信仰心、普通ぐらいだ
と思うよ。修行とかあつても全力でお断り申し上げたい！ 滝に打
たれるとか無理だから！ あと苦しいのも痛いのも駄目ですよ！
「選定とか、仰つてましたよね？」

「大げさなだけですよ、この部屋に入つて、箱に触れるだけです」
神官様が指したのは、背後の大きな扉。あんぐりと見上
げる。本当にこの扉、開くのか？

「樹があるだけの部屋だ。恐れる事は全く無い」

なんだか労働条件がよすぎて、凄い落とし穴がありそうですね
つ。またしても何か聞き逃したのか？

鳥アタマを自他共に認める私は、すぐに大事なこと忘れちゃうん
ですよねー。

あ、手を握つたままだ。解くタイミングが窺えないいつ。しまつた、
つこいつかり。ここで手を引っ込めるのはおかしいかなあ。悶々と
する私を見て、神官様は優しく仰いました。

「あなたを巻き込んでしまい、申し訳ございません。ですが、あな
たほどの適正を示す人はいませんでした。力を貸していただけませ
んでしょうか」

両手を胸の前に組み、深々と頭を下げる。神官の最上礼だ！ 私
なんかにもつたいたないです！

「や、やめてください！ その、私が本当に役に立つかが不安な
だけで」

慌てて止める。神官様の愁い顔は晴れない。いまいち私の返事が
振るわないせいかもしれない。うん、せっかくパン屋も休み貰つた

し、やれることがあれば協力してみよつ。ちょっと前向きになりましたよ！

「……で、私は何をすればいいんですか？」

本当は、大層な肩書きはつけたくないけれど、一応、一応だけ！ 聞いてみました。

「簡単ですよ」

その単語にだまされないつ。気構えをしつかり持ちます！

「戦わずとも、何もしなくて構いません。ただ、樹の枝を持つて一緒に歩くだけで結構です」

……えっと。

それって荷物持ちですか？

眞理ひ、やひと説明を取扱ひ（かもしけない）（後書き）

8／21謹注訂正

腹胀し、やがて口がむにか分かれ

「流石にここ」の奥に何があるかは、分かるか?」

色々不安になつた私に、勇者様が問いかかけました。このひとに質問されたら、思わずびくついてしまいますよ。

「ここ奥ですか？」

え、えへ。分かりません…… それどころか、ここがどこか分かりません。えーい適当に答えちゃうよー

お坂ですか？

私の返答に、神官様も勇者様も沈黙です。
うわあああああああ！

文部省編

「今は絶対かなり外した!!!! 私は慌てて言い訳するよ!

アーティストが星都から一時帰郷するにあつて、ナーストガルは二分の一無一の

私は本当のことを喋りました。

追い詰められたら喋つてしまつよー

多分ちょっと脅されただけでいろいろ情報を洩らしちゃう人間だ
な！　自覚はあります。

困りますね？

「どこまで何を存知なのかは推測しかねるんですが」

勇者様が基本を聞いてきた！ どこまで私は無知なんだ！

創星記、とは。 そうせいき

星神様がこの世界を作ったときの物語です。これは子供の頃から

みんな聞いて育つ話ですよ！

「では、復習を兼ねて聞いてください。子供向けに編纂されたのが主流となってしまっていますから」

大人向けは違うんですか？ はう、まさかの子供は見ちゃ駄目といつマークが？ ……そんなわけない？ ですよねーちょっとと見てみたかっただけです。

ええと、はい、真面目に聞きます。背筋を伸ばしました。

「最初に星神が自己を自覚された。全く存在から神となつた。そして星を配置され、命の基盤を整えた。その上で子等を作り、この世の韻律を決定した」

むむ。覚えていたのとちよつと違つよつな。はい、先生質問です。

「星の配置を決めたあとに韻律を決めて、命の基盤を整え、子等を野に放つたんではないのですか？」

神官様はそれは難しい顔をして考え込んでしまいました。
あつ。失敗した。

「す、すみません。私の記憶違いかもしれないですし」

「いいえ。ちょっと、気になることがあったので。こひらこそ申し訳ない」

かなり深刻な悩みなんだろうか。更に凄く考えこんでしまう。
ちょーっとまつて！ 置いてけぼりにしないで！

けれどもすぐに神官様は説明を続けられた。やつぱりこの人は気遣いも出来る美人だね！ まだちょっと難しい表情はしているけど。美人つてどんな顔も似合いますね！

「……まあ、その続きとして、世界の中央に樹を植え、神はそこを始まりの場所とした。これが星原樹^{セイガントツ}がはじめて、歴史物語に出でくる内容ですね。ここまでよろしいですか？」

ほほう。星原樹^{セイガントツ}ですか。世界一有名な樹ですね！

「その後、星原樹を守るために建造されたのが主神殿エンジエライトです。星原樹の力で、この辺りには星石^{セイセキ}が豊富に産出されました。それで天上の青い石を使った都としてセレスタイトが有名になりました」

おお、青き麗しのセレスタイト！ とか吟遊詩人が大げさに謳つていたのは聞いたことがあるよ。青い石で屋根を作つてゐるから、晴れた日とか凄い綺麗らしい。

魔法？ でココに來たから、そんな光景は見て無いんですけどねつ。

ちょっと見たかったなー。

それにしても、星原樹は主神殿^{エンジエライテ}にあるんですね。

し、知らなかつたわけじゃないですよ！

昔習つたから覚えてなかつただけです！

……うむ。

そういうや、主神殿つて、どつかで聞いたよね！ はつはつは。エンジエライトつていう名前でしか、覚えてなかつたよ。

ここにじやないかああああああ。

と言う事は、この扉の先にはまさか！

まさかー！

「ようやく分かつたか

冷静なツッコミをありがとう、勇者様。

「というわけであなたに持つていただき枝は、星原樹の枝になるわけです」

神官様が話を締めくくつた。

それって、折つていい枝なんですか……？

町民じ、むよつと眞面目に考える

正直に聞いちゃうことにしたよ！ だつて、あとで呪われたり？ したらいやじゃないですかあ！

「そ、それって折つていいい枝なんですか？」

そもそも枝を持ち歩くことすら意味が分からない！

私の質問に、神官様はにつこり笑つてこう仰つた。

「星神様のお告げですから、大丈夫ですよ。世界の愁いを祓はらうために必要なのです」

お告げですか……。へーおつげ……つて、お告げつてあれですか

！ 大神官様が神様にいただくあれですね！ それは覚えています。いきなり話が壮大になつたなあはつはつは。

本当に私がここにいることすら訳分からぬし。

「部屋に入れば簡単に事が済む」

勇者様があつさりと仰います。あなたカンタンに言いますけどお。

引き返せないとだけは、理解できている。

世界の危機とか、本当のところ、深くは理解できて無いのも分かつてる。

どこか私の知らないところで全部起つて、解決されるものだと思つてたんだ。

そう、伝説の勇者様とか、どこかの強い人達がやつてくれるんだ

つて、思つてた。私が動かなきやいけない理由が実感できません！

！！！

冷たいっていうのかなあ……シロウトが布の服だけで人食い熊とかと対決するぐらいの勢いといいますか、勇気がいるんですよお

おおー

考え込んだ私を見てか、此処に来て勇者様がそつと手を離しました。

今まで散々引きずってきたのに、本当に今更。
たったそれだけなのに、いきなりほん、と知らないところに放り出されたような気持ちになる。

掌の温もりが離れて、途端に不安になつた。
すつと手に残っていた熱が冷えていくと同時に心も冷える。

私は顔を上げた。

じつと静かに一人とも私の結論を待つてゐる。私が何か能力があるとか実感していたら、飛び込んでいたのかな。スーパー能力発揮されるとか、いきなり前世に目覚めるとか、性格が変わるとかないかな！ そんなご都合展開はしないでしそうけど！

さつきから怪我したらどうしようとか、怖かつたらどうしようとか、つらいのはいやだとか、ぐるぐる頭に回つて、もう爆発寸前ですよ！ 弱虫だと笑つてもらつてもいい！ 怖いんだよおおお。なつて、その、色々と。

その、責任とか。

世界を救うつて事は、それだけ期待とか凄いと思つんだ。それつて私に何となるのだろうか？

うわー、なんかまじめなことを考へてゐるー

自分のシリアルスッぱりにドキドキしてきたよー

とりあえず現実逃避だ！ うん、目の前の扉のこと考へてみよ
うー

「の扉どうやつて開けるんだうね！」「アーリー、とかこうに違いないよ！　ああ、くだらないことを考へたあ。

ないよ！　ああ、くだらないことを考えたああ。
ちよ、ちよつとは落ち着いたかな。落ち着け私。

ちょ、ちょっとは落ち着いたかな。落ち着け私。

うん、現実逃避完了！　この問題は先送りにしてもいいことが無いわやつです。

ええい、頭が悪いなら、考えるだけ無駄だ！

何とかなるだろう。

私は全部棚上げをし、とりあえず質問した。ひとつでも大事なことを。

「えっと、とりあえず、付いていたら養っていただけますか？
で、もし、お役目が終わったら雇用を保証してもらつてもいいです
かつ」

この人たちのお墨付きがあつたら、どこかでは雇つてくれるだろうね！ そして生活保障を忘れない！

私にとつての重要事項を口に出した途端、神官様が目を丸くし、噴出した。笑うさまが上品ですね！

じやなくて！

えー、これは笑うところじゃないですよ！ 必死に考えた結果で

わ。やつらはと厳格な言葉で語つべや。難こことはでもなこよ。

僅かにむくれていると、勇者様がぽつりと零した。

「お前は、先のことを考えるんだな」

私はあまり深く考えずに返す。

今まで緊張していた反動で、一気に心の中がダダモレだよ！
ぐつと握りこぶしを作つて、力の限りに熱弁を振るつた。

「だつて、これまで何の仕事やつてたんですか？　ツて聞かれた時、神子です！　世界救つてましたがなにか？　とか、いえないじやないですか。私、平凡まな板娘ですよ！　えー、こいつ嘘ついてるかもーとか思われて終了で、働き口すら満足に無いかもです。勇者様もそうですよ、世界が救われたら勇者廃業になつて、腕もたつしちよつとその辺の場所の護衛とかして稼ごうかなーと思つたとき、前職は？　て聞かれて勇者ですつて答えるのとおんなじぐらい気まずいでしょう！　勇者なにしてんのとか絶対みんな心の中でつっこんでますよ…」

神官様は流石に大笑いするのが悪いと思つたのか、こちらを背に向けて震えています。どう見ても笑つてゐるよ！　私が言つているのは正論だと思つうんですがつ。

「この言葉に対し、勇者様の返答は、
「そうか」

だつた。

流された？！　流されたのかつ。

神官様はようやく落ち着いたようで、笑いながらこちらを見た。

「まあ、将来のことを考えることはいいことだと思いますよ
といいながら、幾つか雇用条件を出しました。

ええ、神子とかのスピリチュアルな話より、こっちの方が分かりやすくていいです！

一日のお小遣いとか、町に入った時の行動とか、細やかな条件を詰めたところで、私と神官様はがつつき握手を交わしていた。

「ではよろしくおねがいしますね

は

あっ、勢いで承諾してしまった！

今気付いたけど、あとの祭りですねー！

町民じ、ジヨブチヒンジをかる

巨大な扉の開錠は、やつぱり呪文によるものだった。
それまでの呪文とは響きが全く違つ別の言葉を神官様が謳いあげる。

『 S * k x x x v v v N v v v M * r v v v j v v v r w w
／（世界に命じる）

M v v v c h v v v w o H v v v r x x x k * /（道を開
く）

W x x x g x x x I w o T o w w s h v v v /（我が意
志を通し）

H o k x x x w o K w w d x x x k * .（他を碎け。）』

「うちの言葉は、意味が頭の中に浮かんでくる。

凄いね！

意味は分かるけど、何かは分からないよ！ 当たり前だけど。
前の言葉より韻律がまろやかで棘とげしくない。よくわかんない
けど！

呪文にはいろいろあるんだね、とポケーと口を開いていたら、勇
者様がこっちを見ていきました。ひい！ 見ないでいいよ！ おおつ
と、口は口を閉じるところだった。危ない危ない。

今日はよく口が開く日……。人生、驚きの連続ですね！

ちよつとやそつとではもう驚かない！ ふつふつふ、スーパー町

民ですよ、私は！

生まれ変わるんですよ！ スーパー町民にね！ 韶き悪いな。他に何かいい言葉あるかな？ 超町民とか？ だめつぶりだけが増えます……。

神官様の呪文の余韻が、光の粉となつて空氣に溶け込んだ。広いホールに残響が響く。それと同時に大きな扉が音もなくすっと開いた。

えつ、『ジジジ』、とか音は無いんですか？ 神設計かもしねりない！ 神殿だけに？ はつはー。動搖なんてしてないよつ。スーパー町民だからね！

そんな風に扉について考えていたことは、次の瞬間に吹っ飛びました。

扉の向こうにあつた光景に、私は息をする」とも忘れてしまつた。なんじゅ じゅああああ！！！

扉の向こうは、とても広い広い場所だった。
室内ではなかつた。屋外だ。

光降り注ぐ場所。

深い蒼穹の空と、緑の丘。

風すら息を潜めるぐらいの威容を誇る星なる樹。

その樹が、普通じゃなかつた。大きいとか、そういう問題じゃない。いや、確かに大きいよ！ 大人が五十人手をつないで、囲えるかどうかも分からぬぐらい。視界の殆どが樹に埋め尽くされる。

でも暗くない。樹が光を放つていてるから。光つてているだけで驚いたんじやない。それ以上に、この樹はとんでもなかつた。

天から生えた樹が、地上に向かつて伸びている。

えっ？ とか思いますよね。
私も思いましたああああ！
なんで空から生えてんの！
どうやつて空中に浮いてるのー！

端が見えないぐらい広い丘の上に、その樹は空からぶら下がつていたのだ。

半透明なうすすらと白い幹の中には、天から根が吸つた光がちらちらと通り、葉にたどり着く。葉は完全な星型をしていて、キラキラと蒼い色に輝いていた。時折、葉から零のよつに光が零れ、下にある箱に注ぎ込まれる。

樹の先端は、地上から大人一人分ぐらいの距離を残して宙に浮いている。箱はその下にあるのだ。

これが星原樹。

神様、植えるなら、ちゃんと丘の上に植えてくれてもいいじゃないですかあああ。

光がはらはらと樹から零れ落ちるわが、とても綺麗で、胸が詰まる。

言葉が、喉の辺りから出てこない。

上を見上げても、樹の根元が見えない。あの先は神様に繋がつているのかな？

こんなものを見せられたら、流石に星神様がいらっしゃるのを疑

えるはずが無い。

「リリがセイヒツの間にになります」

声を無くす私に、神官様がそつと教えてくれた。そして、

「セイヒツは、静けさを表す静謐と、星なる櫃^{はし}を示す星櫃の両方をあらわしています。樹の先に、箱があるでしょう。あれが神が命の基盤と韻律を納めた星櫃です」

指差された先にあるのは、ただの白い四角いものだつた。箱、といふには大きいな。棺つていつたほうがいいかもしれないぐらいの大きさ。

「あれに触れることが、選定といわれることです。……まあ、何の危険もあつませんので来てください」

神官様に促され、恐る恐る扉の中に入る。

澄み切つた静寂に私は包まれた。

うわー！ うわー！ 静か過ぎる！

息をする音さえ響きそうですよ！ こんなとこりう来たらくしゃみとかしたくなるじゃないか！ 我慢！ 我慢しかあるまい……！ こう、真面目な場面がきたら、笑いに走りたくなる！

やーっと踏み出した足は、#生で音を立てる」となく、歩けるようだつた。

静謐つて難しい言葉だし、響きも凄く静かにしなきゃいけないイメージがありますね！

神官様に先導され、おどおどと箱の傍に来る。樹の真下だ。この樹、落ちてきませんか！ 落ちてきたら一瞬で私の押し花……じゃなくて、押し町民が出来るよ… そういう意味でもびくびくします。

近くで見たら、箱はふたがなく、小さなバスタブみたいな大きさだった。表現、庶民のたとえで「ゴメンね！」だって丁度バスタブの大きさなんだもん。

材質は白くつるつとした石っぽい何か。鑑定なんて出来ないから解説できないです。すべらかに輝いていますよ。

石っぽい何かでできた四角い箱。本当にどう見てもバスタブ……。その中に、さつきから樹から零れ落ちてきた光が溜まっています。風呂の湯みたいな感じで、ゆらゆらと、たゆたっています。光って、溜まるものなのかな？ これが命の基盤と韻律なんだろうか？ えーっと。

覗きこんで私は首を傾げた。

ちなみに、これをどうすればいいんだろう？ 先生！
助けを求めて神官様を見ると、手を、と仕草でうながされた。
この光の中に手をつけるらしい？

い、痛くないかな。びくびくしながら手を出してみる。一度石鹼で洗つてきたほうがいいですか？ サっき凄く汗をかいだ気がします。でもそんなことを許してもらえなさそうな気配がビュンビュンします。

えーい。仕方ないつ。

投入！

勢いよく光の中に手をつけました。

すると！
なんと！

何も感じませんでした。

ええええー。

こう、ちょっとどびりつと来たーとか、冷たい、とか、あつたかい、とかないんですかあ。

光が私の手を水のよしにするするとなでているよしに見えるけれど、感じません……。

たぶん横から見た私の姿は、お風呂の温度を見るのと同じ格好だよー。ちょっと回りが壮大すぎる風景だけどー。

……この後、どうリアクションをとねば。

ちょっと考えていたら、田の前のバスタブに、いきなり何かがドサッと落ちてきました!!

ひい！

反射的に手を引っ込みました。

怖いよ！ ちょっとずれてたら私に直撃したよ！

よく見たら、私の身長ぐらいある枝が、バスタブに浸かりこんでいます。わー、半透明な枝と、お星様の葉っぱだーきれいだなー。つて。んん？

も、もしかして、これを私が持つんですか？ 勝手に折れてきたけど、いいのかな。

私の背の高さぐらいあるんですけどー！

こ、これ以外落ちてこないよね？ 上からブツシリ、串刺しなんかになつた日には、悲しそぎるでしょー！

恐る恐る神官様を見ると、凄く真剣な顔をして私を見て頷きました。このアイコンタクトはなんだらつ……。あ、枝を持ってっていうことですね。分かりました。

じょうだん、いえそうな、ふんいきじや、ないっすね。ははは。

私はよいしょ、と星原樹のありがたい枝を持ち上げた。あ、軽い

です。

櫃に満たされた光が、枝に纏わり付いているため、動かしたらそれがハラハラと落ちる。意外と綺麗だけど、光は私に降り注がれている。こういつた照明効果は美人の神官様や隠れ美形の勇者様にしてください！

なにかが……つらい！ 普通過ぎる自分が……つらい！

『選定は成った』

わあん、と響く不思議な声。どこかで聞いた声だ。反射的に振り返る。

後ろから聞こえた気がした。

しかし、そこには神官さましかいない。

いまの声、誰だろう？ 神官様のなめらかボイスと明らかに違うんです。

心靈現象ですかあああ。

慄く私をよそに、事態は肅々と進んでいたようす。

ようやく神官様が声を出しました。

「お疲れ様です。勇者一行にようことぞ、神子」
神官様はにつこりと笑い、私に握手を求めてきた。そつと握り返す。前も思つたけど、この人の掌、結構硬い。剣でもしてるんだろうか。

「こちらこそ、よろしくお願ひいたします……」

でも神子呼びは止めてほしいな！ 心がすさみます……。

「勇者様も、よろしくお願ひします」

勇者様は、少しだけ何かを滲ませながら、頷いた。実は勇者様も居たんですね。私たちからちょっと遠いところに。無表情じやちょっとぴりなくなつていたけど、この人の表情を読むスキルが無いから分

からない！

握手はしないの？ ちょっとだけ、手の行き場を失う。あつ、まさか！ セツつきまで握っていた手が、汗ばんでいたのに気付いていたのか？。

「ごめんなさいね！ いまも絶賛汗ばんです！」 緊張の連続ですよー。

こうして、私は町民から、神子（仮）になつたのであつた……。でも、心は町民なんだからねつ。

神子よばわりは、本氣で勘弁していただきたいんですが……。泣くよー。

魔術師、研究資料を遺す（前書き）

いつもとやせや傾向が違います。

世界に関わる話なので、なんとなく読み飛ばしていただいても結構です。

魔術師、研究資料を遺す

研究資料

神話における創星物語と現代星術の限界とその汎用性について

著・ラブライド・ツワナアゲート

星術とは、なにが出来るものなのだろうか。

単純であるこの問いに、正確に答えられるものは少ないだらう。

大体においてこの質問を投げかければ、「この呪文を唱えればこうなる、だからこれができるのだ」といつたことを説明するものが多々。これは星術学において嘆かわしい事態である。この答えは星術を道具として理解しているに留まり、本来の星術という概念を理解したとは到底いいがたいものであるのだ。

星術とは、現象を顕現させるものである。

神が定めたもうた韻律を読み上げることで、有り得ない可能性を引き寄せ、現実化する。

例えば、荒野の真ん中で火を欲している人間が居るとしよう。道具も何も無い。彼が星術を使用できると仮定する。

まず、あらかじめ定められた「火が存在できる」という可能性を引き寄せ、最も実現可能な形で「火が燃えている」状態を現実化するのだ。

この喻えでいうならば、燃焼要素（例えば、乾いた木や燃えやすい草）がある場所で火を呼ぶ行為と、はたまた水中で火を呼ぶもの

は難易度が全く違つてくる。現実化しやすいものであればあるほど、星術はたやすく現象を顕現させる。

韻律とは世界に織り込まれた法則である。火は燃え、水は下にたまり、風は軽やかに吹く。つまりそれらが記された膨大な知識であり法則なのだ。自然現象にも韻律は働いている。それを曲げ、干渉するのが星術である。

「」のよつこ、星神が定められた韻律は、物質としての現象を変化させることが出来る。人はそれを歌という形で発見し、様式を定めた。それが古代星術の黎明れいめいであった。古代星術は、術師の製術過程により編む呪文も謳われる効果も全く変わつてくる。

それは時代が進むに従い更に洗練され、新星術として編纂へんさんされた。新星術においては様式は簡略化され、目的と効果がはつきりしている呪文となつている。

原初しゆの勇者以降編纂された新星術では、世界といつ単語は「」と表され、術を詠唱時には裏拍うらばくをとりながら「4 k 1 o」と謳いいあげる。

これは裏拍を一定の法則で決めてしまつことにより、簡略化された呪文用語である。

古代星術においては、おおむね「* k x x x v v v」と表記されるが、音程、長さによつて効果が変動してしまつのだ。

「」のよつこ、新星術は使用するための法則を決めることにより、生まれる現象の品質を規格化したといえるであろう。

星術の違いによる考察はさておき、¹⁰⁶「こので創星記に戻ろう。

神は、『星を配置され、命の基盤を整えた。その上で子等を作り、¹⁰⁷この世の韻律^{いんりつ}を決定した』¹⁰⁸とある。

韻律は、星と命の基盤と人間の存在には干渉できないとされているのは、¹⁰⁹この神話を基にした学説である。

命の基盤は韻律より先に神が創りたもったものであり、韻律とは別の法則で動いているとされた。命の消失に対し、その命がまだあるという状態（つまり死からの甦りである）を引き寄せられた例が全く無いのは、この創世記に記された順序が厳然として存在するためであるといふ。多くの術師は経験則からそういう結論に達している。

とすれば、星術の限界は人間の存在にたいしてどこまで干渉できるかといつてになるであろう。

しかし、¹¹⁰こので私は一つの疑問を呈する。

星術において、傷を癒す術が確立されている。これは、はたして命の基盤に関わらないものなのであろうか？

生命は命を指すと考えられる。韻律でひとが生命を支配することが出来るのではないだろうか。

もしも命の基盤に関わる韻律が存在するとしたら、現在通用している創星記がひっくり返る可能性がある。つまり、誰が広めたか不明である創星記における信頼性が失われるということである。しかし、代々の『神の声』が創星記に関して、肯定も否定も発表はしていない。神が語らないのは、間違えた創星記を広めたのが星神自身

であ……

（以下、インクと血？　とおぼしきものが滲んでよく読み取れない。）

研究資料は瓦礫の石の間に挟まつてあり、何とか風雨をしのいでいる。

誰も文字を読む人間は居らず、彼の疑問に答える声はもう無い。

魔術師、研究資料を遺す（後書き）

ラ・プラードライト・ツワナアゲート（Sk-7886～Sk-794
1）

ツワナアゲート伯とも呼ばれる。魔術師としての才に秀でた領主であつた。教鞭をとり、魔術師の教育に力を入れる。しかし、魔王の呪の流言により、民衆の暴動により死亡。宫廷魔術師として招聘が決定していた矢先の出来事である。享年54歳。

その後、ツワナアゲート地方は人々に忌避され、廢墟だけが残つてゐる。

元町民じ、それでもあくまで一般市民

「んにちは、町民じです！」

神子じゃないかって？

それで呼ぶなよ！

泣くよ！

お仕事のときはそれで諦めてるんだけど、普段は本当にその名前で呼ばれたら涙と鼻水でぐちょぐちょになつてやるー。乙女とかをかなぐり捨てているけどなー！

……失礼しました。いたさか取り乱しました才ホホ才ホ。はあ。最近、ノーブルすぎるものと触れ合いすぎた反動で言葉が汚くなつております。高貴アレルギー一歩手前です。

突然ですが、最近とてもある願望がたきつています！

身の丈に合つ生活がしたい！！！！

本当に心の底から庶民だと実感している！

一日は一食でいいです。それにこんなひらつひらな服に金糸で刺繡なんていりませんから！ 半透明の布なんて、これは一体なんなの！ どこに引っ掛けたか分からない。動きにくい上にびくびくしながら歩いてますよー！

私は遠い田をしながら、窓から見える景色をぼんやり眺めています。

今日もいい天気だ。紅茶が旨い。窓の外には綺麗に剪定せんていされた植木が整然と並んでいます。のどかだ……。鳥の声がする。いい朝です。

すね！

はい、私、旅立つてなんていません。
まだ絶賛神殿でひきこもり中ですよ。

主神殿で枝を貰つたあと、勇者様達と出てきた私を迎えたのは、
歓迎パーティとかでした！

枝はとりあえずとても凄いものとかで、持ち歩きは許可されませんでした。樹のところにとりあえず置いてきた。そんな扱いでいいのか。神官様も勇者様も、枝には触れずに妙に遠巻きにするんで、なんか私には分からぬ変なにおいが出ているのか気になりました。
く、臭くないよ！ とりあえず、星櫃せいひつとやらのバスタブの横に寝かせて置きました。枯れないよね！ 大丈夫だよね！ 枯れたら二つそり燃やそうか……。証拠隠滅ですよ。

お城でパーティと聞いて、まず、関係ないと思つていました。出席すら想定外。

パーティーかあ、誰の歓迎だろつ。美味しいもののおこぼれがあればいいけど、なんて考えていたこともあります。

まさかの主賓ですよ。

えええええ。

姫様お一方と遭遇しただけで、キャパシティーはとっくにオーバーしてました。なのにパーティとか。

無理無理無理！

その時の事をお話できないのは、パーティー中、私の頭が真っ白だつたため、ほとんど覚えていないからです！ 今でも断片的にし

か思い出せない！

はつ！ じ馳走食べ忘れた！－！ 今気付きましたよおお－！

世界の珍味が！

王様やら王妃様やら、セレブマックスレベルの人たちに囲まれ、
顔が引きつったまま勇者様や神官様に引きずりまわされたことは微
妙に記憶にあります。

覚えがあるのはそれくらいと、トーチャスだった、きらきらだった、貴族の名前つてさつぱりおぼえられない、つてぐらにしか思い出に残つていません……。惜しいことをしたなあ。もつ一生縁が無い（はず）だしね！

とりあえず覚えているのは、パーティが終わつたあと、お風呂に放り込まれ、磨かれ、着替えさせられ、氣絶するように寝て、何故かマナー講座を受講させられ、怒られ、星語^{せいご}を勉強させられ、怒られ、転寝をして怒られ、「はん食べて、勉強し怒られていたら一週間たちました！」

あれ？ 何でいつの間に一週間経つてるの？ そして大体怒ら
れている記憶ばかりだ。何故だ。

はい、そこの君！ なんかおかしいよねこれって！ 急いでると
か神官様は仰つてたような気がするんだけど、どうかから沸いて出
た御付の人たち一団に拉致されて現状に至ります！ 私つて拉致さ
れやすい人間なんでしょうが。

神官様は申し訳無さそうに少し危険な場所に行くから、と私と別行動をするとおっしゃいました。勇者様は相変わらずです。無表情の置物と化していました。

神殿にやつてきた時のある庭から、お一人と陸馬は旅立つて行き

ました。陸馬さん、あなたに会いたかった……。

で、置いていかれた私は、よくわからないまま、客人なのか教育されているのか謎の扱いを受けています。この妙に高級な部屋、そして着替え、食費もろもろおよびマナーとかの講座代は、必要経費ですね！ 私、払えませんよ！

マナー講座とか、凄くぎらりと光った眼鏡をかけた中年の女性が私のことを睨むんですよ。そしてわざとらしくため息をついたりします。

ですよねー、マナーとか、なつてませんよねーあつはつは。だって町民だもの！ 宮廷作法なんて知ってる方がおかしいよ！ そのあたりは開き直ってる。ストレス感じてもいいこと無いよ！ 嫌なこと忘れて開き直ります。これ私の長所。でも、授業の内容も結構忘れちゃう。これは短所。自称鳥頭ですから。

人間順応力は意外と高いよ！ キラキラしている建物に怯えなくなりました。指紋つけないかつて銀製品持つたびにびくびくするのは変わりないけれど。

主神殿は馬鹿でかいドーナツ状の建物だそうです。ちょっとバカにされた感じで教えてくれました。お、怒らないぞ……なぜなら、物を知らないのは事実だからだ！ ここ、胸を張るところですよ！

とにかく、神殿の話にもどると、あの樹をぐるっとか込むように広がる建物だから丸を二つ重ねたみたいな形だそうです。あれだけ大きな樹をかこむつて、どうやって建造したんだ。そしてやろうと思つたひとつて、一体なにを考えていたんだ。人間つて、意外とミラクルです。

で、その南に城があるそう。私が住んでいるのは北側の棟だそうだから、城は樹の根っこで見えません！ 根っこが見えるんですけど見上げたら。でも、普通の人は、葉が無い枝が広がっていると勘違いしているらしい。ちっちっち。みんなの想像よりも世界は不思

議で一杯でしたよ！

ちょっとお得感があります。

それよりも不思議なのは、毎日来襲する、あれなんです。

それはいつも唐突に訪れる。

次はマナーの時間だったかなー「ウフフアハハ」と遠い目になりながら用意をする。といつても身だしなみチェックと教本のおさらいだけれどね！

扉がノックと同時にすると開いた。その向こうにいるのは、輝くばかりの金の髪と美しい紫の瞳の女性です。後ろに控える人の人数が、彼女の身分をあらわしています。

「おじゃましますわ！」

今日もキタアアアアアア。

でもノックと同時に開けるって、どうなんだ！

あー、えっと。華の姫様……、王族って、暇なんですか？
まだ聞けませんが。

元町民ひ、お姫様とでは会話にならない

華の姫様は、今日も絶賛お元気そうです。

今日は若草色のドレスを纏つていらつしゃいます。織り模様が素敵ですね！ 一体何着持つてるんだこのひと。毎日ドレスが違いますよ。毎日一着とか！

ありづるー 王族だし！ 偏見じやないよ。それぐらい財力ありますしね！

姫様は事態についていけない私をよそに、とても『機嫌』です。
「神子様、『機嫌麗しゅう』。今日は素敵なお茶菓子を『用意』しましたのよ！」

何故か毎日顔を出して、私に一方的に話しかけるのですがどうしたものか。気がついたら私の部屋にわらわらとお姫様の侍女さんたちが入り込んでお茶をセットしていきます。ねえ、どうやってここまでその熱湯を持ってくるんですか？

姫様は特に私に断りもなく、同じテーブルにつく。この場合のマナーはどうだつたつけ？ マナー講座が役に立たないよ！ 覚えていないのが原因ですが。

気付けばホカホカの花茶を差し出され、狐色の焼き菓子が並べられてセット完了。侍女さんたちは仕事の素早さが半端じやないです。何で音もなく動き回れるのこの人たち！ いろいろ置き去りにされた感はあるものの、とりあえずお礼を述べる。

「……ありがとうござります」

どうやら神子？ というのは、キラキラしい名前だというほかに、意外に身分とやらが高いらしい。王女様と普通に同席が可能だそうだ。でも中身は私ですよ。とても残念な仕上がりだと思います。決して口イヤルになりませんよ！

「ウフフ、今日こそは勇者様のお話を聞かせていただきたいのです」「キラキラ、ではなく、ギラギラとした目を輝かせながら、お姫様は私ににじります。テーブルを挟んでいるものの、私は若干引き気味です。

ですが、これは完全に人選を間違えているんでは無いですか！

私と勇者様のふれあいなど、拉致されて、脅されて、荷物持つてもらつて、おんぶされたぐらいですよー 言葉による「ミミコニケーションなんて、高度な交流はしていません。あつ、なんだか悲しくなってきた。最近お二人の姿は見てない。

選定とやらのあと、ちょっとここで待つてくださいね、とお一人はどこかへまた出かけられましたしね。その後、連絡もありません。えつ、出かけなくていいの、と困惑したのはたつた一週間前なのに、置き去りにされたような寂しさがあるよー無いような。もともとお二人ともそれほど一緒に居なかつたのになあ。もしやこれが刷り込み？

というわけで、勇者様情報など私が持つていてるはずが無いです。そもそも、素性も何もかも知りませんよ！ 私は正直に姫様に進言します。

「その……、神官様にお伺いしたほうがいいのでは、ありませんか？」

あののお一人がずっと一緒に居るならば、片割れに聞くほうが確実でしようよ！

そんな心を込めて、今日も同じセリフを訴えます。

お姫様が飛び込んできた最初の頃は、王族という単語に遠慮して何もいえなかつたけど（正直頭がついていかず、口が開いたまま相手していたように思う）、最近はちょっと敬語に気をつけながら喋るようにしているよ！ ジやないとこの姫様押しが強すぎるものですから……あとで予定がずれて痛い目にあうのは私だからつ。

「あの方に？ 大体笑顔ではぐらかされて終わりですわ。さあさあ、聞かせていただきますわよ！ 勇者様がどなたかをエスコートしてらっしゃったのは、初めて見ましたし」

「えすこーと。

ああ、あれか。手を握られたあれですね。姫様の視線を思い出してトリハダたちました。思い出しトリハダですよ。

ええ、あの羞恥プレイのことですね！ 覚えがあります……。脳裏に刷り込まれています。

でもあの笑顔装備状態の勇者様ならやつてくれそうですね！ 多分ジエントルマンです。多分。いつもの無表情勇者様なら分からなければ。姫様は笑顔しか知らないかもなあ。無表情、本当に怖いです。威圧感しかない。

なので色々推測で物を言つてみる。

「勇者様にお願いすれば、エスコートはして貰ださるのでは？」

私の意見はばつさり切り捨てられました。

「いいえ。あの方、滅多にどなたにも触れられませんのよ」とえー。いつの間にそんな設定が？ 私、荷物担ぎとか、主に運搬されましたよ。そうだな、運搬のふれあいばかりだな！

「理由があちらしいんですけど、なかなかお話して貰ださらないんですの」

勇者様と楽しいトークつて、イコールで結びつかないにも程がある。神官様のスキルを見習わなければいけませんよ姫様！ 勇者との会話は、空氣を読め！ ですから。

私は、はあと相槌を打ちながら、花茶を飲む。初めの頃、お茶が何で花の味がするのか、甘いのか混乱したけど、今は普通に味わえる。今日の花茶も旨い。言葉遣い訂正します、美味しくってよ、かな。心の中だけでの感想だけどね！

どちらにせよ、毎日姫様はこんな感じで唐突に私の部屋に飛び込

み、小一時間勇者トークをして、満足したらお帰りになる。だから、何でここにくるんだ。話しだす相手なら他に一杯居るんじゃないですか、侍女さんとか。お付きの人とか、妹様とか。あ、最後は止めた方がいいか……。嫌味の応酬で部下の人の心臓が止まりそうになるからね！

しかし私はここで閃いた！毎日ここに来る理由！それは、勇者様はわたくしのもの！といつも無言の圧力じゃないですか？そうでしょう！

恋はガチバトル、まさに乙女の戦ですね、分かります。意外と恋愛小説的な行動をとられているのか。初めて生で見ましたよ！乙が乙女という物なのか。

感心してしげしげみていたところ、

「神子様、なにを考えていらっしゃるの？」

と、例の笑顔で問いかけられましたあああああああ。考え方を読まれては無いと思うけれど不穏な気配を感じたようです。黒いですよ、姫様！

姫様がなおも言い募ろうとした時、ほとほと、扉がノックされました。姫様は口をつぐみ、妙に笑みを深くされます。怖いって。不穏な気配を感じながら一応返事する。部屋の主は一応、私らしいので……。

「失礼いたします」

扉を開けたのは、めがね女史！マナーの先生ですよ！先生は相変わらず無駄の無い格好をしていらっしゃる。きつく束ねられた髪、ぎらりと光るめがね、抑え目の化粧、地味目の服装！どれをとっても教師の服装です。初めてお会いした時、ここまで教師っぽいひとも人生初体験だと感心したね！

「神子様、マナーの授業時間でござります」

笑顔なのに冷たい！吹雪の中に居るようですよ！あえて姫様

に声をかけずに私に声を掛ける。部屋の主が私だしね！ 私が姫様においとまを告げれば、この乙女お茶会は終了するのだろう。でも、姫様の眼光が密かに怖いです！ 何でこう、睨み合っているの！ 「神殿の方々は、神子様の自由を束縛することは出来ないのではなくて？」

姫様は懐から取り出した扇に口元を隠しつつ、さらりといふ。ひとりごとっぽく。でもそれは確実に私とめがね女史に仰っているですよ。

「姫殿下に直言をお許しいただけますか？」
めがね女史は侍女にわざわざ取り次ぐ。目の前に居るのに。こういいう辺りが、王族って不思議！ なところですよ。聞こえるのにね。
侍女さんがわざわざ姫様にそれを伝え、姫様が、
「許す」

と仰つた。ここで二人の視線が交わったああー！ どう見ても火花が飛んできますよ！

カーン。

戦闘開始の合図が私の頭の中だけで響いた。先攻、めがね女史！

「私どもは、大神宮様より神子様を託された義務がござります。授業の時間は開けていただけますよう、伏してお願ひ申し上げます」

どうやらめがね女史は神殿の人だったらしい。うん、私語なんてして無いから、一週間もいるのにせつぱりどこの誰だか分かりませんよー

後攻、姫殿下！

「あら、睨下は神子様をお願いします、と仰つたのでしょうか？ それはあなた方の思想を押し付けるような教育の時間ではなく、ゆつ

たりとした休息を指していたのではなくて？」

「フフ、と笑いながら姫様。えーと、私の勉強時間を減らす話ですか？ とりあえず、大神官様が関わっているらしい。凄い大物ですね！ まだ噂でしか聞いたことが無い人です。

「市井より見出された神子様におかれましては、星学を一通り修めることにより、より深い教養と造詣を身につけられるかと」

「それはあなた方の判断です。この件は大神官様直々にお言葉を賜るまで、わたくしは聞き入れませんわ。ねえ、神子様？」

「こっちにふるなあああ！！！」

せっかく置物の振りをしていたのに！ めがね女史も何も無い風を装つていますが、怒りのオーラがビンビン出ていますよ！ こわいいー。

何で二人とも私を見るのか。

そして二人ともなんで、こいつを追い出せオーラを出すのかな！

とりあえず、私、ひつそりと息でもして時間潰していますから、関わらないください。

なんだか嫁姑問題に悩む夫の気分がよく分かつたつ。

どっちも、出て行つてほしいんだけどな……。

元町民じ、おむかえがくる

気まずさざわらせる空氣の中、としあえず冷えてきたお茶を口に含む。

喉がカラッカラですよー

この空氣で緊張しないとか、そんな氣力と根性があつたら、私ここに居ないと思います！

いろいろ流されるままに神子就任だもんね……。ちょっと、深く考えるように反省しようと考えています。考えるだけで、実行できて無いけどね！

とりあえず私がノーリアクションなため、お一人はにらみ合いに突入しました。どっちの肩を持つても大変なことになる気がするんだ！

お姫様の肩を持つと、マナーの先生とか、あと神殿の人とかともめそうな気がする。生活は大体神殿の人が面倒を見てくださっています。その人たちとこれ以上関係悪化させたくないんだ。今でもぽつと出の神子だから微妙にみんなよそいしいしね！

神殿の人の味方をしたらしたで、お城の人たちと話したときにある毒攻撃が来る気がする。あの毒を受け止められる自信はゼロよ！…嫌味の応酬なんて出来そこに無いから、受け止めるしかないけど、怖すぎます！

分かつてゐるんですよ。どっちつかずって、正直、かーなり感じ悪いじゃないですか！…でもそうしなければならない時も在る……やつと理解しました。斜め向かいに住んでいた、鍛冶屋のおつかや

の気持ちが分かるよ！ 何で奥さんとお母さんの間で真っ青になつてただけなんだ、止めたらいいのに、なんてちょっと厳しい見方してた。けど、理解したよ！ じうじつたときどつち止めても自分が大ダメージだつてことに！ おっちゃんゴメンね！ 嫁姑問題つて、ちょっとやそつとで解決できる問題じゃないんだね！ 私もちよつと大人になつた！

えーえー、事態が硬直しそうになつていまます。どうにかならないかなー。私も硬直しそぎで体が痛くなつてきました。

その時、ふわっとトリハダがたちました。

何のトリハダだろう！
肌つて……立つんだね！

思い出しトリハダか！ 緊張しすぎて鳥
と思つたら、今度は空気が揺れた気がす
る。気のせいかな？

「どうかなさいましたの？」
あー、風でも吹いたのかなーと思つてきよみよみしたらい

思いつきり不審そうな顔をした姫様と目が合いました。そんな
よ風を探していたなんて、言えないよね！ 乙女過ぎるよね！

周囲の人たちが急に動き出した私に視線を集中させています。

やめて！

見られたら減ります！

私の体力とかが磨耗するよ！ まあ、確かにあのにらみ合いの中、置物だつた私がいきなり動き出したのにビックリする気持ちは分かれます。勇者様が大体そんな感じだし。あのひと、静かなのにいきなり喋りだすから本気で怖い。

注目に身じろぎした瞬間、廊下ではつきっとわめきが広がるの

が聞こえた。

なんだろう？

扉がノック無しにぱたーんと勢いよく開きました。

勇者様だった。いつも通り無表情なんですが、迫力が違った。蒼い鎧がほこりと血のような汚れでかなりくすんでいる。頬には細かい傷があり、黒い髪も乱れていた。戦地に居ましたね、その殺氣というか何と言うかそういう怖い気配がダダモレですよ！

蒼い瞳が文字通り鋭く私を見つけると、

「すぐに出る」

と端的に状況を説明されました。用意をするんですね、分かりました！

がたがたとマナーそっちのけで私が立ち上がると、お世話係の人が近寄ってきて、御召しかえはいかがなさいますか？ と優雅に聞いてきた。いつも食事の用意とかしてくれのお姉さんです。姫様がいらっしゃったので、部屋の隅で待機していたようです。お気遣い、すみませんね。

ですが、それを勇者様は言葉でばっさりと切り捨てました。

「時間が無い」

勇者様は無表情を崩していません。えんきょく婉曲な表現をしてくださいよ！ そして人の話は聞いたほうが多いですよ、勇者様！ お世話係の人気が本気で怯えています。震えながら謝罪をしていますよ。勇者様はこう見えても怒つませんよ！（多分）このお姉さんも私に気を使ってくれたのにな。この場合、どっちが悪いっていうのでも無いけど、申し訳ない気になつて、

「大丈夫ですよ」

とその人の肩に触れてみた。ありがとうございます、とお世話係のお姉さんは本気で泣き出してしまいました。そ、その、どうしようと。

とりあえず同僚と思われる人にお願いし、私は準備をすることにしました。

勇者様の目がまじこわいからです。

お姉さんは泣いてたりするし勇者様は傷だらけだしで、凄い修羅場な気もするんだけど、とりあえず部屋のすみっこに置いてあつた荷物の袋を掘みます。一週間前から荷解きせずに放置していました。食べ物とか、腐るものはちゃんとのけているから大丈夫だよ。

着替える時間が無いといわれたけど、このひらひらゴージャスな服、汚したらどうするんですかああああああああ！こんな高級布地、弁償できないよ！私がもだえている時間もないんだろうな。うん、汚して、洗つて駄目だつたら、神官様や勇者様に弁償してもらえばいいよね！生活手当に入っているはず！外套でとりあえず防げればいい。

よーし外套も羽織つて準備完了！

私が荷物を持ち上げていると、姫様が恐る恐る勇者様に声を掛けられました。

「勇者様」

表情を取り繕つていらない勇者様に、流石の姫様も引き気味です。ですよねー。このバージョンの勇者様つて、正直怖いですよねー。分かります！勇者様は姫様に向き直つて、優雅に一礼した。マナーテacherのめがね女史が目指してたのつて、ああいう礼だつたのだろうね！私には無理です。

「姫殿下、申し訳ございません。魔物の群れを殲滅せんめつはしたのですが、浄化が不完全で、今は何とか結界で防いでいる状態です。一刻も早く神子による浄化を行わなければ危険ですので、無礼を御寛恕じかんじょ下さい」

礼儀正しく、でもいつも大違ひな無表情で勇者様は口上を述べている。一番に姫様に気付くかと思ったけど、今ご挨拶ということは、実は目に入つていなかつたのかも。焦つているのは分かるけど、かなり大変な状況なんじゃありませんかあー、とりあえず、魔物

がいる場所に行くのでは無いこと分かったけどね！姫様の疑問がなかつたら、説明してくれなかつたんでは無いですか。その当たりどうなんですか勇者様。

姫様は、とりあえずは、

「そういう事態なら、仕方ありませんわ」

と仰つた。それに礼を述べ、勇者様はくるりと私に向き直る。勇者様に近づくと、勇者様は私の足元を見ながら渋い顔だつた。な、なんでございましょうか！

「走れるか？枝が必要だ。取りに行く」

ああ、あのなんかの匂いが出てている（推測）枝ですね！ 分かりました。私は力強く頷いた。

ひらひらの服に華奢な靴だけど、意外と走りやすいし歩きやすいんだよ！職人様の魂を感じます。これが高級な衣装ってヤツか！まあ、中身は釣り合っていない残念な私ですが。枝、意外と担ぎ上げるの面倒だなあ。服に引っかかるないように気をつけよう。

「枝、……星原樹の枝を？！」

姫様が真っ青になつて叫ばれました。ええー、姫様もその反応ですか。あの枝、かなり嫌われているんですね……。私にはさっぱり分からぬ嫌う要素があるはずなんだ。今日取りに行つたら、もう一度匂つてみよう。あれを持つてるからつて、私も一緒に嫌われたくないし。

勇者様は姫様を無視できなかつたのか、返答をしました。

「選定の際に神子が樹から譲り受けました。現在はセイヒツの間にあります」

姫様は目を見開いて、震えながら、

「神子様は……枝に触れられても、大丈夫でいらっしゃるの？」

と仰いました。

えー。なんですか！ その化け物を見るような目は！ それは姫

様だけじゃなくて、部屋の人全員からの目線ですよー。ガン見どこの話じゃないよ！だから見るなって。減るよ！私の何かが！

……こう、聞かれたら、他の人にあの枝がどう見えるのかがかなり心配です。

「綺麗だけど、普通の枝ですよ」

私がどん引きしながら言った台詞は、どうやら何かを外したようです。皆さん目の線が強くなたあああああああー。なんだかとつても、溝が開いた雰囲気がするよ！ だつて、本当のことじゃないですか！

「時間がありませんので、これで」

勇者様が颯爽と立ち去ります。私も慌てて姫様や御付の人たちに礼をして、

「お茶、ご馳走様でした」

と言つて、少し悩んだ。行つてきます、というのもおかしいよね。ここは私の家じゃないし。だから気になつていてことを付け加えた。

「服は汚れたら洗濯して返しますね！」

汚しそぎたら「ゴメンだけどね！ その時は、神官様、頼りにしています！」

私は長いスカートの前を掴み、勇者様の後姿を追つて走り出したのだった。

姫君、今後のことを考へる（前書き）

華の姫様視点です。

姫君、今後のことを考える

勇者様と神子が出て行った扉は、閉められることがなく中途半端に開いていた。現状の中途半端さを示すかのようだった。話題の中人物がいなことには、事態は何の進展もしない。

神子はある意味常識の範囲からみ出す少女だ。私にとつても触れ合つたことの無いタイプだつた。

何故洗濯の心配をするのか、私には理解できない。彼女の服は神殿が彼女のために用意したものであり、それを汚したところで誰も何も言えないであろうに。

恐らく本人の中に於いて、現在置かれた立場に付隨する権力と、等身大の自分の一致がなされていないのであろうと推察できる。だからこそ丸め込めるかと判断したわけだが、時期が悪かつたようだつた。

勇者様が怪我をするほどの戦闘、の方が浄化できかねるほどの瘴氣じょきがあるとは。

お二人が危険な地域に行くと仰っていたが、あそこまでとは思わなかつた。

勇者様は、彼が神に選定された直後、この都を襲つた一万とも二万とも言われている魔物の群れを撃退している。激戦は先頭に勇者様を据えた騎士団と魔物の群れの間で三日間行われ、星都の空は戦の炎で赤く染まつた。

幸いにも魔物の群れは統率されていなかつた。さらに、魔物の嫌う天上の青い石が都市を囲う高い壁に使用されていたことが勝敗の分け目だった。

大きな被害をこうむることなく、人間たちは生き残り、勝利した。街道を埋める魔物の群れを殲滅せんめつなど、本当のことかと他国の中

はまず疑う。街には殆ど被害が無いではないか、と。

だがこれを誇張した話だと言つものは、星都にはいない。あの日、街道を埋め尽くす黒々とした絶望という名の魔物の群れを、遠目ながら私も見ている。都の民も例外では無い。あの群れを駆逐したことは、神と勇者様の威光に恐れと畏敬を深く抱くことになった。この都のものは、誰しも勇者様の行く手を遮ることなどせず、協力を惜しまないのだ。^{あお}深蒼の勇者様は、まさに生きる伝説でもある。

彼の戦闘能力は、対魔物に特化している。それは魔物に苦しめられている他の国にとつては、喉から手が出るほどほしい力だ。実際、彼らにはどの国からも熱い勧誘や懐柔は止む間がないそうだ。一応は生國であるわが国に屬してはいる。しかし、それは彼らが決めることであつて、私たちに関与できることではないのだ。できれば、婚約や婚姻といった手段でより強固に勇者様を繋ぎ止めたいとは考えていてるもの、全く手応えは感じられない。いつも勇者様は微笑んでいるものの、その奥の感情を揺るがせる事はない。先程の雰囲気には流石に驚き呑まれかけたが、先程の様子に神子は驚いてはいなかつた。あれも勇者様の一面なのだろう。

どちらにせよ、神子様も勇者様も旅立ち、この部屋には用はなくなつた。

私はこの後の予定を考える。

もともとここに居るのは歴史学の授業を抜け出したからだ。あの教師は隣国の息が掛かっており、わが国の歴史に批判的なのがいただけない。それほど馴れ合つべき人物ではないと判断している。授業を抜け出したことに関しては姫のわがまだと思うだけであろう。そう思われるよつて、軽率に振舞つてもいるのだから。

花茶はぬるくなっていた。

カップを持ち上げると、侍女の一人が意図を察し、新しいそれと取り替える。

結局神子の言質は貰えず、彼女の扱いに関しては宙に浮いたままである。神殿に与するのか、はたまた我らの利となってくれるのか。「時間は……ありますわね」

喉を花茶で潤し、神殿の女神官をちらりと見やる。マナー講師を任せている女は、神殿のものに多い思い上がりが鼻に付く。

この国はもともと神殿と王室の対立が、歴史上でもしばしば起つていて。考えてみれば当たり前のことだ。大きな人間の集団がある、その頂点に立つのはどちらだ、と言つ話であるのだから。一応、手を携えると言う形をとっているものの、神殿はこの国自体を神殿のものとしたがり、王室は神殿に対して神を祭るのであればそれで満足して政に手を出すなど考えている。永遠に平行線でしかなり。

これ以上、あの女にも話をすることも無い。私はカップを置いて言葉を発する。

「神子様もお出かけになられましたし。わたくしも帰りますわ」自分の考えを声に出すことで、周りの人間が動く。意志を示すのも王族の仕事である。下々のものが動くためのきっかけを与えなければならない。私の言葉で周囲の人間が動く。茶器を片付け、私の椅子の背を引き、護衛と先導をする。

そのあたり、あの神子は圧倒的に言葉が足りないのだ。いつものんびりと笑つており、周囲のものに軽んじられても気付かないのか、気付いて無視をしているのか分からぬが気にしていないようだった。

与えられたものに戦々恐々とする姿は、哀れさを通り越して好感を覚えた。貴族の中には責務を果たさず、豪華な生活を享受するこ

それより、自分がしたことに対する得た対価で無い生活に慣れようとしている神子は、まだよいほうである。彼女は恐らく気付いているのだろう。責務と対価はつりあうべきであることに。彼女の実績は全く無いのだ。本来ならば歓待されるいわれはない。あの歓待は、期待が形をかえただけだから。神子の態度は私にとって好ましい。権力闘争を目の当たりにし、明らかに関わりたくないという態度をとっていることも簡単に見て取れて、それはそれでほほえましいのだ。権力を握ったと勘違いし傲慢な態度をとるよりはるかに可愛らしい。

廊下に出たところで、再び私は口を開く。

「部屋には帰りません。中庭の花が咲いておりましたわね。そちらへ向かいます」

部屋に帰ったところで、歴史学者がまだ居たならば面倒な事態が発生するはずだ。あえてその選択を取らず、中庭に向かう。星原樹を囲む壁は、天高くそびえ、視界を常に片側から遮る。

この国は星原樹を囲む神殿の外側に広がっている。
星原樹を守るために言うが、王族や神殿の上層部はそうではないことを身に染みて知っている。

星原樹を守るのではない。

人を、星原樹から守るための壁であるのだ。

あの壮大な神授じんじゅの樹は有史以来七千年前、あの場所に佇んでいる。神氣を纏うあの樹木は、それゆえに神の力にそぐわないものを一切近づけない。

近づけるという事実、それはすなわち既に星神により特殊な選定を行われたものだという証左となる。

あの強大な力と象徴を、我が物としようとした王や権力者は歴史

上存在したらしい。分かりやすい権力が形をとつたものだと勘違いしたのか。

しかし、そういうものにはからず神罰が下る。彼らは樹に近づこうにも近づけない。それを押して樹に触れようにも、触れるだけでことごとく狂ったのと言つ。

睨だい下しんの口を通して星神が仰ることには、人間の手に余る力を秘めた樹木であるから、だそうだ。触れるだけで大きな力が流れ込んでくるらしい。自分の精神より広く広大なものを、どうして受け入れられようか。小さなスプーンで、海を掬うようなものだ。

歴史から人は学ばないものだ。最近発生したことも、結局は神の威光を自らの権力としようとした例もある。彼も違わず、破滅の道を辿つた。

星神宮と名乗り、勇者様達の旅に同行しようとした従兄弟殿は、平たく言つても俗物であった。

王位継承権六位という中途半端な立場が、彼を野心に駆り立てたのだろう。そしてそんな彼に、王族につなぎを持ちたい神殿の一派が、星神宮、というよくわからぬ役職をつけ、権力を持たせ、勇者一行にねじ込んだ。

彼は浄化のためにと持たされた星原樹の葉の欠片を持ち歩くだけの役目だった。旅の間は食事や休憩場所に盛大に文句をつけていたそうだ。その我儘ぶりは私も身近で見たことがある。聞いただけで目に浮かぶようであつた。同行させられた近衛騎士団からの評判はすこぶる悪く、勇者様たちの心がわが国から離れないことだけが本当に心配されていた。

報告が様子を変えたのは一週間後だった。星神宮が気力をなくし常にぼんやりとしている、と。

お一人が一旦星都へ戻ってきた時には、何もかも洗い流されてぽんやりするだけの生きた人形がそこに居た。もともと同行を申し出たのは彼だ。勇者様たちは何度も止めようとした。しかし、結果はこれだった。

星原樹の葉にしても、直接身につけていたのではない。結界の韻律を幾重にも刻み込んだ天上の青い石で作られた護符に包み込み、首から下げていただけだ。

しかも、小指の爪ほどの葉の欠片だけなのに。

神とは無慈悲なものだ、と私は思った。神はもしかすると、役に立たないものは容赦なく切り捨てられるのだろうか、とも。従兄弟殿は哀れな姿になつたが、それは本人の欲望による結果である。それが分かつているにも拘らず、^{おそ}畏れのあまり救国の主である勇者様たちを忌避する動きがあつたのは、人間の弱さだろう。

長い回廊を抜け、整備された庭に出る。護衛騎士たちの先導に従い、今が盛りの花を眺める。麗しい幾重にも花弁が重なつていて花が、日の光の下で咲き誇っている。この花は美しさと裏腹に、鋭い棘を葉や茎に持つ。手を伸ばし折り取ろうとする人間の愚かさに気付いているかのようだ。

勇者様は人に滅多にふれる事はない。

私の勝手な推測でしかないが、彼はこの花や星原樹と似たような存在なのでは無いだろうか。

触れるだけで力を流し込んでしまうのではないか。これは憶測でしかない。

しかし、あの神子に関してはためらいが無いということは、その

推測を裏付ける。

神子はあの枝に普通に触れると言つ。触れるだけで破滅をする星原樹の枝を持てるとは、想像を絶する。ただの綺麗な枝、と切る神子の感性もいかがなものか。

勇者様に触れることが出来ないならば、このまま婚姻により勇者様を国につなぎとめることが出来ないかもしない。そうなれば別の手を考えなければ。どちらにせよ、今は一介の神官として付き添つているの方は、ここに戻つてこなくてはならない。まだまだ接觸の機会はあるはずだ。

策謀は、王族に生まれたものとしてのたしなみである。

正直、心が躍つて仕方が無い。

口元を扇で隠しながら、私は楽しみで口元が緩むのを抑え切れなかつた。

姫君、今後のことを考へる（後書き）

誤字、文章を整えました。

元町民ひ、枝を持つていぐ

「こんなにちは！ 臨時雇い神子をやつてる町民ひです！ このあたりで妥協しました。職業欄は、一応神子と書くことに、自分で折り合ひをつけました。

今は、死にかけています。

ぜ、全力ダッシュとつものが、こんなに苦しかったのつて、覚えてなかつた！

神殿の廊下を疾走とか。廊下は、走つてはいけません……！ マナーの授業で学んだけど、早速破つてますよー。やわらか絨毯のおかげで走りやすいよ！ やつたね！ 絨毯痛みそうだけさー！

だんだん廊下が見覚えのある場所に差し掛かる。

天井の絵が、始原の勇者様のあたりになつた。息をするのも苦しいです！

そういえば一緒に走つている人が基礎体力セレブ（私命名）だったのを忘れてましたああああ！ ちょっと休憩とかありますよね、そうですよね！

ゼーはーと荒い息をしながら、何とかついていつています。はぐれたら、しゃれになりません。こんな荒い息だと、不審者だと言われても仕方ないゼーはー。汗だらだらの口開けて死に掛けている表情、誰にも見られないのが不幸中の幸いですね！ こんな顔見られたら、お嫁にいけません。だから勇者様は振り返つてはいけないよ！ 乙女の尊厳守つてね！ 目の前の背中に念じておく。

徐々に天井の絵が移り変わり、だんだんあの馬鹿でかい扉が見えてきました。

あれ、そういえば神官様いらつしゃらないのに、あの扉を開くのはどうするんだろう？

あの重そうな石つぽいものでできた扉を押して入ると、それとも合言葉とかあるんだろうか。大事な部屋つぽいし、鍵も掛かってるよね。

そのとき、勇者様が一言だけ呟きました。

「H x x x t x x x n s * yo / (破綻せよ)^{はたん}」

わあん、と空気が震えた。

小さな声だけれども、確実に耳に届いた。

凄いトリハダがたつたあああああ！

走つて暑いのにトリハダとか！自分で自分が気持ち悪い！そして目の前の光景を見て、トリハダどころじゃないことに気付きました。おもわずあんぐりと口が開きますよ。

扉が、さらさらと崩れていきます。

実は光の粒で出来ていたんだよ、と言われたら納得できるような崩れっぷりです！！！ 端っこから空気に溶けて崩れていきます。扉の向こうには星原樹がそびえ、青空が広がっています。

え、ちょっと、扉、無くなつたんですけど。

しかもなにをしたとかではなく、ただ勇者様が呟いただけで、巨大な石つぽい扉が消えたんですが。勇者様、実は武器要らずなのかな！

それはそうと、扉、壊していいんですか勇者様！
これ、絶対高いというか、補修簡単じゃないでしょう！！！

「大丈夫だ」

心の声を読まれたのか、勇者様は走りながら普通に喋ります。聞こえるのも不思議だけど、この人の息が乱れてない方が不思議ですよ！ 分けて！ その体力分けて！

「この扉は自己修復の韻律が組み込まれている。そのうち勝手に直る」

「へー便利なんですね。

「どうか！ ヤツパリ壊したつてさらつと認めましたね勇者様！ なにをどうしたのか分からぬけど、公共のもの（なのかなあ？）は壊しちゃまずいですよー。ツツコミたい！ そして常識を説きたい！」

しかしそんなツツコミをしている体力など、私には無い！

肩で息をするのが精一杯、バスタブ、もとい星櫃せいひつにたどり着いたときなんて、もう瀕死状態でした……。

そうだ、この一週間、ろくに運動もしていなかつたんだよなあ。食べては授業、食べては授業でうたた寝……はつ。ちょっと前に頑張ったダイエット、あれのお肉の量、私取り戻しているかもしねない！ この、ゆつたりドレスもどきが悪いんだ！ どれだけ太つかが分からないつ。でもいいんだ、今走つたことで、ちょっとでも痩せれるような気がするから……。お肉との戦いは、乙女の永遠の課題ですよ。

私はそんなことを考えながら、星櫃の横においていた枝を手に取りました。

相変わらず軽い。

そしてみずみずしい。枯れちゃつたら証拠隠滅で燃やそつかと思つてたけど、必要は無いようだ。うむ。肩に担ぐしかないけれど、正直間抜けな格好です。本当に荷物運びだね！ これに荷物の袋を

吊つたらどうだろ？ 持ちやすいかな？ ちょっと旅人っぽくないですか？ 枝に荷物ぶら下げるのって。でも葉が落ちちゃうかな。結構わざわざ茂つている枝だし。

枝を揺らしたら、薄い硝子か鱗がすれるよつた、シャラシャラという音がする。お、意外といい音です。癒しアイテムになりそう。見た目綺麗だし。

しげしげと枝を眺めて、ふと思い出した。

そういうや、勇者様も神官様もこれを遠巻きにしていたけど、結局原因はなんだつたんだろう？ やっぱり一オイ？

むむ。これ、臭いんだろうか？

ぼふ、と葉っぱが密集しているところに顔を埋めると、ふんわりと優しい香りがした。お口様の匂いだ。ほんわりする。私には匂わず、他の人にだけ臭い匂いなんだろうか。臭い枝なんて、誰も持ちたくないよね。分かります。ですが、生活のためです！ どんな臭い枝でも持ちましょーとも！

「持つたか？」

勇者様は、私の奇行をじつと見詰めていらっしゃったようです。え、声を掛けて。もっと早く、声を掛けて！ 恥ずかしいです！ 思いつきり匂っていたのがばれた！ 恥ずかしさに身もだえする！

私は勇気を出して、どうしても気になつて仕方が無いことを聞くことにした。聞くは一時の恥ですよ！

「この枝つて、臭いんですか？」
「なにを言つているんだ？」

会話が通じないようですね。

元町駅ひ、ひやと荷物抱きあわせ始めたもひ

「うあえず、枝は臭くない。それは分かった！歩く公害ではないんですね。ちょっとほほつとしました。臭いつて、本当に我慢できませんからね！」

「少し急ぐ」

勇者様の声が少しだけ、固い気がします。お急ぎなんですね！了解しました。声音だけで分かるつて、もしかして無表情マスターに私もなってきたのか！もつと極めたら勇者様の感情が分かるようになるかも？

でもちょっと待て、今の言葉に嫌な予感がする。私は勇者様を見上げて先手を打ちました。

「荷物抱きまいやですよー。あれ、地味に肩がみぞおちに食い込んで痛いんです」

「急ぐということは私に走らせないことで、つまり私を抱き上げて持つていくことなんじゃないかとー。名推理ですよー。そしてこの予測は当たつているはずだ！乙女の勘がそう囁いています！」私は渾身の力を田線に込めて、勇者様に訴えました。

本当にあれは辛いから止めてくださいよー。
むむむむ。

「はじめ！」はまこまで長く続きませんでした。勇者様は、

「すまなかつた」

と謝罪してくださいました！ 勝利！ 私の勝ちです！！ 言えば分かつてくれるんですね。言葉が通じるんですね！ やつたあ！ 私が天に拳を突き出して達成感を噛締めていると、そのままひよいと持ち上げられました。

持ち上げられたっ？！

勇者様の左腕に座らされる格好です。正確には、左の肘の辺りに座らせて、手でぐっと腿と膝を押さえて固定しています。え、なにが起こった。

確かに、荷物抱ぎは嫌だといいました。

それは汲んでくれたんですね！ でも、幾ら小さいほうだといえ、片手で抱きかかえるとは、尋常では無いと思うんですね…。これって、チビッコにお父さんがよくしている抱っこですよね。私と荷物と枝を持ち上げた状態なのに揺るぎない勇者様。基礎体力セレブのみならず、力持ちだったのか！ さては筋力セレブですね！ 脱いだら凄いとか！ どう凄いかは、乙女のたしなみとして口には出せませんがっ。

私が固まつてこるつむぎ、勇者様はさつさと踵^{きびす}を返します。思わず揺れに身を硬くして、勇者様の肩に手を置きます。すると、

「落とれない。信じる」

と言わされました。信じますよー。との心を込めて、首を振ります。信じるも信じないも、私を支えているのは勇者様の腕一本ですからね！ 私の命が掛かってますよつ。落とれないでくださいね。

「あと、その枝には俺は触れない。できれば、少し遠ざけて持つていてほしー」

あ、そうなんですね。分かりました。

勇者様に枝が触れないように慎重に肩に担ぎ直す。

揺らした拍子に葉がしゃらりと音を立てます。薄く青み掛かった透明な葉っぱが、複雑に日の光を透かして、ゆらゆらと水面みたいに光を揺らす。癒される。和むなあ。皆さん、何でこの枝嫌うんでしょうね。

この枝を持つだけの楽な仕事で、なんと！ 三食おやつ衣料しかも宿屋つきですよ！ ぼろい商売だと思いませんか？ うまい話には裏がある……裏のおばあちゃんの言葉を胸に刻みながら、一応警戒はしていますが。今のところ、拉致されたのと、恥ずかしい職業名を押し付けられた以外は特に不満はありません。

勇者様は私を抱えたまま、早足から、徐々に疾走に移行していきます。

びゅんびゅんと景色が後ろに流れる流れる。わー速い。私が走つたより速い……。私って鈍足？

凄いな、勇者様まだ息が切れていないよ！ 私は大人しくしておいた方がいいだろうと、身動きしないように枝と荷物をぎゅっと抱えて小さくなっています。

だんだん勇者様に抱えられるのに慣れてきた自分がいる。

羞恥心は人並みにありますが、どうも勇者様の抱え方って、動物とか荷物とかに対する抱え方なんですね。だから恥ずかしく感じないんです。実際、あのエスコートもどきのほうが恥ずかしかった！

多分、人間扱いされたから？

ここで、きやッ！ 勇者様に抱えられちゃったッ！ とか、姫様だつたらラブモード展開とか、あるんじゃないかな！ あ、姫様と言えば、勇者様が人に触れ合わないとか仰つてたけど、あれは一体なんだつたんでしょう。今実際、勇者様の腕の上に座らされています……。恋する乙女の異的な何かですか！！ 勇者様は私のものよ

！ といった牽制的な何かですか！

つぐづく、勇者様は本当に謎の人だよね。

結局この人たちのことは、漠然とした業績しか知らない。どんな道を歩いて、こうなったのかは分からないし。人に歴史有りってね！ 誰しも、歩んだ道のりの先に今がある。向かいのじいちゃんが言つてました。たまにいい事言つじいちゃんです。

抱え上げられているから、勇者様の顔が私より下にある。見下ろすつて新鮮ですね！ いつも頭一つ分高いせいでの、見上げてますから……。

改めて勇者様の顔を見下ろすと、痛々しい頬の傷が見えました。治療していなんだろうか。

もしかして、勇者様見えないところに怪我しているとかないのかな？ さつき私と一緒に走つてた、つておかしくない？ その気になれば荷物担ぎで攫うはずなのに、私の横をわざわざ走つているとかありえない。相当急いでいる雰囲気が伝わってくるの。

「怪我、されてませんか！」

私を抱えて走つているくせに、結構な速度がでています。なので舌を噛まないよう一生懸命口を開いたら叫び声になってしまった。うるやくで「めんなさい！」

勇者様は前から目を逸らさず、「

「もう治つた」

とだけ返答。そうですか、治りましたか……？ うん、謎ですね。怪我つてそんな早く治るものですか？ よく見たら、頬の傷も生々しい傷跡じゃなくなっています。

「じゃあ、もう怪我は無いんですか？ 痛くないんですか？」

状況が分からぬ私はしつこく聞きますよー。最近しつこさも重要と気付いた！ しつこべきかないと、絶対この人自分から口を開かないよ！

勇者様は私を一瞥いちべつしました。

「……痛くない」

その間はなんですか！ 怪我人を無理させちゃいけないと思つんですけど！ 私はにわかに焦りだした。血とか出たらどうするんですかあああ！ 急な運動危ないですって！ いや、危ないどころじやないのか？ 私は疲れているけど元気ですよ。まだ走れるッ。ダイエットも必要だしね！

「まだ痛いなら、下ろしてくださいね！ 自分で走りますよー！」

私のしつこさに、勇者様は根負けしたのか、

「全く痛みは無い。このままでいい」

と言い換えました。全然痛く無いならいいんだ。うん。私はようやく追及の手を緩めました。この人はたぶん嘘をつかない人だと思します。大人しく口をつぐみました。

しばらくすると、前方に見慣れない広場が見えてきました。

ここも見事に人気ひとけがありません。

神殿つて、人口密度凄く低いんですか？ セイヒツの間からこつち、全然人を見ません。

この広場も初めて神殿に来た時に良く似た、芝生と壁だけの場所です。何でこんな場所が一杯あるんだろう？ 無駄設計じゃないんですか？ 庶民は無駄という言葉が嫌いですよ！ 無駄遣いとかにあこがれますがっ！ 無駄遣いするほどお金はありませんから！ 無駄にお菓子とか買いまくつて、『じゅうじゅうだらだらしてみたい……』そんな夢を抱いたことは確かにありますけど！

勇者様は広場に出ましたが、私を下ろす気配がありません。そのまま芝生広場の中央に歩み出ます。青空には、太陽と白い第一の月がぽつかり出てます。いい天氣だ。

（ここから一体どうするんだろう？

すると、扉のところで謳つていたあの言語が勇者様から流れきました。

「Z x x x h y o w w - 4 5 8 7 5 2 0 - K x x x r x x x
Z x x x h y o w w - 2 4 6 4 5 1 2 - /
(座標 4 5 8 7 5 2 1 から座標 2 4 6 4 5 1 2) -」

世界が、息を呑んだような静寂が広がった。

空気が歪み、軋むさまたが、見える。『いくつと思わず息を呑みました。超常現象ですよ！ なにが起こるの！

勇者様は今度はなにを壊そうとしているんでしょうね！

芝生広場は自己修復しないと思いますよ！ 庭師の人、泣かせるのよくないです。

不思議な韻律のせいでか、トリハダがまた立ちました。

ホント、今日これを立ててばかりですよ！ 何回田のトリハダですか！ これ以上何かあると、私、鳥になります！ ばつさばつさとか飛んでいくよ！ 飛ぶのは意識と記憶だけど… つまり失神です。

とにかく、視界が歪む気持ち悪さもあり、私の緊張は高まる。ぎゅっと枝を握りなおした。

「つかまつていら」

勇者様が普通の言葉で私に注意します。

その言葉通り、勇者様の肩に手を回し、マントをとりあえず握ります。掌には汗が滲んでた。慎重に枝を勇者様から離して準備完了です！

凄くいやな予感がするんだ！
だつて、空気がおかしい！

空が歪んで、空気が転んでるなんて。

勇者様が続きを韻律を謳いあげる。

「K y o r v v v w o A s s y w w k w w / (距離を圧縮)」

耳鳴りがするほどの静寂が広がる。圧倒的な何かの気配がひたひたと押し寄せて、頂点に来た時、勇者様が最後の韻律を口に出す。

「H d o w w . / (移動)」

勇者様の宣言の後に、特大のめまいが来ました！

ぎやあああ！

神官様の術の感覚に近いけれど、こちらの方は穏やかさじやない！

凄く無理やりねじ込んだつて感じがあります！ もしかして、凄い力技なんぢやないですか！ そのところどうなんですか勇者様！

とりあえず、意識が遠くなりかけても、枝を離さなかつた私を誉めてほしいです！

元町民ひ、出番が来る？

ぱちん。

ぴつたりと正しい枠に納まつたような、世界が元に戻つたような、そんな圧倒的な安堵感とともに私は田を覚ました。

気がついて、まず枝の確認をした。

とりあえず、ぎゅっと握り締めていますよー。勇者様に触れさせても無いし、落としてもいませんでした！

こわかつたよおおおおおおー！はい、意識飛びましたとも！勇者様の力技って半端無い。もしかして、あなた、基本力技の人ですね！身に染みて理解しました！うすうす感じていたんですけどね！今更って言わないでください！

世界の歪みが正常に戻り、大きく深呼吸しようとしたりで、私は思いつきり息を吸うのを躊躇ためらいました！んぐ、と喉で息を止めましたとも！

だつて、空氣が、ピンクでした！

いや、喰えではなく、ピンクの霧がもやもや漂つて視界を遮つています。気持ち悪いです。

それもふわっとしたピンクじゃなくて、じきじき田に痛いピンクですよ。なんですかこれ。

ピンクの霧がそこかしこに溜まつて見通しが悪すぎます。

この空氣はどうせ吸っても吸いつと体に異常をきたしそうな感じですよー。吸いすぎて頭の中がピンクに染まる……なんだか卑猥ひわいですね！乙女の口からはこれ以上何もいえません。

はつとじて口と鼻を手で塞ぎます。吸い込んだら危険な気がしますから！

勇者様はそつと私を下ろしました。ありがとうございます。鼻と口を塞ぎながら、ふいふい礼を述べ、きょろきょろと辺りを見回します。

濃いピンクの霧に阻まれて、景色が薄ぼんやりとしか見えません。さつきまでぴかぴかの晴れ空だったよね？ 太陽も月も見えません。私、そんな長時間気絶してないよねっ。勇者様にさすがに起こされたと思ひます。

周囲は昼間のはずなのに、薄曇ぐらこのどんよりした暗さに加え、さらにピンクの霧ですよ。怪しそ爆発です。勇者様、私をどこに連れてきたんですかっ。

「じゅうじだ」

勇者様は迷うことなく私を先導して歩き出しました。勇者様は口を抑えていない。大丈夫なのかな。深蒼あおの勇者様がピンクと混じつて、紫の勇者様になつたら、田も当たられませんよ！

それにも、ここ、歩きにくい。勇者様は身軽に歩きますが、足元にはじるじる石が転がつていて歩くのが難しいです。む……石じゃないな。これは、瓦礫がれきですね！ レンガとか混じつてます。ちょっとこの華奢な靴では、ヒールがはまり込みそうで怖いんですが！ なんとか勇者様についていきます。ピンクの霧つて、暖かそうなイメージがあるんですが、この霧はとても冷たいです。背筋がぞくぞくしてきた。

ふと前方から、風が吹いた気がしました。しゃらん、と葉が音を立てます。

小さいながら、神官様の声が聞こえますよー。

勇者様の足が少し速まります。えーと、待ってください！ 結構

必死で追いかけるために、この纏わり付く長いスカートの裾がかなり邪魔です。大きくドレスの裾を持ち上げます。膝が見えるけど、いいよね！ 非常事態です。一気に走りやすくなりましたよ！

何とか勇者様に追いつくと、神官様が目を閉じて一心不乱に呪文を唱えられていきました。神官様の周りには、ピンク色が薄い気がします。と言つても、少しだけだけ。それよりも神官様が大変な状況でした！

「T·j·y · T·j·y · T·j·y · H s s y · .

ただでさえ白いお顔が真っ白です！ 額には玉のような汗が吹き出で、今にも倒れそうな雰囲気。でも、声を掛けられません。とても鬼氣迫る表情で何かを押さえ込もうとしているのが分かる。

「T·j·y · T·j·y · T·j·y · H s s y · . K k Y r „ H n
k 2 4 5 8 5 ” N H n n O t · T·j·k m y · T·j·y · T·j
y · T·j·y · H s s y ·」

同じフレーズが何度も繰り返されると言つことば、ずっとと諂つてなければ継続できないほどの星術なんだと思つ。

私が息をのんでいると、勇者様がこちらに振り返り、一瞬動きを止めた。私の足元に視線が突き刺さります。

足？

あ、すみません、ひざいぢままで丸出しでした。走りやすさ優先の結果ですよ！

「足はしまいなさい」

ぎじちなく視線を逸らしながら勇者様が仰いました。何で丁寧語

なんですか。お父さんみたいですよ。すみませんね！乙女失格ですね！お見苦しいものを見せました！裾をぱさぱさとぱぱき、足の収納が完了です！収納が完了したところで、改めて勇者様がこちらを向きました。

「枝で瘴氣を浄化してもらひ」

この枝ですか？確かに癒しオーラが出ていると思うんですけど、それだけじゃ足りませんよね。どうしたらいいんでしょう？でも早くしないと神官様の状態が悪化するのがよく分かります。私も微力ながら考えますよ！確かに枝はこの不審な霧を寄せ付けていません。うーん、枝を振り回してみるとか？地面を葉っぱで掃除してみるとか！うん、ろくなことが思いつきませんね！

「俺と同じ言葉を繰り返して言ひ」と

「はい！了解いたしました！」

「A r w w b * k v v v M o n o w o / (あるべきものを)」

うつ、いきなり難易度高いですよ！

「ア、」

舌を噛みそうになつたので、仕切り直しです。ええと、リズムはたん、たん、たたん、ぐらいだから、

「A r w w b * k v v v M o n o w o /」

ですね！うん、言えた！

するともう一文勇者様が口を開きます。

「A r w w b * k v v v S w w g x x x t x x x n v v v . /
(おぬべき焱二。)」

私もまねをして、

「A r w w b * k v v v S w w g x x x t x x x n v v v . /

と謳ひ。

う、な、何も起じりません……よ？ びくびくしながら周囲を見回したその時。

りん、と風が無いのに葉が鈴のような音で鳴った。 ん？ おかしいな、とさすがの私でも気付きます。 目の前の枝に目を戻すと、ふわりと葉が光りだしました。えええ、木の葉っぱって、発光するんですか！

その状態の葉に触れたピンク色の怪しい靄もやは、青い光の粒子となつて空気に溶けました。

目に見える空気洗浄ですよ……！ 即効ですね！

むつたりと靄が意思を持つように渦を巻き、枝を取り囲みます。

ええええ、これちょっと大丈夫ですか？

私は思わず枝を地面に突き刺して手を離した。よし絶妙なバランスで立つてますね！

それを確認して、じりじりと後ずさる。 だって、濃厚なピンクの変な霧が寄ってくるんですよ…。 觸りたくないし、正直、怖過ぎるじゃないですか！

一步離れて立つ勇者様の横にうやつかりと退避します。 こだつたら安心な気がする！

徐々に枝を取り巻く霧の量は多くなり、濃いピンクは渦を巻いて枝を取り囲みます。……違う、枝が靄を吸い込んでるの？ 恐るべき吸引力ですよ！ 私の横を霧がどんどん流れていきます。

風が無いのに渦を巻いた霧が、竜巻のように枝を包み込んだ瞬間！

シャアアアアン！

万の鈴が一斉鳴ったような音が響き渡りました。枝から押されようにして光が弾け、光の波が波紋のように広がっていきます。優しい圧力を持つた光が、そよ風のように私たちを撫でて、そのまま空へ還つていいく。

そして光に触れた霧が、溶けるように空氣に消えていきました。

神官様が同時に、

「J m n w S h r y S h m s！」

高らかに呪文の終了を宣言しました。

一気に場を包み込んでいた何かが、泡のようにはじけて消えます。世界が、正常に戻りました。

果然と見上げた空には、神殿で見たのと同じ、のどかな青空と、太陽、そして第一の月がぽつかりと浮かんでいました。

田の前にはもう光っていない枝が、地面に刺さったまま風に葉を揺らしています。今の不気味な光景は、夢か幻だったような気さえしてきます。

凄い枝だったんですね。枯れたら燃やすとか言ってごめんなさい！

元町民じ、おぬすばんをかわる

青空を眺めていて、また開いていた口をぱくと閉じました。
砂ボロリとかはいりそだしね！

不意に背後で音がしたから思わずビクッとなる。慌てて振り返ると、神官様が真っ白な顔色のまま座り込んでいました。

「なんとか、なりましたね」

気力が尽きた表情で神官様が仰います。肩で息をしながらですが、晴れやかな表情です。さつきのピンクの霧に包まれてるって、凄い重圧でしたしね！ おつかれさまです。

勇者様がふと何かに気付いたようです。

「陸馬ハマを連れてくる」

「ど、どこに？ 勇者様が見ている方向を私も見てみたけど、何も見えない。どれだけ目がいいんですか。」

「恐らく危険はないが、念のため枝はそのままにしておいたまうがいい」

「はーー」

私の気の抜けた返事の後、勇者様は軽く土を蹴つて、瓦礫の上をひょいひょいと走ります。

あつという間に見えなくなりました。じつ、客観的に見たら凄い速度だね！ ホント、さつき落とされなくてよかったです……。それでも鎧を着て厚着して重装備なのにあれだけの身のこなしとか。筋力セレブ半端ないです。

私はいきなり手持ち無沙汰になりましたよ。何かできること、できること。とりあえず荷物から綺麗な布を出して、神官様に差し出しました。

「ありがとうございます」

ものすごく疲れているだろうに、律儀な人だな。やつぱりこの人は律儀大将だよ……今名前をつけました。

しかし、神官様の気力はそこまでだつたようです。

汗を拭きながら、神官様はぐらりと上体を揺らしました。危ない！ とつさに手を伸ばして支えます。私ナイスキャッチ！ 意識を飛ばした神官様、意外と重いよ！ 着やせですか！ うらやましいですね！

神官様の様子を素人ながら観察します。

顔色は悪いものの、息は……普通です。疲労のあまり意識が飛んだのかな。心配ですけど、私はこれ以上どうも出来ない。分厚いはずの旅装にまで汗が染みています。どれだけの間、ああしていくんだろう。とんでもない精神力だということは、私にでもわかります。汗だくだけど、このままにしていいのかな。着替えもないから、いきなり脱がしちゃうわけにはいかないなあ。せめて脱がすなら勇者様にお願いします。神子もいやな称号だけど、チカソならぬチジヨという称号は痛すぎますしね！

そういえば荷物に入れてくるのを忘れました。これは痛い。神官様に飲んでもらうことも額を冷やすとかも出来ません。次は気をつけよう。

他に出来ることはないかな……あつ。

閃きました！ これしかない！

とりあえず簡単に小さな瓦礫をのけて、神官様を横たえました。そのままぺたんと座り込んで頭をふとももに乗せます。私に出来

る」とって、人間枕ぐらいですよ！

つまりひざまくらです。

思ったより人間の頭つて重いんですね。足がしごれるかも。

でも忍耐！ 庶民の雑草力をなめてはいけません。神官様の綺麗な髪の毛が土についたら悲惨なことになりそつなので、スカートの上にまとめてあげておく。よし。あと、神官様が握ったままだった布をそつと取り上げて、額の汗を拭いたあと、畳んで目の上におきました。こうしたら、眩しくないよね！ ゆっくり休んでください。

のどかだなあ……。

もう危険がないと仰つた勇者様の言葉を丸呑みにして、油断しちゃうですよ！

ぼんやりと空を眺めます。

空には太陽と第一の月がぽっかり浮かんでいます。

樹の枝一つで空気が綺麗に掃除できるなんて、神様つて超越してるんだなあ。創星記つて、やっぱり本当のことなんだろうな。

星神様っていう呼び方は、まず何よりも星の配置を整えたと言つ創星記の伝説によるのだそうです。

空には太陽が一つ、月が三つ、世界にとつて主要な星はなんと八千百四十六あるそうですよ。はっせんつて！ 神殿で受けた星学の授業でどん引きしました。だって、神官様とかこれの周期を全部覚えた上で星術を使われているとかいうんですよ！ 同じ人間とは思えません！

以前神官様が転移術を使うために、ガリガリと地面に書いていたものはこの星々の周期表だつたそうです。それを利用することによつて術を使うときの負担とかが軽くなるとのこと。まあ、全部覚えられない凡人用に『これでカンタン！ 絵でおぼえるみんなの星術』と言つ教本まであったわけですが。もちろん、お世話になりました

とも！ そう、町民ですが、ちょっと賢くなっているのだ！ 一週間の勉強付けのお陰だけね！ 一週間だから、本当にちょっと、なんだけどね……。だんだん自信がなくなってきた。

静かだなあ。枝がたまに風に揺れてさやせやと音を立ててぐらぐら。鳥の声とか、何にも聞こえません。

この周りに広がる瓦礫はなんでしょう？

だんだん気になってきた。

街だつたつぽい場所みたい。建物の土台かなーと思いつものとか、レンガの欠片とかが転がってる。

壊れたばかりな生々しさがないのは、風化が始まっているっぽいから。レンガとかも白くなりかけてるし。凄く昔に壊れた建物みたい。

あと、普通の生活に必要な小物とか、食べ物とかが見当たらぬから、壊れたばかりの街ではないことが分かる。じゃないと落ち着いて座つてないよ！ 思い出したように雑草も生えてるしね！ それにしても雑草以外の生物の気配がないな。

虫とかいなかな、ときょろきょろ周囲を観察する。ひざまくらと、それぐらいしかすることないんだもん。

む？ 横の瓦礫の間に、何か紙の束が挟まれています。

神官様を落とさないように、搖らさないように慎重に手を限界まで伸ばし……むむ、と、届くかな！

よし！ 取った！

うわーなんかぼろぼろのノートっぽい紙束でした。めくるだけで崩壊しそう。中身は……昔の文字だ。これ名前かな？ つ……つあなあげ？

た、達筆すぎて、私には読めません！ 誰かの落し物かも。拾つてよかつたのかも謎です。結構汚かった……。

とりあえず、あとで埋め戻しておこひ。横に紙の束を置き、ぽんやりと空を眺めます。本格的にすることなくなってきた。勇者様は戻つてこないし、神官様は眠つたままです。

日差しがぽかぽかと、丁度よい感じです。後ろの瓦礫に背中をもたせかけてみる。うん、倒れそうにない。

そうやって脱力していたら、だんだん私も眠くなつてきた。欠伸をかみ殺しますよ~。

あー、だんだん瞼まぶたが、重くな……。

ちょっとだけ、目を閉じてもいいかなあ。ねむ……。

【5／AO】、【1／SH】と接觸する（前書き）

勇者視点です。

【5/AO】、【1/Sh】と接觸する

星術単位にして一千は離れた場所に到達しつつある。遠見の術を逆算して割り出した位置は間もなくだろつ。

この戦いの最初から最後、そして今もなお、一いちらを観察する何かがいる。

知能が発達した魔物と言つものは、未だに発見されていない。しかし、皆無であるとも限らない。発見されていなければかもしれないのだ。相手の正体が分からぬ以上、瘴氣を抑えるのに全てを使い果たした神官や、戦闘に全く慣れていない神子は連れてくるべきではない。そう判断して、あの場を単独離脱してきた。

対象との遭遇まで、あと三呼吸ほど。
走り続けながら戦闘体制を構築する。

左に佩いた剣の柄に手を添える。この距離に迫つても、相手が何かが視認出来ない。恐らく障壁によるかく乱が仕掛けられているのだろう。

背後に残してきた一人の周囲には、能動的に動くものの気配はまだ感じられない。星原樹の枝による簡易神域が展開したままであるので、生物は本能的に忌避するはずだ。

思考でのカウント。右手で抜刀体勢を整え、息を絞る。左手では簡易星術を開き、効果は振動を選択。星語Svvvndowwは省略、唱えた場合は術の解放規模が大きすぎ、相手に悟られる可能性がある。

一。

思考でのカウント。右手で抜刀体勢を整え、息を絞る。左手では簡易星術を開き、効果は振動を選択。星語Svvvndowwは省略、唱えた場合は術の解放規模が大きすぎ、相手に悟られる可能性がある。

かく乱障壁突破。物理的障壁、なし。

目標視認。

まど

ここに至り、フードつきのマントを纏い、ゆつたりと立ち尽くしている人影を認識する。フードの陰から見える口元はゆるく笑みを浮かべていた。

接触。

飛び込みと同時に抜刀、銀線と化した剣先が相手の喉元を狙う。だが、それは想定済みだつたらしい。展開済みの星術結界に阻まる。剣と術が食い合い、火花が散つた。相手の表情に焦りはない。全力の打ち込みと、それにに対する結界の斥力せきりょくにより、剣が金属の悲鳴を上げた。右手の力をそのままに、左手で展開していた星術を剣の下に潜り込ませる形で打ち込む。これも結界で阻めると構えていたらしい。

しかし、選択していたのは振動の術だ。結界に直接叩き込めば、恐らく相殺されと判断して、振動を与える対象を変更、結界の手前の空気を振動させ衝撃波と化す。結界ごと相手を吹き飛ばした。数歩吹き飛んだその人物は、そのまま体勢を崩さずこちらへ相対する。

「勇者にしては、結構な挨拶だね」

声音からすると若い男だろう。

笑いを含んだ声音は、あくまでも楽しそうだ。あれだけの衝撃にも拘らず、服装に乱れはない。振動の術も、相手の体勢を僅かに崩しただけだった。もともと距離をとるために仕込んでいた術だ。効果が薄くても仕方がない。

剣を構えなおす。状況によつては、右の剣を使わなければならぬい。

「こちらを終始観察していた相手には、十分な挨拶だろう」

「じちらが『氣』がついていたことを公開し、相手の出方を窺う。

「深蒼の勇者は『氣』が短いのかな」

芝居がかつた仕草で会話が流される。見ていたという事実は認めるのだろうか。

「それにしても、面白いものを見つけたね。星原樹の影響を受けないものは、本当に珍しい」

腕を広げながら言つ。会話の影での星術の展開は見受けられない。男の全身を眺め、『ほこりび』を探す。あまり目立つたそれはない。苦戦しそうだと分析する。どのような生物にも、必ずある『ほこりび』、それはあえて神が創った多様性と可能性の裏返しでもある。おおよその場合、それが弱点に共通する。勇者となつてからは、より明確に『ほこりび』が見えるようになった。魔物は最も『ほこりび』の視認が容易である。魔物ではないのか。人間だった場合、更に厄介なことになる。

勇者は人間の敵ではあつてはならないのだから。

田の前の男は、じちらの様子に『氣』を払うことなく自由に話し続ける。楽しそうと言つよりも、皮肉な響きが多く含まれている。

「あそこまで侵食度が高いなら、存在率の九割五分以上は恣意的に作成されたものだろうね」

あきらかに誰を指しているか分かる言葉であったが、彼女をもの扱いしていることに、疑惑が先に立つ。じの男はなにでじここまでを知つているのか。

「あの子は人間だ」

「君がそういうのかい？」

こちらの言葉に被せるようにして男が言い放った。

「どうせ『声』も一緒に居るんだから神に聞いているだろ？　その上でもそう言い切れるのかい？」

「俺よりは人らしい」

抱え上げた体は確かにあたたかだつた。感情をぐるぐると顔に出し、動くさまはなんら他と変わりがない。この答えに、男は一瞬押し黙り、笑みが消えた。

「……なあ、^{あお}深蒼の。お前は人間が好きか？」

「守るべき対象だ」

「好悪の感情を聞いているんだよ」

「感情論で語るべきではない。義務だ」

この男はなにを聞きたいのだろう。事実そう考えている上に、のがれることの出来ない星神によつて与えられた責務である。それを全うする以外に道も、選択肢もない。だが、それに関して感情を持つていいかといわれれば、特になないと答えるしかない。

男はこちらをじつと見た上で、次の問いを発する。

「その右腰の剣は何度抜いた？」

「答える義務はない。それよりお前は何者だ」

「僕はただの遺物だよ。これは親切心からの忠告。右の剣はもう抜かない方がいい。君がもっと削り取られることになる」

「そんなことを何故言つ

問には倍の問い合わせ返つてくる。

これ以上は話さないほうがいいのか。会話で情報を与えかねない。しかし、それよりも知りうるはずがない情報を持つていてることに対する疑念が強い。未抜刀の右の剣の重みが増した気がする。これについて知っているのならば、これは切り札にはならない。密かに抜いたままの剣に対して星術をかける。効果は術の対消滅。星術を構成している韻律に働きかけ、術の効果を崩壊させるもの。男は気付いているのか気付いていないのか、言葉をなおも続ける。

「深蒼、世界の悲嘆と慟哭を被う者。この世は悲鳴と涙で溢れかえり、星原樹も蒼く染まってしまった。それを払拭したとして、君の願いと悲しみはどこに往くんだろうね」

「俺の事は関係ない」

「関係あるさ。個の願いと多数の願いと、どちらが上位かななんて決められることじやない」

この男は一体なにを言いたいのか。

「君はわざと自己から切り離していようだね。いずれまた会うと思つけれども、その時にまで答えを考えてほしい」

「問には今、答えたはずだ」

「君が人間が好きかどうか、についてだよ。では、失礼する」

フードの中でまた唇が弧を描き、歪んだ笑いを浮かべる。揺らいだ術の気配に、男の気配が風に滲んだ。逃がしてはならない。

判断を下し、男の『ほこりび』へ向けて星術を乗せた剣を振り下ろす。予想していたのだろうに、男は避けなかつた。剣がたやすく男の体に吸い込まれ、そこが霧となり崩壊した。

男は唇だけで一言、呴いた。

肌にチリッとした感覚が走る。思考より先に剣をそのまま振りぬくことを止め、踏み込んだ足で地を蹴りバックステップで距離をとつた。

業火が先程まで男が立っていた場所に湧き上る。炎の星術だつた。肌と鎧の表面を、熱と光の余波がなでていく。距離を取つていなければ、炎に巻かれるところであつただろう。炎が消え去つた時には、もう何の痕跡もない。恐らく、本体ではなかつた。

男が最後に呴いた言葉を思い出す。

哀れだな。

何に対する言葉かは、漠然としたものであつた。

その言葉を認識した瞬間、胸の奥で久しぶりに苛立ちを覚えた。そして、右手に力が入つていたことに気づき、大きく溜息をついた。剣の柄が、握りつぶされていた。どうせ刃が欠けてしまつたのだ。打ち直しか、買い替えかをしなければならなかつた。だが柄がつぶれたとなれば買い替えが妥当だろう。

思わず自分の感情に、力のいれどころを間違つ。制御できていると思っていたが、まだ未熟だつた。あの程度で揺らぐとは。これだから感情は厄介なのだ。

大きく息を吐き、思考を明瞭にする。
また人里に足を運ばなければならないのか。そう考えるだけで、僅かに気が重くなる。

人間が好きかい？

男の問いを頭の中で反芻する。

答えは、決まっているじゃないか。

なのに、どうして口に出すことが出来なかつたのか。その理由も

分かつてゐるからこそ、あの問いは性質が悪い。

もはや使い物にならなくなつた剣を鞘に收め、今度こそ本当に陸^ラ馬^まを連れ戻す為、行き先を変更した。一人の元に戻るまでには、いつも通りに戻らねばならないと考へながら。

元町居、目が覚める

「寝てたああああ！」

がばつと起き上がると、勇者様と神官様がびくつといちからを見ました。

「あ、おはようございます」

うん？自分で言つて、違和感を覚える。

周囲の光が黄昏時だね！遠くの森に太陽が沈んでいきそうな時刻です。

まさか私あれから爆睡ですか。ちょっとの昼寝がとんでもないことに！

お、お留守番さえ出来ない私！荷物係、頑張りますね……それしかとりえがないのかつ！

それにしても健やかに眠りましたよ。頭すつきりです！でも背中痛い。そうか、土の上で寝ていたからね！「じろ寝だよ。よだれ垂れてなかつたか心配になつてきた……。

あまりの事態に、呆然とする私に、

「大丈夫か？」

と勇者様が問い合わせられます。

大丈夫ですよ！もしかして、頭の中身を心配していますか？
そつちも、大丈夫ですよ！全くもって、問題ありません！

もぞもぞ動き出すと、私の体の上から何かが落ちます。あ、マント。このなめらかな手触りは勇者様のですね！前、拉致された時に感嘆したなめらかマントですよ！なんといづジエントルマン。足を隠してくれたのかも。しまいなさいつて言つてたし。汚れを叩いて、綺麗に置んでからちよつとはなれたところに座る勇者様に渡しに行く。

「ありがとうございました」

勇者様は軽く頷いただけでマントを受け取りました。

あ、横にお陸馬さん^{うきま}がいらっしゃいます。やつと再会だね陸馬さん！ 喜びのままに陸馬さんに抱きついたら、「ポー」と鳴きました。え、これ嫌がっているの？ でも気にせずこの暖かさを味わってやる！ 再会記念で許してね。思つたよりふわふわもふもふで、ちょっと幸せです。

そういうえば、私より大丈夫じゃない人がいたはずだと言つことを思い出した。

「神官様は、もう大丈夫ですか？」

神官様は、真面目な顔でなんか汚い紙を見ていた。あ、あれは私がさつき瓦礫の間からほじくりかえしたヤツですね！

それ、あまりおすすめできませんよ！

私の言葉に、神官様は紙から顔を上げました。

座る神官様、顔色は見た目は戻つてきているように見えます。でも夕日のせいできちんと色まで分かりません。みんな顔が赤らんで見えるよ。もともと私よりも白い顔されてますし。う、うらやましくなんか、ないもん。もうちょっとお化粧頑張ればどうにかなりますかね？ 一度、華の姫様にいじられましたが。あれも一種の恐怖体験でした。ちょっと思い出しだけで遠い目になりますよ。

神官様は穏やかに笑います。そのお顔を見たら、大丈夫かなって思う。

「おかげさまで。」こちらこそありがとうございました。お陰で何とか浄化が間に合いました」

「いいえ。そもそも枝の運搬のために養つていただいていますしわたしのがお礼を言われるところじゃないと思うんだ。

だつて扶養されているんですよ！ いうなれば雇用主！ つまり私は雇われの身の上ですよ！ 生活保障までしていただいているのに、ちゃんと働かないなんて、庶民ポリシーに反します。それに、私がした事は本当に枝の運搬だから……。む、お枝様というべき？ あんな秘密兵器な枝だけは思いませんでした。これからは

丁重に扱いますよ！

「これ、どこにあつたかご存知ですか?」

枝のこと元想いをはせていいと、神官様がさつきの紙を私に見せます。

「あ、それ、さっきそこの岩とレンガの間に挟まつてました。何か
なーつて思つて、ちよつと引っ張つてみたんです。神官様は、その
文字、読めるんですか?」

「読めなかつたんですか？」

町民の能力を高く評価しそうですよー

「そんな達筆すぎる文字は、たよること無理です」

神官様は納得していくださつたようです。勇者様が立ち上がつて、

陸馬さんの近くで何かを取り出しましたよ。薪ですか。キャンプの醍醐味、焚き火ですね！ テンションが上がりりますよ！

だって街中ではあまりこう、ごーっと火を焚く機会なんてないし。

「今日はここに野宿になります」

私があまりに見ているからか、ちょっと申し訳無さそうに仰る神官様。一応、女だから気を使つてもらつたのかな。あ、野宿がいやなんじやないですよ！

私は力強く宣言しました！

「どうでも寝る自信はあります！」

け寝てるの。そつや、ビードでも寝る時間がつかない。心中で悶絶するよ。-

「やうだな、寝つきはいこようだな」

勇者様、ここは流しておるべきです。いつもなら、そうか、でスルーなの。向でひやんと同意を示すんですか、あなた。こんな時に限って。

「まあ……健康的でこのでは?」

神官様、相変わらずフォローが滑っています。

元町民じ、街は遠慮したい

それから陸馬^{つま}に載せていた簡易鍋ややかんで湯を沸かし、簡単な携帯食とスープを三人でもそもそと食べ、寝ことになりました。ゆっくりと広い大地に沈んでいく真っ赤な夕焼け空が凄かつた！

建物のない広い場所なので、ゆらゆらと揺れる地平線と太陽をじつと見ていました。

まだまだ世の中知らないことばかりだよね。というより、私が知っていることの方が極端に少ないわけですが！

日が沈んでから、星原樹の枝がキラキラ光っているのを眺めます。問題が無さそうなので、地面に刺したままです。光の雫が葉っぱの先からぽとぽと地面に落ちるのが凄く綺麗。ためしに光を手にとつて見たんだけど、すぐに淡く消えてしまつた。これってなんなんだろうね。これが光源になるので、焚き火は消しました。^{まき}薪の節約ですよ！薪の節約にもなるなんて、ますますありがたいお枝様です。

「明日は一番近い街に向かう」

勇者様が焚き火の始末をしながら仰ります。了解しました。街と聞いて、自分の街に勇者様達が来たときの事を思い出しました。

「勇者一行パレードとか、もしかしてありますか？」

お一人とも黙り込むところを見ると、あれには閉口氣味のようです。嫌な沈黙だな。無言の肯定つて、こうこうやつのことを言うの

か。学習しました。

「これも役目だと割り切つてはいるのですが、あの歓迎は困りますね。ですが、救世の旅が行われていると言つことを広めるのも役目なんですね」

と言つわけで、嫌でも歓迎されちゃうんですね！

「私だけこつそり裏から入つては駄目ですか！」

「女の一人旅の方が危ないだろ？」

一撃で切つて捨てられました。そうですよね……武芸も術も身につけていない一町民です。強盗とかが起こつても対処できません。

「それに、その枝が目立ちすぎる」

私は枝運搬員ですからね！ 何で皆さん触りたがらないのか、漠然としたことしか分かりませんし。

「一応、布を掛けて簡易結界としましそう。認識阻害と、封印ぐらいで」

それでもあまり持たない、と神官様は少し苦い顔で笑います。

「私の力不足ですか？」

「お前に出来なれば、他に出来るものはいなないだろ？」

勇者様が普通にフオローしています！ 私も神殿で、神官様は天才だと聞きました。知らない新星術はないんじやないかというレベルらしいです。美人な上に天才とか！ 無欠ですね！ 逆にこの神

官様が出来ないことは、他の人は本当に出来ないのだらうな、と素直に信じられます。

「枝での浄化が本当に必要なのは、もう少し行ったところの谷です。そこに行つてからあなたを連れてくる予定だったのですが、ここのは瘴氣じょきがあまりにも強すぎて、来ていただくなになりました」

「ようきかー。耳慣れない言葉です。実は皆がしようきしようとつて言つてたけど、正体を知らないのでしたー！」

「はい、先生！」

「質問です！　しようきって何ですかー！」

「分からぬ事は聞く！　これが学習の基本！　まず聞くところが分からぬ場合は最悪だけだね。」

「そうですね、と前置きをしながら神官様は説明してくださいました。」

簡単に言つと、魔物の残りカスみたいなものらしい。

魔物を倒すと、死骸は残らず、消えてなくなるそうです。

でも、それはすぐに消えちゃったんじゃなくて、薄く空気の中にしばらく漂つているとか。吸い込んだら吸い込んで、体にも精神にも悪いんだつて。普通はそこまで深刻に考えるものでなく、弱い魔物とかだったらすぐに日の光で消えちゃう程度らしい。星術で淨化することも出来るとのこと。

けど、ここに居たのは上級に分類される魔物の、しかも群れだつたそうです。で、それらを倒したはいいが、瘴氣が溢れて浄化が間に合わなかつた。倒した、とさらりと言いますが、群れつて半端な

いことないですか。そういえば飛び込んできたときの勇者様の様子が戦場真っ只中っぽかつたのが頷けます。あ、結局怪我の話題が浮いたままのような気がしてきた。

ともかく、瘴気が消えない上、濃度の濃いまま広がってしまうと魔物以外の生物には大変毒になるんだって。風で流れていって街とかに行つたら更に大変なことになるため、神官様がここで結界を張つて抑えていたそうです。

勇者様が姫様に簡単に報告していたことは、いつことじつたのですね！ やつと納得しました。

「じゃあ、あのピンクの霧が瘴気だつたんですか？」
「ピンク？」

なんかまた町民が変なこと言つてるよー。つて視線が突き刺さります。

「瘴気が見えるのですか？」

神官様が真剣に問いかけます。
え、あの妙に卑猥な空間は私しか見えてなかつたつてことですか！

「はー、とつてもじぎつこピンクの空間でした」

表現が微妙だった。

慌てて自分をフォローするよー

「ピンク色の、かなり体に悪そつな靄もやが充満して、前が見えないぐらいでした」

じつと神官様が私の目を見ます。なんですか！ 私もじつと見詰め返します。睨めっこなら……負けない！ 神官様の金色の目をじつと見詰めますよ。むむむむ。

「あなたの目にほんの世界が映ってるんじゃない？」

ふ、と息を吐き出しながら田線を逸らしたのは神官様。

勝った！ 僅かな達成感を握り締めます。でもなんでちょっと空しいんでしょうね。そうか、私だけが勝負だと思っていたからですね！ 真面目な話の途中なので、あたりまえですが。

それにも。

私の目には、どんだけ奇妙な世界が広がっていると思われてるんですか！

「人それぞれだろう」

勇者様が淡々と述べます。なんと。そう、このフォローを待つていた！ ナイスです勇者様。珍しくまともなフォローですね！

そうだよね！ 私が変なんじゃないですよ！

それにも、なんでピンクだったのか。もうひとつ、おどろおどろしい色でもいいんじゃないかな。

本当に浄化が必要な谷つて、ピンクの谷なんですね……。しかもそう見えるのは私だけ。笑つてはいけない拷問のような気がする！

でも、これでようやく私の旅が始まつたぽい？

色々先は不安ですがね！ はつはつは。まずは街についてからですかね。はあ。

問題はそれからだ。

神子（仮）、人ごみは拒否したい

こんなにちは、町民です。雇われ神子やつてます。

えー、荒野を旅立つて早三日。

今日は生まれて初めてよその街にやつてきました。そこで人の壁に囲まれています。人が集まるだけで、こんなに暑苦しいものなんですね。

人ごみで、呼吸をするだけでも苦しいです。ちょっと距離はあるものの、この熱気とムードはぐいぐいします。

た、たすけて……。

人の声って、凶器になるんですね。初めて知ったよ。

野太いおっちゃんたちの万歳の声、キヤー勇者様ー！ というお嬢さん方の黄色い声援、その他もうもろ、誰だよ鍋持ち出してガンガン叩いてるー！ それは太鼓じゃないよ！ 耳に痛いだけですよー！

私は半分死んだ目をしながら、陸馬さんの背中に揺られています。ぼくぼくと歩くりズムで私は揺れます。このまま、意識を失いたい勢いです。

私の前を歩く勇者様と神官様は、あの素敵スマイルを惜しみなく振りまいています。

無理！ 私は無理！

唯一の救いは、顔を分厚いベールで隠しているから、町民の皆さ

んと顔を合わさずにするんですね！ これは妥協の結果です。どうしても勇者様ご一行として混じることに不安を覚えた私は、ベルを被つた神秘の神子として登場することになりました。

しんぴ……しんぴ。

ここ、笑うところだからね！

頼む！ 笑い飛ばしてえええ！

街に入る前に神官様に術をかけてもらつたので、お枝様はそれほど危険物じゃなくなつたとか。

危険物？ これは危険物だつたんですか？ 初耳ですよ！ 臭いんじゃないんですね！

確かに光つたりしたり、勇者様が触れないとか言ってたりしたなあ。怯えながら聞いてみれば、私には害がないそうです。えー。

といつても、その封印術とやらも三日位しか持たないとのお話。効力の期限に申し訳無さそうな神官様へ、私は正直に、三日あつたら十分ではないですか？ 私の街にも勇者様達三日いたつけ？三日目には私を拉致して帰還してましたよ。と告げた。すると神官様がうなだれて、その節は申し訳ございませんでしたとか言い出したので、私のほうが慌てました。謝るべきは勇者様だと思つんだけど……。何故か神官様が保護者をしているような気がする。この二人の力関係も謎です。とりあえず、正直すぎるのもたまには駄目なことだと学びました。

とにかく、勇者様の剣が壊れたそうで、その修理も必要だとか。そういうえば、一本持っていますよね？ と不思議だったんですが、右に吊つてる方は普段使わないそうです。オシャレアイテムですね！ 分かります。使わないものでも、持ち歩いちやうんですよね！ そして荷物が増えていくんですよ、私のように……。

まあ、今回はそれが珍しく役に立つたんですが。荷物の中に色々布を突っ込んでいたので、有り合わせでベールっぽい何かを作れたのだ！ 裁縫は得意だよ！ 大体の生活力はある。サバイバル力の

ない町民ですがね！　このベールと言つバリアーがないと、私は人前に出れない。本氣で。

街に入るだけなら、どうにでもなると思ってたんだけど、街では既に勇者様を待ち構える体制が整っていたらしい。やめてえええ！

以下、パレード（ここも笑うところ）が始まる前のちょっとした時間で神官様が要約してくださった、街での出来事ダイジェスト！ それにしてもいつの間に聞き取り調査を……神官様恐るべし。

昔からあつた、とんでもなく呪われている廃墟から、凄い光がして魔物の気配が消えた。行商人も急に魔物が減つたことを実感した。これは何かいいことがあつたに違いない。つまり勇者様！

門番もがつたり見張るよ！　たまたま他の町で勇者様見たことある行商人も目を皿にする！　つまり商売のチャンスだから！　あ、道に人影が！　我らの街に、勇者様来たあああ！

……という流れとか。

それにしてもうすうす感じていたんだけど、この人たちの知名度半端ないです！　顔バレとか。だが、私は決してそこに溶け込まない！　顔なんて出さない、出せない！

地味に生きたい私には正直不要です。こうしてベール越しでも街のお嬢さんたちの「なにあの子」視線が突き刺さる突き刺さる。痛いって！　だから視線だけでハリトカゲみたいになるよ！　針町民（元）が出来上がります。カンベンしてください。もはや癒しはお陸馬さんだけ。あいかわらず微妙に避けられてますが。

紙ふぶきをしようとしたのか、紙が飛んだり、花が飛んだり、どんどん現場がカオスになってきてるようです！　ちょーっと身の危険を感じる。そろそろ皆さんクールダウンしませんか？

うう、陸馬うまの上でひとり揺られているのが凄く罪悪感が沸いてき

ました。だつて、働かざるもの食うべからずですよ！　ここまで、正直私は何も働いていないと言える。自分の力でなんかしたこともないし。本当に枝運搬員だけでいいのかな？　言葉に甘えて大きな穴にどぽんはいやですよ！

ぼーっとしているのも芸がないので、手を振るとかしてみてみたほうがいいのか？

それとも何もしなくて人形を間違われた方がいいのか？

貧乏暇なしが身に染み付いているのでね！　逆に何もしなくて言いといわれたら困ります。仕事一仕事一何か仕事がほしいですよ！。手がわきわきします。最近、裁縫も洗濯も料理も力仕事もしていません！　なんか文字書いたりティーカップ持つたり、枝持つたりぐらいしかしてない。この、仕事へのパッショントリニティーをどこにぶつければ！　できることかー。考えながら周りを観察します。といっても、あからさまに出来ない。なんたつて神秘の神子（笑うところ）ですから！　お上品に、ゆつたりと。できれば姫様レベルで優雅に。うーん。今の私のスキルでできることは、街並みの観察ぐらいです。あとで買出しとかいるかもしれないし。

大通りの先に広場があつて、領主様や役所があつたり、星神さまを祀る場所があるのは大体の街で同じだと思つ。

今通つているのがメインストリートかな？　人ばかりで狭いですが！　そのうち領主様の館かお役所に着くかも。

ここに面してあまり出入り口がある家はない。

私の住んでいたところもそうだけど、魔物が侵入した時、真つ直ぐに広場に向かわせるように一本道にあえてしている面があるんだつて。一步裏通りに入つたらくねくねとした道で分断させて迷走させて各個撃破するのじや！　って向かいのじいちゃんが言つてました。本当かな？

魔物は知能が低いそうです。私より賢くないらしいよ！　比較対象が私という自虐が辛いですがつ。

実際、まだ魔物を見たことがないんだよね。正直今からびびつて

ます……。幾ら勇者様と一緒にしても、怖いものは怖い！

まだ見ぬ魔物はともかく、ちらちらと周りを見て、なんとなく商店街とかの方向が分かつた。よし！ お使いもいける！ 役立たず町民から脱却ですよ！

周囲を観察していると、ふと、視線を感じました。

む。気のせいじゃないな。最近視線に凄く敏感です。こんな職業についているからでしょうか。

人ごみの向こうで、マントのフードを被つた人がじつとこちらを見ています。

何故か凄く気になつたんですが。だってフードだし。フードって、めちゃくちゃ怪しいんですけど！ 犯罪のにおいがしますよ！ これは私が目撃者になるのかつ。まだこっち見てるな……。じつと觀察しかえしてやる。茶色のフードつきマント以外、性別も年齢も分かりません。お嬢さんたちの棘のような視線とはまたちょっと違つた嫌な感じです。

ふとその横のお姉さんに気を取られた隙に、その人は人ごみに消えました。気を抜くなつて言わないで！ だってお姉さん、胸の谷間がぼーんと露出して、私の視線を釘付けにするんですよ！ けしからんお胸様です。いいなあ。お胸様……分けてください。

フードの人、犯罪を起こしちゃダメですよ！ なんとなく心の中で呼びかけてみる。まあ、不審者をみたら犯罪者と思つている私がひどいんですね！

パレードは一応、前進していたようです。程なく広場に着いた。町民は熱狂して、炒られた豆のようにぽんぽんはじけています。私、あの中にも混じれないかもしない。そういえば、自分の街の勇者パレードも人ごみが嫌で見に行きませんでした！ 今思い出した。パレードが行き着いた先には、鎧を着た一団が立っています。

「おお、勇者様！」

手を広げて待っていたのは、とても丸い物体でした。
もとい、太りすぎた丸いおじさんでした……。ギラギラしてると
！ 服の金糸の縫い取りもあることながら、その、……脂あぶらで。

まさか、領主様ですか……？
思ったより、丸いですね。

神子（仮）、長話は聞きたくない

丸い領主様に連れられて、やつてきました屋敷！

私の住んでいたところには、領主様がおらず、領主様に任命された町長さんが治めていたから珍しさと好奇心がうずきます。領主様だつて！ 初めて見る……のに、感動が薄いのはなんでなんだろう。喋るたびにたふたふ揺れる、領主様の豊満なおなかとほっぺたを眺めます。大変、恰幅のよい方ですね。大人の言い方をしてみた。

とりあえず、気を取り直します。中流セレブの生活を覗く絶好の機会ですし！ 上流セレブの生活はもつおなか一杯だけど！ お城やお姫様はもういいです……。いつ不敬罪で連行されるか、いつ壇割るかとか、終始びくびくしますから！

広場のど真ん中に高い塀があり、その中が領主様の屋敷のようです。街の中なのに、妙に高い塀だなー。なんかね、街の人たちから屋敷を守るみたいな印象。領主さまなのに変なの。

それ以外は変なところはなし。当たり前だけど周囲に比べてとりわけ立派な建物なだけです。石造りの四階建てぐらいで、大雑把に形を言えば立方体のお屋敷です。四角か……こ本人と違い、屋敷は丸くないんですね。え、偏見ですか？

石造りの壁にも彫刻があるので、さりげなくお金が掛かっているのを見て取れます。お金の気配は見逃さないよー

勇者一行は領主様に先導されて、当たり前のように入っています。

え、ここに泊まるの？ いつの間にか勝手に領主様の中で決定し

ているようです。まあ、領主様の屋敷断つて、わざわざ普通の宿に泊まるつて言うのは、よほどの理由がない限り、宿屋の人も気ますさ最高潮でしょうけど。

私は中庭のあたりで、お陸馬さんから降りて歩きになりました。屋敷の使用人さんにお陸馬さんを預かってもらうしかないですし、しばしの別れですね、お陸馬さん……しんみりしかけた私をよそに、もりもりお陸馬さんは餌を食べていました。ああ、そういうやさつきポーつて鳴いてた。餌の時間だよ。そりや私より優先ですね！

鎧さんその一が、私の枝を持とうとしてくれたけど、丁重に断つた。

ただし身振りで。

だつて、長い間緊張していたせいか、声が震えて上手く出ない！思わずところで乙女ツバキを発揮ですよ。本当にいらないところで発揮だな！ 身振りで意思を伝える怪しい女です。神子と言つぶれこみがないと、追い出されること間違いないよ！

代わりに荷物を持つてもらうことになりました。申し訳ないです。

領主様に先導され、大きな扉の中に入ります。

うわ、ここも蠟燭ガンガンに焚いてる。室内なのに明るいです。絨毯も気合を入れているのか、凄くふかふか。

絨毯に関する感想は、一瞬で吹き飛びました。
凄い空間だった。

所々に飾られている、金ぴかの美女像（ただし裸）や、あつはんうつふんにストレス的な絵画とか、ちょっときわどい形の壺（乙女の

口からはいえない）とか、『趣味はよくないと思われます！』

一つや二つじゃないよ！

大体そんな美術品です。どこから探してきたんだよ！ 逆に凄いよ！ うわああああ！ 今度は裸の男性像ですよ！ 肉体美はいいから隠して！ 大事なところ隠してえええ！ そこまで精巧に作らなくていいから！ どころか私の口からは言わせるな！ 察してというやつです。

ちょっとと青少年には田に毒ですよ！ 趣味悪！ ある意味潔さ過ぎます。こんなインテリアをする人が世界にいるなんて……想像を超えてまくりですよ！！ オープンスケベの恐ろしさに私は慄きました！ 見よ、この久しぶりのトリハダを！ 実に三日ぶりです。

田のやり場に困るところだけど、ベル越しだから私の顔は見えないはず！ この際だから美女像のお胸様でも心の中で揉んでおこう。あやかれますように、あんな胸になりますように……わりと切実です。

あ、今気付いた。ここで私、「きやあ」とか言つべきなんでしょうか？

妙にニヤニヤして領主様が私のほうを見るんですが！
「神子様には刺激が強すぎましたか？」

ニヤア、と笑う領主様。

セクハラですか？ セクハラですねッ。なんか悔しいんですけどね。刺激と言つより、品格の問題な気もするけどね！

ボール……いや、領主様はちょこちょこと勇者様の横に並んで歩きながら、ずっとお話していらっしゃいます。

この街の成り立ちや、自分の業績、困っていること、そしてまた自分の資産情報、名物に美女情報、そして今度は屋敷の怠慢やらを熱心に、それはそれはなめらかに語ります。綺麗なお姉さんのいる夜の街の話のあたりで、私のほうを見てなんかニヤリとされたんで

すが。私は性別女ですが、このお一人とはそういう意味では無関係ですよ。なんかこのニヤニヤ笑いがイラッときますね！

笑顔が振りまかれるたびに、お顔の脂がてらてらと輝きます。多分、あの顔をうつかり手で触つたら、その手は洗わない限りいろんなところに指紋をつけちゃうんじゃないだろうか。そんなブラックなことを考えてしまうのは、本当にお話が取りとめがないからです。

正直、もう遠慮したい！

お口塞りますよー でも触りたくない！

領主様のお口には脂が塗つてあるに違いない！

だからあんなに喋るんだよおおー！ あ、一族の美女情報になつた。美女で勇者様を釣る気満々ですね！ 分かりやすすぎるツ！ 美女かー。見てみたいなあ。だつて、このボール（失礼）領主様のご親族での、美女ですよ……！ でもうつかり勇者様が気に入つたら大変です。まさかのカップル成立！

でもそうなつたらそうなつたで、姫様の猛攻撃が始まるとでしょうね……あんな女に取られてたまるか！ 見たいな。ひい！ 女の戦い勃発ですよ。私は退避します。でもちょっと怖いもの見たさで観察したい。とりあえず勇者様とどこかの女性とでカップルが成立したら見てみたい気がするんですが。特にデート。どんな会話しているかが気になりすぎる。会話が無いほうにいい笑顔で金貨をかけますがね！

それにしても勇者様の笑顔仮面半端ない！ この会話によく応対できますね。

聞いているのか聞いていないのか、重要な問いは笑顔でスルー、あとは適当に相槌を打っている様子。す、凄い！ ちょっと尊敬し

ますよ！

いつも話すはずの神官様は、そんな一人のあと、つまり私の横を歩いています。

神官様の笑顔ですらちょっと剥がれかける……ところより、神官様は話聞いてませんね。

この人は知識欲が旺盛なようで、建物とか眺めて、「この建築年代は……」とかひとりでぶつぶつ呟いてる。マニアですか……？まあ、人の趣味はそれですし、それに、そんな風に歴史に思いをはせる方が、領主様のお話聞いているより実りがある気がしないでもない。周囲のエロ美術は、神官様は華麗に無視されているようですが。この方も流石ですね。年季の違いを感じます！

はあ。

さつきから私の口が悪いのは、正直、疲れているせいもあると思う。

自分でも気づかなかつた疲労っていうやつかなあ？ 慣れない旅だし。お一人に、色々フォローしていただいているのが分かるから、疲れとか辛いとかなんて、言い出せないけど。

それに加えてさつきのパレード！ そしてこのオープンスケベ屋敷！

どんどん町民の心の余裕を削つていきますよ！

今ならあらゆることに毒を吐ける氣がするつ。

ただし心中限定で。相変わらず小心者です。

何でこんなに心がわかれ立つてるんでしょうねー。そんな自分にイライラしますよー。セーー！

なんとなくイライラしながら周囲を見回してみると、ベール越しの景色に違和感がありました。

何かおかしい気がします。

んん？

ベール越しだから、よく分からないな。

何か凄いいやな予感がするんだけど。ベールを取る勇気は正直ない。
なんかね、いい、空気を吸つたらいけないよつな気がするんですよ。

Jの間の、遺跡の時みたいに。

神子（仮）、「ここに居たくない（前書き）

ちよつと下ネタ氣味です。『めんなさい。』

神子（仮）、「ここに居たくない

じつと汗が滲んでくる。一度、「ここにいたくな」と思つたら、だんだん我慢が出来なくなつてきましたああ！
うう、これ以上先に進みたくない。何でだろう？ 分からない衝動にもじもじしてしまいますよ。

神官様が、

「大丈夫ですか？」

と気にかけてくださつたけど、どう伝えればいいか分からない。

それよりも、気持ち悪すぎて口を開いたら大変なことになりそう。
確かに調子悪いんですが！

ここは、一時脱出ですね！ この場所から、何とか離脱するしかない！

でも、あの手しか思いつきません。

悩む……私は今、ギリギリの瀬戸際に立っています。

どうするか！

ここでの手を使えば、いろいろわざやかながら持つていた尊厳的な何かが削られそうです。

しかし！

背に腹は変えられません！ 私は心に強い決意を秘めて、きつと顔を上げた。女は度胸だ！

私は勢いよく手を上げて、こう言いました！

「すみません、お手洗いに行きたいんですけど

ぎゅっとして振り向く皆様。

その勢いに私もびくつとなりました。

一斉に見ないで！ ただでさえ見られることに慣れていないのにこ

の仕打ち。

しかもこんな発言をするときに見られたら、恥ずかしくて悶絶しますよ！ 実際、ベールの向こうで死に掛けていますが！ 自然と全員の足が止まりました……。

居たたまれない一瞬の沈黙が、この場に満ちました……やめてー誰か、発言してええええ！

ですよねー。乙女としてトイレ行きたい、はどうかと思います！ 神秘の神子設定もどつかに行きそうですよ。でもね、それ以上にこれより先に進みたくない気持ちが勝つた。お枝様を握り締める手に、びっしょり汗をかいている。うー、こんなに汗つかきじゃなかつたのに。

最初に口を開いたのは、領主様だった。

「そうですか、神子様もそんなときがあるんですねえ。おい、案内して差し上げる」

領主様が妙に嬉しそうです。えー、ちょっと引きますよ！ なんか良くない発想と繋がっている気がする。だけど、このせい氣にしている場合じゃない。

鎧さんその三が、こちらへどうぞ、とぎこちなく先導されます。よし！ 横道！ これから先はさつきみたいな圧迫感がありません。ついでに横道のせいが、エロ美術もありませんでした。

思わずほつとする私。

で、冷静になつて、今更気づきました。

これ以上進みたくない私の動きは、おやじトイレを我慢する動きであつたのではないかと！

……気分良くなつても、戻りたくなくなつてきた。

つうわああああん！ 顔が真っ赤になる！ ベールで隠れているけれどね！

横道は先程までとは違つて蝋燭はまばらに燈されてゐる。あまり、

使っていない道なのかもしね。私は先導する鎧さんがその二に問い合わせる。

「あ、あの……」

鎧さんが、あからさまにびくつとなる。そんなに怯えられる理由はないよ！ ちょっとショックです。私は喋らない方が、円滑にすむのかつ。うーん、と悩んでいたら、

「神子様を」案内にするに足る場所ではないかもしませんが……しきりに恐縮されながら言われました。どんだけ私はセレブですか。一般庶民なんで、とんでもないぐらい汚いトイレじゃないかつたら大丈夫ですよ！

ぐねぐねと幾つか角を曲がり、そしてようやく目的の場所に到着した様子。こちらです、と控えめに案内してくれた姿が好感度高かつたです。それにしても広くて道順が分かりにくい屋敷だな。
とりあえず、羞恥心やら気持ち悪いやら限界だったので、転がり込むようにトイレに入ります。

なんと！ ポイレは地味だつた。

一般家庭と大して変わったつくりじやなかつたです。この木の模様が落ち着きますね。ここまでもギンギラエロワールドが広がつていたらどうしようかと、真剣に考えていました。

トイレでひとりになつたところで、ようやく大きく溜息をつけた。やつと地味なストレスから解放されましたよ！

でもさつきの気持ち悪さ、一体なんだつたんだろう？

廊下とは違つて、ここは薄くですが窓が開いています。

窓の外は相変わらずの青空。とっても鳥の声がのどかです。屋敷の中が異空間過ぎて、頭がぐらぐらしていたのが、外の風景を見るとすつきりしました。

そういや、廊下には窓が一切なかつた。空氣がよどんでいたのか

なあ。

私は気分転換に、ベールを上げて一息を付く。じつしたら、ちょっと冷たい空気が顔を撫でて気持ちがいい。

あー、やつと落ち着いてきた。そろそろ帰ったほうがいいのかな……。か、帰りたくないけど。

そんなことを言つてられないね！

頬をパン！と両手で挟むように叩き、気合を入れる。けれども、よし！と顔を上げた瞬間、固まつた。

だつて、廊下に繋がるドア、周辺の空気がピンクに見える。例のびきついピンクが、当たり前のように空気に混ざっています。はつ、と振り返つて、窓のほうを見ました。窓の外は、普通に青空が広がっています。オーケー、自然な色合いが心に優しい。もう一度、ドアを見ると、特に下の方に、ピンクの靄^{もや}が溜まつている。

あのお枝様が大活躍だつた、ピンクの靄^{もや}で前が見えなかつた廃墟ほどではないけれど、漂つ薄つすらとしたピンクムード。

い、幾らH口美術品があるといつだつて言つても、空氣までピンクに彩る必要はないだろう……。そんな効果は誰も期待してないよ！

いやいやいや。冷静になれ。

あれはえつちなムードじゃなくて、瘴氣^{じょうき}かもしれない。

かも知れないつていうのは、いまいち無臭だし、ピンクだし、あの領主様なら空氣までおピンク路線に染めるとかもやつてしまふかも知れない、と一気に考えたせいです。偏見ですか？

神官様に説明してもらつたにせよ、世界の不思議に関しては、まだ私はシロウトに毛も生えていない程度です。つまりシロウト。丸ごとシロウトですよ。

「ここまで道、廊下は蠟燭の明りだけだつたし、ベールで視界が殆ど遮られていたせいでの、詳しい色が分からなかつた。それでさつき気付かなかつたのか。もしかして、先に進みたくなかったのはこのせい？ これが乙女の勘なんでしょうかつ！ トイレトイレ言つてるから、乙女発言をいつもより多めにしていますよ！」

「この瘴氣、神官様は気付かれていないのかな？ それにしても、私はどう伝えればいいのでしょうか？ 領主様もいらっしゃるよね。だとすれば、領主様に報告差し上げた方がいいのかな？」

「領主様！ 空気がピンクに汚染されています！」

「そうでしょうとも。H口彫刻の館ですから。あえてピンクに染め上げているオープンスケベだもんね。」

「領主様！ 空気がよどんでいます！ 入れ替えましょうよー！」

「これはメイドさんたちに挑戦状を叩きつけることにならないでしょうか？ ちゃんと換気をしていないのか、という。で、ピンクが瘴氣だとしたら、街に広がつていいのかつて話だね。」

「領主様！ 気分が悪いので帰つていいくですか！」

「これが私的には真実だしベストなんですが、ダメだろうなあ。帰りたいです。」

「それにして、勇者様や神官様は気付いていないのかな？ 瘴氣が見えるんですか、って驚いてらつしゃつたぐらいだから見えない？ あの時、ちゃんと聞いておけばよかつた！ どちらにせよ、そのまま先に進んでいったら、さらに瘴氣が濃いほうに行つてしまい

そうな予感がします。

でも、なんで建物の中に瘴気が溜まってるんでしょう？ 瘴気って、溜まるものなのかな？ まだまだ分かりません。どこかに教科書でもないかなあ。『はじめて学ぶ、よくあるしじつけ』とか！ 誰か書いてほしいな。私、ちゃんと図書館で借りますから！ え、買わないのかつて？ 本なんて高級品、庶民の給料じゃ、手が届きません。

お枝様におすがりするとか？ 勇者様に教えていただいた呪文は、微妙に覚えてる。

けれど、お枝様はわざわざ封印するほど危険物だから、安易に開封しちゃつたらダメっぽいし。

私単体じゃ、ただの役立たずの町民だな！

つづづく実感しました。身に、染み渡ります。

どうにか、ここに勇者様か神官様を呼ばなきやならない。瘴気の件だつたら神官様になるのかな？

「……女子トイレ」。

汗がぶわっと吹き出た。

なんという難問ですか！！！

女子トイレに呼び出しつて。

私の尊厳つて、今、試されているんですか！ なんという……私は、だんだん涙目になつて来ましたよ。もうやだー、うわーん。頭を抱えてうずくまる私。

そこに、控えめなノックの音が響き渡る。鎧さんその二三だ。

「神子様……、お加減はいかがですか？」

私があまりにもトイレにこもっていたのを、気にしてくださった

ようです。

これだ！ 私は田の前に現われた、素晴らしい突破口にすがりつきました。

「あ、あの、あまり調子がよくなないので…… 勇者様か、神官様をお呼びいただけますか？」

羞恥のあまり、声が震えました。鎧さんその三は、あわてた様子で、「すぐ、お呼びしますね！」

とばたばたと走り去つた。ちょっとだけ良心が痛む。嘘はついてないよ！ 事実を婉曲に言つただけだよ！

少し冷静になつて考えた。もしかして、あんな呼び出しがしたら。私、おなか壊して動けませんよレベルに勘違いされてしまつ……？

それに思い至り、トイレの床に膝をついた。なんてこつたい。

もう、乙女の尊厳はぼろぼろよ！ 元々あつたかどうかは、別として！

神子（仮）、「つこまれたくない

女子トイレに呼び出しどか！

やつてしまつた感が半端ないんですが、私にはどうしようもなく。とんでもない後悔がこみあげてきてなんだからとつても落ち着かないいい！ もういやだあああ！

このほどばしる何かを押さえつけるために私は壁に張り付いた。恥ずかしさというか失敗したというか、なんだらうこの気持ち！

あ、ちなみにトイレから出て、廊下で待つてます。

でもベール完備。恥ずかしすぎるしね！

それにしてもこの広いお屋敷、人の気配がありません。工口彫刻で、使用人に逃げられた？ 有り得ますね！

廊下もかなり薄暗いです。トイレも使ってないぐらいのレベルで綺麗だつた。

だから安心してこんな恥ずかしい格好でいろいろ堪えることができるんですよ！ ああ、壁のひんやり感に癒される……。このまま、壁になりたい。白塗りの壁と同化したい。

なんか、こう、いたたまれないよね……！

その衝動のままに、壁に「んと額を打ち付ける。「うう、落ち着け、他の人が来る前に。

がりがりと壁を掻いていると、恐る恐る声を掛けられました。

「み、神子様……？」

……あつ。

しばし、沈黙が流れる。私も動きを止めて、「ぐつと喉を鳴らしました。

「の静寂が痛い。

「ありがとうございます！」

あえて爽やかにぐるりと振り向く。ベールで顔は見えないけど、明るい声と仕草で元気さをアピールした。私の勢いに飲まれたのか、鎧さんその三は、混乱のまま、突っ立っています。よーしよし、そのまままでいいぞ。

動くなよ……じゃなくて、私の行動にツツコミをこねるなよ……。頼むから。しかし、その願いは意外な方向から碎かれました。

「壁がお好きなんですか？」

神官様、この状況はスルーしていただけないとありがたかったです。なんでここでツツコミですか。スルーすべきところでしょう！

居たたまれない雰囲気の中、神官様は診察を始めました。

「体調が悪いことに気付かなくて申し訳ありません。手、失礼しますね」

丁寧に謝る神官様は、私の手を取る。脈や熱を見ていらっしゃる様子。あ、大丈夫です、平熱です。

「本当に、大丈夫ですか……？」

このセリフが心に突き刺さる！！ 大丈夫です、心も頭も。精神状態は……ぼろぼろだけど！ 今しがたの出来事のせいだね！ でもそれよりも、伝えたいことがあってここに呼び出したんだ。当初の目的を思い出し、私は意を決して口を開いた。

「神官様、ここは空氣、ピンクに見えるんですけど……」

神官様は真剣な顔をして考え込んだ。

「確かに彫刻は卑猥ですが……刺激が強すぎましたか？」
いや、違うつて。通じてるの？ 本当に通じてるのツ！

私の心のツツ」ミは、神官様に届いたのかどうなのか。神官様は私の持つぐるぐる巻きに布を巻かれたお枝様を指し、

「不安でしょうから、少しお守りを作りましょうか」と仰つた。枝を出せという仕草に、私は素直に差し出す。神官様は布の間から何かを引っ張り出した。小さな葉だ。あ、この程度では封印は弱まらないのか。ふーん、と眺めていたところ、それを勢い良くなげに千切りました。え、それいいんですか！ お枝様から引っこ抜いていいんですか？

「手の甲を出してください」

大人しく手を出すと、ぼんやりしていただけで左手の掌を出していた。

「甲です」

珍しく焦った口調の神官様が言いながら、私の手を取りくると手をひっくり返す。あ、すみませんね、とつさのうつかりが多いんですね。

私の手の甲に、神官様は葉を置いた。そして新星語を呟く。

「J m n w K sh S h m s ,
H n s h t s , B s s t k - d S 2 5 8 w H s h n S
y g h ,
B t s r k g k H k , T S h k , J d j y k ,
J m n w S h r y S h m s .」
すると、やわらかい光を放ちながら葉っぱが溶け、私の手の甲に葉っぱの刺青がうつすらと記されました。
ちょ、い、刺青反対ですよ！ まだ裏家業の人間にはなっていませんよ！
私の焦りに神官様は気付いているのか、

「効力がなくなると消えますので、その時はまた仰ってくださいね」とにっこり微笑まれた。あ、消えるんですね。良かつた。ふーん、と手の甲を眺めていると、ふと神官様の仕草が気になりました。指先を擦り合わせていてる様子。

「指、どうかされましたか？」

神官様は苦笑して、

「いえ、やはり私もそれに触れるのはきついですね」と仰る。え、先程、葉をつまんでいた指ですか？ 薄暗い明りでも、赤くなっていることに気付く。元が白いからかなり目立ちます。か、かぶれるんですか、この枝……？ 危険物扱いなのを、ちょっと納得しましたよ。

それにもしても、左手の刺青っぽい模様がとても不思議です。思わず擦つてみました。すると、手の皮が赤くなっただけだった！ へー不思議。ふと顔を上げると、ピンクが薄まつたような気がします。とりあえず、私が言つたことは通じていたのかな？

それを聞こうと思ったのだけれど、神官様が口の前に指を当ててしますかに、と目線だけで訴えられました。了解です！ 私空氣読む子！ そうですね、私たちの後ろには鎧さんその三がいたんだつたなんとなく、お屋敷の人の前で、建物の悪口を言つるのは気が引けます。

このお屋敷、凄くピンクですね！ とか、彫刻、卑猥ですね！ とか。あ、でも神官様口に出してたよーな。ま、いつか。基本、私も適当です。

「これで落ち着きましたか？」

神官様が私の手を取り、甲を撫でて確かめる。ふと、それに強烈な視線を感じた。

廊下の角で、鎧さんその三に向ひて光る目線を感じた。な、なんですか！

ちらちら見えるのはメイドさん……？ そのとき、私の地獄耳へ、メイドさんたちの会話が飛び込んできた。

「ほら、神官様はやつぱり本命は神官様よ！」

「でも分からないわ！ 勇者様との三つ巴の可能性も……」

「いや、もしかしたら、あえての大穴で、勇者様と神官様が」

「でもダークホースで領主様とか」

「ちょっと……それは」

「それは……ないでしょ」

「そうよねえ……きついわあ

きーこーえーまーすーよー——！

一部不穏な発言が聞こえた！ メイドさんは自重すべきですよ！
勝手にカツフルにしないでください！

手を振り払いいたいッ。勘違いは姫様だけでおなか一杯！ 相変わらず私は勘違いラブファンタジーの渦中にいるようです。ただし、噂話の中だけでは。そんな華麗な生活は、今までの生涯においてあつたことなどありません。

それ、ありえないから！ 私の胸と同じぐらいないから……。ぐすん。

どう考へても神官様の仕草は医者の動きです。診察が終わり、あつさり手は離れました。

夢を見ないでください。あと、領主様といつ線は絶対にないから！ 脂は……カンベンです！

こう、自分以外の噂はへー、と聞き流せるけれど、なまじ関わっているものだからげつそりします。神官様はあまり聞いていないのか、スルーされています。華麗ですね。

「……私もきちんと男に見られてたんですね
スルーブななかつた……聞こえてたようです。でも、食いつくところですか。よりもよつて、そのポイントですか。やつぱりずれてるんだろうか。でも若干、嬉しそう？ この人も苦労してるんだな。ちょっとだけ親近感が沸きました。

神子（仮）、「やつれ！」と罵られたい

それはやつと……こつからメイドたち、見てたんですか！

さ、やつきの私の壁に張り付いてたのは、見てないよね？ 見てないといつてくださいいい！

「怖くて聞けないッ！」

「少し、おつかがいしたい」ことがあるのですが、「にっこりと話し始めたのは神官様。鎧さんの向こにこむメイドさんたちに呼びかける。

「え、ええっ」

「どうしよう？」

メイドさんは思いつきり動搖している。
ですよね、私が同じ立場でも動搖するよ。だって、覗き見して
いた相手からの呼び出しだよ。

覗き見するメイドさんたちの姿に、貸本屋で読んだ『メイドは見た！』シリーズの小説を思い出した。あの主人公もこんな感じで覗き見していたんだろうか。それにしてもあの小説のメイドさん事件にあいすぎだと思う。

鎧さんもどうするか困惑しているみたい。鎧さんの顔は鎧で見えないんですけどね！ あ、今更ですが、この人たち全身鎧なんです。重くないのかな。

メイドさんたちはおずおずと出てきた。三人いる。

おだんじさん、みつあみさん、ポーテールさんでした。髪の色は薄暗いせいによくわからない。多分明るめの色じゃないのかな。そして特筆すべきは三人とも、田がくりとした可愛らしいタイプだったこと！ この屋敷ではアレですか、容姿ももしかして採用基

準ですか？ でもあの領主様だったらあつら。

「Hの最近、お屋敷で変わった事はありませんでしたか？」
神官様はにこやかに問いかける。直球勝負ですね。こんなこと聞いていいの？

メイドさんは顔を見合させて、話していいか悩んでいる。
「どうしてそのようなことを？」

逆に鎧さんが聞いてきた。

「Hの領主様は、領民に慕われた氣をくな方とお伺いしていました。この屋敷は、前からこうでしたか？」

「へー、丸いおじさんはいい領主様だったんだ。でも、H口屋敷の領主様だよ！ 慕われるの？ メイドさんたちはちからひ回僚を見ながらどうしよう、と小声で相談始めました。

「去年ぐらいから、領主様の『趣味が変わられたぐらいかな』
「えー、そうだったつけ？ もともとやりしー感じはしてたんじゃない？」

「でも、彫刻はさすがにアウトだと思つよ」

「いや、私はあの壁の絵のほうがやばいと思つ」

「あの裸の彫刻、ほこり払うの本当に恥ずかしい」

「え、あんた楽しんでたじゃないの」

「ちょ、ちょっと今言わないでよー。やつがいた、熱心に磨いてた
じゃん」

メイドさんたちは内緒話をはじめました。内緒話にしては音量が大きすぎる。まるつと聞こえますよー。あれ、そうするとエロ屋敷になつたのは最近ですか？

それにしてもメイドさんたちは自由だなあ。お城で働いている人たちだつたら、答えてくれない感じの雰囲気を纏つてたのを思い出す。領主様が気さくな方だつたというのも関係あるのかな。

それにしてもメイドさんたちの相談がドンドンずれていきます。そんな女の子の話のとりとめのなさに、神官様は苦笑している。

「では、最近あの彫刻が増えたんですね」

「ちよつと神官様がまとめてに入りました！ メイドさんたちは真っ赤になりながら、ようやくおしゃべりを止めて、神官様に向き直る。

「お掃除大変なんです」

「埃すぐ溜まりますし」

それは思った。あんなに「ちやーちやしてたら、掃除大変だよね。いつそ何もないほうがいいと思つ。お城や神殿は『初めの状態を維持する星術』が掛かっているそうで、なかなか汚れないらしい。庶民にとつて夢のような術じやないか！ すぐく便利そうだなあと思つて、この間気軽に神官様にこの術のことを聞いたら、凄い長い説明がはじまつた。一時間ぐらい説明してもらつたのに断片的にしか覚えていない。「ごめんなさい！ つまり、術を維持するにはお金が凄く掛かるそうだ。一般庶民には無理ですね。

「あと、お屋敷も色々改装されてたみたいですよ」

ぼろつとメイドさんが違う話題に移ろうとした。更に長くなりそう。私はお枝様を杖代わりにして、ちよつと体重をかけた。直立していられるのも、足が疲れるんですよ！

すると鎧さんが、

「そろそろ仕事に戻りなさい」

と言い出した。この人のほうが立場が上なのかな。

「えー、横暴ー」

「ひどーー」

メイドさんが口々に鎧さんに文句を言いますが、神官様はあつさりと話題を打ち切つた。

「そうですね、ありがとうございました」

と、微笑を向ける。うおー、輝く笑みですよー。私が以前、目がつぶれそうになつたあれです！

メイドさんたちは思わず、きやあ、と歓声を上げて真っ赤になりました。

「「「！」お客様の前だぞ」

鎧さんがすかさず注意をすると、さすがにばつが悪かつたのか、メイドさんたちは顔を見合させた。でも、色々いまさらだと思つよ！

「失礼します」

メイドさんたちが綺麗な揃つたお辞儀をしてくれた。私は内心拍手を送りました。それぐらい綺麗に揃つた禮でしたよー。メイドさんたちはお仕事の続きを散つていつた。素早い。メイドさんとか、御付の人とか、この人たちは素早くなければまならないんじやないだろ？

「ご迷惑をおかけしました」

生真面目に鎧さんが頭を下げられますが、そこまで気にしていません。

「大丈夫ですよ」

私が口を開く前に、神官様が仰つた。

私を促して、鎧さんを先頭に歩き始め。

「うう、ピンクの空氣の中に戻つていくのか。ちょっと氣が重いです。吸いたくない、けれど息は止められないしね！」

「これは使えませんか？」

お枝様を少しだけ持ち上げて神官様にお伺いします。

「それは強すぎます」

神官様は首を振りながら却下。ですよねー。先程の神官様の指を見たら、私は何も言えなくなりました。そりいえば耐性がどうとかつていつてたしね。

「物事には、原因があり、結果があります」

唐突に話しかけられた神官様を、思わず見上げます。隣に立つと、

「私よりもぶしきつぐらいの神官様のほうが背が高い。

「起こっている事象そのものを解決したとしても、原因を断たねば意味がないのです」

主語がないと、とても小さな声のは、たぶん鎧さんを気にしているせい。瘴気の話をするわけにはいけないのは私でも分かるよ！

瘴気は魔物の残骸。

街には瘴気は発生していなかつた。

じゃあ、この屋敷はどうして瘴気が発生しているのか。

つまり、ここには魔物がいる可能性があるわけで。

「でもピンクは身体に悪いんじゃないんですか？」

「あえて瘴気をピンクと呼ぶ！ 通じるかな。

「私たちにはアレは見えません。もちろん、他の方々にも」

通じたらしい。

「ですが、術を使うわけにはいけません。あなたの仰るとおりならば、かなり大規模な術が必要です」

すぐには浄化は無理だということですね！ 了解しました。でも、目に見えないけれど体に悪いものが漂ってる、それってとんでもなく怖くないですか？ あ、だからですね。いたずらに、瘴気がありますよーといつても駄目なのか。自分で見たもの以外信じないタイプの人もいるし。難しいなあ。

神子（仮）、会話に加わりたくない

結局、廊下で勇者様と領主様に合流しました。私を待つてくださいっていた様子。

相変わらずのH口彫刻の林ですよ。領主様、集めすぎです。そして、いい笑顔で美女像の太ももをなでないでください。
思わず大注目ですよ！ メイドさんたちはあの像を日々磨いているのか。

近づくと、お一人の話が聞こえました。

「私は断然巨乳派ですね」

私は領主様を敵認定いたしました。この丸め！！ そうだね確かにここにある像は巨乳ばかりだね！ でも、人間の度量つて乳だけでは、量れないと思うのですよ。ふつ。私が言つても何もかも空しい。

ここは屋敷はコンプレックスをびしばし刺激しまくりやがります！ そこに正座しろおおおお！ そして謝れえええ！ 全世界のお姉さんに謝れえええ！ 思わず力いっぱいお枝様を握り締めました。手が力が入りすぎて真っ白になる。私の厳しい視線に、神官様が引き気味です。

「で、勇者様はどこに注目されますか？」

「タリと笑つた領主様の質問に、

「……どの女性も、別々に魅力をお持ちですよ」

勇者様は無難に返しました。勇者様はひとまず、敵ではないようですが、神官様、なぜ私から距離を取るの。

「はつはつは、色男は違いますなあ。」『りやあかなわん』

なんて……なんて実のないトーク！ しかも落ちもない！ ツツ
『ハビコロも分からぬ！ 勇者様はずつとあのトークに付き合つ
ていたのか！ なのに疲労の色がないとは……！ やはり伊達に勇
者を名乗つていないのですね！ この人、できるツ！ 勇者様の社
交スキルに改めて戦慄していたところ、神官様が私の体調が優れな
いということを伝えてくださいました。

体調よりも、心がすり減つていますけどね！ 領主様のせいで。

とにかく、晚餐までの間、部屋で休めることになりました。あり
がたいことです。地べたで寝ることに抵抗はないけれど、部屋の中
で寝れるのは素直に嬉しい。湯浴みはいかがですか、と問われ、思
わず頷きました。お風呂！ 私のテンションは急上昇ですよ！ わ
ーい久しぶりのお風呂！

といつても、私たちが臭いわけではありません。星原樹の選定の
せいでの、実は三大欲求がある程度制限され、身体から老廃物が出に
くいのだとか。いつの間に人体改造されたんですか！ 全然そんな
感じなかつたんだけど。お、おそろしい。

しかも、衣服も例の作られた当時の状態を維持する術がしこまれ
ているらしい。一体一着幾らなの！ そのおかげで私たち臭くない
ですが。旅で臭くなるかと恐れていたけど、この点は嬉しい誤算で
す。神子になつてよかつた。いやまた！ おかしい！ 神子になつ
たから旅に引きずり出されているんじゃないのつ。危ない！ 神子
万歳とかいいそうになりましたよ！ 領主様が神子になつたら欲求
が制限されていいんじゃないかな？ これは嫌味ですが。

通されたお部屋には、なんと個別にお風呂が付いているそうです。
セレブめ！ 風呂場にぐらい歩いていきなさい！

案内役の方に導かれたのは、三階の部屋だった。お隣同士で三部

屋。同じ部屋じゃないんですね。二部屋も凄いな。

おそるおそる踏み込んだ部屋の中には幸いというか、彫刻も絵画もなかつた。安心する。思いのほか落ち着いた家具と色合いだつた。私の借りていた家よりはるかに大きいですよ。私は溜息を付きながら、ソファーに座りふかふか具合を確かめる。お尻を適度な弾力が包み、跳ね返します。やわらかすぎず、硬すぎず、いい感じです！これはいいソファーだ。撫でて確かめたけど、これは皮のソファ一だつた。居心地がいいため、ポーツをしてしまう。元々、この屋敷つてこんな感じだつたとか。いやいやいや、それはないか。今のお印象がきつすぎて、他の状態を思い浮かべれないのもあるけど。案内役の方はさつさと持ち場に帰りました。私も知らない人といふると緊張するから、かなりほつとした。さて、動こう。

私がした事は、荷物整理よりもまず窓を開けること。やわらかいまどろむような午後の光が部屋に差し込みます。家具が日焼けするかもしれないけど、ちょっとの間だつたら許容範囲だよね！ カーテンを風がそよそよと揺らします。あー やつと落ち着いた。そしてやつとベールに手をかける。

髪の乱れを直しながら周囲を見ると、やつぱり端っこにピンクがちらちら見える。それがふわりと日光に当たると消えていく。なんでもこんなにもピンクムードがあるんだろう？ お屋敷が魔物にのつとられている？ それにしては街の人には変わり無さそうだし。魔物つて、そんなに賢い生き物だつたっけ。魔物は動物に近い、って授業で習つたし。魔物と動物の違いは、屍骸にあるそうだ。動物は屍を残すのにたいし、魔物は瘴気となり星へ溶けていく。何か死んだら溶けるつて、変だよね。まるでイキモノじゃないみたいだ。

神子（仮）、「会話に加わりたくない」（後書き）

最後付近修正しました。

神子（仮）、世間の裏は知りたくない

窓を開けて深呼吸。

胸いっぱいに新鮮な風を満喫する。すがすがしい空気を吸うだけで気持ちがすっきりする！ 窓の外に花が咲いているのか、いい匂いがふんわり漂ってきます。ベールも地味に呼吸が圧迫されるから、あまり好んではつけたくない。けれど背に腹は変えられません。切実です。

控えめなノックが響き、私はぱさりとベールを被りなおしてから「はい」と答えた。ベール被るだけで神秘の神子へ変身完了です！ そういえば晩御飯どうしよう。部屋でいただけるのかな。顔は、かなり、出したく、ない！！！ でも「馳走は別ですよ。きちんといただくな！ 食べ逃したくないです。

私の返答にドアを開けたのは神官様と勇者様だった。メイドさんは付いてきていない。思わず壁や柱の影を見てしました。あの人たち、隠れるのが凄く上手そつだし。むむ、ベール越しだとあまり分かりません。廊下にピンクが見えるのはあえて気にしない！

神官様はいつも通り、勇者様は相変わらず無表情へ戻っている。さつきまでの笑顔はどこへ行つた。笑顔を探す旅に出たくなるぐらい、見事に無表情です。たまには私たちにも笑顔の無料配布はありませんか？ 笑顔が惜しいのか……？ いや、違う！ さつきまでで表情筋を使いすぎて、顔がお疲れなのかもしませんね。顔面マッサージ、いたしましたよ？ 華の姫様秘伝の、顔マッサージです。美容と健康にいいらしい。

同情的な目線でしみじみしながら勇者様を見ると、微妙に怪訝そうな顔をされた。視線、ベール越しでも気付くんですね！ 見ていただけです、別に用ではありませんよ。

「先程の件で、失礼してもいいですか？」

「うううううううう。私はお一人を招いてドアを閉めました。ソファーに誘導したその足で、窓をさらに全開！ カーテンも限界まで開きます。お一人が入ってきた時に纏わり付いていたピンクを日光消毒ですよ！ 見事な溶けっぷりです。ああ気持ちいい。

そして、再びベールを取つて確認する。うん、部屋の中は綺麗に消毒できたみたい。ベールは手近に置んで置いておこう。いつメイドさんがくるか分からぬしね！」

私は部屋に設置されていたティーセットを取り、紅茶を入れ始める。さつきメイドさんにお湯を貰つたのだ。丁度喉も乾いていたし。窓を開けまくつていた私の一連の行動を、不思議そうに見ていた勇者様が、

「あれの対策か？」

と仰る。伏字、了解しました！ 瘡氣とは口に出さない方がいいんですね！

「はい、さつき日光消毒しました！ この部屋でよつやく安心して息が吸えます。どんどん吸っちゃって下さい！」

私は元気よく答えました。

すると神官様は、

「確かにこの部屋の空気は軽いですね」と周囲を見回しながら納得した風に呴かれた。

どの部屋も日光消毒したらいいのに。

ついでに工口彫刻も工口絵画も、日光にさらして退色や磨耗させてしまえ！ そのほうが世界にとって平和です。特に私にとって平和になります。

紅茶の水色^{すいしょく}が明るい紅に染まつた。うむ、淹れ時である。カップに注ぐと、ふんわりと香気が部屋に広がつた。

まず、私の隣の勇者様の目の前に紅茶を置く。

「どれぐらいの濃度で見えた？」

蒼い瞳が厳しい色を浮かべている。

確かに大問題だよね。神官様の前にもお茶を置き、自分のカップも持つて座りました。光景を思い出してみる。

「あの廃墟の半分以下です」

その答えにお二人とも首を捻つた。どうも、いまいちピンと来ない様子。

「あそこが濃すぎたのは、分かるんですがね」
私の喻えが悪いんですね！ 分かりました。

何かないかなと部屋を見渡した私は、丁度いいものを発見する。

私は横に置いたベールを手に取つた。

「あの廃墟は、これの四枚重ねぐらいでした」

私はベールを折りたたんでお一人に見せる。

向こう側が本当にわずかに見えるぐらい。腕ぐらいの距離だと大体のかたちしか判らない。本当にあの時はひどかった。ほとんど前が見えなかつた。

「で、ここはこれぐらいです。一枚ぐらい」

ちなみに私の普段被つているのは一枚です。

うつすら向こうの色が分かる程度。視界は良好とはいえない。でも、先が見えないほどじゃない。

「……ここの中の景色はどれぐらいですか？」

神官様は深刻な声で質問を重ねる。

「ベル無しです。ピンクはこの工口屋敷の中だけです」

私の即答に、勇者様が口を開いた。

「女の子が工口とか言わない」

内容とは全く関係がなかつた。本当にたまにお父さんみたいですね

！ 私は頭をフル稼働させて言い換えました。

「……じゃあ、わいせつ屋敷」

勇者様が沈黙した。その反応はオッケー？ それともアウト？

「淫猥、わいせつ、卑猥、いやらしい、性愛表現が露骨。まあ、まだ様々な表現はあると思いますが、もう口でいいんじゃないですか？」

神官様は時折ややくばらん過ぎる。「の人もどうなの。

「まあ、この屋敷の装飾に関してはさておき、濃度が問題ですね」
あ、話題を放棄した。ともかく、濃度が高いのが屋敷の中だけということは伝わったらしい。

私が思っていた以上に、かなり濃度が高く事態は深刻らしい。

神官様は顎に手を当てながら、

「領主殿は、良くも悪くも底の浅い方です。何か深い策謀があつて魔物を使っているというタイプではない」

と、実も蓋もない分析をされました。この容赦ない言い方には、勇者様はつっこまないんですか？

「魔物に関しても、恐らく先代の置き土産か、もしくは誰かに利用されたか、それから知らずに魔物を屋敷に入れているかですね。先代は深い謀略に長けていた方らしかつたと聞いてますし」と苦く洩らされました。

「色々、調べていらっしゃるんですね」

私が感嘆しながら言うと、神官様は、

「本来身分が低い私が王侯貴族と渡り合つには、知識だけが身を守る武器ですから」

と苦笑された。

「そう」自分を低めて仰ることでもないと思うな。知識だけでも凄いと思うし。でも、一体どこからそんな情報を得るんだか。私の頭では何も覚えられなかつたよ！ どんな脳みそをしているんですか！ その記憶力を分けていただきたい！

私が微妙な表情をしていたのを、説明が飲み込めていないと思われたみたい。詳細説明が始まりました。

「先代については……たとえば、そうですね。この屋敷の周りに、とても高い壁があつたでしょ？」

「そうですね、かなり高い壁がありました！　お金掛かってるな、と見上げましたとも！」

「先代は増税を重ね、それで得た資金で星都で暗躍したようです。その際、領民が反乱を起こし領主館を襲わないように堅牢な建物を作ったとか。噂かもしれないと思つていたんですが、実際に建物を見ると信憑性が出ました。この館は外からは攻めにくい構造になっています」

「そ、そんなところから色々読み取られるのか。純粹に凄い！」

「先代はかなりの守銭奴で、女は財産を食いつぶすと仰つて結婚もしませんでした。貯めた財産を分与したくないのか後継者も決めてなかつた」

心のメモ帳に書き記しますが、多分半分以上忘れそうです。

「先代はそのまま突然死しました。病死だつたそうです。遺言も家族ものないため、所領は一度、星都預かりになつたんです。その後領主不在も困るので星都側で血族より後継者を選出した。つまり、今の方がその選出された領主様になられるんですよ」

「私の敵、あの丸い人ですね！　ただの贅肉、もとい、ゼイタク丸いおじさんじやなかつたのか。

選ばれたぐらいなので、一応人品に問題はなかつたらしい。趣味には問題があると思うんだ！」

「つまり、一応星都も調べて彼を領主にしているのです。そこまで問題はないと思うのですが……人も、変わりますからね」

神官様は溜息をつく。

「ともかく、情報が足りません」

勇者様も同意した。

「俺の剣も修理が先だな」

「そういうれば壊れたって仰つてた。廃墟から街までの道のりは、大掛かりな浄化をしたせいか魔物が全く出なかつた。なので、勇者様

の剣は壊れたと聞いたがどんな風になつているか知らない。

「剣つて、壊れるものなんですか？」

「良く壊れる」

私の疑いの眼差しに気付いたのか、勇者様は左に下げていた剣を鞘ごと抜き取り、ごとりと机の上に置いた。私は一度ちらりと見て、思わず二度見した。

えつと。

……剣つて、柄が握りつぶされるような柔らかいものなんですか

?

神子（仮）　見えないものは見えない

「見事につぶれていますね」

神官様、それは私でも見たら分かりますよ！

持ち手にあたる柄の部分が、ぎゅっと握りつぶされたパンみたいなことになっている。パンは握りつぶしたらいけないよ！ 食べ物で遊んではいけません。

私はぐにゃぐにゃのそれを、恐る恐る指で突付いてみました。

冷たい！

硬い！

さてはこれは金属ですね。パンじゃない！

まあ、見たら分かるけど。……金属って、つぶれるものなんだ。へー……って、さすがにお馬鹿の私でも分かりますよ、ちょっと普通じやないって。

さては犯人は勇者様ですね！ 勇者様の剣だから、あたりまえだけど。

「潰しちゃったんですか？」

私の問いかけに、勇者様は溜息と一緒にああ、と返事をくださいました。浮かない様子に見える。何でかな。

「力持ちですね」

凄いなあ。しげしげと剣を眺めながら、私はしみじみ呟きました。そりやあ私を片手で持つて走れるよ。体力ばかりか筋力も凄いんですね！

そして重要なことを思いつく。

「そうだ！ 今度、ビンの蓋が開かないときは勇者様にお願いするので開けてくださいね！」

私のお願ひに、何故か凄い微妙な空気が流れました。
え、何か間違えましたか？

「ああ、勇者様にビンを開けさせるとは何事かつてやつですか？でも、ビンの蓋は開かないと困りますよ。そのかつての困窮を私は訴えてみた。

「あれが開かないせいで、朝ごはんに何度ジャムが使えなかつたことか……そしてその日一日が、どんなに憂鬱だつたか。朝ぐらい、美味しいもの食べたいじゃないですか、なのに、ビンが開かないせいで一日憂鬱なんですよ！」

私はずっと一人暮らしで、食事もよく作っていた。パン屋のおばちゃんがまかないでパンをくれるんだけど、大体は味がなくて噛み応えがありすぎる黒パンなんだ。それにあうジャムを作り自作してちょっとした楽しみにしていた、だけど密閉するためにビンに入れたら、蓋がよく開かなくなつてジャムを食べられない事態が何度も発生。そのたびに涙を呞んだね！　お湯であつためたらいいとかいうけれど、正直燃料もお湯も、もつたいたい！

私の力説に勇者様は幾分ぽかんとしている様子。

あ、珍しい表情ですね。ジャムの重要性はそこまでビックリしたことだつたかな。それとも私の食べ物への執着に引いちやつてしますか？　すみません、唯一の楽しみなんです。

勇者様の反応に困惑する私に、神官様が笑いながら、

「まあ、あなたらしいですね」

と仰いました。

最近大体のことが、これで片付けられている気がしないでもない！

私が首を捻ると、少しだけ笑いを引っ込んだ神官様が、

「怖くないですか？」

と仰る。

主語を言つて下さい主語を！　推理力がないのは自分が一番よく分かつてゐからつ。

「剣ですか？　確かに斬られたら痛いと思いますけど」

あ、言わなければ勇者様が無表情に変わる瞬間も怖いです。私的に

ホラーだと思いますよ！

神官様を見ると、呆れと笑いが混じった表情です。呆れないで！

解説して！

「こんな風に剣を潰す俺の異常さが怖くないか？」

勇者様が長い言葉を喋つた！ それにビッククリして動きを止めてしました。

沈黙が流れる。

えーと、いや、問い合わせ想定外だったことも驚いていますよ！

これは真面目な問いだ。

緊張感に喉が渴く。

私は頭を絞りつつ考える。どうせ言葉を飾ることも出来ないから、そのまま言つしかない。

「怖くないです」

これはちゃんと言わなければいけないことだつて思う。

だからちゃんと目を見て真っ直ぐ言いました！ 正面から見た勇者様の威圧感は、相変わらず半端ないけど。

「私を抱え上げる時はちゃんと痛くないようにしてくださいませたし、なによりも、この力で私が叩かれたこともないです」

部屋の隅に立てかけたお枝様を見る。

あの枝も危険だ危険だと皆さん仰るけど、全く私には実感が沸かない。

多分それと似たようなものかもしれない。傷つけられたことがないから、実感がない。うがつた考えをすると、自分に危険がないから、怖くないのかな。そこまでいつたら、ちょっとひねくれすぎな思考かも。

たとえば、目の前に凄く怖い猛獣がいる。今は大人しくしているけれども、いつ不意を付かれてがぶりと食べられちゃうかもしれない。猛獣がなにを考えているか全く分からぬし、理解できないから。

もし勇者様に恐怖を感じるとしたら、そんな怖さだらつ。想像はつきます。乙女の想像力をなめてはいけませんよ！

でも実際、勇者様はそこまで怖くない。たまに突拍子もない行動をとりますけどね！

この人は人を傷つける理不尽な事はしないだらうって、そのあたりは信頼している。拉致されたばかりの頃は意味が分からなかつたけれど、最近は対応がやわらかくなってきた気がするし。でもなんで初めいきなり拉致されたんだ。今更不思議に思つてきた。それの疑問は取り合えず横においておいて。

私は考えながら、言葉を継ぎ足した。

「それよりも、街を出てからずっと見るもの全部が新しいから、なにがおかしくてなにが普通なのかわっぱり分かりませんよ！ それに関しても、あー、力持ちなんだー、ぐらいの感想しか浮かびません」

答えながら、変な言いだなつて思う。何で勇者様が自分が怖いか、とかなんて話になるの？ なにかにひつかかる。すつきりしない！ 上手くいえないもどかしさとは別の違和感。それを探して、勇者様の青い瞳を正面から見詰めた。睨めっこ勝負ですよ！

「……そうか」

いつもと同じような言葉だけど、少しだけやわらかい響きが混じつていたと思う。勇者様は私から目を逸らして横を向いた。

目を逸らしたな！

む、この睨めっこは私の勝ちですね。戦いはいつも空しい。

ふと気がつけば、神官様はマイペースにお茶を飲んでいる。いつも

の間に話題を振るだけふつて離脱してたの！

真剣な話をしたら確かに喉が渴きますよね！ 丁度よい温度になつたお茶をぐいっとあおる。いいお茶だ！ 鼻に抜けていく甘い香氣が、舌に広がり果実のみずみずしい味をかもし出している。お茶独特のちょっとした渋みがアクセントをそえて、大人の味を演出していますね！ さすが領主様の館！

「いい飲みっぷりですね」

私の空っぽになつたカップに、神官様がポツトに残つていたお茶を注いでくださる。

「ここは酒場ですか！ 美人のお酌はいいねえとか、親父っぽく言うべき？ もう一杯、ぐいっとく？」

ポツトを置きながら神官様は真剣な表情になる。

「こんな話をしたのは、今後戦闘が行われる可能性が強いためです。おっと、まさかの真面目な話の続きですよ！」 背筋を伸ばしました。「今までどうすうす感じていらっしゃると思いますが、勇者の能力は尋常ではありません。あの力は、あなたに向けられることはあります。それを知つていただきたかった」

私はその瞬間閃いた。

わかつた！ さつき引っかかっていた違和感。

勇者様はいつも人を助けているのに、どうして自分が怖いかなんていふのか。

まるで、今までひとに怖がられたことがあるみたい。

私が怯えることが当然みたいな話の流れに、違和感があつたんだ。……変なの。もやもやをこまかすために、私はもう一杯お茶をあおつた。

「神官様、おかわり！」

「のみすぎですよ」

神官様は苦笑をしながらお茶を注いでくださいました。お茶は美

味しいけれど、もやもやとした気持ちは、なかなか消えなかつた。
お茶の飲みすぎじや、ないんだからね！

神子（仮）、それは剣とは認めない

美味しいお茶といつても、飲むのには限界がありますよね！

そんな基本的なことをすっかり忘れていた、私を指差して笑えばいいよ！ 今、喉までお茶が一杯です。やり過ぎた。明らかにやり過ぎた！

私がお茶のせいでいささかグロッキーになっていると、神官様が「さて、」と呟きながらポットを置き、剣を手に取った。すらりと引き抜けば、ぼろぼろになつた刃が見える。柄がぐちゃぐちゃなだけじゃないんですね！ 刃にひびが入り、所々欠けているのが分かる。ぴかぴかの剣じやなくて、うつすらとした曇りが使い込まれた雰囲気をかもし出している。こんなにぼろぼろだつたら、鍛冶屋のおじさん泣いちゃいますよ！

その刀身をひとしきり眺めて、神官様はテーブルに剣を戻しました。

そしてとてもイイ笑顔で勇者様に問いかけた。

「で。どうしてこの剣はここまでつぶれたんですか？」

につこつと笑いかける神官様の笑顔に、一部の隙もありません。目が獲物を狙う肉食獣みたいに鋭いですよ！ つまり怖い。

私は椅子ごと思わずドン引きました。床にイスが磨れて音がしたけど、お一人ともこちらを見ません。睨めつこの最中です。私に構つている場合じゃないんですね。分かりました、大人しくしています！

神官様はさらに質問を重ねます。柔らかい口調が、逆に恐怖をあります。

「戦闘の時はつぶれていませんでしたよね？　なにがあつたか私は聞いていないのですが」

爽やかなのに、黒い。

相反する一つが入り混じつた時、こんなに怖いものとは思いませんでしたあああ！　正直パン屋のおかみさんが怒ったのより怖い！　逃げられない！

あ、勇者様が田を逸らした。なんだかこうこうどうこうを見ると、このひとも怖いものがあるんだなって思います。ちょっとぴり親近感沸いて和んだ。こんな状況ですがね！

戦闘の時つていつたら、ピンク発生前ですよね。じゃあ、私を迎えて行って、帰つてくる間に何かあつたのか、それともこの街に来るまでの間になにかあつたのか。実際に勇者様の戦闘を見た覚えが全くないので、けんがどうなつていたか分かりませんでした。

神官様が拳でテーブルを叩きました。

さほど強くなかったようで、それほど食器は揺れません。さすが気遣い王です。こんなところにも自制が効いてるんですね！　でも、テーブルを叩くのは私もビクッとするよ！

「情報の共有の重要性はいつも話してたと思うが、相変わらずその黙り込む癖を止めろと言つてるんだ。幾ら繰り返しても忘れるなら、手にでも書いてけ！」

えつ、……誰？

私の目が点になつたのも、仕方ないことだと思いませんか！

神官様の言葉遣いがかなり乱れていらっしゃいます。あわわわわ。丁寧語がすつ飛ばされますよ！　初めて聞いたけど、それだけにお怒りが分かりますねつ。つっこみたいくどつっこめないこの空氣

よ。

「この、誰かが怒られているといつ狂氣がなんとも苦手。がたがた震えそうになります。しばらく沈黙が降りてくる。

勇者様は僅かに沈黙した後に、よつやく、「悪かった」と一言だけ零しました。神官様は怒りを抑えるためか、ぐじぐじとこじめかみをもんでいます。私は口を挟んでいいんでしょうつかつ。そもそもここにいていいんでしょうつかつ。出来ることなら部屋のすみっこにいますよ！

神官様の仕草を見ながら勇者様は、

「……あとで話す」とだけ付け加えられました。神官様はひとまずそれで納得することにしたようです。

「わかりました」と溜息混じりに仰います。そして、まだ苦い表情のまま、私に向かい、「取り乱して申し訳ありません」と仰つた。

忘れられてはなかつたんですね私！私は硬直したままぶんぶん頭を振ります。いいえいいえ、ダジョウブデスヨ。この人も怒らせではないと、私も手に書いておきます！

「そもそも勇者は勝手に何でも抱え込む性質がありますので、何かがあつてもこちらから問い合わせいたださない限り口を開きません。注意してくださいね」

私が感心して頷いていると、勇者様はまた目線をずらしました。気まずさですね！だんだん私も分かつてきました。やつと緩んだ空氣に、私は話題を強引にさらいました。

「お一人は、いつから一緒に旅をされているんですか？」
二人とも不思議そうに私を見ます。

「あれ、お話してませんでしたか？」

と神官様。言葉遣いがいつも通りに戻っています。話題を変える作
戦は成功したようです！

神子（仮）、聖剣は空想の中にしかない

少し落ち着いた神官様は、苦笑いしながらお話してくださいました。

「勇者と私は、同じ村で育つた幼馴染です。私が勉強のために星都へ行くまでは大体一緒に行動していました」

それで無言の勇者様相手に意思疎通ができるているんですね！ 納得しました。

「先程は……今まで数年にわたって言い続けていたことをまた忘れられて、つい頭に血が昇つてしましました」

ああ、唐突にお怒りになつたんじゃなくて、今までの地味な蓄積だつたのか。納得。怒りっぽなしも体に悪いけど、たまには抜かなきやですよね。少しずつ蓄積していくストレスの方が爆発した時の威力は強いし！ これは勇者様が悪いな、と勝手に知らないのに決め付けてみる。

勇者様は聞いてないフリをしてお茶を飲んでいます。

まあ、自分の話で盛り上がられたら、強引に入るか知らんフリをするしかないと私も思いましたけどね。お城でよくその気持ちを味わいましたッ！ 私を話題にしても何もでないよ！

神官様のお話に納得しつつ、勇者様をしげしげと見て、今まで気にななかつたあることに気付いた。多分、さつき驚いて後ろに下がつたせいで、イスがずれたから見えるようになったのだと思う。

勇者様はテーブルに上げている物のほかに、もう一本剣を下げている。ああそりゃそうだった。

「あれ？ 勇者様は、剣を一本お持ちなんですね？」

修理しなくちゃ大変だな、と思つていたけれど、そういうやもう一本あるならいいんじゃないかな！ 安易ですか？

私が何の話をしているか、すぐに分かつたらしい。勇者様は腰からそつちの剣を鞘ごと抜き、私に差し出してきました。また重かつ

たらいやだなあと構えながら受け取れば、思った以上に軽くて驚いた。

飾り気のない、けれど壯麗な紋章と不思議な文字が刻み込まれた柄、無骨な鞘。もちろんこっちの柄は無事ですよ。

「それは普通に抜けませんよ」

神官様が仰ります。これだけ軽いんだつたら、私でも剣が使えそう
な気がしてくる！ 気の迷いだと思うけどね！

「へ、二ツあるのだから」と何気なく靴を振り返して引つ張つてみた。

たゆほん。

とんでもない軽い音をさせて、剣は抜けました。

えええええええーーーー

剣、抜けましたよ！　抜けましたが！　ジャムの蓋より軽かつた！　なんですよ！

しかも、刃か……無いです。靴のほうを思わずさかさまにして振つてみました。出てきません。これ、柄だけだよ！ 不良品だよ！ 何で勇者様これ持ち歩いているの？ 物持ちがいいだけ？ それとも……まさか、私が壊したんじゃないよねっ。

「さすが神子ですね。抜くことは出来ましたか?」

動搖のあまり、がくがく震えながら目線を上げました。

卷之三

私の動揺つぶりに、神官様が落ち着いてとまたお茶を入れてくださる。ガツ！ とカップを雄雄しく掴み、ぐいっと一気飲みした！

「壊れましたあー！」

頭を抱えながら叫ぶ私に、勇者様は若干引きながら、「元々、刃は無い」

と仰いました。なんですと？

「折れない剣の話を聞いたことがありますか？」

「えっと、始原の勇者様が作られた聖剣の話ですよね？」

心と魂が折れない限り、その剣は折れる事はない。

星神殿の奥で神代からひつそりと立ち尽くす、神の一振り。色々華麗な伝説がある代物らしいけれど、噂と伝説でしかないものです。というか、鋼がそんな昔から保存できるのか、っていう謎もあるけどね！

あ、このパターン、読めてきた！ フフフ、超町民を体得した私は、もう驚かないよ！

「これがその聖剣です」

ですよねー。この話の流れからいうと、そうですよねー。あつ、私聖剣に指紋つけた！ いい記念です。

でも、何でわざわざこの剣と別に、普通の剣を持つてるんだろう？ 幾ら体力セレブだとしても、邪魔じやないかな？ 折れない剣があるなら、使えばいいのに。

「これも万能ではないということらしいですよ」

神官様が仕草で剣を戻してと仰るので、ぎゅっと柄を鞘に押し込んでみた。これでちゃんとしまえたよね。引っ張って確かめる。よーしよしよし、ちゃんと締まつて……きゅぽん。あつ。思ったより簡単に抜けました。それを二度ぐらい繰り返した私。ちょっと二人の視線が生温くなりました！ そんな目で見ないでください。見かねた勇者様が手を伸ばしてひょいと剣を取り上げた。かちり

ときちんと鞘にしまつた様子。初めからお願ひすればよかつたね！

はつはつは。はづ。どれだけ不器用なの。

「これは……使うと体力やら色々奪うからな。鞘から抜けても、発

動するためには剣と契約が必要になる」

まあ、私には関係の無い話ですけれどね！

兵士E、狂氣への融解（前書き）

シリアル、残酷表現、ドロドロ、ホラーがあります。
動物っぽいものに対する、残酷な表現があります！
苦手なたは即退避してください。

兵士E、狂氣への融解

オレは正直イラついていた。手に提げた桶の重みすらオレの神経を逆なでる。乱暴に歩けば歩くほど桶の中の水が跳ね上がり、さらにオレの感情を針で刺すよつとちくちくと刺激しまくる。

クソ、何で俺がこんな仕事を。あいつの仕事だろ！

朝から先輩には怒鳴られる上、今日も面倒な仕事を押し付けられた。水汲みなんてやつてられるか！ 桶の中身を樽に移し、苛立ちのままに桶を投げた。

けたたましい音を立て、それは壁に跳ねかえり、檻に当たる。

檻の中にいる気持ち悪いひよこのようなイキモノが、ギヤアギヤア騒ぎ立てやがる。全身がウロコに覆われた鳥のようなイキモノだ。ひよこの興奮は納まらない。それがまた俺の怒りをあおった。それらが入っている檻を苛立ち紛れに蹴飛ばす。鋼が鈍い音を立てるが、それ以上に自分の足も痛い。檻にまで笑われているようで、全くいい気がしなかつた。

この屋敷で働き始めて四年になる。

もともと商家の次男坊だったオレは、正直言つてやつかいものだつた。

優秀な長男が跡を継ぐからお前は自由にしろ、時期が来たら出て行け。常々率直に言い渡されていたのは、優しさだったのだろうか。オレには未だに分からぬ。すがりつくような気持ちで星神殿の神官による才能検査を受けたが、見事に空振りだった。神殿に納めた

お布施が途端にもつたいなく思えたのは仕方がないだらう。何も持たないオレはなりふり構つていられなかつた。あらゆるところに頼みこみ、実家の伝手を使い、何とかこの屋敷にもぐりこんだのだ。

毎日ぼろぼろになりながら訓練をこなし、一年経つた頃、鎧を与えられた。重いそれは責任が鋼の形をしたものだつた。この時点から、正式に領主様の私兵と認められるのだ。だが、鎧を貰つたといつても取り立てて変わることは無い。訓練と仕事の繰り返し。同僚と仲良くなるつもりは無い。オレは淡々と予定を消化していた。

そんな日々に、少しだけ変化が訪れた。

鎧の兵士さんつて、誰が誰だか分からぬわ。

とあるメイドにいつも言われる。彼女はオレによく話しかけてくれた。取り立てて美人ではないが、笑った顔が可愛らしかつた。彼女は俺を見るたびに笑つて挨拶してくれる。まさかオレに気があるのかと思っていたが、ある日先輩と街で腕を組んでいる光景を見てしまつた。つまり、恋人の後輩を気にかけていただけだつたわけだ。オレがうねぼれて勝手に舞い上がつただけだつた。

オレはそれで彼女のことを諦めたつもりだつたが、だが、言い知れぬ怒りのような感情が常に胸の中にくすぶつている。彼女への感情を、先輩は察していらっしゃい。手を出すなと釘を刺され、地味に嫌がらせをされる日々が続いている。

もういやだ。ここを出て行きたい。でも、オレが悪いわけじゃないだろ！ 何でオレが出て行かなればいけない？ 罰を受けるならあいつらだらう。何かを壊したい。めちゃくちゃにしてしまって、高笑いをしてみたい。ああそうだ、先輩の顔をボコボコにして、彼

女をオレのものにするんだ。いうことを聞かなければ、力づくでも従わせればいい。オレをバカにした罰だ。それぐらい、神も許す！正当な報復なのだから。

オレの背後で、まだけたたましくひよじどもが喚いてやがる。

「絞め殺すぞおまえらー。」

ひよこに吠えてみたが、一向に静まらない。
クソ、ひよこまでもバカにしやがって！

ガンガン檻を蹴ると、怯えたのかひよじどもが奥に固まつた。それを見て、俺の心がざわめいた。いいことを思いついた。

どうせこいつらは餌なのだ。その餌やりを今したところで文句は出ないだろう。俺は自分の口元が歪むのを感じた。横においてある網でひよこもじきを一羽救い上げる。今からの運命を氣付いていいのか、ひよこはいまだにオレを馬鹿にしたように騒ぎ立てやがる。がたがたと網が揺れるが、オレは離す気は無い。そのまま、隣のさらに大きな檻の中にはげ入れた。

低い唸り声を上げ、その中の獣がのつそりと立ち上がる。鋭く黄色い歯は、大人の男の指よりも太く強い。どんな肉でも引き裂くだろう。灰色の剛毛は僅かに青みがかっている。狼型の珍しいイキモノだそうだ。ただし、でかい。陸馬なみの体格をし、それでいて動きは俊敏である。先代の領主がペットとして手に入れたとかとにかく珍しい種類だそうだ。俺は正直こいつは好きではない。すぐに歯を剥き、世話をしてやっているのに懐かない恩知らずだからだ。

だが、今、この瞬間だけはこいつが好きになれそうだった。
さあ、餌だ。食っちまえ。

長い黄色の舌をだらりと出しながら、のつそりと立ち上がる。ひよこは一羽、けたたましく騒ぎながら檻の端に逃げた。しかし、檻の隙間は開いているようで開いていない。星術が掛かつた檻だとか。ひよこは死に物狂いで暴れるが、あいつはゆっくりと獲物を観察するのだ。そして、唾液まみれの長い舌で巻き取り……。

ひよこの断末魔が響いた。

オレはその光景を笑いながら見ていた。実にいい。気分がすっきりする。一瞬、獣の口から何かが溢れたような気がしたが、見間違いだと思う。こんな暗いところ、しかも使用人しかいないところに置く蠅燭はないのだ。

「ほらよ、まだまだこいつらはいるぜ」

俺は笑いながらひよこを獣の檻に入れ。獣は噛み付いたり、引っかいたり、押しつぶしたりとひよこをいたぶるメニューをバラエティに富ませようとして衷心のようだ。それにしても、獣の癖にうまいことをやる。一羽もこいつは逃さなかつた。餌といつても、食い散らかすのではない。あくまでいたぶり、愉しむのだ。

初めの頃は残酷すぎて受け付けなかつたこの光景も、今は好ましいものだ。なぜ、昔こいつのことを嫌つっていたのか、思い出せない。

「フヘヘッへ、お前は最高だ」

獣の檻を撫でる。こいつは偏食がひどい。

様々な動物や獣の肉を与えたが、特に食することが無かつた。商どもがどこからか見つけてきたこの氣味の悪いひよこを『えるようになつてから、いたぶつてから食べているようだ。ひよこをあれだけいたぶるなら、血が流れそうなものだが、いつも綺麗になくなつている。食つていてるんだろう。こいつがすみずみまでねぶるほど

ひよこが好物に違いない。食べかすも排泄物も散らかさない、いい獣だ。まさにペットとして理想的ではないだろうか。

「やつだ、お前の世話をしているのはオレだ。オレが飼い主だらう

オレは素晴らしい思い付きをする。こいつを連れて行けば、先輩など一ひねりだ。面倒な上司、オレを馬鹿にしたメイドも、ひよこのようになるに違いない。俺はその妄想を浮かべ、うつとつとする。素晴らしい光景ではないだろうか。それは、この檻を開ければ実現するのだ。手軽に実現する妄想に、オレは興奮した。

「ソレから出してやる、そして、オレに楽しいものを見せてくれ！」

オレは腹の底からわいてきた笑いの衝動そのままに笑い転げながら、腰の鍵束に手を伸ばし、躊躇なくこいつの檻を開けた。オレが檻をあけるのをじつとあいつは見ていた。よしよし、分かつてるじゃねえか。

オレは表情を緩めながら扉を全開にする。あいつは、嬉しさにはじけるように、オレに甘えて飛び掛ってきた。

【1／Scar】、結果の観察（前書き）

流血、残酷な表現があります。

【1／Short】、結果の観察

血が散る室内に、フードの人物は立っていた。

獣の牙、爪の跡は石の壁、人間の体を問わず刻み込まれている。先程立ち去った狼型の魔物の力を示していた。異様な室内である。

しかし、そんな異様な場所にもうろたえることなく、怒りも悲哀も無くただ観察者の眼差しだけを持ちながら、彼は立っている。

彼の足元には、獣に引き裂かれた哀れな男が晒し続けていた。この屋敷の兵士である。鎧は彼の命を守るのには役に立たなかつた。明らかに命の炎は消えかかっている。その流れる血をとめることも治療もフードの男はしない。ただ、観察するだけだ。

「瘴気に狂つたか」

足元の男は、明らかに瘴気に犯されていた。
瘴気酔いの症状は、以下の通りに上げられる。

判断力の欠如。痛覚の麻痺。そしてもっと恐ろしいのは人の心において外してはいけないがを溶解してしまう作用。人が獣になる。

むしろ、魔物になる、というべきか。

身体をすたずたにされながら、うつろに晒う男を見下ろしながら彼はひとりごちる。

「思ったよりも、侵食が深いな」
考えを廻らせる。

ふと彼が気がつけば、いつの間にか部屋は静寂に満ちていた。既に男は沈黙していた、永遠に。見開いたままであつた瞳を指で閉じてやる。狭量ではない、それぐらいは彼とて行う。男はどちら

にせよ、間に合わなかつた。瘴気による魂の融解が進みすぎていた。既に男の命は無く、魂は循環の旅に消えていった。あのまま生きるより、そのほうが幸いであるだろう。死という神の祝福に抱かれるほうが。

ギャア、と一羽だけ残つていたひよこが騒いだ。その方向へ振り向かぬままに術を投擲する。

「H」^は

白く輝く針に貫かれ、ひよこは沈黙し、露もやとなつて消え去つた。

「魔物の餌に魔物を与えていたか」

異様なひよこもどきは、正しく魔物であつた。魔物は死ねば瘴気になるのみだ。肉は残らない。

恐らく誰も気付かなかつたに違いない。狼型のあれは、殺すのに愉悦を覚えていても食つことに喜びをえていたのではなかつたといふことに。

魔物の主食は人間だ。それ以外にはない。そう決められているのだから。

これだけ瘴気が蓄積すればたやすく人は狂う。先程の魔物は瘴気を取り込み人を食い、普通とは違う変化を遂げているのだろう。

「さて、どうするのかな深蒼は」

死の沈黙が包み込む室内に寂寥を伴い響く。彼はマントを翻すと、空気に溶けるように消えた。

神子（仮）・五里霧中はやめてほじこ

勇者様達は色々調べてみるとのことと、私の部屋から帰つていきました。

結局のところ、お一人は変な感じは受けていないそうです。でも、私が主張するピンクについてはあつさり信じてくれた。出所をまず探らなければ、との神官様の言葉を思い出します。どうから出でるんだろう。あんなピンクが噴出しているところがあつたら、近寄りたくないです。いかがわしいお店とかだったら演出でありますけど！ ピンクの霧で効果的な演出です。怪しいムード大盛り上がり！ そういつたえっちなお店は領主様が詳しそうですがね！ 偏見じやないよ！ さつきなんか勇者様に一生懸命お話していました！ 耳に入ってきたから仕方ないよねっ！ 勇者様も神官様もスルーしていただけど、興味はあるんだろうか。今度聞いてみよう。

部屋を出るとしたら、ピンクの中を突つ切ることになるんだよね。左手に貰つたお守りはまだつすらと形を残しています。

さつき試しにピンクの霧の近くに行つてみたら、霧が私を避けた。お守りの効力凄すぎです！ さすが神官様！ しばらく楽しいので霧に手を伸ばして避けられるを繰り返してた。ちょっと楽しかったで、我に返つて頭を抱えました。なにしてるの私。

お風呂どうしようかなあと考へながら、ベッドに寝転んでみる。お風呂はいってないけど、ベッドカバーの上だつたらいいかなと思つて、普通に寝る方向じゃなくて横から仰向けてごろごろ。金糸とかの刺繡がごわごわしているけど、それを差し引いても素晴らしいベッドですよ！

なんだこのベッド！ 広すぎるじゃないか！ 私が三人寝ても大

丈夫だよ！

一般庶民用のより縦も横も二倍あります。ふかふかだしね！ 丁度いいマットレスの具合だ。

ふかふかに包まれたまま、先程の話を思い出してみる。

幼馴染かあ、いいですね！ なんか、こつ氣心知れる感じが！ お怒り神官様は丁寧語じやなかつた。神官様が何で丁寧な言葉を話してゐるか聞いてみたら、都會ではいろいろあるんですよつて笑顔で言つてた。色々つてなに！ 濁された部分が怖いです。

どんな村でお一人が生活していたのか気になります。あんなキラキラした感じの人人がいる村つてどんなんだ。どう見ても職業村人はなりそうにありません！ 町民みたいに地味に生きていくには、キラキラは不要だからね！

それにしても幼馴染かあ。どんな感じなんだう？ 私には幼馴染つていながら分からぬ。

私つて小さい頃なにして遊んだつけ。

友達いたつけ？

つらつら考えても思い出せない。えつ、そろそろボケがはじまつたのかあああ！ 友達とかいたつけ？ あれ……、本格的に記憶喪失な気がしてきましたよ！ そのうち思い出すかな。忘れっぽさには自信があります！ 友達いない人だつたつけ！ うわ！ 寂しい人生です……。

あー……眠い。

このまま寝ちゃつて大丈夫なんだろうか。またなにか用事があるかな。領主様と一緒にごはんとか言われたら、生ぬるい笑顔で断りそうだ。ストレス的な問題で！

ピンクに気が張つていたのか、今は反動でぼんやりしている。たぶん瞼を閉じたらそのままウトウトしちゃうはず。

あー……お茶でおなかがだつぱだつぱですよ！　まだ治まりません。

絶対、腹回りの大きさが増えているに違いない……。後でトイレに行きたくなったりして。さっきはどっさにあの場所を離れない一心でトイレの話題を出したけど、本当は行かなかつたし。またトイレ行きたいですと言い出したら、私どれだけ我慢できない子だと思われるのか！！　今更思い出したけど、勇者様は私がトイレに行つたと思い込んでいるのかな！　いやあああ！

ひとしきりもだえながらゴロゴロとベッドを転がります。いやあ、ベッドが広いって、いいですよね！

転がりすぎて息が上がった！

全力投球ですよ！

窓からいい風が吹き込んできます。

ほんとに眠い……。

うと、と瞼が落ちかけた瞬間、遠いところでの人の声が聞こえた。

……なんだろ？　悲鳴に聞こえたけど。

そちらに意識を向けた瞬間、ぞわっとトリハダが立ちました。

駆け抜けた感覚に、反射的に跳ね起きた。

振り返った先にある扉、その隙間から大量のピンクの霧が漏れだしてきている！　うわあああ！　増えてる！　どう見ても増えてる！

私はそのまま扉に駆け寄り、開きました。

前が、見えない。廊下はピンクの霧で埋まっていた。

うわあああ！　何があつたんですか！　トリハダが治まりません！

あの廃墟で見たぐらい濃いピンクになっちゃってるんですけどーーー

そして、私にとつて見えない霧の先から、明らかに悲鳴と思われる声が届いた。

な、なにが起こってるの？

いただいたお守りのおかげで私から腕一本分ぐらいはピンクの霧は近寄ってこない。でもそれだけ。充満しているせいで、廊下の視界はさっぱりだよ！

ばたばたと人が走り回る気配、悲鳴、怒号。明らかに何か異常なことが起こっているのに、私には分からない。立ち尽くす私に、知った声が掛けられた。

「部屋に入ってる。危険だ」

勇者様だ。

「何があつたんですか！」

私の声は震えていた。だって、これは明らかにおかしい。

「魔物が出た」

勇者様の答えは簡潔だ。簡潔すぎて、私の理解が一瞬遅れる。え、ここ屋敷の中ですよ！

否定する言葉を発したものの、自分の中から答えが返ってくる。瘴気は魔物の残りかすだとしたら、魔物がいるのは当たり前。それが原因なのだから。

部屋に入ろう、と足を返した瞬間、

「動くな！」

という勇者様の鋭い声が私に突き刺さった。その声に縫いとめられるように、私は思わず立ち止まる。相変わらず廊下も、姿も見えない。生臭い風が前から流れてくる。

鉄さびの臭いがする。

ピンク色の霧の向こうで、獣の唸り声と激しい戦闘音がした。私には見えないから動くことが出来ない。動くな、という指示に従うしかない。

「グルルルル」

怒った犬のような声がする。ただし、その大きさは犬とは大違いに音量が凄い。ガン！ と鋭い音の後、勇者様の息を飲む音が聞こえた。

私が開けた扉の方へ、ピンクの霧が僅かに流れている。そのおかげで、少しだけ霧が薄まり、見える部分が広がった。
けど、それはいいことじゃなかつた。

「ギャウウウウ！」

血走った目、異常な黄色い舌、鋭い歯を持つ人間よりも巨大な狼が、私の目の前に踊りだしてきた。
み、見えないなら最後まで見えなかつたほうがよかつたんじやないですかあ！！

神子（仮）・田の前ではお断りしたい

食べられる！

鋭い犬歯をむき出しにしながら私に飛び掛ってきた魔物は、何故か私をスルーして後ろに着地しました。

魔物の動きのせいか扉の方に空気が流れた。二十歩ぐらいの距離はうつすら見える程度にピンクの靄が薄れました。
視界が良好になつたのはいいけれど、魔物が目の前にいるのはいただけない！

魔物は私を眼中に入れていない様子。
え、なんで？ 助かったのか、なんなのか、分からぬ！

喉が引きつって声も出ない。

じわじわと背中に死を感じる。

背筋が強張つて動けない。

汗が背中を垂れるのが分かるけど、どうしようもできない。

魔物はまるで私がいないように、もう一度後ひ足のばねで再び飛び上がるつとする。

このままじや、私に直撃だよ！

背後での動きのはずなのに私は何故かそれが分かり、反射的に座り込んだ。膝の力が入らなかつたから、簡単にそれは出来る。

その瞬間、私の前に人が立ち塞がつた。勇者様だ。

勇者様の手に剣はない。徒手だ。魔物は明らかに彼を狙つて飛び掛つている。

危ない！

その声は喉に引っかかつたまま音にならなかつた。勇者様は無造作に左手で拳をつくり、振りかぶる。

そのまま手は魔物の口に吸い込まれる。魔物なのに魔物が晒つたように見える。魔物が顎に力を入れてしまえば、勇者様の腕も無事ではいられない、最悪、噛み千切られる。

流血の予感に、私の喉を引きつった息が通り、かすかな悲鳴になる。

しかし、私の予想は大きく覆されることになつた。

勇者様はそのまま腕を振りぬいた。まるで魔物などその腕に噛み付いていいのかのように。金属と牙が磨れる不快な音が響く。

「ギャン！」

壁に魔物が叩きつけられ、悲鳴が上がる。ずるりと壁から落ちるけれど、すぐに魔物は体勢を整えなおした。舌が異様に長いです。黄色つて気持ち悪いって！

勇者様を危険とみなしたか、ひらりと距離を取り、体勢を低くして唸りを上げた。じつと隙を窺っています。じりじりと左右に動きながら、距離や間合いを測つている様子。剥きだしの犬歯は、數本折れている。先程の一撃の効果だろう。

勇者様も腰を落として臨戦態勢をとる。

けれど相変わらず手には剣はない。右に吊り下げるたそれは、今が抜く時じゃないんですか！

それにして、私を挟んで対峙されたとしても生きた心地がしないんですがあああああ！ 怖すぎるよおおおおお！ 魔物の眼中に無さそうなのだけが不幸中の幸いっぽいけれど、でも動いたら襲われそうな気がする。

私は置物、私は置物と繰り返しながら腰を抜かしたままだらだらと汗を流すしかない。

「こらみ合いはしばらく続いた。濃密な緊張感と殺氣に、私も呼吸が上手くできません。木の葉が一枚落ちただけでもギリギリまで高められた張り詰めた均衡は、なだれのように一気に崩壊すると思つ。忍耐が切れたのは魔物だつた。

鋭い歯を剥きながら、勇者様に飛びかかる。

常人ならば避けようのない速度の跳躍だけど、勇者様は慌てた様子も無く迎え撃つ。

勇者様は再び左手で魔物の眉間に狙つて殴りつける、が、これは魔物も予想していたのか空中で体を無理に捻つて避けた。しかし、その一撃はフェイントだつた。僅かに腰を落とし、用意していた右で魔物の顎を下から一気に突き上げる。とても鈍い音がする。顎の骨が碎けたのかも。魔物の悲鳴がまた響いた。フェイントは、魔物がなまじ賢そだからひつかかつたんだろう。

魔物はふらつきながらも着地する。先程の一撃も決定打ではなかつた。まだ魔物は瘴気とならない。やはり殴るだけでは足りなかつたみたい。やつぱり剣がないせいなんだろうか？

顎を碎かれながらも魔物の殺氣は変わらない。

勇者様は魔物が距離をとつたのを見計らい、星術を展開する。

「K X X X X * W O A S S Y W W K W W (風を圧縮)」

右の掌を上にする。そこに、揺らめく何かが現われる。空気を固めたものなんだろうか。向こうの景色がゆらゆらと揺らめいて見える。あれです、暑い日の道が熱気でゆらゆらしてゐやつみたいな感じー。

魔物は再び姿勢を低くし、今度は体当たりを仕掛け。単純な攻撃だけれども、それだけにまともに当たつたらとても凄い衝撃になるのが私でも分かる。勇者様はさすがに正面からその攻撃を受けなかつた。左足を軸に、右足を引き、

「S*t s w w d x x x n n (切断)」

紙一重で避けながら右手を、魔物の首の近くに叩き込んだ！ 術の威力を直接叩き込まれた魔物は口から唾液を散らした。ゴリッと鈍い音がしたもの、魔物の勢いを止めるまではいかない。着地しそうな目を血走らせながら勇者様に飛び掛る。今度は近距離過ぎたせいか、勇者様の回避が遅かった。胸元の鎧が魔物の前足の爪に当たり、大きな跡をつけられた。勇者様は衝撃を緩和するためか、敢えてそのまま後方にさがつたけど、すぐに体勢を立て直した。

魔物はその隙を襲うかと思いきや、そのまま突っ切つて走り去る。

逃げた！

魔物が消えたのは、魔物が来た方向のピンクの霧の向こう。私はもう見えない。

私はこの一瞬の攻防に、どっと汗が噴出しました！ 体感時間は凄く長かったけど、本当は時間はさほどたっていないと思う。横で置物になっているだけでも、相当怖いよ！

私は震えながら勇者様を見上げます。変だ、震えが止まらない。

勇者様の左手は、先程魔物の口に突っ込むなんて無茶をしたせいか、血が出ています。丈夫そうな手袋が裂けてる。

「勇者様、怪我……」

私がようやく出した声は情けなく揺れたままだった。

勇者様は駆け出そうとしたが、数歩で振り返りこちらに軽く視線を投げてくれる。蒼い眸はまだ剣呑なままだけれども、私に向けたそれに殺氣は無かった。

けどこっちを向いてくれたのは一瞬だった。すぐに前を向き、

「……もう治った」

と言葉を落として、私に背中を向けた。

「部屋に入つてろ」とだけ言い残し、また勇者様も魔物を追つてピンクの霧の中に消えて行つてしまつた。

な、治つたつて？ そういうれば前も似たような会話をしたような気がする。でも、今怪我をしたよね？ 何で治つてるんですか？

逸らした視線が質問を拒絶しているような気がして、私は呆然と座り込んだまま魔物と勇者様が消えたピンクの霧を眺めた。

神子（仮）、働くはずはないられない

ピンクの霧の向こう側がどうなっているかなんて、私には見えない。

霧が濃すぎて視界が全くありません！ とりあえず扉のほうから風が流れてくるから、どっちが部屋かはよく分かる。

普通に行けば、部屋に入つてするのがベストな対応なんだろう。でも、何か私に出来ることがないかを探したい。怪我をしてまで庇つてくれた人に、恩を返さないのは女が廃りますよ！

でも、本当はまだ怖い。

さつきの魔物の牙を思い出す。あれで噛まれていたなら、私はやわらかいパンよりもたやすく引き裂かれていただろ。これが、勇者様達が旅する世界なんだ。姫様が言つていたことは眞実も含んでいた。小娘には厳しい世界だろ？ といつアレ。

まだ怖くて、膝ががくがく笑う。でも、ここで立てなかつたら自分の中の何かをなくしそうで、ちょっと歯を食いしばりながら立ち上がつた。壁に背をあずけて何とか立ち上がる。それだけで息が弾んでしまつた。どれだけ情けないの私！

先程去つていつた勇者様の背中を思い出す。そして、最後の会話を思い出して、イラッとした。痛いなら、痛いって言えばいいのに。なんで言わないのか。治つたにしても、痛かったのは絶対痛かっただろうし、私だったら泣き喚くレベルだと思う！ なのに大したことがないつて振舞うのが勇者様の普通になつていてる。

この気持ちちは、多分神官様が怒つていたのと近いものなんだろう

なあ。ひとりで抱え込むなと神官様は言い続けてきたにも拘らず、勇者様は相変わらず抱え込んでるみたいだし。うん、次に顔を見たら「ピッキンしてやる！ ちょっと驚いて、将来禿げ上がるがいい！ あ、ちょっとだけでいいです。男のひとにとつて髪の毛が無くなるのは重大事だつて分かつてるから、ちょっとで！ 何で減つて欲しい毛が減らずに、減らないでいい毛が増えるんでしょうな。どことは言わないけど！

よし！

私は立ち上がって、お腹に力を入れた。
怖がつている場合じやない、動くんだ！ パン！ と頬を両手で叩き、行動を開始しました。

瘴気は日光が嫌いだから部屋の中に瘴気を呼び寄せて、少しでも日光消毒するべきだよね。

消毒したら消えて私の視界も広くなつて一石二鳥！
屋敷の人、どれぐらいの濃さで体に悪影響が出るんだろう？
でも、これは明らかに悪影響が出てそうな濃さだけれどね。

お枝様に頼るのも考えたけど、神官様の手が赤くなつたことを思い出した。お枝様の封印を解けば瘴気が消えても人が体を悪くしたりいけないよね。うーん……もうちょっと、眞面目に星術の勉強をしておくんでしたああ！ 適正ないつて、悔つてたよ！

神官様もどこかで瘴気と格闘していると思う。あの人が逃げたとかは全く思い描けない。そう考えたら、あの幼馴染二人は結構根っここのところは似てるんじやないかな。眞面目で抱え込みがち。うわー、秘密主義ばかりですよ！ 私には秘密にするほどの事はないがな！ ただの町民です。資産もささやか過ぎるから、脱税もしてません。

神官様の事を考えていたら、ふと左手に貰つたお守りの事を思い

出した。そうだ、これは最初よりちょっと薄くなつて。本物の葉より、やんわりとした効果になつてゐるんじゃないだろ？ イドさんや鎧さんとか平氣そうだつたし。

でもこれを使つとしたら、どうしたらいいんだろ？

首を捻ると、頭の中で韻律が流れた。むらむらと水が流れゆつに、音と力ある言葉の意味とその旋律が。

Arwwb* kvvv M o n o w o / (あるべきもの
(を)

ああ、この音の連なりだ。覚えがある。初めてお枝様の力を使つたとき、勇者様に復唱しろと言われた言葉。世界の根幹を成す連なりの音、すなわち韻律と人が呼ぶもの。

Arwwb* kvvv Swwgxxxtxxx nvv
v . / (あるべき姿に。)

そして私は理解をする。

これは呪文じゃなくて、ただの祈りであり、お願ひだと言つ」といふに。ただ、世界にお願いをしてゐるだけ。ひとにとつて異質なもの排除して欲しいと言つ依頼であると。

これをお願いすればいい。左手にある世界の欠片に。

私は、ピンク色を吸い込むことを気にせず、大きな声で韻律を唱えて祈つた。

「Arwwb* kvvv Mono w o / (あるべきものを)
Arwwb* kvvv Swwgxxxtxxx nvvv . /

(あるべき姿に。)」

左手から、はらはらと光がこぼれる。弱弱しい小さな光が生まれ、やがてそれは爆発かと思つぐらいの光芒となつた。光なのに圧力があるように感じ、私はよろめいたけど何とか踏みとどまる。やがて光は消えうせ、瞼の裏に隠したにも関わらず、目がチカチカした。

爆発と同じように、唐突に光は収束した。

反射的に閉じた瞳を開けば、廊下は普通の様相を取り戻していた。ピンクの霧など、どこにもなかつたかのように普通の景色だ。静かで、ちょっと暗いだけの廊下。壁にあるひび割れって、もしかしてさつき勇者様が魔物を殴り飛ばした時のアレですか？！ 馬鹿力だなあ……。

日常の風景と引き換えに、左手にはもう葉の模様はなくなつていた。

せ、成功ですか！ よかつたあああ！

私は緊張が緩んだ脱力感のために、ずるずると床に座り込んだ。壁へ背中を預ける。冷たい壁が心地よい。ああ、部屋に帰らなきや。でも手足が重い。頭がくらくらする。これは眠気だ。ただの眠気、大丈夫。

それにしても、私は旧星語なんて知らないのに何でちゃんと星術を思い出せたんだろ……？ さつきまで身近にあると思つていた記憶や知識の源が、すうっと遠ざかっていく感覺がした。待つて、一つだけ教えて。その何かに私は頭の中で呼びかけた。それは何故か留まり、じぢぢを振り返った気がする。

教えて、勇者様や神官様や、他の人は無事なの？

返答が、文字情報となつて頭の中を流れる。

星別者検索。

返答三件。現在情報更新。

【5/A0】、損傷率八割、あと五秒後回復。交戦続行中。

【5/Dsnnkn】、損傷なし。人間にに対する治療中。対象回復率四割。失血率二割のため危険。

【0/Mvvvko】、損傷なし、存在力低下、平常に比べ六割。自動的に休眠に入ります。要因星術の反動。カウントダウン、五、四……。

ああ、そうか。と全部の情報を読み取り、私は納得した。何故か全部の指示する内容を理解した上で、私は納得したんだ。

そしてその何かは私の中からすうっと消えていく。知識があつたはずの場所はぽっかりと穴が開き、そこに何があつたか分からぬ。ただ、失つたことだけを自覚した。

緩やかなカウントダウンが頭の中で再開される。

一、そして○を刻み、頭の中での情報が【0/Mvvvko】休眠、と更新された。

その瞬間、日が落ちるより速やかに、私の意識は闇に落ちた。

せめて部屋に入つたらよかつた。誰かをビックリさせるかな、とそれだけを後悔しながら。

【Suk】、記憶の混線と流出

瞼の裏の暗闇では、私は私であり、でも私じゃない何かになる。先程は強引に知識を開いたから、余計に不純物が混じっている。

まだ「田覚め」の時ではない。

分析。

結果……体内の韻律が乱れている。世界へ存在を固定する部分が狂っているらしい。修復が必要。混線した記憶を整理するために、幾つかの記憶の欠片を拾い上げる。

本来の私が持つべきものと、そうじやないものを選別する。たまに混線が起ころる。どこまでが自分が持つていてるべき知識か分からなくなるのだ。

さて、この記憶はなんだろう? 古い本を開けるように、私はその記憶を覗き込む。

これは私の記憶か、それとも【^{せかい}Suk】の記憶か……。

砂礫を含んだ風が吹いている。風には、血の匂いが混じっている。魔物を呼び寄せるに違いない。

荒涼とした砂漠だ。空の色と、砂漠の色、それだけが視界にある全てだ。

木々は枯れ果て、水の気配は無い。時折舞う風が、砂礫をダンスに誘うように巻き込み、砂漠への侵入者を排除しようとする。ここは、厳正なる死が平等に降りそそぐ場所だった。

「仕方ない」

そんな場所で、彼女は高らかに笑う。

彼女の笑顔は力強く、淑女からは遙かに遠いものの、ひとを惹きつけてやまない。

黄昏の残照が彼女の黄金の頭髪を輝かせ、炎のように燃え上がらせた。瞳の色は濃い紫。強い意思を宿す眸。正面からその視線を受け、相対する青年はたじろぎながら声を発している。

「本当にいいのか？」

「上等だ、私の命でそれが贖えるなら、幾らでも持つていぐがいい」「国はどうするんだ」

「ふん、弟がうまくやるさ。あやつは私ほどがさつではない。皆に支えられ、よい王になるだらう」

唇をほころばせ、笑う。それだけで華麗な印象へと変わる。例えその装束が血にまみれていたとしても、彼女は正しく王族であった。「なあ大神官、お前こそ私に付き合つてもいいのか？ 帰つてするべき仕事が山積みだらうに」

青年は茫々に伸びた頭髪をかき回しながら、撫然とした表情で、「今ここに居るより重要な仕事は無い」と言つ。その口調に彼女は笑つた。青年は照れ隠しでよくなつた口調になる。

「それより、あいつの言つことが正しいと思うのか？」

「アレは人の言葉だ。お前が気まぐれに預かる星神様の託宣とは違

う。だからかな、信じてみようと思つたのは

彼女は聖剣の柄を握りなおす。そこから光が伸び、長い紐状になる。それが彼女の選んだ武器の形、鞭だった。黄金の光を放つそれを軽く振る。

ひび割れた甲冑を気にせず、彼女は背筋を伸ばし地平線に向こうと睥睨する。

「それだけで信じるってのか？」

「なんでもそうだ。こちらから信じるしが肝要だと思つたが。お前こそ星職者のくせに何を言つている」

凛と言い放つ彼女に、青年は、

「お前はいつもそうだ。信じて裏切られて何度も泣いただろつ。まだ懲りないのか？」

と面倒くさそうに言い返す。一人の間では、これはいつもやり取りだ。彼女も笑いながら言い返した。

「また泣いたら、慰めてくれ」

「わがまま王女様のおもりはいいやだね」

即座に返ってきた言葉に、彼女はふんと鼻息を荒くし腕組みをする。

「慰める程度してくれないと一 ケツの穴の小さい男め！」

青年は本格的に頭が痛くなつたようだ。両手で抱えて座り込んでしまう。うめきながらぼそぼそと言葉を洩らす。

「どうからそんな言葉覚えてくるんだ」

「私は博識なんだ」

「違うだろ」

頭を抱えたままの青年に、彼女は拗ねる。

「たまには願いを聞いてくれてもいいじゃないか

「オレの願いを聞かないといつえに、帰る気の無いやつのことなんて聞くもんか」

あくまで投げやりな青年の言葉に対し、

「じゃあ、帰つたら」

彼女は珍しく言いよどむ。けれども、すぐに顔を上げていつもの尊大な調子で宣言する。

「帰つたら、一つだけ何でも聞いてくれ」

彼女は青年のほうを見なかつた。視線は地平線に止められたままだ。その顔を見上げ、青年は押し黙つた。しばらくのち、大仰に溜息をつきながら苦笑をする。

「仕方ないな。わがままめ、俺に何の得も無いじゃないか」

青年の譲歩は引き出せたものの、その言葉は彼女は気に入らなかつたらしい。

「相変わらずの計算男め。たまには無償奉仕をしろ」

「生きるには金が要るんだよ」

「私にたかるな」

「たかってねえし」

青年は遠い目をしながら頭をかき回した。この癖のせいで、彼の頭は大体ぐしゃぐしゃになるのだ。彼女はその仕草を眺めながら、胸を張つて言い放つ。

「誰かさんが言うわがまま王女だからな、わがままなんだ」「威張るな」

二人は同時に地平線を睨みつける。

「……そろそろ、時間だな」

青年が立ち上がり、武器を構える。神宮と言つ肩書きのわりに凶悪な武器だつた。大きな斧である。ただの斧よりも殺傷能力に秀でるよう、先端にも鋭い針がつけられている。青年は星術を保持することが出来る宝玉に、改めて術を込めた。戦いに備える。

一人が見たその方向は、彼女がずっと立ち尽くしながら見ていたそれだつた。

二人が見詰める先に、徐々に黒い帯が地平線から広がつていく。砂煙が舞い上がり、その黒い群れを揺らめかせる。

魔物の群れだ。

地平線を埋める、圧倒的な数の暴力。何万、何千万いるか分から
ないそれに、彼女たちは二人で相対しようとしている。正しくは無
謀な行い。しかし、この戦いは彼らが選択した最後の戦いであった。

彼女は笑いながら宣言した。

「^{きん}黄金の勇者として、強すぎる光を押さえ込んで見せる！」

ああ、と私は溜息を吐いた。

……これは、世界の記録。私のじゃない。

幻視を終え、私はその欠片をぽいと投げる。
今の私が見るはずも無い記憶だ。

私は選別のために、別の欠片を覗き込む。
時系列が狂つていいせいだ。星のめぐりの影響をもう少し受けれ
ることが出来たら、こんな風に時間が狂うことが無かつたはずな
に。

私は溜息をつきながら、欠片の選別を始めた。

神子、起きたくない

「それ、違ああああ「つー。」

私は焦りながら跳ね起きた。あつ、ちょっとめまごが！　いきなり起きたからだね！　そうだね！

ん？　なんか色々夢を見ていた気がするけど、こまごめ思ひ出せない。

あー、なんだつたつけ！　思い出せば気持ち悪いです。

「神子様、お加減はいかがですか……？」

メイドさんがびくびくしながら話しかけてくれる。私が叫びながら起きたのをバツチリ叩撃しちゃつたらしい。大丈夫ですよ、噛み付きません！　だからそんなに微妙に距離をとらないでつ。

それにしても寝言が多いんでしょうか！　最近目が醒めるどこのパターンが増えてきてるね。そうですね。

いつか凄く恥ずかしいことを叫びながら起きそ�で、本気でびくびくするんですが！　夢の中つて何が起こるかわからないから、とつてもテンジヤラスですよね。

「お着替えをお持ちします」

メイドさんがにっこり笑つて部屋を出て行く。あ、はい、着替えます。

せつから落ち着かない。例えるならば、うつ……、あと一口コアが残つていたのにそのカップを下げられてしまつたよつなもつたひない感がもやもやと渦巻いてくる。何か大事なことを忘れている気がするんですが、……うむ。どうせ思ひ出せませんよね！　気にしない！

そういえば、私は廊下に行き倒れていたはず。

誰かが拾つてくれたんでしょつか？ 全く記憶にございません。寝つきだけはいいみたいだね！ ホント……どこででも寝れるようです。眠気はもう少し自重を覚えるべき。

勇者様の怪我はちゃんと治つたのか、神官様が治療していた人は大丈夫だったのか気になります。

そのうち教えてもらえるよね！

誰かが着替えさせてくれたみたいで、ちゃんと寝る格好でした。すとんとした飾り気の無いネグリジェでした。メイドさんかな？後でお礼を言おう。これも大変肌触りがよろしくありがとうございます。お金持ちは違うね！ 神殿のネグリジェは、触るのが怖いぐらいでした。何の素材か分からぬけど、艶がある布地でした。皺が付くのが怖くて、寝返りが打てなかつたのはいい思い出。思い出にしたい。もうあそこに滞在はしたくないですマジで。

そしてふつと思いました。

ベールがないね！ 力いっぱい素顔ですよ。

ああ、もういいよ……多分、大の字になつて廊下に倒れてただろうし、今更取り繕つものももうないつ。トイレにも行く女です。シーツの中でゴロゴロしてみた。うふふ、きもちいい。転がりがいがあります。

意外とメイドさんが戻つてくる時間が長い。その間にお布団を堪能するよ。

枕はふかふかだし、あと三日ぐらいは眠れそうです。幾らでも、寝れるよ！

うん、体の調子は全く問題が無い。お腹が減つてる気がするけど、そのうち何か貰えるんじやないかな！ 期待しています！ 結局、御飯もお風呂も入りそびれましたが！ 今からお風呂はいってもいいのかな、さっぱりしたいなー。

だらだらと欲望を脳内で垂れ流しにしていたら、メイドさんが帰ってきた。自分の欲望まみれさに、ちょっと反省します。

「お着替えをお手伝いしますね」

「大丈夫です！」

力いっぱい拒絕してみました。貧相な体は世間様に見せたくないですよ！ と言うか、人前で服を脱ぐと言う経験が圧倒的に足りないので、単純に「遠慮申し上げたく存じます。神殿でイヤだったのがまさにこれ。

お着替えも、お風呂も、おトイレも、一人で出来ますから！

その時ノックの音がしました。メイドさんが会話の途中で失礼します、と応対に出る。神官様でした。

「お加減はいかがですか？」

それほど疲れた様子が無い神官様、この人もまさか体力が有り余っているタイプなのか？ 人を治療する呪文って、凄く疲れるって聞いたことがある。なのにピンピンしているのは凄い。

「神官様は大丈夫ですか？」

私からの質問に、首を傾げる。

ん？ 私も首を傾げる。

「私は元気ですよ。ちょっと失礼します」

と、神官様は額に指を押し当てて、小さく星術を唱えられました。診察つて、こうするんだね！ 医者要らずといわれた雑草庶民の私には、いろいろ初体験ですよ！

「はい、問題は無さそうですね。色々寝言は仰つていましたが」

「え、何をですか」

「いろいろと」

そのぼかしが……ぼかしが、気になるんだよおおー…だから睡眠中の私！ 何をしてたの！

「このままでは私はお嫁にいけませんね」

寝ながらぶつぶつ言う嫁など、欲しくもあるまい。私は布団の中でどんよりといじけた。

「いえ、夢の中でも掃除をしていらっしゃったようすで問題はないのです？」

いや、問題の焦点がずれた！ 今日のフォローもすべり気味ですね神官様。ゆるぎない。私はあえて話題を変えた。

「それでも、神官様はお疲れにならないんですか？」

「十分休息はとりましたよ」

私は窓の外を見る。明るい。のどかだ。

あれからそれほど経っていないんじやないかなあ？ まだ明るいしね！

「あれからって、一時間ぐらいですか？」

神官様はとてもイイ笑顔で、

「一日です」

と仰いました。

ん？

まさか。

「私、……一日寝てました？」

私はぱかーんと口を開けた。寝すぎですねー。

神子、「ご飯は抜かしたくない

ふ、一日ですか。

繰り返して思ひ程度にはビックリしていますよ！ 何が驚くって、

「つまり六回」「はんを逃してこる計算ですね……！」

私が思わず声を上げたのは、仕方がないことだと思つ！
「ごはんぐらいいしか楽しみがないです最近。

何かメイドさんが、えーって顔をしてみています。恥ずかしいから見ないでくださいほんとにお願いします。心がガリガリ削られるよ！ だから見ちゃ駄目。

神殿に行つてから、ごはんを一日三度と言つ生活に慣れてしまつて、燃費が悪い人間になりました。食べても、おなかが減る。うーん、そこまで動いてもないんだけど。……はつ！ これは、食欲でストレスを紛らわせる作戦？ 人間の体の防衛反応ですかっ！

「ご飯の心配が出来るほどでしたら、大丈夫ですね」

神官様はゆるぎなくにつじり。この人の動じると動じないポイントの違いが分からぬ。謎だ。そして私はもう一つ重大なことを忘れていました。

「一日間ごはんを食べていいなどいうことはつまり、その間トイレもいつていられないわけですね！」

あんだけたつぶんたつぶんに飲んだ紅茶はどうに消えたんでしょうね！ まさに人体の神秘！

神官様はこの話には動じることなく、

「以前お話しした、生理現象が押さえられるように変化しているせいもあると思いますよ。長く戦える体になつているはずです」と仰る。そうですが、凄いですね！ ぐらいしか言えません。

そもそも、元々ただの町民です。そんなに戦いませんし戦えませんよ！ 私はお枝様運搬要員ですからそこんところ口口シクです。どんどん会話を重ねるにつけ、メイドさんのガツカリ具合がちょっとずつ増しているのがとても気になります。神秘の神子（笑）としての登場だけど、『ご飯やらトイレやらの話ですかね！

庶民というか乙女どころじやない、生活臭漂う話ですよね。ゴメンねー。だがこの話題は譲れない！ 人間として譲れぬ……！

多分私以外のお一人はドリーム・ザ・アイドルぐらいの勢いでト イレ行かないかもしないですかね、夢は破れてないと思うよ！ 私に期待するなと言つことだ。メイドさん頑張れ。心の中で応援するよ！

そういうふじで、そういうや、と思い出した事がある。

「神官様が治療されていた方は大丈夫でしたか？ 結構大怪我だったと思いませんけど」

倒れる前に、私はそのことを気にしていたハズ。

神官様は、じつと私を見る。田が笑つてませんよおお！ 美人さんの威圧は怖いって！

「どうして、そのようなことをお尋ねになるのですか？」

笑顔なのに笑顔じゃない顔に、私は何かを間違えたのかビクッ とする。

「ちょっと気になつただけなんで！ ちょっとですよ！」

両手をぶんぶんと振ると、それだけで疲れました。寝たきりの筋力 の落ち具合半端ないです。運動嫌いなのに、更に鍛えるとか考えられません。

「……私が怪我人を治療していたことを、なぜご存じなのですか？ あの状況で勇者が伝えるとは思えませんが」

え？ そうだっけ？

私は首を傾げて神官様を見た。どこで知ったか、覚えがない。何でそんなことを知ってるんだろう？ 我ながら謎かもです。

「あの怪我人は、私の力だけではなく何かの力によつて癒されました」

何かつてなんだ。よくわかんないけど、とりあえず、「よかつたですね」

と言つておく。誰かが助かつた、つて言つことだけでも凄いと思つんだ。神官様はまたじつと私を見ます。

見ても何もでないよ… 油汗ぐらいだよ…

「あの時、あなたは何かをしましたか？」

神官様が小首を傾げながらさりと仰るので、私は、「あ、はい。しました」

あつたりと容疑を認めました。町民から容疑者ですよ… やつたね！ いや、格下げですが。

「具体的に何をしましたか？」

にわかに取調室の様子になつてきました。この犯人席は中途半端なく辛い感じです。なんでも自由しちゃうよ… やつてないこととか。「左手に貰つたお守りにお願いしました」

あれはお願いだつたよなあ、と考えながら手の甲を見る。もちろん、もう何もない。神官様はとても不思議そつだつた。

「お願いですか？」

「そうです。ピンクまみれだつたので、祓えないかな、と思つたんです」

だつて先も見えないピンクでしたから！ とんでもムードでした

！ 先は見えないし魔物は出るしませんに最悪。

「先日瘴気を祓つたのと同じ呪文で、あるべきものを見るべき姿に戻してくださいと左手の葉っぱ様にお願いしました！」

「……そうですか？」

神官様はとうとう考え込んでしまいました。

「何かあつたんですか？」

さすがに気になつて聞いてみると、私の術で何か悪いことが起つたんですか！ 誰かがうつかり召されちゃつたとか、恐ろしい話

題じゃないだろうな。笑えません。

神官様は苦笑しながら、

「恐らく推測ですが、その星術がかなりの効果を示したようだと前置きをしてからお話してくださいました。

どうやら私が使った葉っぱ様の効果はかなり広かつたらしく、瘴気を吹き飛ばしただけではなく魔物にはダメージを、怪我人には治療の後押しをしたらしい。

つまり魔物を元の瘴気に戻す効果と瘴気を消す効果、あと人体をあるべき形に戻す効果があらわれたとか。人体どころか、しおれていた花まで生き生きとなつたそうな。それはぶっちゃけ言いすぎだと思いますが！ 全くそんなことを考えて使つたとかの覚えはありません。

で、そんな星術を使つた犯人（なのか？）が、どう考えても廊下で行き倒れていた私しかいなかつたわけで。現在、お屋敷や街の方で神子様万歳ムードが広がつてゐるらしい。今までのあらすじだそうです。

あいた口が塞がりませんでした。まさに超展開。

待つて、ちょっと待つて！ そこは勇者様万歳だろー！ 私じゃないよ！ どうか神子（笑）万歳とか！

……いやだああああ！！！！！

外に、外に出たくない！！！

絶対何か勘違いしているッ！ 私はピンクがいやだつたから使つただけで、実際何かをしたのはお枝様だと思うよおお！

本氣で泣きが入つた私に、神官様は、

「元気を出してください。ご飯持つてきますから」

と慰めてくださった。

どうやら私の操縦法を覚えられたようです。

「飯は食べるナビね！」

神子、観察されたくない

満を持して、『ご飯の時間です！ テンション駄々上がりですよ！』
私に食事を与えて、神官様は診察にお出かけになりました。
食べ物を与えていればいいと思われているんですね。くつ……心
外な！ でもおおむね正解です。

『ご飯は病人食っぽかっただけど、大変おいしゅうございました。ミルクで炊いたおかゆだつて！ 高級品のミルクをこんなに贅沢に使うとは……セレブめ！ 上にちょっと掛けられたチーズの風味とあいまつて、絶品でございました。これはただのおかゆではない！ おかげ様ですね！ 崇め奉れるレベル。口に含んだ時にふんわりと広がる甘みと、一緒に炊いたほっくりした豆の風味が広がって、顔が崩れましたとも。

こんなご飯を六食……六食……飛ばしたなんて……。本気で泣いていいですか？ 多分領主様の恰幅のよさはこの『ご飯のせいだらうね。美味しいから食べ過ぎるんですよ。

危うくメイドさんによる「あーん」が実行されようとしたが、これも笑顔で流すことが出来ました！ こ、これは拒否してもいいんだよね？ だって、おかゆをフーフーされて、更にあーんつて恥ずかしすぎると思うよ。まさにウフファハハな状態じゃないですか。何の拷問ですか。食事時間が一瞬にして拷問に変わると言つ恐ろしさを味わいましたとも。一口一口を味わう私を見るメイドさんの視線がなんだかとっても暖かい眼差しなのはなんとかは分からぬけど。

あと、お風呂の希望も通りました！ 思つたとおりお手伝いします発言がきました。だが……断固拒否するッ！ 手伝いは大丈夫ですよとお断りしたところ、何でそんなに残念そなんですかメイド

さん。私はそんな変な趣味は無いよ！ 今準備中のことと、待っています。あ、そうですよね、昼間つから、お風呂用意なんてしませんよね。『ごめんなさい』。

メイドさんはやたら明るい人だつた。ほつてりした唇が特徴的な人だ。やつと私に慣れたのか、それとも私が慣れたのか話してくれる。もうさつきの神官様との会話を聞かれてるので、私にとつて恐れる事は何もないッ。

「神子様のお好みの料理などありますか？」

「何でもいけます」

食べられるものだつたら、だいたい美味しいだけれど、優秀な味覚と鋼鉄のお腹を持つています。

「では、アメなどいかがですか」

何故アメ。棒に刺さつたアメを貰いました。本當になんでだ。賄賂じやないよ！ 貰つたものはすぐにいただく。あめをぺろぺろ舐めながらメイドさんと色々話します。

「お客様がいらっしゃるのが久しぶりですので、張り切つてしまつて」

どこまで接客するかというラインが微妙らしい。それを言ひながら、私はいたつて残念な客だと思われます。

「基本、放置でいいですよ」

大体の事は出来るし。そういうてみたものの、逆にプロ根性に火をつけてしまつたらしい。適当で、いいですよー。

喉が渴いたなつて思つたら差し出されるお茶……こんな生活に慣れたら大変です。私の資産じゃメイドさん一時間も雇えないよ！

「こんなに可愛らしい神子様のお世話が出来て、幸せです」

ウフフと笑うメイドさん。そんなリップサービスまではいいですよ。平凡顔なのは自覚してます。私の微妙な反応に気付いたのか、メイドさんが言葉を付け加えました。

「『飯をほおばって、もじもじ』されているのがとてもかわいらしく

「いざります」

そこ？！ そこに注目なんですかッ！ まさかの愛玩動物的な扱いでした。ならまあいいか。だからアメをくれたんですね。さつきから舐めながら会話をしています。これはこれで美味しい。最後のあたりを噛み碎くか、それが問題だ。棒にへばりついた残りを見ながら熟考していると、ノックが聞こえました。メイドさんが応対します。声が聞こえる。あ、勇者様だ。

そういうえばもう一つ、どうしても気になっていたことがある。幸い、部屋履きはベッドの横で発見する。私は寝台から下り、ドアのほうへ向かった。ちょっと広い部屋なのでベッドはドアの死角にある。病人扱いだけど、怪我も病氣もしていないので普通に歩ける。メイドさんはまだ私の調子が戻っていないので、後にして欲しいと伝えていた様子。別にいいですよ、と主張しようと思つて、ひょっこり顔を出し、

「勇者様、お怪我はなかつたですか？」
と聞いた。

メイドさんと勇者様が一瞬固まつた。えつ、別に何の衝撃映像もありませんよ？ 沈黙は一秒ぐらいでした。勇者様が、「そんな格好で出ではいけません」

と言つた。メイドさんもそだそだばかりに頷く。えー、ただの寝巻きなのに。私の無言の抗議は取り合われませんでした。残念な胸元も、足も出でないんですが……あ、足はふくらはぎぐらいからは出てた。メイドさんと勇者様は目線で結託したのか、

「また後ほど」

とドアを閉められてしまいました。あつ、聞きたいことがあるんですが。追いかけよつとした私の肩を、メイドさんがガツと掴む。

「着替えましょうね、神子様」

メイドさんの迫力に、すばやく頷きました。目が怖いです。

今思い出した。マナー講座のメガネ女史が寝巻きで出るのは恥ず

かしいことだとチラツと言つてた。失敗ですね！ 概ねひとり暮らしだつたし、訪問してくる人なんていないのであんまり自分の格好に氣を使つたことはない。部屋を出るときに着替える、ぐらいの気持ちだつたんだよね。正直、面倒です……でもメイドさんが怖いので口に出せやしないよ！ あ、でもちょっと待つて、あめを食べてしますから！

着替えて、ようやくドアを開けることを許されました。

大人しく待つててくださった様子。お待たせして申し訳ないです。文句を言わない勇者様。やはりできるツ！ 紳士だ！ 神官様は、診察をかねていたようだつたから余り気にしていなかつたのかも。メイドさんがお茶を用意してくれる。また、この間のようटーブルに着いて話します。一人なので向かい合わせですよ。今度は紅茶を飲み過ぎないからねつ！ 今更ですが、あのときは人払いをしていたんだろう。

少し外して欲しい、と言つ勇者様に従い、メイドさんは席を外した。

「この一日間のことについて、聞いたか？」

聞きたくない神子万歳については聞きましたよ！ 現実逃避したくなるね！

私のぬるい笑顔に勇者様は訝しげな様子をしながら、別方面の話をしてくださいました。

この魔物発生事件の顛末でした。

あの魔物は、前領主様のペットだつたとか。普通の動物だと思つて飼われていたものが脱走したらしいです。

あんなに凶暴な動物を飼おうと言つ氣分が分からない！

瘴気が広がつていたのは、おそらく餌として与えていたのも魔物だつたのではないだろうかと。魔物だと知らないまま商人たちも捕まえてきていたみたい。魔物が魔物を殺して、その瘴気が溜まりま

くつたらしい。どれだけ気付かないんですか！　死体が残らないの、おかしいと思わないのか。それもそのはず、徐々に屋敷の人の精神を瘴気が侵食していったみたい。魔物の部屋が一番瘴気が濃かつたのか、いるだけでだんだん頭がぼんやりしてきたと証言があつたとか。人の欲望を抑えれなくする瘴気の効果、工口屋敷はその表れらしいですよ。あ、ただの趣味じやなかつたんだ。

私の術のおかげ（？）で、そのあたりの歪みも修正されたとか。全く自覚はないけどね！　現在は工口屋敷の家具を撤去しているらしい。へー、でも撤去してあれをどこにしまうんだ。蔵とかに押し込めて、あんな裸の像ばかりある蔵とか行きたくないですよ！　想像しただけで怖いです。薄暗がりの中、林立する工口彫像とか。今は屋敷の工事中だそうです。私が目覚めて体調を見て今後の予定を決める、という話だった。

話がひと段落ついたところで、私はどうしても気になっていたことを思い出しました。

「で、勇者様の怪我はどうなったんですか？」

あつ、目を逸らした。

今日は問い合わせるよ。時間はありますしね！

神子、怪我について話す

大体この話題を出すのは、抜き差しならない状況の時ばかりだった。

実際に勇者様が怪我しているな、と思つて聞いたらはぐらかされた、みたいな。

今まで色々スルーしていたけど、聞きたいことを一つずつ潰していこうかと決心しました。たつた今、決心したところだけど… そういえば「コピンするのを忘れていました。イラつとしたときにしょりと思つてたんだよね。今はさすがに出来ません。

恐らく相手が神官様だつたら、こうした話題はうやむやなままに話題をすらされてごまかされるんだろうな。短い付き合いで身に染みました。うすうす思つていたけれど、神官様はボケとボケ殺しの素質があると思うのです。そのせいで、会話が迷走してどこまでが意図的なごまかしなのか分からなくなる！ 恐ろしい人！

その点、勇者様は言葉数少ないと言つが、あまりごまかしさしない。元々交渉役を神官様に丸投げしているし、大体聞き役に徹してゐるよね。領主様相手の聞き役つぶりはプロの領域でした。見習うべき。多分お二人は昔からこうやって役割分担をしてきたんだろう。二人が幼馴染だと聞いて、更に確信を得たよ。

勇者様は、基本姿勢聞き役、用事がない限り話を自分から展開しない。無表情のせいで、いまいちこの人の距離感が掴めません。でも、言いたくないことは言わない人だと思つので、聞ける限りは聞いていこうと思います！

質問タイムスタートッ。

「で、怪我はどうなったんですか？」

私は二口一 口しながらもう一度言いました。重要事項ですよ。私が倒れる前、勇者様が凄い怪我を負っていた記憶がある。でも神官様が治療していたのを知っているのと同じぐらい確証はあるのに、それを見た記憶はないんだ。だからこのあたりは伏せて質問しました。ちょっとと知的じやないですかつ。「ごめんなさい、調子に乗りました。

「治った」

勇者様、ぶつ切りの返答です。

これは質問に対してはある程度は答えてくれるってことですね！ 分かりました。ポジティブに捉えますよ！ 前を向いて進むよ！ 足元の石につまずいてこけるのがオチだらつとしても！

「こつも怪我はすぐに治るんですか？」

「……ああ」

「怪我をしたときは痛いですか？」

「……ああ」

会話の神様、助けて……！ これは先程の神官様の取調べ状態になつてきました！ 尋問じゃないんだから！ 勇者様は手元のカップをじつと見てています。何か考えている様子。

ああ、空気が暗い。私はぐいっと紅茶を飲み干しました。ぬるくなつて丁度いい感じです。カップを置きながら、

「つまり、すぐ治るけど、怪我をしたときは痛いんですね？」

と再確認。

このときようやく勇者様が顔を上げました。私が一体何を意図して質問をしているのか、不思議そうな表情です。ちょっとだけ表情が読み取れました。私を誉めてつ。

「そうだな」

「痛いなら、あまり無理をしないでくださいね。心配しますからー。」
とりあえず、私が聞きたいといひました。だから、ちゃん
と自分の意見を伝えてみた。

「私なら痛いことは耐えられない。針で指を指しただけでも涙目で
すよー。足の上に本を落としたとかも地味にくる。紙で指を切つた
ときとか、寒い日に唇が切れたときとか。小さい怪我だけど、痛い
つて！

つまり、痛みに全く耐性がない私にとって、血をだらだら流して
いるのにすぐ治るから大丈夫だという勇者様が信じられない。

「治るのと、痛いのは、別だと思つんですよー。つまり、『飯がな
くてお腹が空くのと、』『飯がまづいのは別問題なのだ！』喻えがよ
く分からぬ？ 失礼しました。

「すぐ治るのに？」

心の底から不思議そうな勇者様に、私は大きく首を振りました。
「すぐ治ると、痛いのと、私が心配するのは別です！ 怪我をす
るから心配する、そこが重要なのですー。」

「どーん。

言い切つた！ 勇者様はしばらく目線を彷徨わせた。どう見ても、
私の言葉をいまいち飲み込めていない様子ですよ。この無表情を見
ていたら、ほっぺを両側からつまんでぐいぐい引っ張りたくなりま
した。

「なら、避けきれない以外、怪我をしないようにすればいいのか？」
出てきた結論は、思った以上に斜め上でしたよー。

「普通怪我を避けることを第一にしますよねっ」「面倒だ」

つまり、避けられる怪我も避けずに突進していたのですか！

「それでいる……！ この人想像以上にずれている……！ 神官様ー！ 神官様ー！ 幼馴染が変なこといつてますよー！ タスケテー！」

私もどつからつこんだらいいか分からなくなってきた！

「怪我をしたほうが動きが鈍るでしょう

「すぐに治る。それよりも戦闘を速く終わらせた方が効率的だろ？」「話が何か違うー。

私は頭を抱えてテーブルに突っ伏した。どういえば伝わるのか。頭を抱えながらつめくように言いました。

「えーと、つまり、うーん、怪我しないでください。見てるほうが痛いんで」

私も大概つまいこと言えません。

「……血が苦手だと言っていたな」

勇者様は何かを思い出したようです。そんなこと言つたつけ？

言つてたんだろ？！ 自分では忘れてているけど。過去の自分グッジョブ。

「そうです！ だから流血沙汰はカンベンしてください。なるべく怪我は避けて！」

勇者様の中で何かが納得できた様子。頷きながら、

「それなら仕方ない」と仰いました。

避けるのが面倒なことより、私に血を見せないことが優先されるつて、何か変。

自分より他人をあつさり優先させすぎじゃないかな。勇者様って、自分のことには基本無頓着だけど、人の意見は簡単に受け入れるみたい。

あー。さっきからずっと覚えていた違和感の正体が分かりました！

勇者様は「自分」が痛いとかはどうでもよいといった雰囲気なんですね。でも、生物としては痛みって重要じゃないのかな！ 怪我をしてるよ！ っていう体の悲鳴が痛みなんであって、それに慣れると辛いことじゃないのかな。

勝手に私が感傷的に思っているだけなのかも。実はありがた迷惑かも？ 頸をテーブルに載せた状態でうめいた。実はまだ突っ伏してままです。

べちょっとなった感じの私の頭に、何を思ったか勇者様の手が載せられる。

「……」

両者、無言です。

え、何で手を載せたんですか。しかも、ちょっと重いです。撫でるなら撫でる、叩くなら叩く！ どちらかにしてください！ 受けて立ちます……！ 私と勇者様はまた睨めっこタイムに入りました。私……負けないつ！

その時、ノック無しにドアが開きました。む、一応、乙女の部屋ですよ！

「……何をしているんですか」

呆れた風の突っ込みに、勇者様は普通に、私は目線だけで振り向いた。神官様のお帰りです。お帰りなさい。

王子、頭は痛くない

この状況に、神官様が動いたッ！

何故か勇者様にツカツカ歩みより、おもむろにその頭をぐしゃぐしゃに撫でました。小さい子にお父さんがよーしょーしと撫でるぐらいの勢いです。

な、何でだ！

勇者様も私も目を丸くして神官様を見上げます。何が起こったのか飲み込めません！

神官様は思う存分勇者様の髪をかき回したあと、満足そうに頷かれました。

「これぐらいの力具合でしょう」

な、なにがですか！

勇者様、思い切り髪が乱れますよ。触り心地がよさそうな髪だなあ。今度私もかき回して見たいのです。ちょっとひらひらましいです。身長差がありすぎて、無謀な戦いですがね！

撫でられまくった勇者様はといふと、棒を飲み込んだような表情になりました。髪を直すということを忘れ果てている。

私も固まつたけど、勇者様の衝撃も凄かつたんだろうねー。そりやあああ。うん、同情します。勇者様頑張れ！ 無責任な声援を中心で送つてみた。

神官様は、彫像と化した勇者様を放置し、私に笑顔を向けられました。

「恐らく頭を撫でようとしたところ、力の入れ具合が分からなくなつて固まつたと思われます。またの機会がありましたら、大人しく撫でられてやつてくださいね」

すらすらと仰る神官様。勇者様の行動について、解説ありがとうございます！

はあ、そうですか。ん？……いや、そうですかではすまないよ！ 頭を撫でようとしたかどうかは分からぬじやないですか！

問題の勇者様の反応はつゝと田を上げて見てみたといふ、遠い田をなさつていきました。当たつたのか、当たつていなかどつちですか！ この問題はぜひ白黒つけていただきたいッ。

とりあえず、頭から手を退けていただけませんか？ 重いです。さては「」に手袋のせい？ 脱いでくれたらちょっとはましかも。わざやかな重量ですが。

「お茶がありませんね。お代わりはいかがですか？」

神官様のゆるぎなさは筋金入りだと思います。この混沌とした状態で、私のカップが空なのに気付いたみたい。妙に迫力がある問いかけに、私は頷くしかない。といつても頭の上の手が邪魔で、言葉だけですが。

「いただきます！」

お腹たぷたぷフラグが立ちました！ わつき飲み過ぎないと誓つたのにね！ 神官様のお酌上手！

私のカップにたつぶりと紅茶が注ぎ込まれます。はつゝ謹んで飲ませて戴きます。

ポットの中のお茶を注ぎきつた神官様は、それを勇者様に普通に渡しました。

ようやく私の頭の上から手が退けられます。勇者様はまだ頭が戻つてきていなうです。両手でポットを抱え込みました。

「ちょっとひとつ走り、お湯をとつてきていただけませんか？」

まさかのパシリ！

有無を言わさないってのは、ソレソレことか！ 学習いたしました。

勇者様はようよりしながら席を立ち、ポットを丁寧に持つたまま退室しました。多分、メイドさんにお願いするとか、そのあたりは全く頭から抜け落ちているんだと思ひ。背中が妙に哀愁が漂っていました。

扉がきつちり閉まつたのを見届け、神官様は私に向き直りました。

「さて。お話をしましようか」

「何の話ですか！ うろたえますよ！」

「先程、勇者に怪我の話をされていましたか？」

「どこから聞いていたんですか？」

そんなに大声で話をしていましたよー。テーブルでつぶれていたのが思わず跳ね起きてしまうほどショックだよ。顎の当たり赤くなつてないか心配です。

「入れない雰囲気でしたので、機を窺っていました」

苦笑をしながら神官様は続けた。

「私も常々、あの戦い方はどうかと思っていたところですので、助かりました」

付き合いの長い神官様だつたら、もつとひどい怪我も見ているはずだ。だからこそ私は不思議だった。

「神官様は、勇者様に何も言わなかつたんですね？」

神官様の眸にふつと蔭のようなものが過ぎつた。

「彼を勇者にしてしまつた原因の一つを私が担つていいので、私が言つたところで白々しい話になるのです。この道に引きずり込んだ私が、怪我をするなど主張する。とんだお笑い種じゃないですか」

蔭の名前は罪悪感だ。それはさすがに分かつた。なんだか踏み込んだではない部分なのかもしれない。空気がどんどんよじてきましたよ！

「ともかく」

神官様は翳りを消していつもの笑顔に戻られました。

「ありがとうございます」

神官様にお礼を言われたけれど、それは筋違いですよ。

「私は好き勝手言つただけですし」

しかも、結局勇者様が納得した理由が私が前に言つたはずの「血を見たくない」っていう言葉だし。本人忘れていました。罪悪感がちくちくと来ます。

「お礼ぐらい言わせてください。……まあ、ともかく、勇者は元々人を避けがちな所があるので、貴女と触れ合つことで少しでもましになればとは思います」

そうですね頭を撫でようとして固まる人だ。
どんな生活を送ってきたんだ勇者様。

神子、過去の事は振り返らない

昔の話をしましょ、と神官様。

「……勇者として選定を受ける前の話です。彼が戻ってくるまで、簡単にお話しますね」

お一人は山奥の小さな村で育つたそうです。これはちょっと聞きました。で、その中でも一人とも浮いた存在だつたらしい。容姿的な意味でかと思ひきや、性格や行動的な意味でだつた。

勇者様は無口で人の輪から外れていたそう。唯一の家族のお母さんとも余り触れ合わない。

神官様は知りたがりのひ弱な子供で、一日中不思議に思ったことを大人たちに質問しまくるから、だんだん面倒な子供だと放置されるようになった。あんまりあの頃は私は気にしていませんでしたが、と神官様は軽く笑う。

この話は、ちゃんと聞かなければいけない話だ。私は背筋を伸ばして、神官様の言葉を逃さないように聞く。

毎日無言で狩をする勇者様の後について、神官様は一緒に罠を作つたりいろんなことを喋つっていたそうです。

選定を受ける前から、実は勇者様の回復力、運動神経や力は突出していた。けど、狭い村社会で異質なものは弾かれてしまうので、それをひた隠しにしてたとのこと。まあ一人とも放置されていたから逆に気付かれなかつたんでしょうね、と神官様は苦笑していました。

そして、後から知つたことですがと前に置き、勇者は母親から怯

えられていたようです、と神官様は告げた。……お母さんに？ 私

の掌がじわりと汗を浮かべます。これは、本当に聞いていい話なの？

「思い返せば、彼女も必死だったのでしょうか？」

と淡々と話す神官様。その声には何の感情もない。

狭い村で小さな子供を抱えてひとり暮らす辛さ。そこそこ豊かな街の中で、のんびり自分で生活するのとはまた全然違う苦しさなんだろうな。でも、それは想像でしかない。私はその辛さを想像したけれど、実感としては分からなかつた。

苦しい暮らしは人の心を容易に折る。

「私も欠片しか聞いた事がないのですが」

勇者様のお母さんは、つねづね勇者様に言い聞かせていたらしい。

力を隠すこと。そしてみんなの役に立つこと。みんなの役に立つなら、あんたは人間として生きていける。

小さかつた勇者様は、それにすがって生きるしかなかつた。役に立たないなら、人間じゃなくなつてしまふ信じていたふしがあるそうだ。さすがにそれは神官様が違うと主張して、一応は受け入れたらしきれども。

その後も勇者様は村のみんなの手伝いをしながら、おこぼれに預かりながら生きていった。ある程度体が育つと、狩や耕作の範囲が広がり、生活が少しだけ楽になつた。けれども、既にそのときはお母さんは病で亡くなつていたそうだ。

「その頃、私は勉強のために星都にいたので、詳しい事情は分かりませんが。もし先程の怪我の話に違和感があつたなら、それは彼が昔から擦り込まれた考え方にあるんだと思いますよ。自分のことを、まず人間の数に入れていない」

それが勇者の選定を受け、力と治癒力が増し、更に顕著になった。神官様は溜息をついて話を締めくくつた。室内に暗い雰囲気が満ちる。

理由は分かつた。

あと、本人が何も言わない理由もなんとなく分かつた。
私はこの話を聞いたからといって、実際勇者様の考えを変えてしまうことが出来るなんて思わない。小さい頃の癖が大人になつても抜けないよう、よっぽどのことがないとそんなことは起こらないと思う。

だから、この話を聞いても、そつかあ、と思うけど、それ以外は考えない。

勇者様に同情するなんて、そんなことを私が考えるだけでも失礼だと思う。だつて、その頃の勇者様の苦労は私には分からない。甘い考えしかない、ぬるい世間しか知らないただの町民、小娘です。その上で、できることを考えてみた。

「はい、神官様！ 発言よろしいですか！」

「どうぞ、神子殿。発言を許します」

ノリに乗つてくださいました。

私は胸を張つて主張する。握りこぶしを振り回しながら。

「あれですね、ぜひ勇者様はもう少しづがままになつていただいた上で、生きている実感と幸せを味わうべきだと思うんですが！」

エキサイトする私。いい考え方だと思うんだ！ これまでの事は変えられません。そんな考えを持っていることも仕方ない。なら、幸せになるしかない。ハッピーになれば人生薔薇色ですよ！

椅子からがたつと立ち上がり、

「これから勇者様を幸せにするために、色々作戦を練りたいんです
が！」

と熱く畳み掛けました。神官様はそれはいいですね、と笑顔を見せ
てくださいました。

と、またノック無しでドアがこのタイミングで開きました。
気まずそうな勇者様が立っています。何故かその手にはポットの
ほかにお菓子っぽいものが載った皿がありますよ。

私は立ち上がったまま、握りこぶしを振り回していた途中です。
どう考へても、さつきの主張は聞かれていると思います。

うん、気ますい。

神子、しあわせについて考える

最初に動いたのは勇者様だった。手に持つたものを私に見せてくれる。

「メイドたちから神子に、だそうだ」

むつ……！ 焼きたての焼き菓子ですね！ なんと！ バターの匂いがなんとも香ばしいです。この甘い香りにうつとりしてしまいますよ。ガン見してしまいます。熱い視線の先はお皿。これまた高级そうなお皿ですね！ 金縁とか。割つたら怖そうだよ。

無意識に焼き菓子の数を数え始める。十二個か。つまり一人当たり四個食べられますね！ こういった計算力はあります。超素早いです。

勇者様が私の前にお皿を「トント」と置きました。

え、いいの？ 私が先に食べていいの？

じつと皿を眺めて、勇者様を見上げました。これほど真剣にアイコンタクトをとったのは初めてです。

勇者様が頷く。

やつたああ！ 私は思わず笑みを浮かべました。
手にとつて焼き菓子を観察します。

できただけです！ ほっくりと割ると黄金の断面からふんわりと湯気がつ。あつあつですね。更にこの美しい黄金の輝きは、卵たっぷり！ 鼻をくすぐる上質な香り付けのお酒の匂いがします。これもまたアクセントですね。エクセレントですね……！

私は一口食べながら幸せの旅に行きました。

お菓子つて、ほんとー、癒されますよね。あー、癒された。

とりあえず一つ食べきつて目線を上げると、机に突つ伏して震えて笑う神官様と、何もなかつたように座る勇者様がいらっしゃいました。

何で笑ってるんですか？

なんだか予想がつくけど敢えてそこはつっこまないよ！ ツツコミどころを心得ている町民です。えーわかんなーいつてカマトトぶらるのがポリシーです。カマトトってなにって？ 可憐な乙女つぶりを装つ何かですよ。つまり私に近いけど遠い何か。私はむき出しの町民で人生にチャレンジしています。あくまで自然体をコンセプトに生きています。

……何の話だつて？ 失礼しました。だつてまだ神官様笑つてるんだもん、横でもじもじするのも限界があります。思考が爆走しても仕方ないよね。

ひとしきり笑つた後、あー、と神官様は満足そうなため息をつきながら、

「貴女の思考は、何に気を取られているかかなり分かりやすいんですけど、飛びすぎですね」

と言つ。んん、そういうえば何の話をしていたつけ。と思い出して、私は固まる。

ああ、そうだ、色々気まずい状況ではなかつたですかっ！

思いつきり、忘れてました。お菓子様は偉大すぎる！
でも今更気まずいなんて言えない。それこそ気まずすぎる……！
どうしようもない状態ですよつ。

私はさらっと流そうとしました。

が、ここでフォローをしてくださいるのが神官様だ。どんな事態でもおもねらない。さすがです。半端ない。

「で、何か遠大な計画でも？」

につこり笑つて問い合わせるその姿はまさに星職者でござりますね！ 神々しいばかりです。でもその話は本人がいたら氣まずいこと限りなし、だよ！ ちょっと横において熟成させることが必要です。後でこつそりと話すべきです。

「とりあえず、お菓子でもどうぞ。とても美味しかったですよ！」
敢えてスルーをしてぐづとお菓子のお皿を渡す。
ついでにもう一個取り、はむつと口に含む。ふわっと広がる幸せの味に、ああ、幸せってこんな香りをしていたんだなあとしみじみ笑みがこぼれる。

「貴女は幸せそうに食べますよね」

神官様は微妙な笑みを浮かべながらそう仰る。何かのツボだつたのか、笑いを堪えている様子。わ、忘れてるわけじゃないですよ！

食べるところに集中する、それが食事の作法だよ。

「神官様、それは違いますよ！」

私はあえての否定を口にした。否定つて、ぐづと注意をひきつけられるよね。ちょっと知的な会話術ですよ！

「食べ物が美味しいのがいけないので！ そう、私を幸せにする食べ物が罪作りなんですよ……！」

心からの主張です！ 食べ物恐るべし。怖いよねっ。

神官様はどうとう耐え切れなくなつたのか、吹いた。乙女の主張で笑うなんて、失礼ですよ！ 美人台無しです。

言い切つたあとに私はじつとりと勇者様を見詰める。我関せずと言つた感じで、ぼんやり窓の外を見ている様子。私の注意をお菓子に向けさせて、その隙に空気になる……おそろしい策ですね！ まんまと嵌められました。

幸せかあ。

このひとにとつての幸せってなんだろう。

私の幸せの形はとても単純だ。お菓子だったり、ちょっとあつたかい日だったり、こんな他愛もない会話だったり。かなり安上がりで庶民的に出来ていると思う。別に浴びるほどお金がなくても、世界征服しなくとも、幸せ。

じゃあ逆に勇者様の幸せってなんだろうな？

ひとにとつて、それはいろんな形をしていると思う。十人いたら全部返事が違うんじゃないかな？

平穀、財力、権力、それとも恋愛？ 幸せを感じるきっかけもいっぱいある。

でもこのひとに正面から聞いてもまともに返事がありそうな気がしない。

そもそも、笑ったのを見たことがない。困惑や驚きはたまに見るから、完全に感情がないというわけでもないと思う。色々あって心を殺しがちなのかもしれないけど、観察していたら分かるようになつてきたし！

そのうち、好きな食べ物でも地味に探つていこう。

恐らく長い付き合いになりそうですね。つまり、考えることを明日以降に丸無げしました！ だって思いつかないんだもん。そのうち何とかなればいいなあ！

それにしても、この旅の終着点は一体どこなんだろう？

赤の大神官、本を書く

(その冊子につづりれているのは、幼い子供が手習いで書いたような文字だ。

簡単に言えば字が汚い。

よことこを上げて言つなら、一文字一文字丁寧に書いつとしている努力は分かる。

インクの付け過ぎでにじみが酷い。

紙がそれほど高級なものではなく、纖維が荒いため、ペンをよく引っ掛けてしまったのだろう。

ところどころ、インクの飛沫を散らせている。

その冊子と言つよりは紙束に近いそれは、星櫻の横に隠しておいてある。

星原樹の能力か、紙が劣化する事は無い。

これが置かれてのち、筆者の願い通り三人の大神官が手に取つた(

未来の、大しんかんさまへ

はじめまして、わたしは、あかの勇者様をせんべつした、大しんかんです。

わたしは、初めてのにんげんの大しんかんでした。

わたしが始めてだから、いろいろよく分からぬことがあります。わたしもこもったので、次のあなたのために、書いておきます。はじめのひとつは、次のあなたも、にんげんだらうつていつてました。だから書きます。

星語なら、ふつうに書けるのですが、共通げんじはむずかしいです。五ばいは、むずかしいです。

ほかのひとに、見せたらいけないので、教えてもらえないから、ぶんしようがおかしかつたら、『ごめんなさい。

ちゅうい！ 大しんかんのあなた以外にみせたら、まおうの呪がはつどうするかも、だから、大しんかん以外には、みせないでください。とっても、大事な、おねがいです。ぜつたいです。

あと、文字が汚かつたら、『ごめんなさい。

わたしは、星別者名せいべっしゃでは、【2/Dsnekne】、といいます。

「Jの名前が、わたしの名前です。勇者様は色がつくそうです。いいなあとおもいました。

あなたは、どんな名前でしたか？

でも、このノートをよむまえに、あなたもたぶん、わたしとおんなじに名前をなくしてしまっていると思います。わたしは、ちょっとびりさびしいきもちになりました。

あなたはどうですか？

いちど、星の中に書き込まれてしまつた韻律なので、わたしたちの名前は、もうもどつてこないです。星語がわたしたちの名前にな

つてしまっています。

知らなかつたなら、『ごめんなさい』。

わたしは、知らなかつたから、勇者様に教えてもらつていつぱい泣いてしまいました。

「じどもがきらい」と言つていた勇者様がちょっとびりやさしかつたです。あかの勇者様は、あなたのころは、どんなふうに話されていましたか？ わるいひょうばんが、いっぱい山もりあるひとですが、いひひとですよ。信じてくださいね。

ええつと、初めに大しんかんのやくわりについて、かきます。しつていたら、『ごめんなさい』。

大しんかんは、星神様のことばをつたえることができます。

でも、星神様は、全部は、おしえてくださいません。
にんげんが、きちんと、学ばなければいけないことは、言わない
そうです。

わたしたちは、星神様とおはなしはできません。

大しんかんは、いっぽうてきにいただいたおことばを、ただ伝えるだけです。

でも、どうしても、星神様に聞きたいことがあつたら、うらわざがあります。

星原樹のあるところだつたら、大しんかんとして、星神様におうかがいを立てることが出来ます。でも、だいしようが大きいです。星神様のことばをつたえるときの、二十倍はかぐじなくては、いけません。

それでも、大しんかんのことばは、ふつつのひとりより、ちょっとびり星神様に届きやすいぐらいで、あまり効果はありません。

星神様は、世界を全部みてくださつていますから、大しんかんの祈りは小さすぎて、届かないのだそうです。わたしのしんちょうが、

小さいのとはかんけいないですよ。

わたしたち、大しんかんは、星神様の「声」をあずかります。

星語を正確によみあげられる力と、韻律がきちんと実行できます。あと、神様のことばをあずかることができ。でも、あくまで一時的です。

いっぱい、神様がおしゃべりしたら、わたしたちのからだがもちません。たましいの、大きさがちがうから、神様にあっぱくされて、わたしたちのたましいが、けずられてしまってそうです。わたしは、勇者様の力になりたくて、いっぱい神様とお話しもらいました。でも、そのせいで、わたしはうすっぺらになっちゃつたので、おなじぐらい、いっぱいおこられました。あなたも、気をつけてください。わたしたちのたましいは、とっても、ちっぽけです。あつというまに、なくなってしまいますよ。

次に、星別者のしゅるいについてかきます。

勇者様は、星神様の「手足」です。きょうじの再生のうりょくと、戦う力をあたえられた、神様の兵士です。ひとつ、神様のまんなかで、生きる苦しみにあえぎながら、たたかう兵士です。

聖剣は、氣をつけてくださいね。星神様が、作ったものでは、ないのです。だから、聖剣といいます。星剣は、なくなってしまつたとききました。聖剣は、とてもとても大きな力ですが、大きなだいしょうがいります。あまり、つかわないほうが、いいです。勇者様の、存在値をうばいとする剣です。あぶないです。

勇者様は、しおりが発生したら、出ます。しおりが発生したら、まものが増えます。だから、星神様が、勇者様をせんていします。そのため、大しんかんが出てから、勇者様がせんていされます。これは、あまりのようなものだそうです。

勇者様がせんていされたら、さえてください。勇者様は大きな力をもつてゐるひとですが、にんげんです。

神様のしれんは、勇者様に与えられます。ひとの子の苦しみを、勇者様が受けれるやうです。でも、ひとりのひとが、苦しきのはふしきだなとわたしは思ひます。だから、あなたも勇者様をさせてあげてください。ひとりきりに、しないでくださいね。わたしは、さいじままで、

(「これからしばらへは水のあとでにじんで読み取れない）

ので、おねがいします。ほんとうに、おねがいします。

ほんとうに、星神様とつながつてこるひとは、神子といつそうです。尊といつ、とうといひとだそうです。つねに星神様とつながつてこることが出来るので、わたしたちとはちがつ手段で、星神様へ意思をつたえる事ができるそうですよ。

でも、めつたなことではこらつしゃらないやうです。星神様がわざとつくらなこと、ないやうです。はじめのひとがおしえてくれました。

まんがいち、あなたの時代に、神子がでたら、ちゅういしてください。星神様がにんげんをためしてこるといつことです。神子の日をとおして、星神様がみていらっしゃいます。

神子はよくみたら、わかるやうです？ どんなのか、やうやうができません。これもはじめのひとがおしえてくれました。はじめのひとも、まだみたことが、ないやうです。なのにしつているのは、ひとつも、ふしきです。神子は神様にいつもつながつてているひとだけ、神様とお話しごとにはできないだらうつていついていました。おはなしするのと、みるのを、そこまでいつしょくたにしたら、

いきもののはんいをじるやうです。ちよつともすかしい話で、わかりませんでした。

「これから、わたしの話です。ちよつびり、書かせてください。

大しんかんとして、わたしはいっぱいべんきょうしました。

みじかい旅だつたけれど、わたしはせいにいっぱい生きることが出来ました。神様といっぱいおはなしすぎる、わたしのたましいはペシャンこに近いそうです。だから、このノートを書いておきます。未来の大しんかんさん、あなたも、あまり、お話しすぎたら、だめですよ。

わたしはなんでもないと思つていたのですが、おねえさんが、いっぱい泣いてしまいました。いつもはこわい、せんしのおにいさんも泣いていました。わたしはもうすぐ星にかえります。だから、せめてノートを書いておきます。

わたしはこうかいをしていないのですが、いろんなひとを泣かしてしまいました。未来の大しんかんは、しんぱいしてくれると、泣かないでくださいね。勇者様をいっぱい支えてくださいね。

わたしのおでがみに近い、ノートをよんでもぐれて、ありがとう。

わたしが未来の大しんかんのやくにたつために、この後にはいっぱい星語の韻律構成を書いておきます。神様の声をつたえるいがいに、あなたが勇者様のやくにたてますよ。

わたし、ほんとうに、星語はとくいなんですよ。

あなたの、しあわせを、祈っています。

(この後百ページ余りにわたり旧星術および新星術の構成が記入されているが、解説までも旧星語のため、解読は困難と思われる)

神子、戦闘には参加できない

頭の上を変な馬っぽいのが飛んでいくのを、しゃがみながら見ました。ひー！ 飛んでる！ あ、ちなみにあれはさつき勇者様に殴られた魔物です。何でみんなのが吹っ飛ぶの。

私の背後に落ちて、魔物は消えた。相変わらずお見事です。

じんにちは、神子をやつてる町民です！

職業は……無職よりはいいだうつて泣く泣く受け入れたよ！
無職はつらー……まあ、今も働いているかつて言えば、微妙だけじね。

でもまだまだ他の人への自己紹介は、自分で出来ません。それどんな羞恥プレイですか。実態と本人のギャップがありますよねつ。

今日は荒野の真ん中で座り込んでいます。

ちなみに皆さん戦闘中。

私は足手まとい以外の何者でもないので、離れてじつとしている。
私は置物ですよ、私は置物ですよ！ どうぞお構いなく。

お枝様を持ったまま足を抱えて座る私は、一見優雅に観戦してい
るみたいに見えるけど、違うよ！ 結構必死に観戦します。万が
一吹っ飛ばされてきた魔物を避けなきやいけないしね！ 素早さが
鍛えられます。あ、石が飛んできた。座ったまま横にずれます。私
の横を、石がカツン、と飛んでいきました。

「こんなところで座つていて大丈夫かつて思つよねー。

何故かわかんないけど、大丈夫なんだ。魔物の皆さんは、何故か
私を岩かなんかだと思っているみたい。基本攻撃されません。これ

もお枝様効果？ 勇者様たちは普通に襲い掛かられます。

初めの頃は魔物を見ただけで怖くて固まつたけど、魔物は全部私をスルーしてお一人に襲い掛かっていくんだよね。私に来ても、硬直するぐらいしか出来ないから全く問題はないけど！ その状況を見た神官様が、大人しく観戦していくください、と笑顔で仰いました。私の動きが鈍いのは明らかですからね！ ありがたく観戦だけしています。あ、荷物もちゃんと見てるよ！ それぐらいは働きます。

神官様が手に持った杖で変なドロドロをふつ飛ばしました。どちらの核っぽいものを潰したみたいで、一撃でかたがつきました。魔物が瘴気に変わり、霧散する。今は太陽が出てるから、一瞬で消えるから瘴気は溜まりません。

神官様、意外と肉弾戦に強いですね。服の下は筋肉なのか？ まさか着やせタイプ？ うらやましい……。私は胴回りは着やせせず、胸は着やせします。残念なことにな！

そういうしている間に、神官様は次は大っぽいなにかを鋭い突きで倒しました。簡単そうに動いているけど、絶対私は無理。歩くだけ筋肉痛なひ弱町民です！ てっきり私は神官様は星術で敵を倒していくんだと思ってました。でも本人に言わせると、

「魔物が多いときは術がいいんですが、少ない時は殴った方が速いですから」

だそうです。意外と武闘派ですか、神官様。

勇者様はさつきまで相手していた植物っぽい動く何かを片付けたみたい。

剣がなかつたら殴り飛ばしてたけど、やつぱり剣があるほうが効率的なんだって。確かに見ていると、剣で傷を与えたときのほうが消滅まで早いみたい。街を出るときに、予備で五本買つてた。陸馬さんに積んでいます。どれだけ潰すんですか勇者様。ちなみにまだ

一本目です。神官様が無駄遣いはしないでくださいねって笑顔で釘刺してた。目が笑つてなかつた。あれ、怖かったです。勇者様の返事もちょっと間が開いてたから、そこはかとない圧力を感じ取つたのだと思われます！

ちなみに怪我もしないように気を使つてるみたい。理由はまあ、あれだけど、とりあえずはこれでよし…

戦闘が終了したみたいなので、私はスカートの土を払つてお二人のほうへ向かいます。怪我がないみたいでよかつた。意外と見ているだけも疲れるんですよ。声を出したら魔物が氣づきそうな気がして、口を押さえてじつとしてるし。ハラハラするしつ。

戦闘に参加するほうが無謀だからこれでいいんですけどね！ともかく、やつとお仕事の時間です。本当に軽作業なんだけどね。

私は戦闘をしたあたりでお枝様を振つて、

「Showwwkvvv hxxx Fwwwyooww（瘴氣は不要です）」

と呴いた。これだけでなんと！薄い瘴氣だったら、お枝様効果でなくなっちゃうのだ！すじーー私でも出来るぐらい簡単です！ません。働くよ！

なんとなく役割分担が出てきた今日この頃です。

あの初めて勇者一行になつた街を出て、既に一週間が経過しましたよ！時間の流れつて速い！

結局あれから自分の評判がどうなつてるか怖すぎて、ひきこもり

てましたよ。あ、領主様の館はさっぱりしてた。H口彫刻は撤去されたり、売りに出されたり、譲られたりしたらしい。だ、誰が引き取ったんですか！ 地味に気になります……。すつきりしたお屋敷、そのメイドさん評判は上々だった。掃除をしやすいんだって！ ですよねー。彫刻があれば、肩とか、胸とか、いろいろなところとかに、ホコリ溜りますからね！ 私の彫刻があるとすれば、胸は掃除しなくていいけどね。……自分で言つて辛くなりました。いや、それ以前にそんな彫刻があれば私は泣きながら壊してくれと勇者様に頼みます。私の力じや壊せないのが分かつてているからこそ勇者様頼み！ 一生懸命お願ひしたら聞いてくれるよね。基本、融通が利きます。

お屋敷では、落ちた体力を戻すために部屋で飛び跳ねてたら、勇者様に見つかって心配されたり（頭の中的な意味じやないですよね？）、メイドさんに謎の笑顔で見守られたりしましたが、おおむねのんびりと過ごすことが出来ました。『はんが美味しかったから、去りがたかったけどね！

数人だけで見送られて旅立つて一週間、選定による体質変化のためか、服は本当に臭くない。凄いな！ 逆にホコリで汚れちゃう方が問題のようです。後、『ご飯もちょっとだけで満足するようになつているのが実感できました。実感は出来たけど！ 出来たけど！ 私は食べます。量は減らしてるけどねっ。やっぱり、人間食が基本だと思いますよ！

陸馬さんがポー、と鳴きました。あ、ご飯の時間ですね。私じゃなくて陸馬さんのだよ！ 幾ら食べるのが大好きだつて、そんなに頻繁に食べてはいけない！

餌を、陸馬さんの背中に置いた荷物から『』を出します。お世話は私が係ですよ！
それを見たのか、

「休憩しましようか」

爽やかに神官様が仰います。勇者様もひらひらやってきました。
たまに、神官様、戦闘後にすつきりした顔をされているのにつけ
こんでいいんだろうか。ストレス溜まってるんだろうなあー。

こんな風に、のんびりと荒野の旅が続いています。

神子、忠告される

草をむかしむかし食べる陸馬さんの横で私も座り、パンの欠片を口に入れる。

硬く焼いた日持ちするパンはとんでもなく硬い。日持ちさせるために、水分をわざと飛ばして焼いている。これはこれで独特なちょっとすっぱいパンなんだ。水をちびちび一緒に飲みながら、ようやく噛めるぐらいいの硬さに戻る。「のちょっとじゅわつとしたところが好きです。これはこれでいける。

座り込んでくつろぎ姿勢の私と、先程の戦闘で使った剣を簡単に手入れしている勇者様と、地図を広げだした神官様。無言だけれど、ようやく気詰まりじゃなくなってきた。単に慣れたともいえるんですけど。

神官様が地図を見ながら、

「……次の街は、あまり貴女を連れて行きたくないんですが」と仰いました。何ですか？私はパンを噛みながら見上げます。神官様は苦笑しながら地図を指して、大陸の中央付近を私に見せる。「この辺りが、つい先日までもっとも栄えていた部分です」

一番大きな大陸の、丁度真ん中ぐらい。星都の上当たりだった。

「ここがまず魔物の被害にあり、壊滅的なダメージを受けました」指でぐるりと描かれた範囲は、意外と大きな部分でした。

「壊滅的って……」

そういえば、パン屋を休む話をしたとき、おかみさんの娘さんが隣の大陸から逃げ帰ってきたな、と思い出した。……まだ一月たっていないのに、ものすごく昔みたいな気分になるけど。ともかく、私が住んでいた街の大陸は、まさに星都のある一番大きなそれ

だつた。

「魔物の群れに巻き込まれ、街が幾つか消滅しました」

私の頭の中に、火と血と魔の踊る風景が染みのように浮かびあがる。かつて家だつた焼け焦げた残骸はまだ火の氣を孕みくすぶつている。崩れた石垣、壊された生活用具。散らばる食料に目もくれず、人々を襲う魔物たち　まさに悪夢でしかない、風景。幻のように立ち上つたそれは、はじました時と同じように唐突にそして一瞬であわい湯気のように消えてしまった。

瞬きよりも短い間に見えた光景に、私の体は硬直する。

「……どうしました？」

神官様が訝しげに私の顔を見る。私は何のことか分からず、首を傾げた。

「顔が真っ白ですよ」

私は何とか噛み切つたパンをごくりと飲み込んで、

「大丈夫です！」

と告げた。ちょっと食欲が落ちましたけどね！

生々しい幻だつたな。想像力が豊かつて言うレベルじゃないね！
今のはなんだつたんだろう？

もしかして昨日見た悪夢とか？

まるで私の記憶のように、見覚えの無い光景が立ち上るとか！
ふだんの物忘れが激しい私への自分からの挑戦状かもしれない。負けないつ。自分に負けないつ。

「……体調が、悪くなつたらすぐに言ってくださいね」

まだ心配そうな神官様に、首を勢いよく振つて了解を示す。心配をおかけしましたつ。大丈夫ですよ！

「ともかく、これから回る地域は、比較的被害があつた部分になる

「こう説明は、先日しましたよね」

「多分聞いた気がします！」

私はイイ笑顔で答えました。神官様はにこりと笑って言葉の語尾を疑問系から念押しに変えてきました。

「説明しましたよ」

「……もう一度お願ひします先生！」

「一度手間、申し訳ないです。」

神官様は根気強くもう一度教えてくださった。

あの時は地図がなかつたから、なんとなく「へー」と聞き流してしまつたんだよね。とりあえず一緒に地図を眺めながら説明を貰います。

どうやら勇者様稼業というのもむずかしいらしいです。片方の地域を回りすぎても、「こちらへは何故来てくれないのか」と声が上がりすがつたり、「ひいきだ」といわれたりするそうです。

とりあえず、大陸中央部に走っている動脈のような重要な街道を安心して使えるようにするのが優先なんだつて。これが開通しない限りは、物流も人の流れも滞つて、復興が遠のくそう。今いるのもその関係の場所らしい。そういうば、多少歩きやすい道でしたね。各方面にバランスよく回りながら、みんなの安全を確保する。わあ、聞くだけで胃が痛くなるじゃないですか！

「旅の途中の私たちに直接依頼があるわけではないのですが、星都や主神殿に高貴な方々から突き上げが来るそうです。順繕りに回っているそうです。大変ですね、有名人も！ 無名でよかつた私！」

「最近は、あなただけよこして欲しいとか言つことがあるそうですが、もし、そんなことを言われても行かないよつこしてくださいね」

「え？ 私ですか？」

逆にビックリですよ。ただの枝持ちですからー、役には立ちませんよ。

「貴女も微妙に噂が一人歩きしていますからね。美味しいご飯に釣られたりしたら、ぱくりとやられてしますよ」
ぱくりってなんですか。可愛らしく言つても、黒い何かしか伝わりませんよ！ それにしても酷い。私、どんなにご飯に釣られると思われているんですか！

「そんなに子供じゃないですよ」

さすがに反論する。

すると意外なところからシッコミが入りました。

「合計六回」

勇者様がぱつりと呟きを落としました。

「六回？」

何のカウントですか？ 私は神官様のほうに乗り出しかけていた体を引き、勇者様にジト目を向ける。勇者様は剣の手入れを行いつつ、続きを口にした。

「先日の領主屋敷で、メイドから菓子を貰つて食べていた回数だ」

「知つてる人だし、ついていかなかつたですよ！」

ちゃんと確かな人からしか貰つてないよ！ 心外な。でも実際は六回以上いたいた言う真実は、私の胸に仕舞つておく。

私の反論に勇者様が続けて、

「知らない人から貰わるのは基本だ。あと、すぐに警戒心を解いてろくに知らない相手を部屋に入れないと」

む？ 私が常にそんなことをしてるとでも？ 記憶にございません。

だけど、私の不満げな顔を見た勇者様が、

「旅についてくる前に、あつさり信用して部屋に入れようとしたのはどこに誰だ」

えー……？ しばらく記憶を探します。探します……。

「そんなことありましたっけ？」

ぶつちやけ覚えてません。勇者様は無言になつた。呆れているのか

どうなのか、なんだか辛い反応ですよー。なじるなら、なじつてください！ 生焼けの魚ぐらい辛いっ！

神官様が、

「とにかく、着いていかない、物を貰わない、さあ、復唱してください」

「着いていかない！ 物を貰わない！」

わたしはやけくそになりながら復唱した。ちや、ちやんと覚えますよ！ 何でそんなに懐疑的なんですか。

「神官様、私は幼児ですか！」

「幼児ぐらい物覚えがイイ事を星神様に祈りましょつかうつ。心をえぐる言葉でした。

「ともかく、名前を利用しようとしているもの、実際にこまつているひと、様々なひとびとがこれからも関わってくると思います。次の街は、特に治安が悪化しているらしいです。近づいてくる人物は、ある程度の見極めは私でしますから、貴女は自分の身を守ることを考えてくださいね」

真剣な忠告に、私は頷くしかありません。

それにしてどこから噂を仕入れてきているんですか！ 謎です。

とりあえず、知らない人に食べ物を貰わない。
心に刻みました……。

微妙に……ツライ！

神子、観察してみる

私は歩くのが遅いので、大体陸馬さんに乗つて移動している。あれから一回ぐらい戦闘はあつたけど、私は相変わらず空氣としてひつそりすゞしました。

今のところ、時々ヒヤツとするけれど、戦闘で恐怖を味わつた事はない。半端ない安心感です。さすが勇者一行！ 凄いね！ 私はカウントに入れなくていいけど。

それにしても魔物つて、見た目がグロテスクだつたり変な汁とか飛ばしていたりするけど、何故か余り臭くはないんだよね。でもなんで岩とかがじゅわつていいながら溶けかかる汁を飛ばすんですか！ 危ないじゃないですか！

戦闘が終わつたら、不思議と汁や血っぽい何かまで、綺麗さっぱり瘴気になつて消えるんだよね。瘴気はピンク過ぎて出来る限り吸い込みたくないからいいからくんくんしてみたことはない。けど、お一人が言つには特に匂いがないらしい。私は見えるから避けまくっています。ごめんね！ どちらかと言つと魔物より陸馬さんのほうが獸臭いぐらい。

神官様によると、魔物が生物かどうかは、専門家の間でも意見が分かれているんだつて。何の専門家ですか！ それも聞いてみたらどうやら魔物研究のひとがいるとか。どの分野でもマニアックな人がいるんですよ、と笑顔で言われました。今度、機会があれば本を見せてくれるそうだ。『たのしくがくしゅうシリーズ！ ふしきないきもの、きょうのまものじでん』とかが私にお勧めだとか。地域ごとの魔物の特色がでているので、魔物も気候に影響されるのか何とか。詳細な説明はともかく……なんだかまた子供向けな気が

する題名なんですが。そこはツツコミ待ちですか？ 神官様の読書の範囲が分かりません。そういえば、前に廃墟で拾つたものまで目を通していくよな。ある意味突き抜けすぎます。

それはともかく。魔物 자체は怖い。でも比較的私がけろつとしているのは、戦闘が終わつた後に魔物が綺麗に消えてしまのがかなり大きいです。

生々しさがかなり薄まつていると思う。それじゃなかつたら、切り裂かれた魔物の死体が転がる光景にびびつてた。トラウマものです。戦闘のたびに勇者様が魔物の血まみれ肉まみれだよ！ 斬つたり殴つたり裂いたりしているから。血まみれ勇者様……そんなホラ一はお断りだ！ あ、神官様は杖で殴つているから返り血はないみたいですね。さすが星職者。違うか。

結局、神官様が話していた街には、半日ぐらいで到着しました。

城門の上に、ブロンザイトって書いてる。分かりやすい表示ですね！ これで地図のどこか悩むことはない！

神官様が言つていた、魔物の襲撃は、たびたびあるみたい。城壁や周りの地面に跡が残つてゐる。魔物は消えるけど、それにあたえられた損害は消えない。

街を囲む城壁は焼け焦げがあつたり、崩れているところを無理やり補修したりしてるのが分かる。周りの木や草も焼け焦げがあるところを見ると、火をはく魔物か、火の星術を使う人がいたんだろうな。あまり、街の近くで放火はしないでくださいね！ よその街のことながら心配になつてきた。

そういえば、神官様はそんな星術は余り使つてゐのを見たことがないなあ。星術の系統は、神殿で勉強したよ！ 火を出したり氷を

出したりして攻撃する人もいるらしい。神官と魔術師の違いもいろいろ書いていたけど、私は半分しか覚えてないです！ サボつていてんじゃなくて、半分で勇者様がお迎えにきたんだよと主張します。居眠りはしそうになつたけどねつ。興味ない事を聞くのつて、何であんなに辛いんだ……。

それはともかく、街に入るには手続きが要るのですよ。

門は昼間なのに狭くしてて、門番さんが検問をしている様子。隊商の人たちが列を作つて待つていた。その後ろに私たちも並ぶ。私は物珍しさからきょろきょろ周りを見ていた。商人さんと田畠が合つて微妙な顔をされたけど気にしない！ 田舎もので申し訳ないです！ まだまだよその街は珍しいんだ。

街の大きさは、ここから見るぶんには前の街と変わらないかな？ ビックリするほど大きな街じゃない。周りに農地があるかだと思つ。美昧し多分交易が主体な街なのか、逆側に農地があるかだと思つ。美味しい名物とかありますかっ。前、貸し本屋さんで旅行記を読んだことがある。旅行と言いながら、グルメ探訪を主にした本だつた。その表現が秀逸で、また挿絵が美味しそうなんだ！ あの本のせいで私はご当地グルメって言うやつに並々ならぬ興味があります。でも街の外に出ると思っていなかつた頃だから、どここの街が何が美味しいかさっぱり覚えてないですけどね！ もつとチェックしておくんだつた。

手続きに思わぬ時間が掛かっているみたいで、かなり暇です。

太陽が少しだけ傾いた頃ようやく順番が回ってきた。それから神官様と門番さんがお話しています。場所によつては税金が必要なんだつて。

この街では特に勇者一行と名乗らずに入る予定だと説明を受けました。何でかは分からぬけれど、神官様がそういうならそつちの

方がいいんだろうな。

神官様が護符を出して話をしている様子。星神殿の人を疑うことは余りないから、身分証明にいいんだって。確かに初めにお一人と話したとき、私も護符を見て安心した気がする。門の詰め所の兵士さんたちは、みんな疲れているみたいだつた。空気がぴりぴりしているのが分かる。魔物のせいだろう。

私はなんとなく不安になつて勇者様を見たら、この人はいつも通りだつた。それに安心をする。今回はよそいきモードではないみたいで、普通に無表情のまます。これに慣れてきたのはいいことなのか悪いことなのか、どつちかは分からぬけど。これもある意味進化！ 私も日々、グレードアップしています。

青い鎧は分厚いマントでほぼ見えないから、勇者様も普通の旅人っぽく見えるはず。真っ赤な鎧とか金ぴかのマントとか売っているつて武器屋のおっちゃんに聞いたことがあるから、派手な色の鎧は思つたよりも普及してゐるのかも。でもそんな派手な格好をしたら、魔物の標的にならないのかな？ 普通に不思議です。

長い交渉が終わり、神官様が戻つてきた。笑顔に少しだけ疲れが見える。お疲れ様です。

うながされてやつとくぐつた門の中の風景、それに私はもやつとしたものを感じた。

なんだろう、この街の空氣。
何か、変だ。

神子、知らない街に警戒する

何に引っかかりを感じたか分からぬまま、私はぐるりと周囲を見回した。

往来にはそこそこ人の数。でも女人人は少ない気がする。余り外出していないのかな？

空気はいがらっぽい。みんなが歩くたびに砂埃が巻き起しつて、黄色っぽく風が染まる。肌とかに砂がつきそうでイヤだなあ。

建物は、前に見た町と大して変わりがない。距離的に離れてないから、地形がほぼ同じだ。そういうた場所では街のつくりは変わらないそうです。海辺とか、山間とかだったらさすがに変わってくるらしいよ。凄いね！このあたりの知識は、お察しの通り神官様の受け売りです。絶対、雑学王だと思う。歩く辞書だと考えそうになります。

まだメインストリートを抜けていない。私は陸馬さんの上でまだキヨロキヨロする。

がたがたと荷馬車を引いて陸馬が通り過ぎる。隊商の商人たちだ。あの陸馬さんは派手なオレンジでした。本当にこの種族は一体保護色をなんと考えているんだろうね！ 可愛いからいいけどつ。

違和感の正体をつかめず、私は首を捻った。

「ちゃんと前を見てくださいね」

横を歩く神官様に注意を受けました。

「了解しました！」

背中を伸ばして前を見ます。前を見ながら、

「何かこの街、変じやないですか？」

神官様に質問です。先生、教えてください。でも返ってきた答えは、

「何が変だと思いますか？」

まさかの質問返しだった。うむ。

そういわれてもう一度考える。建物の前に溜まる人々を見る。中を恐る恐る窺つている様子。中から酷い罵声や破壊音が続いている。喧嘩だろう。

「……昼間っから、酒場で喧嘩しますね」

これが深夜なら、住んでいた街にでもたまにあった光景だ。でもこんな時間から飲んだくれが徘徊してゐるってどうなんだ。太陽はまだ頭上に輝いて、真昼間ですよ！ 酔つ払いっぽい人がうろうろしているのも、一人や一人なら分かるんだけどこんなに大人数なんて初体験です。皆お酒を飲んでご機嫌じゃなくて、暗い目をしている。目が、何かどんよりしているんだよ。楽しいお酒じゃないのがよく分かる。

それに気付いて、私は改めて周囲をぐるりと見回した。

ああ、そうか。

笑つてゐる人がいない。

なんだかみんな俯くか、暗い顔をして歩いている。立ち話をしている人たちも、深刻そうな顔をしている。まあ、二コ二コして歩く人も少ないとは思うけど、この陰気率は異常だ。たぶん空氣に色をつけたら薄ぼんやりした灰色になるかも。暗い！ この街暗い！

「あと、なんだか全体に暗いといふか」

一つに気がつくと、だんだん、他のことも気になってきた。

あと、路上生活者的人が多い。裏の路地だけではなく、メインストリートでも俯いた人々が道のすみっこに座り込んでいる。大体は町長さんや領主様が保護するハズの人たち。

私の視線を追つていったんだろう、神官様が、

「壊滅した街の人々が、難民となつて周囲の街に流入したんです。しかし、着の身着のまま逃げ出した人たちにお金があるわけがなく、こうなつてしまつたのだ、と。路上生活をする人を指しているのが分かる。

視線の先にはやせ細つた子供がいる。明らかにボロを纏つた、難民と分かる子供だつた。あ、子供が人にぶつかつた。案の定怒られて突き飛ばされる。子供は幸い怪我がなかつたのか、すぐに立ち上がり走り去つた。

その小さな背中をぼんやりと見送つていると、先程子供がぶつかつた男が怒りの声をあげた。スリだ！ チクショウ！ 私は思わずもう一度子供が去つていた方向を見たが、もうその背中を見ることは出来なかつた。怒り狂う男に対し、周囲は冷淡だ。掏られるほうが悪いと、歪んだ笑いを向ける人すらいる。

この光景がこの街でのいつもなんだろう。

私は今まで比較的治安のよい場所で住んでいたから、こんな風に日常の中に犯罪が溶け込んでいることにビックリした。

「ないときは、あるところから奪い取れ、だそうですよ」

神官様が疲れた雰囲気で零した。星職者としては複雑な心境なんだと思う。星神様の戒律になんかあつた気がするし。

「だから気をつけろ」

不意に勇者様が口を開いた。滑らかな声は喧騒の合間を縫つてきちんと届きます。勇者様は実は陸馬さんの手綱を持つてくれていて、私のほうをちらりと見て、勇者様は続けた。

「お前はこの街において弱者だ。狙われる」

「そうだよね！ 明らかに私は弱いのがよく分かります！」

私は頷いて、

「気をつけます」

とお返事しました。

覚えていますよ、食べ物を貰わない！ 知らない人についていかない！

あれだけ心配されたのも判る気がしてきた。

「國の方針として、廢墟となつた街を復興させるためには元の町民達を送り返したいらしいのです。しかし、安全が確約できない上に、恐ろしい思いをした故郷へ帰りたがる者たちはいません。結果、何もかもが畠ぶらりんになつたまなんでしょう」

神官様が悲しそうに仰つた。

「實際、彼らはどこにも受け入れられることがなく、難民となつてしまふことが多いそうです。たまに良心的な領主様がある程度食糧を配給したとしても、それだけでは難民達には足りません。難民達は生活苦のために犯罪に手を染める。結果、難民を受け入れた街の治安が悪化し、難民達が更にうとまる。悪いことが悪いことを呼び、どんどん悪くなつていくそうです。」

「それだけに、主要街道周辺を安全区域に戻したいのですが」「なかなかです、と神官様の声が空気に溶けるぐらいい弱弱しかつた。相当参つてゐるらしい。」

「街道の安全つて、どうやつて守るんですか？」

私の質問に、神官様は答えてくれようとしたけど、先に宿についてしまつたようです。

「またあとで、ですね」

いつもより高級な宿みたいなんですが、陸馬さんを預けるお金もかなりの金額だった。きちんとした宿じやないと危ないんだそうだ。なんだか、違う世界に来てしまつたみたいだ。

私は漠然とした不安を抱えながら街の風景を見回した。見慣れているはずの、普通の街に似た場所なのに得体の知れない何かがありそうで怖い。

そのとき、軽く背中を掌で押された。いつの間にか横に立つていた人を見上げる。勇者様だ。

「疲れたか？」「

「大丈夫です！」

氣を使わせてしまったかな、と思つて、反射的に元氣に答える。ならいい、と再度軽く宿に入るよつに促された。

街の雰囲氣に飲まれている場合じゃないよね！

よし！ 気合を入れていくぞっ。

握りこぶしを作つて氣合を入れてたら、勇者様に不思議そつに見られた。

そんな目で見ないでくださいっ。

神子、宿を観察する

宿で取れたお部屋は一つでした。

いつもは一応、男女別とかにしているんだけれど、空いてないものは仕方ない。

みんな安全を求めてある程度の宿に泊まろうとするらしい。私もお金があればそうすると思う。

別のところを探すかとお一人が話していたので、私が「一緒にでも全く気にしない」と主張しました。逆に「気にしなさい」と神官様にツッコミを受けたけど。えー、経済的だと思いませんか、三人一部屋！ 一人一部屋の時より、一人頭三割引ですよ！ つまり、ご飯一回分以上なのだ！ それを主張したら、神官様に計算は、速いんですねと誉められた。計算「は」のところが強調されたように聞こえたつ。誉められたけど、訝然としないです。

チェックインの時、宿の人によく者様が変なことを言わされました。ちょっと離れていたけど、私は恐怖の地獄耳を持つています。聞き逃さないよ！

従業員はかわいい子連れてお楽しみですね、両手に花状態だとか言ってました。言つ度にこつちを微妙な目線で見るんですよ！ そんなんじやないですって。微妙に誉められたような気もするが、これも嬉しくない。なんかさつきから嬉しくない誉められパターンばかりですね！ あ、勇者様がイヤなんじやないよ！ なんだかあの従業員のひとの目線がねつとりとこつ……品定めをするみたいでイヤだったんだ。鼻が大きい従業員の男の人だった。鼻を引っ張つてぐりぐりしたくなります。しないけど。

そういうえば、こういった下ネタ話題を言われるのは勇者様が担当ですよね。領主様も一生懸命勇者様にナイトフィーバースポットを説明してたなあ……結局、あの情報は役に立ったのだろうか。聞い

たら聞いたで、また注意されそだだから言わないけど。逆に神官様はあいつたことを言われない様子。雰囲気とか？

ん？ 今何かに引っかかった。

さつき勇者様は両手に花といわれてました。両手に花といふことは……。神官様、また女のひとだと思われるみたいですね。普通に喋つてゐるのに！ 美人とは、悲しいもの……。ご本人は気付いているのかいなか、はたまたいつものことなのか、スルーしていましたが。

とりあえず部屋の中に入る。

すぐに勇者様が窓やドアを確かめはじめた。鍵の辺りを念入りに見たり、蝶番を触つたり。

なんだろうとジッと見ていたら、気付いて説明してくれました。どうやら変な仕掛けがないか調べてたらしい。なんですかそれ！ どうやら治安の悪いところだと、外から開くように仕掛けがされているときがあるそうだ。怖いなあ、という反面、勇者様は何故調べられるのかとまた疑問がわきましたよー。このひとも出来ることの範囲広すぎます。

神官様が星術を使い始めた。しかもちゃんと消せる白墨で、床に何か書いてまで術を使つていきました。この部屋に結界を作つたらしい。簡単に侵入できないように、こと。持続するようにな書いてるんだって。奥が深いですね。

それでも、荒野を旅していくときよりかなり警戒が凄いんです……。まあ、荒野ならお枝様を地面に刺しておけば魔物避けになるらしいから、わざわざ結界を張る必要がないのもあるけど。お枝様はいつも通り布でぐるぐる巻きの封印状態だよ。

それにしても、お一人のこの警戒。そこまで街つて怖いところなんだらうか。

犯罪のとか、霧囲気とか、変だなあつて思つぐらいなんだけれど。

私は思わず、

「厳重ですね」

つて率直な意見を言つたら、神官様が、

「魔物相手の方がまだ氣楽でいいかもしれませんね」

とぽろりと零されました。その気持ちがちょっと分かつてしまう。だつて、襲い掛かってくる魔物は単に撃退すればいいだけだけど、泥棒さんは捕まえるにしても怪我させていいかどうかも悩むしね！

「……いえ、すみません、さつき言つたことは忘れてください」

神官様が落ち込んだ様子で付け加えた。

「大丈夫ですっ。忘れるのは得意ですから！」

胸を張れることじやないんですがっ。落ち込まないでくださいね。

私も部屋を調べてみた！ といつても、家具とかを眺めるぐらいだけど。床は石、壁は木で出来ています。丈夫そうだね！

小説でよく読んだ、床には実は穴が開いて隠し扉がつとかはなさそうです。床を叩く私を、勇者様が微妙な表情で眺めていました。私は想像力が豊かなんですよ！ ここに落とし穴があつたらどうするんですか！

「床には何もない」

「穴とかないんですね？」

「見れば分かる」

えー。私はちょっとガツカリしながら立ち上がりました。でも見れば分かるつてどういうことなんだろう？ トランプを見抜く技術を持つているんですか？ あつても驚かないけどね！

ベッドは一つ、大きなソファーが一つ。申し訳程度の小さなテレビが一つ。椅子はソファーがそれをかねてるんだろうな。一応、ソファーでも寝れるように、毛布が一枚付いていた。

これで三人部屋と主張するとは！ 宿の人は変な笑いを浮かべて、

ベッドは少なくともいいですよねとか言ってたな。こんな狭いベッドで一緒に寝れないよつ。簡素な寝台は、思ったよりは汚くなかった。一応掃除はしているみたい。でも、あんな料金を払つたらもういい宿かと思いました！ 私の住んでいた街の平均より、四割増は高かつた。

寝る場所について、「ソファーでいいです！」と私は主張しました。だつて、どう考へても体格的に私だつたらちょうどなんだもん。勇者様だつたら絶対足がはみ出る。まして戦闘ではお二人しか働いていません。私はゆっくり陸馬さんの旅を満喫していただけなのだ！ 動いてもないよ！ だからソファーで問題なしと思つた。

でもこの意見に、お一人と言つか意外なことに勇者様が首を縦に振らなかつた。

「体調を崩すかもしれないだろう。ベッドで寝ればいい」

「私はさつきまでずっと陸馬さんに乗つてました！ それほど疲れませんから、ソファーで大丈夫です」

こんな感じで、ベッドに寝る、ソファーでいいのハンドレスな会話に、神官様が笑顔でざつくり終止符を打つほつが速かつた！ いつも通り言葉にナイフの切れ味がありますよね！

「入口近くのソファーには私が寝ます。真ん中の寝台に貴女が寝なさい。勇者は窓際の方で。そのほうが賊の侵入に対応しやすいでしょう」

そして笑顔も安定の迫力を備えています。

私はその内容に、私は思わず声を上げた。

「賊前提ですか！」

「ええ、賊前提です。警戒心は持つて置いてくださいね。この街は……」

神官様は言いよどんだけど、続きを付け加えた。

「……人の心が、堕ちつづりますから」

神子、伝言を受け取る

神官様と勇者様は、それから程なくして外出しました。

私はお留守番です！

いろいろ調べたいことがあるんだって。一人が出て行つた後はきちんと戸締りするように、と言いつけられました！……やっぱりものすごい子ども扱いですか？一度お二人の中の私への認識を聞いてみるべきかも。

窓を開けて、外を見てみる。王宮や神殿は綺麗なガラスがはまつていたけれど、そんな高級なものは宿にはない。木の扉が付いてるだけだ。ぜつたい蝶番に油差してないな！ ギギギつて耳に痛い音をしながら窓がやつと聞く。

重い窓を開けてみた街並みは、たたずまいこそ本当に前の街とそれほど変わらない。なのに、この灰色の雰囲気はなんなんだろう？ これだけでなんだか息苦しいな。

路上で座り込んで、うつろのままに空を見上げる人たちを見たら、胸が痛む。何とかならないかな、と思つけれど、私が何とかできるわけない。

私はなにか凄いものを持つているわけじゃない。財力があるわけでもないし、知恵があるわけでもない。勇者様達みたいに、戦闘力があるわけでもないし、術を使えるわけでもない。出来ないことの方が多い。所詮町民です。才能なしの判定も受けてるしね！

だからこそ持つていらないものを数えるより、できることを数える方がいいなって思つて考え方を変えてる。強制ポジティブだ。

空を仰いでその高さを嘆くより、何か一つでも出来ることを探して地面を睨む方がいいと思う。裏のおばあちゃんも言つてました。おばあちゃん元気かな。あれからずいぶん遠くへ来たものです。

「どうにしても考えていても駄目だよね！　お腹が空くだけだよね！」と思考を切り替えて、とりあえず荷物整理に励むことにした。無駄に腕まくりとかしてみる。やる気を表現するよ。

いくら体から老廃物が出ないからといって、砂埃とかで服がドロドロだから洗濯場を借りなきやいけないし。さつき、宿に泊まる時に洗濯場のこととか、体を洗えるかを聞いておいてよかつたね！　とりあえず出来ることがあつたほうがいいかも。いろいろグルグル考えるのは正直苦手です。気分が落ち込んで、駄目になっちゃうから。

自分の荷物を整理してから、そういうれば、お一人の服とかも洗つたほうがいいんだろうか？　と思い至る。出かける前に先に了解を貰つたらよかつた！

昔、パン屋で同僚の子が「お父さんに勝手に下着を洗われて恥ずかしかつた！」って言つてたから、家族と言えど恥ずかしいものみたいだし。でも何でお父さんが下着を洗つ状況に至つたの。

今更凄く気になります。手紙で聞きたいくらい気になるな！　でも手紙つて意外と高級品だね。丈夫な紙もお金が掛かるし、送るのもお金が掛かる上に今の状況だつたら本当に付くかどうか分からぬみたい。ちょっとだけ郷愁が顔を覗かせる。手紙つていいなあ。あこがれるよなつ、遠くに旅立つた友達からの手紙が来るとか！　この場合は残念ながら私が書くほうだけど。書いてみようか……と頭の中で文章を考えてみた。

けれど、現状を説明できない！　何を間違えたか勇者一行ですか、絶対嘘だと思われる！　当初言つておいた場所と違う街にいるし！　手紙も出せないのかなあ。

そんなことをつらつら考えながら荷物整理をしていると、ドアがノックされた。

「……はい」

今までの言いつけとかで、私は警戒をしながら返事をした。

「この宿の従業員です」

確かに聞き覚えのある声だった。

ドアをチーンをつけたままでちょっとだけ開けてみたら、さつときのいやな笑いをする男のひとだった。そのお鼻でよく分かりますよ。

狭い隙間から、小さく折りたたんだ紙切れを差し出してくる。

「お連れ様から手紙です」

え？ 手紙？ こんな狭い街の中で？ しかも、わざわざ紙に書いて？ いくら私が手紙をほしいと思ってても、こんなに身近にいる人たちから貰つたら戸惑いが先に立つ。

私が不思議に思ったのが伝わったんだろう。慌てたように宿の人には付け加えた。

「伝言ですか。ちゃんと渡しましたからね！」

「はあ……」

でも伝言するぐらいだつたら、部屋に帰つてきてくれたらいのに。神官様とか、無駄が嫌いだからこんなにまどろっこしいのしさそう。

私は首を捻りながらとりあえず手紙を開く。

『急用が出来たので、こちらに至急来て欲しい』

簡素な文章は共通語の殴り書きだつた。その下には簡単な地図が付いている。うーむ。ぶつちやけ、方向音痴なんですが。よくよく読んでみると、それほど離れた場所ではないことがわかつた。これなら行けそうかな？

私は最低限の荷物を取り、先ほどまで拡げていたものを簡単に片付けた。窓を施錠して、部屋も戸締りをする。お枝様は邪魔だし、街中では使わないだろうから置いていく。ここに置いていたほうが結界もあるし安全だよね！ わたしの背の高さと同じぐらいあるお枝様、普段持つて歩くのって実は邪魔です。でも仕事だしね。部屋の鍵は一応預かっていた。内側からもチーンとか付いているから、中で閉めるときはそっちを使うんだ。

本当に用事つてなんだろうと首を捻りながら、私は街に出かけて
いった。

神子、さすがに危険を悟る

纏わりつく視線が、大変うつとおしいです！

私は敢えて周りを見ずに入りますよ。

だつて凄い視線を感じる！ 前に勇者様達といった時にあつた、お姉さんたちの厳しい視線とは別のイヤラシさがある視線。全身トリハダたちまくりだよ。どう見てもいいカモが歩いているぜヘツヘツへな目線ですね！ 怖いって！

柄が悪いっていうんですか、なんか通り自体がすさんだ雰囲気です。気力をなくしたように座り込む人たちがちらほら見えて、道にゴミが沢山溜まっている。それがなんともいえない嫌な匂いを発しています。道も、建物も汚れている。でもそれを掃除しようと言う人がいない。皆何かに必死だつた。でもそれは決して幸福な方向に進んでいる人たちの表情じやなかつた。

人の心が墮ちかけています。

神官様の苦しそうな言葉が、頭の中に甦つた。何とかしたい現状なのに、なんとも出来ないのを知つているもどかしさ。それが詰まつた言葉だつた。

この雰囲気のことですね。瘴氣とはまた別の重い空気が街の中を包み込んでいる。当たり前のことが当たり前じゃなくなつてはいる世界に、私はここに出てきたことを後悔しました。どうしようかな、帰ろうかな！ でもね、なんだか後ろに気配を感じるんですよ。小動物並みに最近気配に敏感です。何かが研ぎ澄まされてきてるかも！ うそです、調子に乗りました。

どつちにしても、この街では私が浮いているのが分かる。

『さすがと簡単な荷物を入れた小さなカバンを胸に抱え込みました。手に汗をかいっているのが、分かる。

田立つといつても派手な格好しているとかじゃないです。さすがに神子装束じゃないよ！ あんなひらひらは怖くて着てません。自分の街を出てくるときに買った丈夫な旅装束だ。これなら多少の運動でも大丈夫！ かかとの低めのブーツだしね。だから今みたいに小走りで進めるのだ！ わざかに息が上がります！ 勇者様並に体力セレブになりたいものです。むきむきはカンベンんだけど！

普通の格好でも、この街では田立つてしまつ。

だつて、女性自体が歩いていない！ これが指している事に、さすがの私でも薄々気付くよ！

つまり、出歩くことが危険だと叫びつゝ。

うあー後ろにまだまだ誰かの気配がある。

このまま宿に帰るなら後ろの人たちとすれ違わなきゃいけないんだよね。それもさすがに怖い。

焦りながら地図を見る。

この地図の指しているところ、もうすぐなんだけどな。
進むか、戻るか。私は背後の気配に追いやられて道を進んでしまう。焦りと緊張に頭が全く回りません！ ヤバイという単語が、ぐるぐる頭を回るばかり。焦りだけが空回りですよ！

だんだん細くなつていく路地に、これはヤバイと実感が沸いてきたあああ！

勇者様神官様ごめんなさい！

先に謝つておきます！

犯罪にがつつい巻き込まれそうです！

言い聞かせられたの、微妙だと思つていたけれど……認める！

子供より私は始末が悪かつたということを！

知らない人の言つことを信じない！ これも重要ですね。全部注意事項がないと駄目なひとにはなりたくなかったです……うわあああん。

地図が指し示した場所には、廃墟みたいな教会がありました。追いかけつこの終点になりそうだ……。みごとに裏通り、そして人気がない場所だつた。

私は速度を緩めて、うつすらとかいた額の汗を拭う。背後の人たち、諦めてくれたらいいのに。

本当にここかな？ 地図はあつさりと書いていて、間違うはずがない道順だ。教会だから、もしかして本当に呼び出しだったのかも、という懸念もある。

それにしても、あまりの建物の荒れっぷりに私は首を捻りました。あれ、星教の建物って大体の街では大事にされてるんじゃないの？ 私はその前に立つて、建物を観察しました。

建物の中に踏み込むのは、正直悩む。だって草がボーボーに生えてて、建付けとかガツタガタに歪んだ扉が申し訳程度についてるだけ！ これぞヤバメな物件つて看板立てれますよ。格安物件間違いなし！

夜、こんなところ絶対怖い。近寄れない。一人じやトイレに行けなくなります。まさにホラースポット間違いなし！ 誰もいないよつて言うのが離れててもたたずまいがさりげなく主張してくれます。普通、こういったところって難民の救護所とかになりそうなものだけど、窓もドアも壊れたまま放置されてる。うーん、予算がなくなつたとか？ でも主神殿とかは凄いお金がかつてそうだけね！ というか、これはやっぱり騙されている雰囲気が満載ですよね！ だれがこんなところに用があるかっ！ 怪しさ爆発だよ！ さすがにおかしな一変だなーって思いながらここまできたけど来

なきやよかつたなあ。ウカツでした。

あの宿のおっちゃん、絶対なんかある。怪しい……乙女の勘が、怪しい匂いがすると囁いております。鼻がでかいのは関係ないけどねつ。

私はぐるりと向きを変えて、宿に帰ろうとした。さつきからの視線は変わりない。そろそろつけて来たっぽい人たちがいる方向を突破しなきやいけないんだよね。あっちの道のほうが大通りだつた。微妙に狭い道の先、今の場所に私の背中を汗が流れます。どうにもいやな予感がするんだよね。首の後ろがちりちりする。落ち着かない。

ちなみに、お枝様は部屋においています。あんなに大きな包みはもてませんから！

あそこだったら、神官様の結界があるから泥棒も入れないから大丈夫だと思つたんだよね。さつさと帰ろう。

ここは危険だ。私はとうとう緊張感に耐え切れず、走り出した。

その時、私の耳にかすかにその音が届いた。

「J y m n w K s h S m s - S m n , F k k N m r s r , T
s k g N b r m d N m r h S m n , K k y h K k h ,
J m n w S h r y S h m s .」

韻律だ、と気付いた瞬間、ものすごい眠気がやつてきました！

私は足をもつれさせそうになるけど、根性で踏みどどまりました。下手糞な韻律だな！ おっさんのだみ声です。神官様の謳うようなあれと随分違う。寝言みたいに唸る声だ。でも、正確に言葉をなぞつているから、効果が出ているんだろう。……ん、なんでそんな韻律マスターみたいな感想を持つてるんだろう？ 実際、勉強したことが今更生きてきた？ まさかね。それとも、眠いから、あっちと、混じったのかな……。視界が一重にぶれる。頭がぐらりと揺れた。

意図しないのに意識が飛びかける。体に力が入らない。壁に体を持たせかかる。随分強く打つたはずなのに、私は痛みを感じなかつた。

ちょっと！ 絶対ここで寝たらやばいよって言う場面ですよ！

それは分かっているけど、体がそれに逆らえない。韻律が耳から意識に体にしみこみ、効果を發揮する。

私の体から力が抜けて崩れ落ちる。頭を打ちませんように！ そんな間抜けなことを私は考えた。

なにか文句を言おうとして、私の意識は途切れた。

神子、誰かに拉致される

目を覚ましたら、薄暗い部屋でした。
人の気配は無い。

「んぐつ」

声を上げようとしたら、凄い圧迫感に口を開けませんでした。これはまさか……聞いたことだけがある、さるぐつわってやつですか！人生初のさるぐつわですよ。嬉しくないお初です……。

「んうーー」

何を喋っても呻き声にしかなりません！ 鼻呼吸はできるから、息をするのには支障が無い。

さるぐつわって初めてしたんだけど、こんなに顎が疲れるものだつたんですね。口をうつかり開けたら閉めれなくなりそう。むしろその場合、よだれを拭えない悲劇が確実に起こる！ 乙女としてこれは死活問題ですよ！

何故よだれを拭えないか。

はーい正解は……縛り上げられているからです！ 予想通りですよねつ。

荒縄ですよ。

これも人生初縛り……。特殊人生を歩んでいるな！ もうちょっと平凡に生きたかったけどねつ。

土の上に放置されている状態です。湿った土が、地味に冷たい。髪とか土まみれだろうなあ。洗うのが大変なのに。まあ、洗うどころではない状態ですがね！

もぞもぞと全身を動かしながら状態を調べてみます。首と手は動くし。

んー、血の匂いもないし、多分怪我はないと思つ。変な姿勢で寝てたせいで体が痛いはあるけど。

まず、手は後ろで縛られてる。肩が地味に痛いです。

あとは足首を縛り胴体と腕に縄を回してぐるぐる縛つていますよ

！普通に……つていうのもおかしいけれど、普通に縛られてます。変な縛り方ではないです！ 变な縛り方については、私より前の街の領主様に聞いてください。そのような図説の絵画が混じっていました。私、あそこで変な知識が確実に増えた。微妙に引いているのを察してか、絵の素晴らしさを解説しようとして縄田の美しさについて語つてらつしゃつたけど、逆にそのせいで神官様もどん引きしてた。勇者様はいつも通りだったのがある意味恐ろしいです。領主様は悪い人じやないと思うんだけど、なんていうか、うん、自重して下さいねお願いですから。領主様の思い出はどうでもいいから横に置いておいて。

私が身動きできないつてことのほうが問題ですよね！
明らかにさらわれました！

拉致ですか……さすがの能天気な私でも、今のこれはかなりやばいと思います！

前回の拉致よりヤバイ。前回はまさかの勇者様だったけど、今回はあれより犯罪の匂いがふんふんするよ！ 臭い……臭いぜ！ 確実に匂つてやがる！

だからさつさと脱出したい！ 勇者一行においてただでさえお荷物なのに拉致されて更にこの状態！ お一人に会わせる顔がありません……。脱出できたら、私田舎に引きこもつてどつかの谷あたりにひっそりと住むことにするんだ……。脱出も出来ない今となつては、壮大な夢ですが。

とりあえず、現実問題、縄が私の行く手を阻みます。

この縄、解けないかな、と体を動かしてみる。気合入れて動いてみたんですが、どう考へても陸に上げられた魚程度にしか動きませんよ！ びつちびちです。横で見たら凄い格好なんだろうな、と死んだ魚の目をして考えますよ。動けば動くほど縄が食い込んで痛いです！ 手首とかも結構締め上げられてる気が。小休止です。荒い息になつても鼻呼吸しか出来ないので、空気が物足りないです。

うーむ。

今、右頬を地面につけた格好で転がされてるから、何とか仰向けになろううとうじろんと転がります。土がついた頬を拭いたいけど、無理だから諦める。どうせ全身土の上に転がされているせいにどうぞうだらう。

上手く受身も取れないので、地面にちょっとぶつかって痛かったです。足を伸ばそうとしたら、何かをおもいつきし蹴つてしましました。逆に足がダメージを受けましたよ！ しまった、この体勢は後ろ手に縛られたところとそれによって反っちゃう背中がじわじわ痛い！

「こいつでもしないと、部屋の中が見えないのだ。とりあえず、現状把握！」

仰向けになつたら視界が広いね！

それにして、ココはどこですか。

思つたより天井は高い。石造りの堅牢な建物だ。

右手の壁のかなり上のほうに、空気孔か、小さな窓が開いている。そこから射しこんでいる光が唯一の光源になつていいおかげで、部屋が完全な闇になつていない。私が暴れた成果、その光の中に白いホコリがもうもつと舞い上がっているのが見えて、くしゃみが出そうになりました！ 猿轡でくしゃみつて、どうなるんだろう。

私の周りには、いろんな形の木箱が積まれていた。ただ積みまし

た！ つていう乱雑さのせいで、私が転がされているスペースが大変狭くなっている。

こう、整然と積んだらもうちょっとましになるんじゃないかな！ 私も足を伸ばせるよ！ セッキ上に向いたときに何かにぶつかったと思ったのは、多分この木箱だと思う。これを蹴ったとすれば、足が痛くなるのは分かる。そりやあ痛いよ。

一時に持つ置き場みたいな感じを受ける。

ここは倉庫かな？

それにしては、人の出入りが少なそう。どちらにしても倉庫だったら、いろいろものがあるかもしない。それに、脱出の役に立つかも！ 何か落ちてないかな？ 刃物とか嬉しいです。

部屋の中をもっと見ようとして首を傾けて、私は固まりました。一瞬で硬直する。

ぎやああああああ！ 私は心の中で盛大に悲鳴をあげる。本気で驚き、一瞬呼吸が止まった。

どりと汗が噴出して、心臓が凄く速く鼓動を刻む。喉から心臓が出そうながらいですよ！ 心臓やもろもろ健康に悪い！

今まで私が背を向けていたほうの木箱の山の上に、ひとがいた。仰向けになつたから、やつとその存在に気付いたんだ。

そのひとは木箱を三段積んだ上に腰掛けでこちらをじっと見下ろしている。

フードつきのマントに、すっぽりと全身を覆つた怪しいひとだ。窓からの光の範囲から外れて、闇の中にひつそりと座つている。

気付かなかつたあああ！

これが誘拐犯との遭遇ですかああああ！！

誰もいないと思い込んでいたところにひどがいたつていう驚きと、誘拐した犯人（推定）との遭遇の驚きに、私は恐怖と混乱で固まつた。

さすがにこの状況はキヤパシティ越えまくりだよ！

それにしてもひどだよね？ ひどだよね？ 置物じやないよね？

静か過ぎるんですが！

私はじつとその人物を見詰めた。

木箱の山の上に腰を掛けるそのフードの人物はふいに身じろぎをした。置物説は却下されました。やっぱりひとでした！ 残念です

！ 置物……それはそれで怖いです！

フードのひとは、私が凝視していることに気付いたようだった。

「ここにちは」

その人は、場違いなほど穏やかに挨拶をしてきました。
わたしは真っ白になつた頭で、一人つっこんだ。

えーっと……その、……ビューコアクションシリと？

神子、不審人物と出会い

不審人物は、答えない私を少しだけ眺めた。

眺められてもリアクションができませんよ！ できるのはジタバタするぐらいだ！ バタ足をばきを見るがいい！ 足首も縛られているけどね！ 暴れるよ！

リアクションできないのは、結局転がされているせいだけじね！ ハハハハハ……はう。こんな風に笑ってるけど、実際はかなり緊張している。何が始まるかも分からぬ。先の見えない恐怖に、じつとりと掌に汗が出てきた。ぎゅっと手を握り締めて息を吸う。背中を流れる汗が気持ち悪い。

不審人物は不意に口を開きました。今更気付いたけど、男の人の声だ。それに気付かないって、どれだけ頭が駄目になつてたんですか私！

「h x x x n v v v h x x x k o n o h * y x x x n o n x x x k
x x x . /」

(範囲はこの部屋の中)

何かがふわりとこの部屋を取り巻いた氣配がする。その一言で、世界の流れが変わった気がする。

久しぶりのトリハダですよ！ なんだこれ。私は不自由ながらも周りを見回してキヨロキヨロします。

私の様子を気にせず、不審人物は星術を続けます。綺麗な声だった。不審人物なのに！

流れるような韻律は、今まで耳にしてきたものとは何かが違う。ひとに分かり易いんじゃなくて、世界に分かり易く謳われている、つて言葉が頭に閃きました。私、詩人になったのかな？！ 私の様

子など気にせずに、ドンドン星術は纏まれていきます。

「k x x x v v v s h v v v h x x x s w w g w w .」

(開始はすぐ)

世界が韻律に耳を澄ませている、息を潜めて次に何が命じられてもすぐに実行できるように。

まるで楽団の指揮者が演奏を始めるときみたいだ。指揮棒の先端に、全ての意識が集中している。この場合、次の韻律が指揮棒に当たる。緊張した空気が部屋に満ちている。

「k o n o b x x x s h o n o k o t o h x x x d x x x r * m
k v v v z w w k x x x n x x x v v v .」

(「Jの場所の」とは誰も気付かない)

「Jの言葉が広がった途端、倉庫の雰囲気がふつと変わった。世界から少しだけ色が抜けて、周囲の景色が遠くなつた気がする。その光景を見た途端、「Jの部屋は閉鎖されたんだと分かった。

「k o k o d * n o t o h x x x d o k o n v v v m o h v v v b
v v v k x x x n x x x v v v .」

(「Jの音はどう」にも響かない)

「Jの言葉のあとに、静寂が深まりました。知らないうちに外から聞こえた音が全て遮断された。外から実は音が聞こえてたんだ。あつ、もしかしたら叫んでもたら助けてくれるひとがいたかも? それでさるべつわですね、そうですね、助けを呼べないようになりますね……。

「s h w w r y o h x x x t x x x c h v v v s x x x x r w w m x

× × d * · /

(終了は立ち去るまで)

最後の韻律が空氣に溶け、星術が終了しました。私は知らずにつめていた息をゆっくり鼻から吐き出しました。溜息をつきたいけど、さるぐつわが邪魔をする。

どうして神官様が使う星術は意味が分からぬのに、こんな風に私に意味が聞こえる星術があるんだろう？ 勇者様のも意味が分かるんだよね。新と旧の違いつていうのは聞いたけど、どっちがなんだかよく分かつていません。

不審人物は、世界からこの部屋をあっさり切り離したようです。そう、こんな風に星術の効果がなんとなく分かる！ もしかしてこれが乙女の勘？ 違いが分かる女になりました。やつたね！

で、何をするんだこのひと。

わざわざ音が聞こえなくなるのは、拷問でもする気ですか！ やめてよ、町民の心は弱いので、ぱつきぱきにおられまくりますよ。すぐに何でも吐いちゃうよ！

固まる私に、フードのひとは「」とい放ちました。

「僕はただの見学だからあまり気にしないでほしい」

え、正直意味が分かりませんよ。私の周りは説明不足の人人が本当に多いです。

困ったことに、ちょっとのヒントとかで分かるほど賢くないからちゃんと一から十まで説明を求めますよ！ ひとを拉致して何をするんですか。

「んふー！」

怒つても声が出ないんだけど、とりあえず訴えてみる。怖さを怒りで何とか潰している状態です。手が震えているのを、ぎゅっと握りこんで、その人を見上げる。

「一つ訂正すると、君をさらったのは僕じゃない。僕は君を見に来ただけだから」

え、見に来ただけ？

見に来ただけって、私は珍獣かつ。

確かにこんな風に床でびっちびちしていると珍獣つていわれても仕方がないけど、乙女に向かって何と言ひ言葉！

ちょっとぐらい助けてもらつてもいいでしよう！ 不審人物は首を傾げながらさらりと、

「助けないよ」

と言い放ちました。

なんだかとつても酷いこと言われてる気がするんですが。気のせいですか！

そして私は、はたとそのことに気付きました。

ん？ 私、声を出していないのに会話になってる？

「そうだね。思つたよりよく聞こえるから、もうそのまままでいいね」
そう言いながら不審人物は立ち上がり、するりと木箱の上から降ります。そして私の横に膝をつく。まるで影が動いているみたいに音もしないし風が動かない。変だ、と言う事はさすがの素人にも分かる。不自由な身の上ながら、近づいてきた相手からあとずさり距離をとつた。

「本来君が警戒すべきなのは、僕じゃない」

上から覗き込まれます。顔は陰になつて見えない。ただ、視線が真っ直ぐにこちらを見ているのが分かる。

「君の敵は魔物なんかじゃないんだよ」

どういうこと？ 精一杯目元に力を入れてじつとりと睨む。でも

相手は私の眼力をスルーしました。酷い！

「馬鹿な子ほどかわいいっていうけれど」

不審人物はいつたん言葉を切り、しみじみと感じ入るようになつ付加えました。

「馬鹿すぎるのも考え方のだね」

ちょ、ちょ、と！ いきなりこのひと出てきて私のことをぼろぐ
そこに言つてますよ！ 自分で言つなら自虐ネタになるけど、人に言
われたら腹が立つって事があるの、知つてますか？ 不当に貶め
られていますつ 酷いです！ 訴えますよ！

「訴えるなら誘拐犯の方が先だろ？」

あ、そうですね。そっちの方が先だ。うむ。

私が額くのを見て、不審人物が溜息をついた。

「……騙され易過ぎる。あお深蒼や大神官が苦労するのがよく分かる」
思いつきりあきれた口調です！ また馬鹿にされた！ 知らない
ひとにとやかく言われる筋合いはありません！ きー！
……さっきのセリフでなんか引っかかった。それを深く考える前
に、額にべしと手が置かれました。手はひんやりとしていた。あ
つ、私の額汗だくですよ！ 緊張の油汗です。

「SOS×××」（走査）
スキャン

痛つ！ 一瞬びりつと何かが体の中を走ります。見学者は展示物
に手を触れたらいけないんですよ！ 見学者の心得を何とする！
「もがー！」

暴れる私を全く気にしていない様子で、不審人物は深く深く溜息
をついた。

「やっぱり君には【〇／MvvvK〇】（神子）が振られているみ
たいだね」

その星語の響きに覚えがあり、私は暴れるのを止めて見上げた。

「……残念だ」

声は深淵から響くよに深い闇を孕んでいる気がした。
いやな予感にトリハダが止まりません！

不審人物は急に私を軽々と抱き上げて、木箱の上に座らせる。ま
さかのお姫様抱っこでした。祝！ 初お姫様抱っこ！ 本当にいや
な初めてが多いですよ！

「またろくでもない」とを考えているね

先ほどの声の響きは全く無かった。でもあの声を私は聞いたことがある気がする。初対面……ですよね？ むむ？ 最近記憶力に自信がなくなってきたからね！ 私が首を捻るのに、不審人物は、ああ、と声を洩らした。

「自己紹介がまだだつたね」

初対面だつたようです！ ますます自分の記憶力に自信が無くなつた！ シライ！

「はじめまして、【〇／MvvvK〇】、神子。僕は【1／Shr】

「一つ目の言葉が意味が聞き取れない。首を傾げると、どうやら分かつてくれたようです。そうだつたね、となにかに一人で納得して、彼はフードを外した。

真っ白い髪と、周囲が僅かに灰色に沈んだ白い虹彩の眸。闇の中では強烈に浮かび上がるその色が、私の目に飛び込んできた。

「君の耳に届くように言い直すと、【1／Shrvvvt〇】（始原^{しはら}の勇者）になるかな？」

私の右頬についたままだつた土がポロリと落ちたけれども、それに気付かないぐらい私は驚きに硬直してしまつた。

神子、会話をしているつもり

怖い、と初めに思いました。自己紹介してくれた自称始原の勇者には失礼な話だけど、怖い！

「さりげなく失礼な子だね、君は」

いつもは心の中だけで話しているから失礼な子だつて言わないでください。それだったら、さるぐつわを外して、普通の会話をさせてください。

「却下」

絶対言いつと思つた。いたいけな私を解放してあげてもいいじゃないですか。

「怖いつていう僕に頼むのは本末転倒だろ？」

「だつて怖いよ！何がつて、綺麗過ぎて怖い！男のひと相手にこの表現を使うとは思いませんでしたよ実際！」

私は目の前の人を凝視する。睨めつこは得意だ！

神官様みたいに、美人だつて言つのとまた違う。人の温かさが余り感じられない容貌なのだ。

白い頭髪は老齢のそれとは違い、艶がありながらも霜を集めみたいに真っ白だ。ゆるいウエーブが掛かっているせいで、淡雪みたいに見える。長さはそんなに長くない。

白い目つて初めて見ました！白い虹彩の周りは、不思議と僅かに角度によつて色を変える。そのせいで眼球と虹彩がきつちり分かれ目が分かるんだよね。

肌は少しだけ日に焼けている。それだけがかろうじて生きているものなんだと思わせます。男の人の顔立ちだつてちゃんと分かる。弱弱しさよりも冷たさが際立つ目鼻立ちです。

例えて言うなら、覗き込んだ青く透明な湖の底が深すぎて見えないときみたいな、あるいは振り返つて見えた夕焼けが世界を燃やす

ほど輝いていたときのよつな、そんな不安定な怖さと感動をあたえる容貌です！ よし！ 頑張つて詩人になつてみました！ 心のガツツポーズです。私の持つてる言葉を駆使しましたよ！ キラキラしい言葉遣いに正直疲れただけ。

とりあえず、あれだ。整いすぎて怖いです！ こんなに美形が存在していたら、私の乙女としての何かがなくなりそうです！ とりあえず、お肌のお手入れはどうしているんですか？

「……肌の手入れはしないよ」

あ、お返事ありがとうございます。

でもこの説明で分からない人が沢山いると思う。そこで紹介するのは神殿の天井画！ あそこで見た顔です。こんな顔の人間がいると思えないよと思いながら見てたから、実際に動いているのを見たらびびります。

んん？ 天井画つて事は、この人の年齢は一体幾つだろう？ そんなにぽんぽん勇者様が交代するほど、激しく世界は危機に陥つてたつけ？

私が首を捻つていると、

「君の思考が取り留めなさ過ぎて、頭が痛くなる」
額に手をやりながら呆れ果てて白さんが言います。

どうやら私の心の声はここまで全部ダダモレだつたらしい。今更だけど、心の声で会話できるつて、なんか凄いよね。乙女の秘密は読み取らないでくださいね。

あと、貴方は白いから白さんで。私命名です。こいつった呼び名は早い者勝ちですよ！

遠い目になつて溜息をつきながら私の向かいにある木箱に白さんは座りました。

勝手に私の考えを読み取つて、何であきれてるんですか！ ツツ

「白さん、ね。まあ、君にとつては深蒼あおが勇者だからそれが妥当か

どつやら勝手に納得してくれたみたいですね。私は座られた木箱の

上で足をばたばたさせて、どうして脱出を手伝ってくれないんですか！ ガタガタ多少音をさせたところで、結界のせいで外に音が漏れない。安心して暴れられるよ！ いや、本当は音漏れしたほうがいいのか？

乙女が縛られているのを見て、何も思わないのですか！ 自称始原の勇者さん！

私はそのまま白さんに文句を言つた。心中でだけ。「自称じゃないよ、これは完全に他称」

微妙なニュアンスが含まれている言葉ですね。ちょっと同情しますよ。なんたつて私も神子とか呼ばれている珍獣ですから。

「そうだね、縄で縛られて拉致されている神子は前代未聞だね」前代があつたんですか？ なんか、神子はいみたいに聞いたんですけど。

「いるけどいない」

面倒な会話をする人だ！ また問答集が始まつたー！

このひととの会話は、たまに通じない時がある。なんだか全部私が知っているみたいに話すしつ。一人では会話は成立しません！ つまり会話は言葉を受け取る相手がいて成立するものです。相手に伝わらない言葉は駄目ですよ！

それに私は何も知りませんよ！ 説明してください！

私は抗議する。

身じろぎをする度に縄が地味に食い込んで痛いんですね。もうちよつとダイエットが必要だつたかな？ 座つていて太るといつことは無いよねつ。

白さんはじつと私を見た。

「思考は飛ぶ、記憶をぽろぼろ取りこぼす。今の君に説明をしてもすぐ忘れるだろ？ そんな面倒なことはしない」

何でそんなことを知ってるんですか！ さてはストーカーですか！ 怖いつ。

「だんだん遠慮がなくなってきたね」

ツツ「ミをするけど、白さんは思つたより気長ですか？」失礼な思考をしてると思うけど、意外に怒りません。

うーん。それにしても、本当に貴方は始原の勇者様しょねん？ やつと私は神官様にお伺いした話を思い出した。勇者の現われる間隔について。

「残念ながら」

……勇者様つていうのは、星が一巡りか二巡りする間に一人、つて聞いたなんですが。

つまり、百年から二百年に一人選ばれるもの。

「そうだよ。実際僕がそう呼ばれたのはさつと星暦六〇〇〇年代のことだ」

え、一千年前ですか？

神子、世界のひみつを一つ知る

とさでも告白ですよ！

まさかの千歳オーバー発言！ 年取りずぎー。若作り過ぎですよー。

「別に若作りしているわけじゃないけど」

でももつと古臭い喋りかたしないんですか？ 現代用語に精通しきでしょー！

「そのシッコミはどうだろ？」「うわー

その返しもどうなんですか？ 独特のテンポで話すから、白さんとの会話は難しいです。

「君の思考も酷いものだよ」

おじいさんなら、かわいいひ孫娘ぐらいの気持ちで、温かく見守つてくれてもいいじゃないですか！

「君がひ孫娘だったら微妙だよ」

白さんのとんでも発言も微妙ですよ。一きなつ一千〇〇〇歳テスヨと言われても普通信じませんよー。そー、普通は信じない。なのに、私の勘が嘘を言つていないと囁く。どこの信じる要素があるかわからぬいけど、嘘じやないと思つてしまつんだ。

私はじつと白さんを見ました。人を見る目があんまり無い庶民だけど、じつくり観察してみる。既婚者と未婚者の見分けがつかない町民です、見る目ないよー。パン屋のおかみさんにコツを聞いたけど分かりませんでした！ あと悪い人の見分けもつきませんねつ。見分けがついたらここにはいない……つづ、辛くなつてきた。

田の前で話す白さんはどう見ても若々しい外見。

でも、雰囲気がおかしいんだよね。生活感がありません。白すぎるから？ お肌にしみ一つありませんよー。敗北感で胸がいっぱいです。更に旅人っぽいのに手ぶらです。荷物やお金とか、どうしてるんだろう？ 寸鉄も帶びていなつて言うのかな、武器を持って

いる雰囲気はありません。そういうえば、始原の勇者の時代に新星術しやうが生まれたとか聞いた覚えがある。星術が使えるから武器は要らないのかな？ 神官様は面倒くさいから殴る方向らしいけど。

私が観察をしているのを分かつてているのか、白さんは静かにこちらを見ています。全身を覆うフードつきのローブの下の服は見えません。靴は汚れていない。それにしてもこの倉庫にどこから入ってきたんだこのひと。もしかして私が運び込まれる前からいた？ 私の寝顔を観察していたんですかっ。あつ、視線が冷たくなった。聞こえてるんですねっ、やっぱりこれも聞こえてるんですね！

じつと見ていて気付いた。生活感の無さは、多分纏う空氣のせいだと思う。纏う空氣がセイヒツの間に似ているんだ。静か過ぎる穏やかな雰囲気があります。嫌いじゃないけど、澄み過ぎて居たたまれない。

こんな目立つ人がそもそも食事したり、普通の宿とつたりするのが想像できない。ひとを外見で差別したらいけませんがっ。で、普段何を食べてるんですか？ 肉と魚とどっちが好きですか？

「……ところで、星暦はだいたい一千年区切りだというのは知ってるかな？」

私の思考は読めているはずだけれど、白さんはあつさりスルーしました。酷い。

白さんが話し始めたことを頭の中で繰り返す。このひとは多分喋りたいことだけ喋るタイプですね！ 了解しました。勇者様に学ぶ聞き役の態度を踏襲して聞き役にのぞみますよ！

えーっと話題は二千年でしたつけ？

神殿での勉強が役に立ちますよ！ 歴史は六千年代までは簡単にさかのぼれる。でも、そこから前が謎なんだって。大災害で全部無くなつたとか。

昔から星原樹があつた事はよく知られたことだけど、どんな国があつたかは実はよく分からないらしい。たまに不思議な遺跡が発見されるけど、全く意味が分からないんだって。

星原樹が出来た頃から、星暦が始まったんだというのはずっと言い伝えられていることらしい。学者の先生達が研究しているそうだ。で、それがなんだって言うんですか？木箱の上にずっと座つていたら、お尻が痛くなってきた。ちょっと身じろぎしただけでも繩が擦れていやなんですが。土に転がされていたのと縛られているせいで色々痛いんですが。おーい繩解いて欲しいですよー。

「一千年毎に、世界は変わるんだ」

私の訴えは聞こえないフリをされるらしい。この辺女の敵め！……まあいいや、で、世界が変わるってどうしたことですか？この疑問は正確に読み取つてくれたようです。由さんは優しい声で付け加えました。とんでもない内容を。

「文字通りだよ。一千年で世界は滅びて生まれ変わる」

白さんはゆっくり指を折つて見せた。一つ目から始まり、「星暦一九九九年、三九九七年、二回目は少し早かつたから五九八年。今が第四期にあたる」

そう言いながら四本目の中を見せられる。

……は？

そこでようやく私は今年の年号を思い出す。星暦七九九六年。：

：もしかして、もうすぐ。

「そう、一千年の区切りがくるね」

あつさりとした口調は、天気の話題と同じぐらい軽いものでした。とんでもない内容を語つているよつには到底思えない。

もしこれが酔っ払い親父が言つてる内容なら、ハハハ親父も変な夢を見るんじゃないのかつて笑い飛ばせると思つ。

でもこのひとはそういう意味では嘘をつかないんだろう。私の中でそんな変な確信がある。

だからこそ怖いんですが！

いきなり世界が滅びる予言つてなんですか！

絶対滅びるんですか……？

私は全身からさーっと血が引くのを感じた。油汗がさつきまでと

別の意味で吹き出る。緊張で息が短く荒くなつてしまつ。

話が壮大すぎるー

でも、それが本当だとして、私に話したところで流れが変わると
は思えない。何で私に話すんですか？ 私は非力ですよ！ それを
知つても止められるとも思えない！ 勇者様の一行に混じつている
といつても、ただの町民です。さつくり剣で刺したら死んでしまう
ぐらいの戦闘力の無さですよ。……私が出来ることは本当に小さい。
わざわざも窓からこの街のことを見めていて、非力を実感したとこ
ろだったのに。

白さんは、私に話をして一体何をさせたいんですか！

嘘一つ見逃さないよ！」私は白さんを正面から見る。
お腹に力を入れて、姿勢を正した。じゃないと何か負けそうな気
になる。お肌の艶は負けていますがね！

「それは女の子が男に負けちゃ 駄目だろ！」

「がー！ それはつっこむところじゃないですよ！ 白さんは真面目
な話をしているんですか！ どっちなんですかつ。

「真面目だよ。絶対に滅びるかというと、それは分からぬ。今期
の神子きみが現われたということは、星神様の裁定が最後の段階に入っ
ている」

「ここで星神様の話になるんですか？」

神様がいらっしゃるのに、何で世界が滅びるんですか？

世界が危険だからこそ、勇者様達が選定されて戦っているんじゃ
ないの？

疑問が浮かんだけれど、その次にまさか、と考える。

私はそれを思いついたけれど、恐ろしくて思考から消そうとした。

しかし、白さんはそれを正確に読み取った。

「やうだよ。世界は神様が滅ぼすかどうかを決めるんだ」
君は知っていると思うけど。白さんはそう付け加えた。
私は、喉に重いものが詰め込まれたような気がした。

神子、怒る

変でしょう！

私は気を取り直して白さんに噛み付くよつて考える。

魔物の親玉みたいなのが魔王とかで、それが世界を滅ぼすんじゃないんですか？ 神様じゃないでしょう。そんな、酷いこと神様がするんですか？

「魔王などいないよ」

白さんは静かに断定します。

魔王の呪、とか言うのも聞いたことがある。勇者様達の旅は、魔物を倒すことじゃないの？ ジャあなんで戦ってるんだ。勇者様達の旅の目的って、何なんですか。

「目的は本人達に聞けばいい」

聞いたことがあるような、ないような。

でも勇者様は純粹に誰かを助けるために旅をしているみたいですよ。それじゃ駄目なんですか？ 何で神子が出たら裁定が始まっちゃうんですか？

「落ち着きなさい」

落ち着けません！

私はガン！ と木箱を縛られたままの足で蹴った。

足が痛いけど構つものか！

私は滅多に怒るほうじゃないけれど、カツと頭に血が上るのを感じた。

暴力的な気分になつている。

多分、縛られていなかつたら白さんには文字通り噛みついていたに違いない。

それぐらい衝動が強く私を突き動かす。

その根底にあるのは、やるせなさや、悲しさや、理不尽への怒りがぐちゃぐちゃになつて、全部入り混じつて、凄い色の絵の具みたいに私の気持ちを塗りつぶしていく。

この瞬間も白さんは私の思考の流れを読んでいるはずだ。なのに、怒つているのを聞いているのに、静かにこちらを見るだけだ。

私は白さんを睨む。

目線に力があれば、串刺しに出来るのに！

どうして人を滅ぼすとか、するんですか！

とんでもないことを言い出したこの人は、絶対何かを知っているはずだ。私は血が上つた頭のままで問い合わせる。

私に無駄話をしに来ただけじゃないんじょー！ 滅びるとか滅ばせるとか、勝手に決めないでください！

そもそも、人間が魔物で困っているのに、神様は何をされているんですか！

「その、魔物だよ」

ようやく、白さんは口を開きました。

「魔物が現わされたから、勇者が選定され、世界の裁定が始まるんだ。それが今回の四期の特徴」

魔物ってなんですか！ あんな生物、何で世界にあるんですか？

そのせいで沢山の人が泣いて、今もこの街みたいに苦しそうなひとが沢山いるのに！ どうして星神様は魔物を放つておくんですか！ 私は興奮しすぎて鼻息が荒くなります。ぐきゅぎゅぎゅぎゅ。さるづわが実に邪魔！ はずしてー！ 思考だけでも暴れても、この怒りは伝わっていない気がする！

「十分伝わってるよ」

白さんの秀麗な眉の辺りには、確かに不快そうな皺が出来てますね！ふふんだ！そこが皺になってしまえ！そしてちよっぴりストレスで禿げ上がるがいい！

「ショボいけど恐ろしい呪だね……」

ショボいっていうな！思いつきり呪つてやる！ぎー！

「さつきの答えだけれど、魔物は魔物だよ。人間の敵として定義されているものだ」

何で世界に人間の敵がいるんですか！

その思考をぶつけたあと、私は気付いてしまった。

「……星教でもきちんと言つてるだろう？世界は星神様が造りたもうた。星神様が神だと知覚した後、星の配置し韻律を定め、命の基盤を整え、子等を野に放つた。世界は、全部神様が造られたものなんだよ。僕らも、人間も、魔物も」

……魔物も。

なんで、なんで！

私の頭はぐちゃぐちゃだ。だつて、今まで勇者様達凄く頑張つてた！でも、それも全部神様が仕組んだことで、しかも世界が滅びに向かつているって意味が分からぬ！勇者様達の苦しさとか、意味がないってことなんですか！！

私はぼろぼろ涙がこぼれてきた。でも拭えない。白さんがぽんやりとした白い塊にしか見えない。

流れる涙がさるぐつわに吸い込まれて正直不快です！

衣擦れの音とともに、目元に柔らかい布が押し当てられました。

その上から大きな掌が私の目元をやわらかく覆います。ビックリして涙が引っ込みました。

「そのまで聞きなさい」

白さんの声だけが瞼の裏に響く。

「世界はとんでもなく短い周期で既に二度滅びている。星神様が滅ぼしたくて滅ぼしたんじや、無いんだよ」

それは、どういふことですか？

少しだけ、ほんの少しだけ落ち着いた私は、その先をうながした。
押し当てられた布と掌は、ほのかに温かい。

「昔の話をしよう

田さんは穏やかに話し始めた。韻律を謳つゝ、たまに、なめらかな言葉を操りながら。

神子、昔の話を聞く　一度目の滅び

「一度目。人間は簡単に星語を操つた。その頃、共通語はなく星語が人の言葉だつたんだよ」

田さんの話と一緒に、映像が私の頭の中に流れしていく。

見慣れない不思議な服を着た人々。ゆつたりとした袖のたっぷりとした布を使つた服だ。

空は高く澄み渡り、緑は滴る恵みをもたらしている。

優雅な人々が、白亜の宮殿のような建物で謳い、笑う。宮殿に見えたそれは、庶民の住居だ。

星酒と呼ばれる神授の甘露の杯を干し、星神様を讃えて敬う人々。それは理想郷と呼べるような街並みで、とても美しい世界だった。みんなの笑顔が穏やかな世界。いや、穏やかな世界だった。

ただ、とある一を除いては。

泣き叫ぶ女性がいる。

街から外れた山の中で裸足のままで地面に這い^{つづく}蹲り、彼女は一身に穴を掘つていた。

彼女は襤襷^{ぼろ}を纏い乱れた黒髪を振り乱し、らんらんと輝く瞳で空を見上げる。

三つの月が空に昇る日だった。

彼女は星のめぐりを正確に把握していた。この術をなすには、このときを逃してはならぬと狂氣と裏腹な冷酷さで計算する。

美しかつたかんばせは汗と怒りにゆがみ、この世ならざるもの、すなわち人の形をした悪意を体現していた。彼女は地面を掘る。爪ははがれ、手は土と血にまみれて黒々としている。

しかし彼女はその奇怪な行動を止める事は無い。

彼女の周囲は、事切れた男女の死体が折り重なっている。

首をねじ切られ死んだ男は、彼女の恋人だった。身体を真紅に染め死んだ女は、彼女の姉だつた。

愛していた一人は、彼女を裏切つていた。

狭い世界が全ての女だつた。ゆえに、世界が彼女を裏切つたようなものであつた。

二人の血を地面に零し、それを持つて毒となす術式を彼女は血で書き記す。

彼女は吼える。世界に向けて、神に向けて。

全てに裏切られた！ 私は全てが憎い！ 世界が憎い！
全部、滅びてしまえ！

それは命を削りながらの呪詛だつた。血を吐きながら彼女は滅びを望む。

彼女はそのまま狂いながら呪詛を呴き続けた。

本来なら、たつた一人の呪詛が世界に広がるほどの強度は持たない。

だが、不幸にも彼女は特殊な存在だつた。

星原樹の一分枝を託された女。彼女を指して人々は巫女と呼ぶ。

巫女が独り狂つたところで、世界を腐り落とせるだろうか。

それは世界に落ちた染みであつた。

しかし、その一滴は確実に浸透してしまつた。

まず、彼女が持っていた枝が汚染され、それがあろうことか媒介となり、世界に彼女の呪詛がばら撒かれる結果となつたのである。

気づいた時にはその染みは大きく広がりすぎていた。星原樹の世界の浄化作用が追いつかぬほどに。

世界の根源たる韻律で眩かれたその呪詛は、世界に対する毒となり、水を腐らせ、大地を殺し、風を死の運び手にした。

星神様は人の世の事は人に任せていたので気付くのが遅くなつてしまつた。

毒に犯された全ては一度消し、それ以外の部分を生かすしかない。星神様は心ならずも一度、世界を消すこととなつた。

それが星暦一九九九年の話だ。

世界は滅び、僅かな人々とともに新しい大地が生まれたのである。

「そして、これを機会に共通語が生まれることになつた」

私は目の前を流れていった映像に絶句していた。彼女の引き裂かれそうな痛みが伝わり、私の胸をかきむしる。

「では、次の話だ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5611v/>

町民C、勇者様に拉致される

2011年10月10日04時02分発行